THE CENTRAL REVIEW

中央公論

七月號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



新刊

初版・即日賣切・再版・出來

獨逸、イエナ大學名譽教授
ヘッケル博士著

生命の不可思議

文學士 栗原古城譯

大宇宙の不思議は生命より不思議なるは莫し、生命の源泉を究むれば、**合理的**にして**堅實**なる**人生哲學**は茲に建設せられたるものと云ふべし。泰西の新科學は今や其精鋭を擧げて生命其者の研究に沒頭し、一世を驚倒せしむべき眞理學說等の發見せらるゝもの枚擧に遑あらず、苟くも此最新科學の傾向に通ぜずんば、何人も**新思想を云爲するの資格無き也**。爰に『宇宙の謎』の名著に歐洲の學界を震憾せる生物學の一大權威ヘッケル博士が、廿世紀初頭の新研究を網羅組織して、その『生命學』の要諦を說けるもの即ち本書なり。若し夫れ**有ゆる專門科學の眞髓を摘抉總合**してこれを何人にも理解せしむる明快懇到の敍述に至りては、博士は正に當代の第一人者たるの觀あり。本書一冊より得らるべき**實益と興味**とは優に**數年の研究と冥想**とに匹敵すべきを疑はず「宇宙の謎」と共に**歐洲の學界讀書界を風靡**せる**世界的名著**として敢て一本を薦む。

四六判總洋布製
極美本全一冊
紙數六百七十頁
正價貳圓參拾錢
送料〔內地十二錢 其他十四錢〕

東京本鄉西片町
玄黃社
電話小石川一三一九番
振替東京七九九五番

有島武郎著作集 第五

長篇小說 迷路

その堂々たる結構と、その絢爛なる文章と、而してその熾烈なる感情とを以て、氏の創作に目覺ましき神來の境を現じたるは、此の一篇である。「迷路」と、その續篇にして、「曉闇」の題下に發表せられたるものを合せ、更に「迷路序詞、首途」の一篇を加へて總べて二百七十枚。『宣言』と共に、氏の作中最長篇の一である。異郷に放浪して、肉の呻きと靈の喘ぎとに悶ゆる一青年の、時に作者自身の俤を示せる如きを主人公とし、血を吐きつゝ人生を嘲るニヒリストの悲愴の最後、妖艶にして淫蕩なる一夫人の情生活の曲折等を配せるもの、正に情熱の繪卷の觀ある作品である。（本編に限り價八拾錢送料六錢）

既刊目次

- ■第一編 死 ■（六版）
- ■第二編 宣言 ■（六版）
- ■第三編 カインの末裔 ■（四版）
- ■第四編 叛逆者 ■（四版）

定價一冊五十五錢 ＝送料六錢＝

明治大正に亘れる新文藝の精華

名作選集

第三十編

中村星湖氏著 少年行

■初二重表紙特製最美本▼價參拾八錢▼郵送料六錢

中村星湖氏の處女作にして、また其の出世作と稱すべき長篇小說也。早稻田文學の懸賞募集に應じて其の第一等を贏ち得當時の選者長谷川二葉亭をして、ツルゲーネフの俤ありと賛せしめたるもの。富士山麓の灰砂の谷を舞臺とし、希望に燃ゆる二人の少年を主人公とし、少年期より青年期に移る頃の、戀の憧れと功名の悶えと遣瀨なき悲しみとを描いて、深刻を極め、詩趣に富める名作也。

名作選集二十九編

■南小泉村 眞山青果著

東北の一寒村を背景とし、無知野蠻の土民の生活を材とし、戰慄すべき人間の暗面を炬火の前に描ける力强き作品也。

東京牛込矢來町中の丸 振替（東京）一七四二
新潮社
電話番町八〇九番
電話番町八九九番



■ドストエーフスキイ全集■

トルストイと並んで全人類の運命を負へる二大偉人なるドストイエフスキイの作品を、直接に露の原文より譯出して此の全集をつくる。いづれも堂々たる長大篇、神魔相闘ふ人間心の大悲劇を曲盡せるもの也。

虐げられし人々

カンバス布製
紙數七百三十頁
定價壹圓五拾錢
――送料八錢――

昇曙夢氏譯

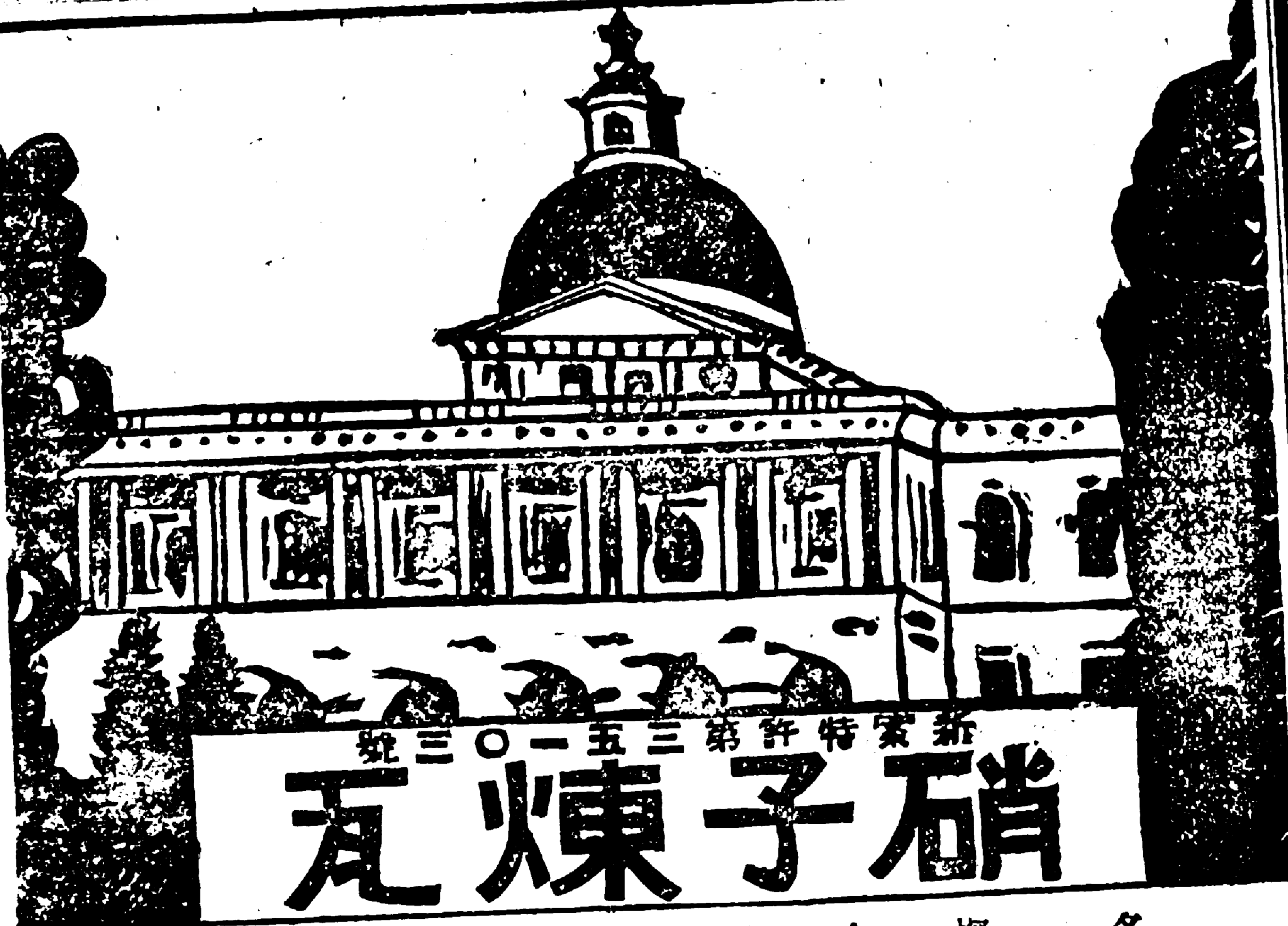
著者自ら此の作の内容を説明して曰く……「それは〱暗い陰氣な物語であつた。ペテルブルグの重苦るしい空の下で屢々人知れず秘密に行はるゝ暗い悲痛な物語の一つであつた。大都會の暗い隱れた裏通りで、馬鹿々々しい生活の沸騰や、下らない利己主義や、利害の衝突や、苦々しい淫蕩や秘密や犯罪や、凡て是等の病的な生活の焦熱地獄の中で行はれる不思議な隱慘な物語の一つであつた――」と。そこに熱涙なる青春の戀を描き、老夫婦の悲嘆を描き、獸の如き老侯爵の淫縱と、捨てられたる母子の悲慘を描き、最後に一封の遺書すべての紛糾を解くに至る迄人間數奇の運命を描いて、滿眼の熱涙を世に虐げられ踏みつけられし人々に注ぐ。露人が聖書と共に同情の福音と稱し來れる書、何人か讀んでよく泣かざるを得ん。而も本書は一面**戀に敗れたる沈痛の經驗を描ける作者の自叙傳**にして篇中の一青年文士は實にドストエーフスキイ其の人也。此の點より見て本　は二重の興味ありて存す可し。邦文に譯して一千有餘枚の長篇、新たに『カラマーゾフの兄弟』と同型の版に刷して至廉の定價となし、世に公にすることゝせり。

東京牛込矢來中ノ丸
振替(東京)一七四二二

新潮社

電話番町 長八〇九番・八九九番

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



御覧下さい!! 化粧煉瓦界之最新權威

今建築界に於て
名實第一の稱ある
新案・特許 第三五一〇三號 硝子煉瓦の
燦たる外觀の美を!
永久不變の品質之充實を!

本書は現代式家屋の新築に改築に缺くべからざるものにして今や建築界に於ける「日本建築界の誇」との御賞賛を博し化粧煉瓦界の明星と目せらるゝに至れり

使用個所（建築物之内外壁、店舗の正面殊に飾窓下、玄關浴場、洗面所、臺所、流し場、便所等の羽目板及（在來の壁の下敷、塀、門柱板の上にも容易く張り附けられます）

硝子煉瓦は東亞のほまれ

製造元
橫濱市久保町五十八番地
合資會社 東亞硝子工業所
電話三八六四 電略「ド」又ハ「トア」

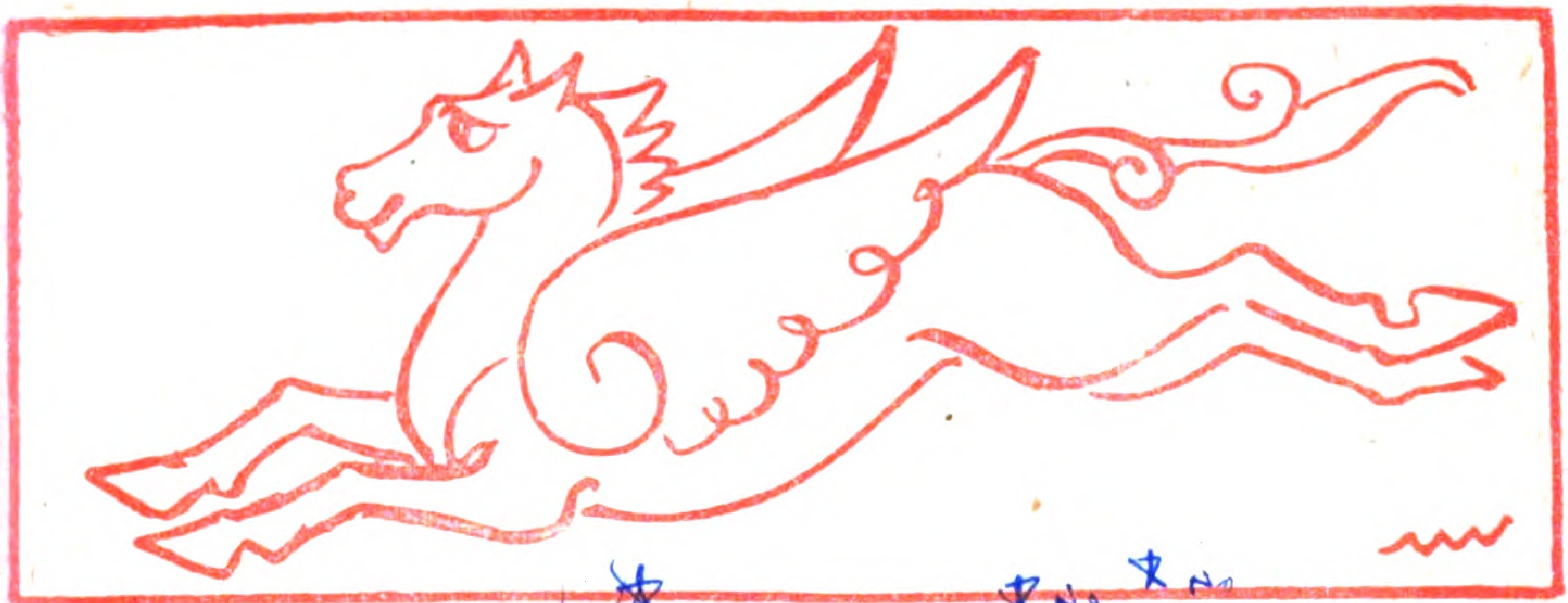
一手販賣所
東京市麴町區一丁目三番地
安部幸兵衛商店 機械電氣部
電話新橋五一八・五八三・二七七二 電略「アベデン」

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



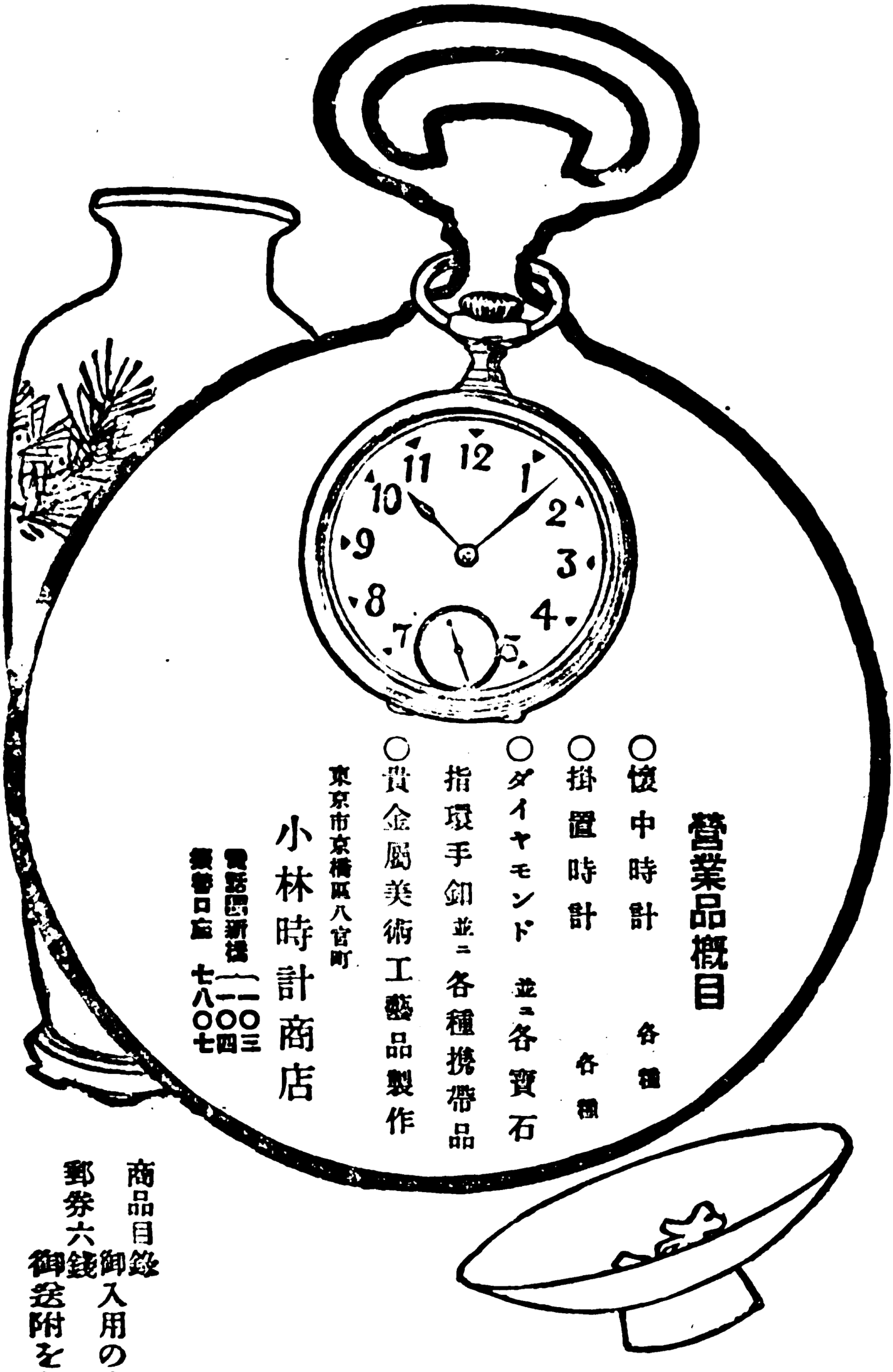
中央公論第三十三年七月號目次

▼公論

▼說苑



此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



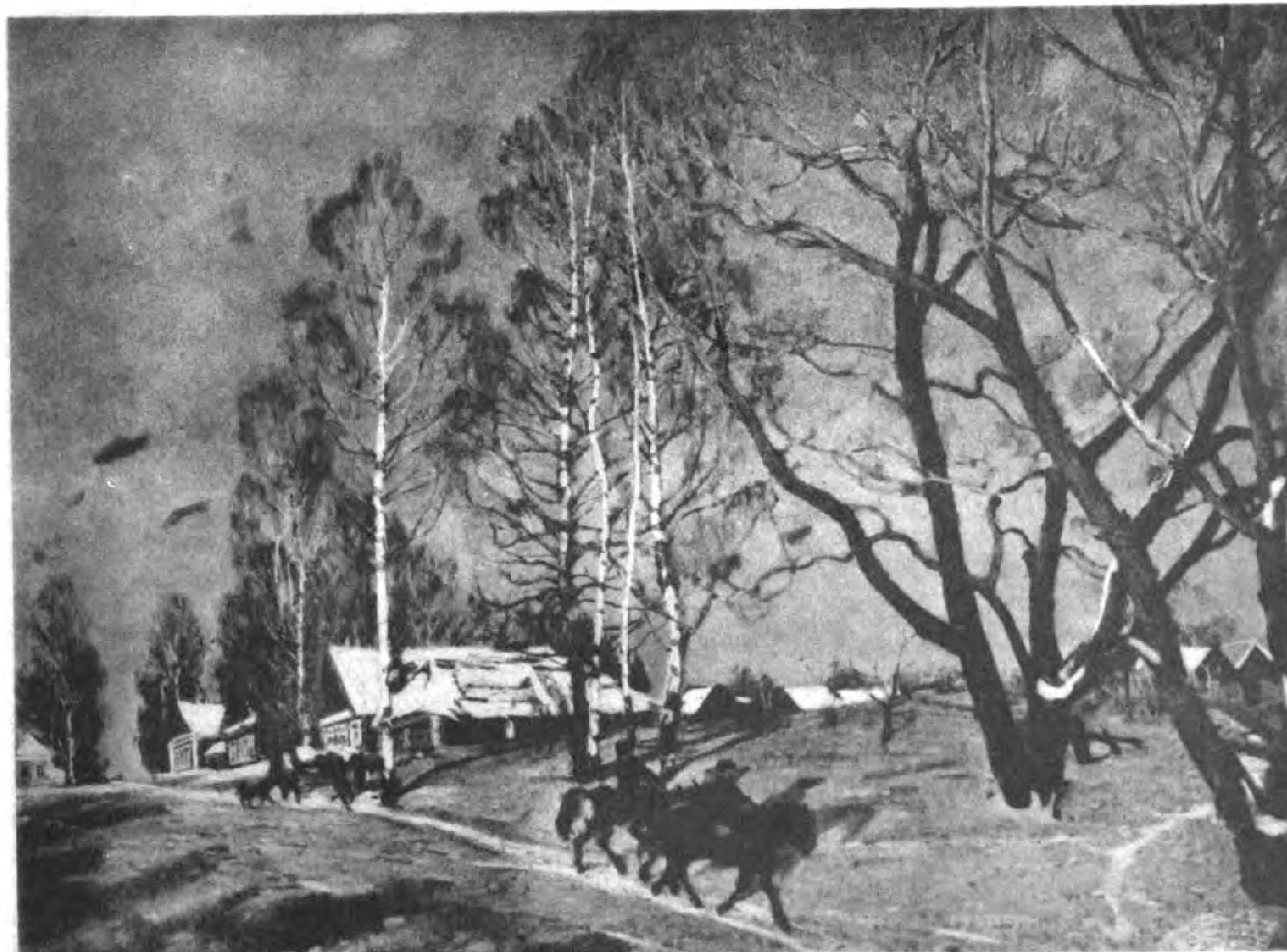
營業品概目

○懷中時計　各種
○掛置時計　各種
○ダイヤモンド 並ニ 各寶石
指環手釦 並ニ 各種携帶品
○貴金屬美術工藝品製作

東京市京橋區八官町
小林時計商店
電話新橋 一一〇三 一一〇四
振替口座 七八〇七

商品目錄御入用の方は郵券六錢御送附を乞ふ

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



A BLUE DAY, WINTER.

BY KONSTANTIN YUON.

中央公論



第卅三年第七號
七月號
第三百五十八號

子福者保護論

法學博士　牧野英一

私は、私の所謂子寶國有論の一節として子福者保護論といふことを論じて見たいと思ふ。

□

私は豫てから子寶國有論といふことを主張して居るのである。小供問題解決の楔子は、畢竟、子寶國有といふことに歸着せねばならぬと考へて居るのである。子寶國有論といふ用語は、寧ろ甚だ奇矯であるが、其の趣旨は簡單にして且明瞭である。即ち、國家は小供に對し自己の小供としての責務を理解せねばならぬといふことである。兩親の小供に對する責務のことは既に屢々說かれて居るが、それと同様

に又、國家の小供に對する責務も強く說かれねばならぬと謂ふのである。小供は其の兩親の小供であると同時に、又其の國家の小供であると謂ふことである。

□

小供を產み、小供を育てることは、其の兩親にとつて大なる誇りであるし、又同時に大なる慰安である。併し、實際の事を謂へば、此大なる誇りと慰安とには大なる犧牲と苦勞とが伴ふのである。故に若し、此の犧牲と苦勞とを伴はずして、此の大なる誇りと慰安とを享受することを得るならば、固より申分がないが、實際に於て、此の兩者を分離することは多くの場合に困難であるし、又道義上の問題としても、之を分離することは多くの場合に於て許す可からざることである。

即ち、小供を產み、小供を育てることは、其の兩親にとつて甚しく苦しき負擔である。併し、此の負擔はどうしても兩親に於て引受けて貰はねばならぬ。小供は其の兩親に依りて發育せられることが、自然であり、又當然である。併し、それが其の兩親にとつて苦しき負擔であることが事實である以上、國家は、此の義務と此の事實との調節に付き、其の權力を適當に行使する所がなければならぬ。──謂ふまでもなく、國家の社會に於ける使命は、義務と事實との矛盾衝突を適當に調梅することに存する。而して、私は斯の如き使命の表現として國家の法律を硏究して居る者である。

□

加之、小供が多く產まれ、之が適當に育つて吳れるといふことは、國家にとつて非常に必要なことである。小供がなければ國家の生命は永續しない。小供が多く且強くなければ國家の運命は繁榮しない。

小供は其の兩親に對すると同樣に其の國家の爲めに又大なる誇りであり、且慰安である。

されば、兩親が小供を產み、小供を育てることは、國家に對する大なる任務を盡すものと謂はねばならぬ。而も、斯く小供を產み、小供を育てることは、實際に於て其の兩親にとり、大なる苦しい負擔なのである。

此負擔が兩親に於て引受けられねばならぬことは當然である。併し、それは、國家の費用が其の國民に於て負擔されねばならぬといふのと同一の理由に依るものであると考へる。而して國費の負擔、卽ち租稅の分配が國民間に公平ならざる可からざるが如く、小供に關する兩親の負擔といふことも、又公平といふ見地からして考量せられねばならぬものであると謂はねばならぬ。——謂ふまでもなく國家の社會に於ける使命は、共同生活の經營を公平に分配するといふことにあるのである。法律は又斯の如き使命の表現として吾々の研究に上るのである。

□

換言すれば、小供問題に付て國家と個人とは利害關係を反對にするものと考へることが出來る。從て小供問題の解決を今日のまゝに放置することは決して適當なことでないのである。卽ち、第一に、小供の養育を其の兩親の當然の義務とのみするのは、國家として甚だ蟲の良いことではあるまいか。兩親が苦辛を重ねて育てた小供を、第三者たる國家が當然引き浚ふといふことは、時として其の兩親に遺憾なる誤解を生ぜしむる原因となるまいものでない。第二に、小供は之を產んだ者に於てのみ全然養育の任に當る可きもので、之を產まざる者は全く之に對して無責任であるといふことになるならば、著しく不公平

な結果に到達することになるので、若し、國家が、此の如き事態に對して何等の考慮をも爲す所がないならば、國家は又國民の怨嗟の府となるまいものでもなからう。されば、公平に且適當に小供問題を解決せむと欲するならば、小供の養育に關する一切の負擔と責任とを總て國家に於て引受けるといふことにせねばならぬのである。私の子寶國有論といふのは此の如き意味である。此頃は種々な事柄に付て國有とか「ナシヨナリゼーシヨン」とかいふことが主張せられるのであるが、それと同じ理由に於て、また同じ程度の重さに於て、子寶國有といふことが主張せられねばならぬと考へるのである。

□

但、子寶國有論は、或意味に於て既に實行し初められて居る所ではあるのである。私は其の第一例として所謂教育無償主義を擧げたい。原則として小學教育に付き授業料を徴收しないといふことがそれである。國家は義務教育といふことを認めて、學齡兒童保護者は學齡兒童を就學せしむるの義務を有するものとし(小學校令第三二條第三項)、此の義務の爲めには契約自由の原則に制限を加へて、尋常小學の教科を修了せざる學齡兒童を雇傭する者は、其の雇傭に依りて兒童の就學を妨ぐることを得ずとして居る(同令第三五條)。而して此の如き義務に對應する爲めに、市町村に對して小學校の設立を命じ、其の小學校は原則として授業料を徴收せざるものとして居るのである(同令第五七條第一項)。惟ふに此の義務教育無償主義といふことは、一方に於ては國家が自己の小供をして教育ある者たらしめんが爲めに、其教育を自身に於て擔任したものと謂ふことが謂へるし、又他の一方に於ては、各個人に對し、教育を受くるの機會を均等ならしめたものと謂ふ意味に於ても理解が出來る。されば、此の制度は畢竟、

小供の教育の「ナショナリゼーション」を規定したものと考へることが出來ると思ふ。

固より、小學校令の現在の規定が右の「ナショナリゼーション」を全うして居るかと謂へば、それは肯定出來ることでない。授業料だけの免除で其の目的が達せられ得ることとは思はれないし、又、學齡兒童保護者が貧窮にして其の兒童を就學せしむる能はざる場合に於て、就學義務の免除又は就學の猶豫を認むるが如きは(小學校令第三三條第三項)、甚だ不徹底なことであらうと思ふが、兎に角、法規の精神だけは疑ない。其の精神が徹底されて居ないにしても、其の精神が法規に示されて居る點に付ては十分の理解をして置かねばならない。即ち、小供の「ナショナリゼーション」は教育の一角に於て既に着手せられて居ると謂はねばならぬ。

□

更に他の一面に、此の運動が又既に着手せられて居る。それは所謂少年裁判問題である。不良少年感化の問題である。抑も、不良少年に付ては國家は痛切に利害關係を感ずる次第である。之は到底各個人のそれ〴〵の處置に任せて置くわけに行かぬことで、國家が自己の責任として何とか片付けて行かねばならぬ問題であるのである。感化問題が此の數年來、所謂救濟事業中特に注意せれることになり、所謂少年裁判法といふものが、既に甚だ眞面目に當局者に依り研究せられつゝあるのは、右の意味に於て理解し得ることと謂はねばならぬ。換言すれば、之は小供の「ナショナリゼーション」の一の現はれと見る可きことになるのである。――老婆心ながら附言して置かねばならぬのは、所謂少年裁判の問題は我邦に於てこそ、まだ當局者の研究中の問題であるが、歐米諸國に於ては、研究を超えた既定の問題になつて

居る。本家の「アメリカ」合衆國のことは謂ふまでもなし。「イギリス」「フランス」のやうに立法的に此の問題を解決したのもある。「ドイツ」に於ては、法律はまだ草案として討議に上つて居るに過ぎないが、實際に於ては、單純な司法省の訓令で、少年裁判を實行して居るのである。「フランス」でも、其の特別法の制定以前には、單に從來の刑事訴訟法の運用として、實際上、少年裁判の制度を實行して居たのであるが、近年に至つて其の特別法が出來たのである。

□

併し、不良少年に付て小供の「ナショナリゼーション」を實行するといふのは、問題の解決が逆であると謂はねばならぬ。解決の要點は、少年が不良なものになる前に、適當に之を處置せねばならぬのである。又、敎育の無償といふことは、其の趣旨に於て甚だよし。併し授業料の免除位で此の問題が適當に解決せらる可からざることは謂ふまでもない。吾々は、不良少年問題や敎育無償の規定やの根抵となれる其の精神を考へ、更に其の精神を擴充することにせねばならないのである。

幸にも吾々には、親の慈愛といふものが自然に具はつて居る。此の貴む可き本能の作用に依つて、吾々は小供の爲めに多大の犧牲を辭することがないし、而も不平なしに其の負擔を引受けて居るので、從て、從來は此の貴む可き本能に問題の解決を打任せ得たのであつた。併し、例へば不良少年といふことになると、最早、親の慈愛だけでは解決することの出來ないことになるので、いよ〳〵國家が其の職責を自覺することになつて來た。故に、さし當りは、國家は不良少年問題に沒頭するといふことで焦眉の急に應ずることを得るかも知れぬが、事柄の性質を考へることになると、國家は、從來既に久しく小

供問題に關する其の職責を盡すことを怠つて居たものと謂はねばならぬ。其の之を盡すことを忘れるが故に不良少年を生じたのである。換言すれば、國家は、從來、親の慈愛といふ責む可き本能を濫用したのである。其の結果として、茲に不良少年といふが如き、其の兩親の爲めにも、又國家自身の爲めにも悲酸なる事實に遭遇せねばならぬことになつたのである。

□

小供問題に付て、國家が其の職責を盡すことを怠れる結果は二つの方面に現はれた。其の一つは右に述べた不良少年である。不良少年の數が多くなるといふことの原因は、固より單純に一つや二つにまとめて論ずることの出來ないものではあるが、親が小供に對する任務を盡しきれないといふことが其の最も有力なる原因の一であるのである。併し、第二として、兩親にとりもつと面倒の少ない方面に結果が現はれて來た。それは人口の減少である。增加しないといふことである。少くとも增加率が減少したといふことである。專門家の調査に依ると、我邦の人口增加の狀況は、さし當り、悲觀す可きものでもないやうである。殊に其出生率は相當に顯著なものがあるとのことであるが(例へは高野博士「本邦人口の現在及將來」第一三二頁以下、第一八四頁等)、併し固より改良す可き餘地は少くない、同書第一七八頁)。而して出生率の如きは、今日以上の增大は望まれぬとのことである(同書第一七七頁一七八頁)。さて、我邦のことは暫く之を措き、之を歐洲の事迹に付て考へるに、謂ふまでもなく「フランス」の人口減退といふことは、著しく同國識者の論議に上つて居ることであるし、「ドイツ」に於ける出生率遞下といふことも、近頃に至りて同國の問題となつて來た所である。而して其の「フランス」に於ける人口減退の原因

は、畢竟出生率の遞下といふことに在るし、又「フランス」「ドイツ」に於ける出生率の遞下といふとは、主として兩親が小供の生產を避けるといふことに歸因するとのことである。學者の論じて居る所を見ると、結婚數も相當にあり、又其の結婚から小供の生れるのも相當にあるといふことである。唯、それ〲の家族に就て見ると、小供の數が少ない。一人とか二人とかいふに止まるのである。所謂一人主義又は二人主義である。此の如きは出生率の減少が故意に基くものであり、計畫的なものであるといふことに理解せられねばならぬことになるが、又他の一面から考へ、社會に於ける生存競爭がます〱激しくなると同時に享樂的欲望が段々つのつて行くといふ事實に徵して見ても、まことにさある可きであるやうに思はれるのである。我邦に於ける人口問題は「ドイツ」の如くは問題とならぬやうである。況や「フランス」の如く悲觀的なものでないのであるけれども、社會に於ける生存競爭と享樂的欲望との相交錯する關係が、彼地に於けるそれと段々似寄つて來るといふ事實に就て考へて見ると、同じやうな問題が我邦にも發生し得るものと考へねばならぬ。吾々は今からして此問題に相當な注意を拂つて置く必要があると思ふ。

四

殊に人口問題が這回の戰爭につれて更に火の手を擧げることになつたのである。這回の戰爭は、或意味に於て科學の競爭と謂ふことが出來よう。種々な機械や方法やが大袈裟に利用せられるのである。非常な長距離まで利く大砲とか、恐ろしい毒瓦斯とかいつたやうなことが、著しい進歩をした。故に、這回の戰爭は廣い意味に於ける道具の爭といふことになつて居ると思はれるが、それかといつて、其の爲

めに人其者の大切なことが少しも減退しては居ないのである。矢張、兵士が澤山必要であるのだある。兵士の供給の大きいことが、最後の勝利を占む可き要件となつて居るのである。故に矢張戰爭の要點は人、特に其の數の問題に歸着すると謂つても良いのであると思はれる。加之、戰後の經營といふことが、今からして大に苦心されて居るのであるが、此の問題の解決は格別著しく人、特に其の數の如何に關係があるので、各國とも此の點に付ては苦心して居るやうに見受けるのである。故に人口問題殊に出生問題といふやうなことを論ずることは、戰爭に依りて特に注目を引くに至れる小供問題として、又現下の時事問題と考へることが出來る。

加之、戰爭開始後、各國に於ける出生の數が著しく減じて居る。父たる可きものが戰場に出て居るといふことが其の最も大きな理由になるのであらう。之は既に統計的に明らかにせられて居る所で、「イギリス」に於ても、「ドイツ」に於ても既に各方面の注意を引いて居る。「フランス」に於ては、平時に於てさへ、特に人口問題に惱んで居るのであるから、今やそれが一層熱心に論議せられるのは當然である。

□

「フランス」では平時から人口問題が苦慮されて居る所から、特に此の點に付ての論議がある。我邦に於ては、さし當り人口問題が問題になつて居ないから、此の點に付ての論議があまりない。――地方的な惡い慣習にして人口增加に妨あるものに關する特殊の論議は暫く別にするが、それとても問題の樣子は一般的に茲に論じて居るものと同一である。――さて私が、茲に不良少年に關する問題から一轉して更に人口減退の現象に眼界を擴めよと主張するに付き、之を不必要な、少くとも尙早な議論として排斥

した人がないでない。併し、私は此の問題を今から研究して置かねばならぬと信ずるのである。不良少年問題は、小供の「ナショナリゼーション」といふことを、一般に認めしむるに至つた一の原因であるに過ぎないので、從て、小供の「ナショナリゼーション」が單に不良少年に付てのみ必要であるに止まるといふことにはならないのである。それと同じく、人口減退といふ事實が現實にされてから此問題を論ずるのでは、研究の時期が適當なものと稱することを得ない。人口減退といふことは既に西歐に於ては事實である。而して其の原因と考へられて居る所の事項は、早晩我邦にも實現し得るものであることを考へて見ると、今からして牖戸を綢繆するの必要があらうと思はれる。而して私が特に高調せむとする所は此の問題の基礎となれる思想其者で、卽ち、社會に對する國家の責務といふ點からして、此の問題を取扱ひ、畢竟、小供問題といふ一角からして國家乃至法律の作用に對する現代の思潮と理想とを論じて見たいといふ點に存するのである。

□

但、謂ふまでもなく、私は法律の研究に從事する一の學徒に過ぎないので、而して、此の法律なる特殊の方面から此の問題を考へるのであるといふことを斷つて置く。問題の研究を單に法律的方面から試るといふことは、謂ふまでもなく極めて半面的なことであり、而も或は見方に依りては、研究の重要な方面でないかも知れないが、私の立場は其の半面的なものに過ぎないことを諒察して貰はねばならぬし、又法制に現はれた二三の斷片的な咄をすることも、此の問題の解決に關する基本觀念――卽ち私の所謂子寶國有論――の定め方に貢献する所があらうかと考へられるのである。

□

法制に現はれた問題としては、小供問題は、徐々に個人的から社會的に進みつゝあるのである。謂ふまでもなく、從來の法律は個人の權利といふことを基礎としたもの、所謂個人的なものであつたのである。從て、又、各自の責任といふやうなことが個人的にのみ理解せられたのである。併し此の法制は漸次に一定の方向に向つて變動しつゝあるのである。其の變動の標的は吾人の社會的生活に於ける共同責務といふことである。共同の利益、共同の權利、共同の義務といふことを法律の基礎として理解すること、從て、吾人は此の共同體に向つて責務を負ふし、共同體は共同體として吾人に對し又責務を負ふことになるものとすることが、新らしい法制の向はむとする所である。法制に於ける此變動は甚だ徐々であるが、併し確實である。法制は學者の屡說明するが如く社會其者の反影であるから、社會が一部の思想家の欲するが如く急激に變動することの出來ないやうに、法制も亦徐々にしか變化して行くことの出來ないものであるが、併し、社會が一定の過程を踐むで進化するが如く、法制も亦其變遷に付て一定の方向を持續し、確實に其の一歩一歩を占めて行くものである。故に法制に付ては常に二つの點を注意せねばならぬ。第一は、法制上の解決は常に妥協的なものであり、從て微温的なものであるといふことである。併し、第二に、吾人は常に、其の法制の趨勢に付て、其の根底に潜まつて居る大なる思潮を看取せねばならぬといふことである。

□

從來の法制として、小供問題に付き特に規定されたもので明かに吾人の注意を引くのは、濟貧に關する

刑法の規定である。又遺棄に關する刑法の規定である。是等の刑罰規定を見るに小供の生命の貴重なものなることを豫定しては居るが、他の一方に於ては、小供の養育に對する責任の歸屬を單に個人的なものにしか見て居ない。之が從來の法制の特質と謂ひ得るものである。私は、右の刑罰規定が小供問題の解決に對して全く無意義なものとは思はないけれども、國家が個人に對し、單に刑罰を以て此の如き負擔を命ずるに止まるのは決して妥當な政策でないと思ふのである。此の如き制度に於ての國家は、單に權力の主體として現はれて居るばかりで、利益又は負擔の公平なる分配者としては何等の働きをもして居るのでないのである。一體、刑罰が刑罰として其の社會的作用を全うするのは、刑罰の半面に成立する規範が正義公平の上から見て妥當なものでなければならぬ。妥當を缺いた規範を、刑罰で强行するといふことは車を横に押さんとするものである。之は權力の濫用と謂はねばならぬ。併し、從來の刑罰規定にはどうもそれが多いのである。

さて、既に遺棄を處罰し、又墮胎を犯罪とする以上は、更に進みて避姙其者を犯罪とせねばなるまい。更に又一歩を進めて考ふれば、結婚せざること其自體を以て一の犯罪と見ねばならぬことになる。避姙の處罰、結婚の强制といふことが、實際上可能なりや否やの判斷に付ては深く語を費やすの必要がない。昔は羅馬では結婚を强制したことがあつた。今ではそれが只昔咄になつて居る。避姙の處罰といふことも別に直接な方法がない爲に、避姙の方法を書いた出版物の取締位に止まつて居る。併し、假りに、避姙の處罰、結婚の强制が國家の絶大なる權力を以てすれば、爲し能はざるの理なしとしても、國家自身が小供に對する責務を自覺して小供の發育に對し自身の爲す可きを爲さない限り、又國家が小供の養育

に關する社會各員の負擔を公平にしない限り、問題はいつも循環して居るばかりであらう。

□

併し、從來の制度は、之を歴史的に見れば、相當な合理的根據を有するものであるのである。從來の制度では、何事も個人本位に組織せられて居る。財產法に就て論ずれば、個人的所有權と契約の自由とが其の基本であつたが如く、小供問題に就ても、小供を國家全體の小供として取扱ふといふ觀念は發達して居なかつたのである。それで、小供を目して、謂はば兩親の私有物の如く解するものと見受けられる制度が多い。其遺棄を罰し、墮胎を罰するといふのは、多少、小供私有物の觀念に一歩を進めたものであるけれども、それとても、單純な素朴的な道德觀念か、又は私有物と雖も勿體なくしてはならぬといふ位のものであつたのである。國家は未だ小供に對する自己の責務を感じて居ないのであつた。之は百年前の思想、卽ち、「フランス」民法制定當時の哲學からは容易に理解し得られることであるのである。

親權の制度の沿革といふやうなことに付ても同樣で、小供が親の私有物である以上、親は小供を賣らうと喰物にしようと勝手である譯であつた。併し今日では、個人本位の思想も、四時の序、其の功を成すものは去らねばならぬ。親權の絕對性(之を小供の方から見れば親に對する無條件服從義務)が制限さ れることになつて、所謂親權の喪失といふことが規定せられることになつた。曰く、父又は母が親權を濫用し又は著しく不行跡なるときは、裁判所は子の親族又は檢事の請求に因り其親權の喪失を宣告することを得(民法第八九六條)と。又曰く、親權を行ふ父又は母が管理の失當に因りて其の子の財產を危くした

るときは、裁判所は子の親族又は檢事の請求に因り其の管理權の喪失を宣告することを得（民法第八九七條第一項）と。此規定は、小供を親の私有物と見る見解から脱却して、小供自身の人格を尊重することと、小供を國家の子寶とするの見解とに基いて居るものである。親權を以て小供に對する所有權とは見ないで、國家の子寶に對する社會的義務と見ることになつて來た結果である。「フランス」民法の沿革に就て見ると、親權の制限に關する種々の規定は、十九世紀の過程に於て徐々に發達した所であるので、學者は、親權が、初めは親の爲めの權利であつたのから、終には小供の爲めの義務に變つてしまつたと說明して居るのである。

附言して置くが、親權喪失の原因を單に、親權の濫用と著しき不行跡とに限ることは、或は不十分である。親權が一の社會的義務である以上は、親權者が單に親權を適當に行使しないといふだけで、之を其の喪失の原因と見ねばならぬ。「フランス」の一八八九年七月二十四日の法律は、親權の喪失及び小供の保護に關するものであるが、其の標題を『虐待され又は道德上遺棄せられたる小供の保護に關する法律』として居る。其の法律に於て親權喪失の原因として揭げて居る所は、多くは我民法に所謂『親權の濫用』『著しき不行跡』といふことに該當するものであるが、併し、積極的に親權の濫用又は不行跡といふまででなくとも、小供が『道德的に遺棄』せられた場合(enfant moralement abandonné)、卽ち單に構はずに放つて置かれる場合に於ても、尙、其の規定の精神が適用せられねばならぬものである。我民法が、解釋上、如何なる邊まで適用せられ得るかは、細かい解釋論に讓らねばならぬが、兎に角、觀念問題として右の如き思想の趨向は、之を認めねばならぬと考へて居る。

□

既に、遺棄墮胎を處罰し、既に親權の喪失を規定する以上は、其の精神を更に擴充して、國家は自己の責務を自覺せねばならぬ。即ち、遺棄墮胎をするの必要に迫られないやうに制度を立てて行かねばならぬ。又親權喪失の場合に於ける小供の處置を適當にして行かねばならぬ。處罰と生存競爭とのダイレンマに陷つては、個人の地位は如何ともし難い譯である。親權の喪失に因りて解放せられた小供が野中に彷徨して居たのでは、彼等は矢張野獸の群に入るより外はないのである。

即ち、問題の根本的解決は、小供を全然國家の手で養育することにするといふ點に存する。而して兩親は、國家から其の適當なる養育者として指命されたものと解することにする。從て兩親が養育者として不適任な場合、即ち親權喪失の場合には、國家に於て他に適當な養育者を指命することにせねばならぬといふことになる。而して既に其の兩親なり、其の他の養育者なりは國家から指命されて職務を行ふ者であると解するならば國家は其の勞に對して相當に酬ゆる所がなければならぬ。其の功績に對して相當に表彰する所がなければならぬといふことにならねばならぬのである。――重ねて謂ふが、私は小供に對する親の道德的責務を無視するのではない。親たる者に對しては固より親の其の責務を論ぜねばならぬが、國家に對しては又、國家の責務を說かねばならぬのである。

「プラトン」が、昔、小供が全然都市(即ち國家)に依りて養育せられねばならぬといふことを說いたことがある。「リクルグス」の法律のことも歷史の敎科書で敎はつた所である。併し、其の昔の如き理想を實現することは、今さし當り不可能である。法律は、矢張、社會と共に徐々に變遷して行くものである。併

し、矢張、其の變遷は持續せられて居るので、私は、其の例として、二三の法律的實例を考へて見たい。

□

先づ、所得税のことを考へて見たい。各自が其の所得に比例して所得税を收めるといふことは當然の義務である。所得税に付き最後まで兎角の議論をして居た「フランス」でも、結局、一九一四年七月十五日の法律で之を規定することにした。

所が、此の最後に制定せられた「フランス」所得税は、子供問題にとりて最も面白い規定をして居るのである。稍複雜であるが、大略を述べて見やう。

第一に、少額所得者に對する免税點が獨身者なると否と、小供を有する者なると否と、又其の小供の數に比例して相異つて居るのである。我邦の制度では、一律に免税點が四百圓となつて居て（所得税法第六條）、一年に四百圓以上の收入ある者に限り所得税を收めることになつて居るが、「フランス」では、其の免税點が、獨身者なるときは五千「フラン」、妻ありて子なき者は七千「フラン」、一人の未成年の子あるときは八千「フラン」、二人の未成年の子あるときは九千「フラン」、それ以上一人の小供を增す每に免税點を千「フラン」宛高めることになつて居る。

第二に、所得に對する一定額の控除に付て同樣のことが規定せられて居る。我邦では、俸給、給料、手當、歲費に就ては收入年額から其の十分の一を控除したものを其の所得とすることになつて居る（所得税法第四條の四）。又右の如くにして計算したる所得が五百圓以下なるときは百五十圓を、七百圓以下なるときは百圓を、千圓以下なるときは五十圓を其の所得から控除することになつて居る（同法第四條の

五)。右の規定は餘程社會的なものであるのであるが、「フランス」では妻子に關聯して次の如き控除額を認めるのである。即ち、妻ある者には二千「フラン」を控除し、其の他の扶養義務ある家族に付ては、五人以內ならば一人に付千「フラン」宛、六人以上ならば千五百「フラン」宛を控除すといふことになつて居る。此の點は他の諸國の所得稅法にも例のあることで、例へば「イギリス」では、百三十「ポンド」乃至五百「ポンド」の所得者に對しては十六歳以下の子女一人に付二十五磅を控除すといふことになつて居るし、「ザクセン」では、三千百「マーク」以下の所得者に對し、六歳以上十四歳以下の小供一人につき五十「マーク」宛を控除する。「プロイセン」では、六千五百「マーク」以下の所得者に對し、十四歳以下の小供二人以上を有するときは、其の數に從ひて稅率を遞下することになし、又「バイエルン」でも、五千「マーク」以下の所得者に對し、十五歳以下の小供を有する者に、同じく稅率を下げることにして居る。斯樣に他の諸國にも例のあることであるが、「フランス」では、納稅者の所得額如何に拘はらず、右の控除をすることにして居るし、小供の年齡は二十一歳といふことになつて居るし、小供の數が五人以上なるときは特に控除額を高めて、他國の制度に比し、子福者の保護に努めて居る點が多いのである。

第三に、稅額に對して又一定額の控除をする。即ち、扶養者一人を有するときは百分の五、二人のときは百分の十、三人のときは百分の二十、それ以上、一人を增す每に百分の十宛を割引き、結局、稅額が二分の一に至つて止まることになつて居る。右の扶養者中には親(七十歳以上又は虛弱な尊屬)のことも含まれて居るが、小供(二十一歳以下又は虛弱な卑屬)が最も重要なものになる譯である。

右の標準から計算すると一萬「フラン」の所得者に對し、獨身者ならば二十「フラン」の稅、有妻者なら

ば十二「フラン」の税で、三人の小供を有する者には免除といふことになる。又二萬「フラン」の所得者に就て見れば、獨身者百二十「フラン」、有妻者九十六「フラン」、三人の小供を有する者四十六「フラン」といふことになる。(「フランス」の所得税法のことは工藤博士「最近財政之研究」第二四〇頁以下に詳細な説明がある)。

倘、「アメリカ」合衆國の所得税(一九一三年十月三日の法律)のことを一言附加して置くが、之は結婚者に對する免税點を高めて居る。即ち、妻と同棲する夫、又は夫と同棲する妻に對しては所得税免税點に付き所得額より千「ドル」を控除す。但、夫妻併せて千「ドル」を越ゆることを得ずといふやうなことになつて居る。

さて、所得税の減額が子福者に對し如何程の慰安と奬勵とになるかといふことは固より疑問で、問題の根本的解決を距ることは遠いと謂はねばならぬ。併し、法律や制度は徐々に變つて行くのである。而して所得税法の斯の如き規定は、其の精神に於て正義と公平とに合致するものと謂はねばならぬ。我所得税も亦此の趣旨に於て修正せらるゝこと、又出來るだけ此の精神が徹底するやう修正せられるやうに私は希望して居る。

□

次に「アメリカ」合衆國に於て行はれる「母親扶助金」mothers' pension に付て一言述べたい。之は母親が小供の養育に困難を感じて居るとき、それに對し公金を以て扶助するといふ制度である。一九一三年頃から著しく諸州に發達した所である。一九一三年の初には、只「イリノイス」と「コロラド」とに右扶助

金の法律があつたに過ぎなかつたが、同年中には其の他十七州に同様の法律が出來たといふことである。一九〇八年に「サン、フランシスコ」で此の運動が起つたが、初めは別に法規はなかつた。今日では法律になつて居るのである。各州互に多少趣を異にして居るのであるが、大要次のやうなことになつて居る。

第一に、扶助せらる可き母とは、寡婦、夫より遺棄せられたる妻、囚人の妻、精神病の爲め監置せられたる者の妻である。其の外、州に依りては、離婚せられたる母、婚姻せざる母にまでも之を適用して居る。

第二に、扶助金の高は區々になつて居る。「カリホーニヤ」では、小供一人に付き一ヶ月六「ドル」二五、「イリノイス」では一人の小供を持てる母には一ヶ月十五「ドル」、二人以上の者には、小供一人に付一ヶ月十「ドル」といふことになつて居る。州に依りては、（例へば、「コロラド」、「マッサーチユーセッツ」、「ネブラスカ」）では、別に金高の制限を規定してない。

第三に、管轄廳は、大多數の州では少年裁判所といふことになつて居る。即ち、少年裁判所は、單に少年犯罪者の裁判といふ狹い範圍に於てのみ活動して居るのではないのである。さて、右法制の一例として「オハイオ」の一九一五年六月二日の法律を擧げて見ると次のやうなことになつて居る。

（一）寡婦、病氣の爲めに勞働が永久に不能になつて居る者の妻、囚人の妻、三年以上所在不明の者の妻にして貧窮の爲め小供の養育に困つて居る者に對しては、其の小供が學齡以下の者なる場合に於て、少年裁判所は扶助金を與へる。

(二)右扶助金は、第一の小供に付ては一ヶ月十五「ドル」を超ゆることを得ない。第二以下の小供に付ては一ヶ月七「ドル」を限度とす。

(三)扶助金は六ヶ月を限度とす。但、期限の到來したる場合に於て、之を更新するを妨げない。

(四)監査吏 probation officer に於て時々其の家を訪問するものとす。

(五)少年裁判所が右の扶助金を與ふるには、次の要件の具備せらるることを要する。第一に、其の小供は其の母親の手許で養育せられねばならぬ。第二に、若し扶助金が與へられないとすれば、其の母親が外で働かねばならぬといふ場合でなければならぬ。第三に、其の母親は小供を養育するに付き、道徳的に肉體的に且精神的に適當な人である場合でなければならぬ。第四に、扶助金を與へることが母親と小供との「ホーム」の結合を全うするに必要と認めらる可き場合でなければならぬ。第五に、其の母親の手許に小供を置くことが小供の利益と見らる可き場合でなければならぬ。第六に、監査吏が豫め母親の「ホーム」を調査し、報告書を少年裁判所に提出せねばならぬ。

右扶助金の性質に付ては今でも説が二つに別れて居るといふことである。第一は、之を以て貧民救助の一の場合に過ぎぬとするものである。併し、第二のものは之を以て矢張、其の名の示すが如く「ペンション」であるとするのである。之は motherhood に對する reward で、同時に小供に對し proper home training を保障するものであると謂ふのである。何れにしても、小供の養育には母の慈愛を中心とせねばならぬといふことが根本となり、母親が稼ぐことの必要に迫られて小供をネグレクトするやうなことのないやうにといふことが、此の法律の理由となり、又其の結果として、金錢上の負擔は國家に於て之

を引受けねばならぬといふことが此の制度の精神になつて居るのである。

□

「母親扶助金」の制度と關聯して研究せねばならぬのは姙婦產婦休養法である。產婦の休養といふことは我工場法施行規則に規定がある。曰く、工業主は產後五週日を經過せざる者をして就業せしむることを得ず。但、產後三週日を經過したる後醫師の意見を徵し支障なしと認むる業務に就かしむる場合は此の限に在らず(同規則第九條)と。而して此の規定の違反に對する制裁は百圓以下の罰金又は科料となつて居る(同第二一五條)。然り。產婦には斯の如き休養を要する。然らば此規定の精神は更に姙婦にも及ばねばなるまい。事の玆に及ばざるは不十分と謂はねばならぬ。併し、それはさうとしても、更に疑となるは、斯の如く休養を命ぜられたる產婦は、如何にして其の日々の生活を營むかの問題である。

私は此の點に關する「フランス」の一九一三年六月十七日の法律のことを說いて見たい。此の法律は一八八七年から「フランス」の議會の討議に上つて居たものであるが、其の精神に付ては固より一の異論もないのであつたけれども、其の規定の具體的內容に付て適當なる一致を見ることが困難であつたのである。終局、法律となつたものに付て見ると、次の事項が規定せられたのである。

（一）婦女が、出產の前後に亘り、八週間勞働を休止するも、雇主に於て之を契約解除の理由と爲すことを得ずといふことが其の一である。「フランス」法では、雇傭契約は、期限の定なき場合に於て、當事者の何れからも之を解除することを得るのであるが、右の場合に付ては雇主の解除權を制限して、婦女の地位を保障してやるのである。我民法には此の保障の規定がない(民法第六二七條、六二八條參照)。

(二)婦女は懷姙の場合に於ては損害を賠償することなくして雇傭契約を解除することを得る。「フランス」法では、雇傭契約の解除を勝手に許す代りに、解除者に損害賠償の義務を認めて居る。併し、姙婦に付ては、其の賠償義務をも之を免除するのである。我民法では、期間の定なき雇傭の解約の申入は二週間を經過して效力を生ずることになつて居る(民法第六二七條第一項)。姙婦に付ての特別の保護の規定はない。

(三)工場主、商店主は出產後四週間以內の者を使用することを得ない。此の違反に對しては固より刑事上の制裁がある。

(四)婦女勞働者は其の出產の前後に亘りて扶助金を受ける。其の扶助を受ける者の範圍は、給料を得て他人の家に於て勞働する者及び給料を得て自宅に於て勞働する者である。固より無資力なる者に限る。休養期間は、產前に在りては、勞働が自身又は小兒に對し危險あるものと認めらるゝ間、產後に於ては四週間、通計して八週間を越ゆることを得ないことになつて居る。其の休養期間內は扶助金を受ける。扶助金は國庫と府縣と町村とで分擔する。扶助金は一日五十「サンチーム」から一「フラン」五〇の間に於て町村が之を定める。若し一「フラン」五〇以上を支給する場合に於ては、其の超過額は町村に於て負擔す。母親が自ら哺乳するときは五十「サンチーム」の割增を受ける。扶助金を受くる者は休養及び衞生に關して定めらるる規程を守らねばならぬことになつて居る。

さて、謂ふまでもなく休養は姙婦產婦の義務である。而して國家が一方に於て之を强制するならば、他方に於て、其の休養間の保護を全うせねばならぬ筈である。「フランス」の右の法律は國家の其の義務

を規定して、同時に姙婦産婦に休養を命じたのである。

此の休養義務は他の諸國に於ても皆規定する所である。但、例へば、「イギリス」では、單に産後四週間の勞働を禁じて居るのであるが、「ドイツ」では、産前産後を通じて八週間、産後は必ず六週間といふことになつて居る。

休養中の保護に付ては「イギリス」も「ドイツ」も國家的保險の制度に依ることにした。即ち疾病保險に於て之を取扱ふのである。例へば「ドイツ」では、疾病保險に加入せる婦女に對して、産褥に在る間無料を以て助産婦及び醫藥の給與を爲し、且六週間は産婦の賃銀の半額に相當する救濟金を與へ、若し産後疾病の發生したる場合に於ては、普通の患者と同じく疾病救濟金を與へるのである。「イギリス」に於ては、出産の場合には、普通の疾病救濟金を四週間給與し、尚助産婦及び醫藥料として一時金を與へる。面して「イギリス」に於ける特色としては、勞働者の妻が出産した場合に於ても右の一時金を給與することになつて居る。尚、「イタリー」でも、一九一〇年に産婦に對する强制保險を制定して居る。其の他諸國の立法例のことは略する。

「フランス」では扶助金の制度に依り、「イギリス」「ドイツ」では保險の方法に依つて居る。之は、無論保險主義の方が、少くとも日本の立場から見て希望す可きことであると思ふ。併し其の稍細かい議論に立入ることは、さし當り避けて、制度變遷の趨勢から見ると、從來は單に慈惠團體の仕事とせられて居た所の産婦救濟が、斯の如く法制上のものとなり、同時に國家の重要なる義務と認められるに至つたのは、(謂ふまでもなく保險の制度に於ても、國家も亦多額の支出を爲すのである)、小供の「ナショナリゼ

ーション」といふ點から見て甚だ興味ある事例と謂はねばならぬのである。

□

さて右の法制と相並んで、母親の哺乳義務といふことを考へたい。小供の養育は親の義務である。而して其の義務の一として母親は小供に對して、哺乳の義務を有するものと謂ひたいのである。直接に此の義務を認めた法規はまだ知らない。併し、間接には「母親扶助金」の制度が之を認めて居るものと謂ふことが出來る。「フランス」の右の法律が自ら哺乳する母に對し扶助金の割増を與へることにして居るのも亦さうである。

一派の論者は哺乳義務を母親の義務として法律にしたいと謂つて居る。「パリ」の社會學者にして醫家たる「プローゾレ」氏 Sicard de Plauzoles(La maternité, 1909)が論じて居る所である。即ち、母親は少くとも十ケ月間は自ら哺乳せねばならぬし、又他人の爲めに乳母とならむとする者は、其の最後の出產兒が滿十月以上になれるか又は同時に二兒を哺乳するも差支なしと認められる場合に限ると論じて居る。尙氏は、右哺乳の義務の外一般に母親の權利及び義務を一の法律にまとめんとし、婦女は、懷妊六月に至る前に其の旨を町村役場に屆出づ可く、右屆出後に於て母親健康監督吏の監督を受く可きものとして居る。同時に母親は一切の醫療に對し請求權を有するものとする。尙、最後に母親は其の小供にして十四歲以下の者の數に應じ、國家より賠償金を受くるの權利あるものとし、總計十二個條より成る法律案に付き世評を問うて居る。

私が玆に哺乳義務に付き特に一言するのは、此の義務が有產階級に於て特に厭はれる傾があるといふ

ことを耳にして居るからである。私が茲で特に論ずるのは、小供問題に對する國家の責務といふことであるけれども、國家の此の責務を論ずることは、他方に於て、親の小供に對する養育を社會的義務と理解するからである。國家の責務を論ずると同時に國家に對する兩親の養育義務を明かにすることは又、子寶の「ナショナリゼーション」といふ思想の當然の適用であると思ふ。

□

さて、右の「プローゾレ」氏の案には、十四歳以下の小供を有する母に賠償請求權を認めるといふことがある。之は狹く理解すれば『母親扶助金』といふことに歸着するが、廣く理解すれば子福者其者の保護といふことにならねばならぬ。予輩は茲に於て、多數の家族を有する者の保護に關する「フランス」の一九一三年七月十四日の法律のことを述べねばならぬ。

既に、一八八八年に、時の政府が子福者 famille nombreuse の保護に關する法律の必要なることを説いて議會の注意を促がしたことがあつた。越えて一九〇八年に至りて下院は之を問題とす可きことを決議し、一九〇九年に議員よりの數種の提案を見るに至つた。一九一二年に至つて、議員から二つの法案の提出があつた。其の一は寡婦の救助に關するもので、其の二は一般に戸主が家族の爲めに將來の計を爲すに付き國家が補助せんとすることを目的とするものであつた。此の兩箇の法案が合一せられて下院を通過し、更に上院の修正を經て右の一九一三年七月十四日の法律となつたのである。

此の法律の精神とする所は、一方に於て、給料に依り衣食する戸主が四人五人の小供を教養するの實際困難なる事實を認め、又他方に於ては、大家族が國富の增殖と國力の繼續とに對し多大の貢獻を爲す

ものたるの點から、是等の家族に對し相當の扶助を爲すは國家の義務であるといふことを認めたことに在ると、此の法律の說明者が說いて居る。

此の法律に依り扶助金を受くる者は、次の三種である。卽ち、第一は父母が共に小供を養育する場合に於ては、其の戶主は第四子以下にして十三歲以下の者に付き扶助金を受ける。第二に、父の死亡、行方不明、又は遺棄に因りて小供が母の負擔に屬するときは、母は第二子以下にして十三歲以下の者に付き扶助金を受ける。第三に、母の死亡、行方不明、遺棄に因りて小供が父の負擔に屬するときは、父は第三子以下にして十三歲以下の者に付き扶助金を受けるといふことになつて居る。以上總ての場合に通じて、資力十分ならざる者に對してのみ此の法律が適用せられるのである。

扶助金は國庫と府縣と町村とで負擔する。扶助額は、小供一人一年六十「フラン」乃至九十「フラン」で町村が之を定めるといふことになつて居る。尤九十「フラン」以上を支給する場合に於ては其の超過額は町村に於て負擔するものとなつて居る。

「アメリカ」合衆國の母親扶助金と趣を異にするのは、父親も亦此の扶助金を受ける場合があることであるし、又此の扶助金は必しも親子が同居する場合に限ることもない。所謂里子のやうに、他人へ預けてある場合にも此の法律の適用がある。十三歲までの子に付て扶助金を與へるといふ點も差異がある。

右の法律の實施に付き豫算として計上せられたものが當初五千萬「フラン」とのことであつた。五千萬「フラン」は少しとしないが、小供一人に一年六十「フラン」乃至九十「フラン」といふのは相當の額とも思はれない。併し、兎に角此の如き法律の制定に依りて、國家の自己の責務を自覺することに一步を進め

たのは面白いと考へて居る。

□

右の法律に關聯して考へて置きたいのは、所謂給料の家族割増し（Familienzulage, Kinderzulage）といふことである。「ドイツ」でも「フランス」でも、大きな會社や地方自治體には其の使用人に對し、其の給料に付て家族の數に依る一定の割増を爲すことが行はれて居る。「ドイツ」では主なる都市が其の使用人たる勞働者に對し之を實行して居るとのことである。例へば「シャルロッテンブルヒ」や、「デュッセンドルフ」や、「フランクフールト、アム、マイン」や、「ストラスブルヒ」や、「マインツ」や、「ケーニヒスベルヒ」などの名が擧げられて居る。「コットブス」では市長の俸給に對し家族割增しを與へて居る。「フランス」では、稅關や、郵便電信や、「パリ」の公設質屋などの吏員に之が實行せられて居る。「ドイツ」の「クルップ」などでも之を實行し、其の方法としては小供が增した場合には、家賃を減じてやるとか、又は同し家賃で廣い家を貸してやるとかいふやうなことをやる。「パリ」の「プタンタン」雜貨店、「フランス」銀行も此の割增しを實行して居る。

若し官吏の給料を以て其の勞務に對する報酬と見る可きでなく、其の地位を維持するに付ての費用の支給といふことに解すること、一般行政法學者の說くが如くんは、國家の官吏、殊に少くとも下級の官吏に對して家族割增の制が實施せられて然る可しである。此の如くにして、一九〇八年に此の下級吏員の割增しのことが「フランス」の下院で問題になつた。一九一四年には時の大藏大臣が此の制度の實行に關する法律案を提出す可きことを約束したが、時局の爲めに、今尙其のまゝになつて居る。

官吏の俸級を高めねばならぬといふことは、我邦に於ても現下の問題であるが、官吏の頭割に一律に之を論ずる外に、家族の數に依る關係を考慮することが、公平であると思ふ。多數の使用人を使用する會社商店等に對しても此の點の考究が願はしい。現に我邦でも或會社が或程度に於て此の制度を實行して居ると聞いて居る。

□

遺族扶助料といふやうなものを定めるにも此の點が考慮せらる可きであると思ふ。「イギリス」では、現に戰死者の遺族扶助料に付き、寡婦が獨り殘つた場合、寡婦が小供一人を有つて居る場合、小供二人を有つて居る場合、小供三人を有つて居る場合といふやうに區別がしてある。

□

斯樣に、子福者の保護をすることは之を國家の任務と解しても、他方に於て母親の哺乳義務乃至親の小供に對する養育義務は固より之を高調せねばならぬ。さて、之に關聯して、之に對應して居る一種の義務のことを考へて置きたい。それは、獨身者、結婚したるも小供なき者に對する課税である。之も單純なる立法論ではあるが、理論の根據は社會的任務の平等なる分配といふことになるのである。之は必しも結婚を奬勵するといふまでの意味を持つものと考へる必要はない。又必しも、小供なき者に對する一種の制裁として考へるまでのこともない。唯、小供なき者、小供あるも自ら養育の任に當らざる者は、養育といふ辛勞多き社會的任務を採らないものであるのであるし、又子福者の保護に關して國庫なり地方團體なりの負擔が大きくなることになつて見れば、小供のない者に對し其の費用の一部を持た負

擔せしむることによりて、社會的任務分配の平均をとることにせねばならぬのである。一般に課税方法は、單純な頭割り主義、即ち形式的平等主義から離れて、漸次社會的な分配主義、即ち實質的平等主義へに移りつゝある現在の趨勢から謂ふならば、一方に於て所得税の賦課に付て小供の數を參酌せねばならぬといふことの主義を更に徹底せしめて、小供のない者（而して小供があつても自ら養育の任務を採らない者、例へば哺乳義務を盡さない者にまでも及ぶべきである）に對する特別税といふことも考へて見ねばならぬことと思ふ。唯、現在の所では、此の主義は之を認めても、之を法制に現はすだけに詳細の點の論議が熟して居ないのである。

□

さて、吾々は此の如く小供問題に關して改革問題を持つて居る。私は其の解決が漸次進捗せむことを希望するのであるが、それと同時に、其進捗に關聯して、子福者と選擧權との關係に付て一言を附加して置かねばならぬと思ふ。

白耳義では獨身者と妻帶者又は小供ある鰥夫とで投票權が違ふ。前者は一票、後者は二票といふことになつて居る。さて同しやうな改革案が一九一一年に「フランス」の下院へ提出せられて居る。之は「ルミール」氏案と云ふので、獨身者に一票、結婚者に二票、三人以上の小供を有する者に三票といふのである。然るに此の提案を不十分として更に「デユガージユ」氏案と云ふものが提出せられて居る。「デユガージユ」氏の主張の大要を述べて見ると次の如くである。曰く――

「ルミール」氏案は、婦女及び未成年の小供に對し其の固有の權利としての選擧權を認めない點に於て

不完全であるし、又小供の數の如何を考慮せざる點に於ても亦甚だ不徹底である。小供二人ならば、小供に付ての選擧權を認めないし、又十人の小供を有てる者も三人の小供を持てる者と同樣であるといふのは贊成が出來ぬ。

選擧は全「フランス」人の投票に依らねばならぬ。現在に就て見ると、普通選擧とはいふものの、それは名のみである。選擧人が千百萬人である。其の內小供を有せざる者及び小供を有するも三人に至らざる者が七百萬人で、三人以上の小供を有する者が四百萬人である。其の前者に就て人口を見ると、其の七百萬人の選擧人は僅かに六百萬人を代表して居るのに過ぎないに對し、其の後者に於ては、其の四百萬人の選擧人が二千三百萬人を代表して居る。前者に於ては二人に付き一票と見ることが出來るに對し後者に於ては六人に付き一票である。國家の將來の繁榮に付き多大の負擔を辭せざる子福者は、選擧權の關係に於て斯の如き見じめな待遇を受けて居る。形式的には平等な普通選擧權であるが、事實に於ては不公平も甚しいと謂はねばならぬ。

名は普通選擧と謂ふけれども、「フランス」の人口四千萬の內で、實際選擧權を有する者は、右の如く千百萬人に過ぎない。之は婦女が除外され、又小供が除外されるからである。而して、子福者も獨身者も平等に一票といふことになつて居る。併し、國家の繁榮に對して利害關係を有することは、婦女とても小供とても、其の獨身者と其の痛切の度に於て趣を異にする所がない。而して、今次の戰爭の爲め、家長が潔く戰地の露と消えた後、其の寡婦と小供とは、國運の將來に付て何等の主張をも爲すの權なしといふのは果して正當と謂へるであらうか。

眞正の普通選擧であるが爲めには、婦女も小供も選擧權を有たねばならぬ。而して其の行使に付ては、成年の婦女は男子と同じく一票の投票を爲すこととし、小供の選擧權は、其の法定代理人が代つて之を行ふことにすればよい。――

右は「デユガージユ」氏の提案の要旨であるが(Revue politique et parlementaire, mars 1918. p. 293 et s.) 必しも普通選擧といふ事を前提するまでもなく、選擧權に一定の制限を付する法制の下に於ても、小供の數といふことを考へることは、全く其の理由なきこととも思はれぬ。人口論のオーソリチーたる「ジヤツク、ベルチーヨン」氏が其の著に於て、「小供を育てるといふことは納税の一の形式として考へねばならぬ」と主張して居ることを玆に引用すれば足りると思ふ。

婦人參政權論の理由の一として、婦人も亦母として男子に劣らない社會的任務を盡して居るといふことが主張されて居る。此の點だけで、婦人參政權の問題が解決されると謂ふのではないが、政治の民主的傾向から考ふれば、重い理由であると思ふ。「イギリス」も、最近に、どう〳〵婦女の選擧權を認めることになつた。

□

敬老尙齒といふことは、疑もなく美風である。之は我邦に於て履行はれる所である。さて、之と相伴ひて、子福者の表彰といふことも又願はしいことではあるまいか。「フランス」では各地方で之れを實行して居る。土地の有力者名望家などが率先して、地方長官と共に之を表彰するのである。近く「ペロンヌ」といふ地方での表彰式では、二人の娘と十三人の男子との兩親が表彰された。斯の如く多人數を

育てながら、尚、小供は健康に、田畑はよく耕されて居るといふのが表彰の理由である。而して表彰の演説をした「イザーク」氏が『斯の如きは國家のに對して債權者であると謂はねばならぬ』と謂つて喝采されて居る。

右の「イザーク」氏は「リオン」の商業會議所の會頭をした人である。此の人が一九一六年に『大家族會』La Plus Grande Famille といふ團體を組織した。其の會員資格は五人以上の子福者たることとなつて居る。子福者の權利、責務、有形無形の利益を研究し、且、其の權利及び利益の主張に付き社會に對して適當な運動を開始せようといふのである。而して、尚、他方に於ては、子福者に對し直接間接に助力となる可き事業を創始組織せんとするとが目的で、其の爲めに、子福者の團體を組織し、互に意見と智識とを交換したいといふのが其の趣旨で、事業としては、調査部、相互扶助部、救濟部、共同購買部、救濟金庫部、保護部、プロパガンダをする部といふやうなものが出來て居る。尤、斯樣な團體は前から他にもあつて予輩の知る所でも、子福者會 Ligue des Familles nombreuses とか生命の爲めの會 Ligue pour la Vie とか人口增加の爲の同盟會 L'alliance nationale pour l'accroissement de la population などがあり、又「パリ」の社會政策學會 Société d'Economie sociale は、古くから此の問題に關して研究と主張とに熱心である。

咄の種として、戰線に於ける大家族の競爭懸賞といふことを附加して置きたい。之は右の社會政策學會の主催で、次のやうなことになつて居た。七人以上の小供ある家族で、現に出征せしめて居る男子の數の最も多い者に賞金を與へるといふのである。其の候補者たる者は、第一には農夫勞働者といふやうな者に限られ、一年に三千「フラン」以下の收入の者といふやうな制限が置いてあるが、又第二には、

酒精中毒の疑ある者と職業的貧乏人とを除くといふことになつて居る。賞金は三百「フラン」となつて居る。締切が一九一六年六月五日とかいふことになつて居たが、結果はまし當り私の手に解つて居ない。

□

右は主として戰爭開始までの事例に就て述べて見たのである。戰爭になつてから、思想の右の傾向が、ます／＼明かになつて行きつゝあることは疑ないやうである。

謂ふまでもなく、戰爭は國力の能率を最高度に發揮せしむるものである。其の爲めに各國とも、種々の方面に亘つて所謂動員といふことをやつて居る。動員は「ナショナリゼーション」の一の形式である。換言すれば、「ナショナリゼーション」といふことが、戰爭に由來する社會現象の特に重要なるものの一になつて居る。

小供に就ても、右の「ナショナリゼーション」がます／＼歩を進めつゝあるのである。新聞や雜誌に散見する所に依ると、種々の事實が目にとまるのである。兵隊に歸休させるといふ制度は、單に其の歸休といふことの外に重要な意味を有して居る。

結婚を奬勵することが又著しい事實のやうである。結婚を强制する制度が設けられたといふことである。獨身者課税といふことも實行されて居るといふことである。私生兒の地位が大に改良されたといふことである。母の哺乳も納税免除とか其の他の方法で奬勵されて居るとのことである。私は、戰爭開始後に於ける此等の事實に關し、學術的に材料を整頓するだけの餘裕をまだ有つて居ないので、此の點をはつきり論ずることを得ないが、兎に角、右に述べたやうな種々の事實が新聞や雜誌に散見して居る

ことは一般に知られて居る所である。此等の事實の中には、吾々の常識から見て、ともすれば或は突飛であり、又甚しきは反道德的と見られるものもあるが、思想の趨向は十九世紀の終から二十世紀へかけて、殊に一九一〇年以後甚だ明瞭になりつゝあつた所である。戰爭になつてから、其の傾向が特に促進された爲め、場合によりては正規を逸して居る點もあるやうに見えるが、併し、大觀するに於ては、一定の流れの疑ふ可からざるものがあるのである。戰時に於ける異例として取扱ふことの出來ないもの、卽ち戰後に於ける社會政策の基本として、深く注意して置かねばならぬものがあることは、特に茲に高調して置かねばならぬ。

□

抑も、社會政策は社會全體に亘つての政策である。單純な貧民問題、勞働者問題でない。唯、問題が貧民に付き、勞働者に關して特に焦眉の急に迫つて居るが爲め、先づ其の一隅から、研究され計畫され實行せられるのである。殊に、社會政策を一般的に實行するが爲めには、國庫の莫大なる負擔を豫期せねばならぬ。右に述べた種々の小供政策が、或は不徹底な制限に拘束せられたり、又或は單に立法論としてのみ橫はつて居るのは、多くは財政方面から來る支障の爲である。緣返して論じた如く制度は徐々に變遷して行くのであるから、兎角、すべてが徹底を缺くことは免れない。併し、其の變遷の精神とする所は、社會全體の爲めに負擔を公平にし、社會の各自に社會的責務を自覺せしめ、國家自らが又其の責務を明らかに認めるといふ點に存するので、單純な貧民問題勞働者問題には止まらないのである。

吾々は固有の意義に於ける貧民や勞働者の外に、又所謂高等貧民、高等勞働者といふものを有して居

る。此の種の貧民、勞働者に對しても、前上論じた所が直ちに適用せられるのである。從來は、社會政策が慈惠とか救濟とか稱せられる爲に、高等貧民や高等勞働者が其の慈惠救濟に與ることは一の恥辱であつた。從て、此點に付ての主張が其等の人々の口から爲されることがなかつたけれども、社會の變遷は自ら是等の人々をダイレンマに陷れつゝあるのである。之を恥辱として主張を拋たんか、自滅の外ないことになる。然らずんば之を主張して自ら自己の社會的地位を公平に認めしめねばならぬ。斯の如くにして所謂中產階級問題といふことは、第四階級問題の外に重い意味を持ちつゝあるのである。經世家多くは曰はずや、國力の中心は中產階級に在りと。而して學者或は、此の問題を命名するに中產階級の保護と爲すが、保護といふのは、中產階級を寧しろ侮辱するの甚しき者ではなからうか。國力の中心たる中產階級に其の正當なる地位を認めるといふとが、問題の解決に對する出發點でなければならない。

されば、私が此の粗末な論文の標題を子福者保護としたのは妥當でない。唯茲には一般の耳に入り易きを擇んだまでである。其の子福者保護の精神は、子寶國有論から來るのである。其の子寶國有論は畢竟するに、社會の共同責務、卽ち所謂「ソリダリテ、ソシヤール」の思想の一の適用に外ならないのであるといふことを再言して、此の主張を一先づ茲に切上げることにする。

祖國に歸るの悲哀

(世界に同化せず世界を同化する能はざる國民)

茅原華山

世界に於いて最も望郷心の熾烈なる日本人が長い旅行から歸つて來る、如何に嬉しいことであらう、臺灣、支那、朝鮮から歸つて來る客でも、始めて九州中國の山を望めば、懷かしさに耐へないやうだ。

私のこの行は歲月からいへば二年である、前の六年に較ぶれば、その三分の一に過ぎないが、望郷心の熾烈なる日本人からいへば、必ずしも短しとはいへない、同船の客で、私は五ヶ月支那を漫遊しました、私は七ヶ月間南洋諸島を跋涉しましたといふを誇るものがあつた、私は前度の漫遊とは全で異つた方角に赴いた、紐育から太西洋を北から南に下つた、赤道を通過して南半球の人と爲り、南極十字星を眺めつゝ、椰子樹の蔭に四たび月を閲みし、大正七年は南阿米利加と南阿非利加との中間、南極を距る三千八百哩といふ海上に於て迎へた、隨分長い旅行であるともいへる、然しながら、私は躊躇しつゝ日本に歸つた、私は何うしても日本に歸るのが嬉れしいと思はれなかつた、旅馴れた身の望郷心などがなくなつたのも一つの原因であらうが、私が外世界から日本國民を最も冷靜なる觀照的態度で研究した結果、私は寧ろ日本國民の運命に就いて悲觀せざるを得なくなつたのである、私は敢て言ふ、今のやうでは殆ど樂觀する餘地がないと、哀みを通して喜びに至るといふが、日本國民は悲觀に徹底してゐないのみか、自己を悲觀さへして居らぬやうである、日本國民の現在の態度は一言にして蔽くせば、大病の身に作るを知らないで、其健康を誇つてゐるやうなもの

である。

それならば勵聲疾呼して國民を覺醒したならば可いではないかと言ふものもあらうが、物事はさう簡單に行くものではない。國民の自覺々々々々々といふことは多年叫ばれたが、日本國民は果して自覺しつゝあるであらうか、私が一年日本を留守にして歸つて見れば、國民は寧ろ戰爭の景氣に醉倒してゐる有樣である、その最も悲慘なるは自覺を叫んだ新しい人や新しい女が殆ど全滅したことである、自覺の叫びの迂なるを知つてか、成金と共に醉倒してゐる、日本の所謂思想界といふものは其進境を見ないで、反つて全滅に瀕してゐる。

自覺といふても其内容を與へなければ抽象論である、國民の自覺といつても國民が如何に自覺して可いか、未だ曾て具體的の内容を與へられたことがない、具體的の内容といへば、第一に日本國民の病は何んであるといふことの自覺から始まらなければならない、そして私をして言はしむれば、その病の大患痼疾にして容易に治癒すべきものでないことを自覺せしめねばならないのである。

その病の如何なる病であるかを指點するさへ容易の業ではない、指點されても果して自ら進んで投藥するであらう乎、日本國民は平靜に自己を觀照することを否む國民である、一切に蓋をしたがる國民である、好んで人前を繕ふ國民である、見えを張る國民である、實際破産するまで破産して夜逃げをするまで金がある振りをする國民である、それが自ら進んで自己の醜態を暴露して、内科的に外科的に大治療を遣るを敢てするであらう乎。

私は歐洲戰爭は世界の總勘定であることを覺つた、廣大無邊なる再整頓、再建築が世界の上に行はるゝに方つて、私だけ樣に依つて胡盧を描いては居られない、私も亦、不敏ながら自ら私の内世界の再整頓、再建築を實行せずんば、決して時勢に順應するとが可能ないと氣附て、思索研究をしてゐたが、私をして世界再遊の要求を起さしめた動機は、一は世界に放浪して學問の

違り直しをしたいといふのであつたが、一は日本國民を研究して見ねば、坐して言ふべく起つて行ふべき思想が出て來る譯はない、可能るならば勉强以て日本國民の生活をば徹底的に批判して見たいといふのであつた、日本國民の生活批判の爲めの外遊とは、一見矛盾のやうであるが、私が南米伯剌西爾のサン、パウロでは長らく總領事松村忠雄氏の厄介に爲つて居つたが、或時松村氏が「日本國民を研究せんが爲めの世界漫遊」は實に奇拔だ、破天荒だ、開闢以來絶無のことだが、日本に在つて日本の長い古い因襲の中に生活して居つては、全體として日本國民の理會が可能やう筈がない、僕も南米に居つて實は始めて日本國民を知つた、自己を知つたと言つたことがある、世界を漫遊して日本國民には容易に治癒すべからざる大疾患があるとを覺つて、而も國民が無自覺なるを知つては、故郷忘じ難しで、喜び勇んで歸られやうか、私は實に躊躇しつゝ日本に歸つたのである、瀬戸内海も富士の山も餘りに私の詩情を動かさなかつた、私の問題は自然ではない人間である、人間といつても日本國民である。

何が日本國民の大疾患である、私は此處にそれを詳說する餘地がない、詳說しないで斷片的に開陳すれば世間の誤解を招くの虞れがある、然れども既に筆を下した限りは何事をかを語らねばならない。

「日本國民は世界に同化せず、世界を同化することも可能ない國民である、固定硬化した國民で世界から[illegible]れば一個の異分子である」と明言したい、日本國民は斯かることを明言されるを好まないに相違ない、或は又怒髮天を衝いて、これ日本國民、大和民族を侮辱するものなりとて私を彈劾せんとするものがあるかも知れない、然しながら私が少くとも日本國民の一大疾患であると診斷したのであるから、之を明言するが[illegible]人の事であると信ずる。

私は之を說明するに私自身の蒐集した事實に依らないで、朝日新聞の上海特派員美土路昌一氏の「日本留學生と排日」と題する記事を引用しやう(六月四日——[illegible]九日)私は美土路氏とは全く面識がない、從つて氏の

研究と私の研究とは全く無緣である、氏は曰く「留日支那學生及び日本の各學校出身の支那人間に多年澎湃として漲れる排日思想に就いて十分なる研究を行ふことが刻下の急務ではあるまいか、余が支那各地歷遊の途上及び上海到着後數月間に見聞したる結果は、日本學校出身者の殆ど全部は悉く排日派に變じて、日に益す其色彩を濃厚ならしめつゝある」とて詳かに獨逸、米國、英國、佛蘭西の支那に於ける文化政策を說き、列强は此文化政策に依つて自國の文明を支那に扶植し、新しき第二國民の手に依つて自己の勢力を發展せしめ、以て其經濟的の地位を確保せんとするに至つた、卽ち支那內地に於ける學校の建設、留學生の自國招致策で彼等は此等の青年を仲介者として着々其政策を實行し而も侮るべからざる成功を收めつゝある、最近歸國せゐ留日支那學生が連日檄文を飛ばして排日の思想を皷吹しつゝある一方に、米國の赤十字義金募集が米國大學出身の支那青年を以て組織せる米國大學協會及び女子大學協會の發起に依つて主唱され、米國總領事以下米國人と聯合して日々非常なる成功を收めつゝあるが如きは、非常なる皮肉と謂はなければならぬと言つてゐる。

氏は北京に於ける日本出身者は五百二十二名で、米國は百五十四、英國は九十九、佛國は五十二、獨逸は四十七、白耳義は三十八、墺國は九、露西亞は七、西班牙、土耳格は各一で、北京に於ける外國學校出身者にして諸種の事業に活動せるもの﹅總數其過半は日本留學生である事實を擧げ、留日支那學生益々多くして排日熱愈々昂騰しつゝあるを證明し、且つ氏は「最も多く日本に留學生を派遣した湖南省に於いて最も排日的傾向多く、何事によらず、彼等の手に依つて日本人の事業が妨害せられつゝあることは、支那に於いて事業を經營しつゝある人々の直接經驗せるとである、米國が自國に留學し居たる詹天祐氏の手を通じて殆ど獨占的に支那鐵道材料を輸出しつゝある如きは、日本留學生に依つては夢想だにも能はざる所である」と言ふ。

美士路氏は其原因を擧げて曰く

一　日本官民の冷淡
二　教育營業者の無理會
三　留學生の差別的待遇
四　相互交際機關の絕無に由る誤解
五　卒業後の無聯絡
六　就職に對する無保障

等を以て之が主因とし、之に加ふるに

一　對支外交の錯誤より生ずる誤解
一　一部外人の煽動

美士路氏の記事は此れだけだ、此れだけでは固より所謂原因の推究檢擧には爲らない、然しながら美士路氏は新聞記者として其能事を盡くした、其原因を推究檢擧するは思想家のことである、然るに我國の思想家は西洋の思想を飜譯するが主で、事實を基礎として其原因を推究檢擧をしない嫌ひがある。

支那人と日本人は其國民性に於いて氷炭相容れぬ所があることを看取せねばならない、日本人は一時に興奮する國民である、支那人は永遠に打算する民族である、支那人は決して滅びざる民族である、堅く大地に喰ひ附いて決して浮足に爲らぬ民族である、蒙古民族も滿洲民族も皆支那民族に喰はれ吞まれて了つた。

何故に氷炭相容れぬかといへば、支那人は經濟的理性——甚だ惡質の處はあるが——を以て活きてゐる民族である、支那人は最もサアベルが嫌ひである、然るに日本人は依然として封建の戰爭本能を以て活きてゐる、何事も戰爭を以て解決せんとし、無意識的に領土の獲得を以て人間生活の究極目的としてゐる國民である、一は經濟的理性一本槍、一は戰爭本能一本槍、此二個の人間が根本に於いて一致せぬ所のあるは已むを得ないではないか、支那人が積極的經濟理性で動いてゐる米英獨の人間と共鳴するに不思議はない。

日本國民の一特色は其强烈なる排外性である、西洋人に對しては敬遠し、支那人に對しては譯もなく侮蔑する、世界が水ならば日本國民は油である、決して融合和解することが可能ない、蓋し日本國民は封建の差別觀的道德に鍛錬されたが、平等觀の社會生活に鍛

錬されたことがない、故に日本國民は相互の間でも差別的に結合しても平等的に結合することが可能ない、本能的に自他を差別せんとするから、日本國民の生活は暗鬪を以て徹底してゐる、中央より村落に至るまで、源平藤橘に分れて暗鬪して居る、世界に對しても亦固より此態度を革められない、白人に對しては本能的に下に居り、支那人や他の亞細亞人に對しては本能的に上に居る、前者に對しては本能的に謙遜し、後者に對しては本能的に威張る、殊に支那人に對してはいやに淸潔がつて侮遠する。

國家生活は武の生活で、社會生活は商の生活である、支那に於いては國家が社會に埋沒し、日本に於ては社會が國家に埋沒して了つた、日本には社會生活がないから無商の國民である、今日の戰爭は千金一擲の豪遊を試みるものなれば、無商の國民は其得意の武すらも容易に試みることが出來なくなる、國家は立體的のもので又且つ絶對的のものである、社會は平面的で地平線的で其中心が商であるから世界的である、社會のみある民族に臨むに國家のみなる民族を以てす、彼れは打算的に出でんとすれば、此は政治的に出でんとす、彼れは平和的に出でんとすれば、此れはサアベル的に出でんとす、其柄鑿相容るゝ能はざるは理の自然である。

誤解には相違ないにもせよ、支那人が日本は支那を以て第二の朝鮮と爲さんとする異心を包藏すと確信してゐるのは、日本の國民が自ら招いた罪もあることを自省せねばならない。

戰爭は一時の事である、殊に日本人に在つては戰爭は一時の事である、全く經濟的理性、打算的合理主義のない日本人に在つては、一時に興奮して赤熱するが其本來の面目である、支那人を教育するも、一時的に金を儲けてやらうといふのが其動機でないともいへない、日本人は祖先以來經濟的理性で生活して來なかつたから、祖先以來の經濟的蓄積がない、而して生存競爭の最も猛烈たる時代に會す、其生活難は其國民性と相合して、留日中國の學生多きを機會とし、學生を

育する事業をば絶對價値ありとして努力せずに、之を機會に成るべく多く支那人の懐を搾らんとすることがなかつであらうか、蓋し多くの日本人に在つては事業を絶對價値ありとする理想主義で努力してゐるのではなく、事業は方便で、一時に金を儲けんとするが目的である、最も惡質的な唯物主義に支配されてゐる。

日本國民は日本内地卽ち本島、四國、九州の因襲を携へ行かずんば、世界に永住し難い國民である、因襲を携へて行くも、鄕愁客恨に堪へ難き國民である、經濟的理性なく從つて永遠性がないから、長く外國に居れば自墮落する國民である、神經衰弱に罹る國民である、鐵の神經（アイロン・ナアーヴ）のない國民である、往々ホームシックの爲めに發狂する國民である。

米國に在る日本人の觀光團が日本に來るや、日本の先輩は『皆さんは能くも日本を忘れずに遣つて來ました』といふが、日本を忘れるので困まるのではない、日本を忘れられないので困るのである、それが獨逸人の澤庵、梅干、味噌の味が忘られないのである、日本人は世界に出で丶世界に同化することの可能ないものである、それならば世界を同化し得るかといふに、知らず日本國民は世界を同化するに足る何物を有する乎、衣か、故の兒玉臺灣總督は支那服を着けて曰く、これぞ世界に於いて最も着心地の可い着物であると、食か、住か、日本國民は我食、我住は科學的に洗練された最も進步したるものなりと公言して之を世界に推薦するの勇氣ある乎、然らば日本國民の内生活の產物に何物がある、曰くナッシングではない乎。

世界に同化せず、世界を同化する何物をも有せざる日本が、支那の學生を收容するとが實は問題ではない乎、留日學生は日本に於て西洋の古本的（セコンド、ハンド）敎育を受るに過ぎない、而も侮遠的の心を以て粗略に敎授されるに過ぎない、支那の靑年が一方には日本の淺游なるを知りて之を侮蔑するの心を生じ、一方には日本國民性に觸着して日本を以て領土的野心あるものとして深刻なる排日感情を懐いて歸るのも已むを得ないでないか。

今や日本國民は深刻に自己を内省觀察せねばならぬ一時である、長を長とし短を短とするといふやうな微温的のものではならない、最も大なる克己の心を鼓舞して自己の醜態を暴露して、拔本塞源的に自己を改造するのである、私は今や過去四年の思索觀察の結果を綜合した小著を印刷中である、私が突然『中央公論』の命に應じて筆を下しても、現在の私の全體を披瀝することは到底不可能である、世間に於ける私の背景は萬朝報時代の私である、第三帝國時代の私である、若くは古く中央公論に出た私が背景である、此背景を以て今の私が斷片的に書いたものを讀まれては、其斷片さへ或は理會されないかも知れない、或は恐ろしい誤解を招くかも知れない、私は右の小著を公にし、之を私の背景としたい、故に若し私の小著が細條末節はいざ知らず、苟も大體に於いて『中央公論』編輯者の同意を得たならば、改めて大に筆を執ることに致しまして、今回はこれで止めておきます、私は日本國民は内に同胞相爭ひ骨肉相喰むの時ではないと思ひます、日本は

一切が行き詰つてゐます、日本對世界の關係が行詰つてゐるのみならず、其國内の生活も行詰つてゐる、そして日本國民の中心思想は今に樹立されずして、六千萬の羊は暗中に摸索してゐる、若し私の新しく綜合した思想が世に知己を得ることが可能たならば、喜んで其人々の驥尾に從ひ、先づ思想的に日本國民の局面を一變し、更に大建設的經國家を得て之を廟堂の上に斷行して貰ひたいといふのが私の願ひである。

責任感の稀薄なる我國政治家の言論

——寺内首相失言問題に關する考察——

大山郁夫

寺内首相が去る三月八日、米國に於ける有名なる週刊雜誌「アウトルック」の記者なるグレゴリー・メーソン氏を引見した際に、日獨同盟の可能性に關して、なしたる言明が、その會見記事を載せた同誌五月一日號の我國に到着した頃、即ち五月下旬よりこの方、我國の諸新聞紙上で盛に論評せられ、遂に六月上旬に於て春秋會が英米の有力なる諸新聞に向つて打電したる反對意見の聲明とまでなつたことは、今尙ほ世人の記憶に新なる所である。寺内首相の該言明は、今までの所では、歐米諸國の有力なる新聞紙の論難の標的となつて居ないことは事實であるが、それが全然その注意より疎外されて居ないことは、英國の「デーリー・メール」が、右の「アウトルック」記事に關し、ノースクリッフ所持諸新聞紙通信員なるバナード、フォーク氏と寺内首相との會見記事を載せ、それが直ちに敵國たる獨逸にも一種の反響を喚び起し、少くとも「バイエリッシャー・クーリアー」及び「ノルドドイチエ・アルゲマイネ・ツアイツング」等の二三の新聞紙の論評を受けた一事に徴しても之を想見するに十分なるものがある。加之、首相の該言明に對して、現在に於て外國諸新聞紙上に批難の聲の現はれ來ないことは、それが永久に問題にせられないといふことの保障になるものではない。否、常識を以て判斷すれば、聯合諸國が日本の軍事上の貢獻を更に多く要求する所あらんとする傾向の仄見ゆる今日に在つては、居然として外交上の一勢力としての重任を自覺して居る筈のその有力なる諸新聞紙をして、當面の必要のために、之に對して沈黙を守らしむる動機が、より多く確實に存在して居るものと推定する方が、寧

る適當であると見るべきである。之に反して遠き將來に於ては、寺内首相の日獨同盟の暗示が屢ば引合ひに出さるべき機會は、決して少くない樣に思はれる。懸くすると講和會議の際に於ける日本の要求に對する牽制策として、それが戰爭繼續中に於ける日本の誠意の缺乏の證明として引用せられまいものでもない。それ程でなくとも、現今に於て暫く潜伏の狀態に在る黄禍論が、後日極東に於ける經濟競爭のために刺戟せられて再燃するが如きとあらば、その時には日本の陰險なる意圖が中傷的に高唱せらるべき可能性は最も多く、而して若しさうなつた曉には、寺内首相の右の言明の如きは、極めて貴重なる證憑的資料として盛に使用せらるるに至るであらうと想像するのは、決して間違つた見方とは謂へない。由來或る種の目的のために國際的偏見を煽揚するを以て事とする論者は極めて多く存在し、而して是等の徒輩の味覺に最も快適の感を與ふるものは、此種の材料を以て随一とすること位は、今更事新しく説明するまでもないことである。

斯の如く考へ來らば、寺内首相の對「アウトルック」記者言明の齎らし來る結果は、決してメーソンをして一時の名を成さしむる程度に止まるものとは謂へない。既に述べたる所の如く、現今までの所に於ては、直接に右の言明を楯に取つて日本の政策を批難した外國新聞は、我等の知つて居る範圍内に於ては未だ現はれて居ないけれども、間接にそれに關聯して居るものでないかと思はれる事實は、決して絶無であるとは謂へないのである。今その一例を擧ぐれば六月一日紐育發の朝日新聞特電に依つて報道せられたる濠洲聯邦首相ウイリアム・エム・ヒューズ氏の紐育市なるユニオン・リーグ倶樂部の晩餐會に於て試みたる濠洲モンロー主義の演説の如きは、正しくそれである。ヒューズ氏が該演説に於て特に力説せんと欲したる所は、濠洲及びニュージーランドが自由民の聯邦として存續せんがためには、その領域を將來の敵國の侵略に對して完全に保障する必要あるが故に、來るべき平和會議に際しては、太平洋上に於て濠洲と共同利益を有する文

明國たる米國の友誼的援助に依つて、以て右の目的に相應する條件を獲得しなければならぬ、といふ點に歸したのであつた。(六月四日東京朝日新聞第三頁參照。)

言ふ迄でもなく太平洋は主として日、米、濠三國間に蟠屈する一大湖水の如きものであつて、日本は此海洋上の平和及び均勢に關して濠洲と共同利益を有する點に於ては、決して米國に遜る所がない筈である。加ふるに日本は濠洲の母國たる英國とは同盟の間柄に在るものであつて、その關係に依り對獨墺戰爭に參加したる結果として獨領南洋諸島を占領し、現に之が守護の任に當つて居るものであるから、本來ならば濠洲の政治家が平和會議に於ける共同行動者として米國に着眼する以上は、同時に我國をもその仲間に引入れることを務むべき筈である。然るにヒユーズ氏は此點に關して我國を全然除外して居るのみならず、その所謂「將來の敵國」の中には、どうやら獨逸と共に日本をも含めて居るのではないかと疑はれる樣な暗示的表現をさへ用ひて居るのは、我國民の立場よりしては、その儘看過すべからざる問題である。素より絶對民主制の下に在る濠洲の如き國の政治家は、常に民心に迎合する必要に遭遇して居るがために、曾て黄禍論の名の下に同國民間に鬱積した排日感情の如きものに對しても、非理と知りつゝ尙ほ之を支持するの已むを得ざる破目に陷る事情のあることは、十分之を酌量しなければならないにもせよ、現在日本とは共同戰友として對獨墺戰爭に從事して居る際に當り、殊に黄禍論の如きは少くとも聯合諸國間に於ては暫く鳴りを鎭めて居る際に當り、ヒユーズ首相が如何に社交的晩餐會の席上に於てなりとも、苟くも一國の政治的責任の地位に在る身を以て、右の如き演説を敢て試みたのは、抑も如何なる理由に出でたのであらうか。此暗示的聲言の背後に潜める眞意に至つては、尙ほ立入つて研究すべきものがあるが、少くとも我國を太平洋上の共同利益の保護者の列より明示的に除外した事に關しては、之を寺內首相の日獨同盟に關する言明と關聯して考察し、その間に一脈の因果關係を認めんとすることは、必ずしも

不當なる推定とは謂へないのである。少くとも我等はその然らざることを示すに足る確實なる反證を與へられない限りは、一概に之を否定し去ることが出來ないのである。

最近に於て我國民が同盟國より遠來の貴賓にてあらせらるるコンノート殿下の歡迎の準備に多忙を極めつつあつた時、折も折とて英國下院商事委員が駐英日本大使並に萬國商事會議日本代表者の一行に對して開催したる歡迎晩餐會席上に於けるバルフォア外相の日英兩國間の絕對的信賴に關する演說の梗概を傳ふるルーター特電が我國に到達したことは、兩國間の修交のために極めて喜ばしい事たるを失はなかつた。我國民は英外相が極めて機宜に宜したる此演說を試みた好意を多とせねばならぬが、同時に總ての外交上の電報を讀む場合と同じく、此場合に於ても亦、英外相が態々日本が今後と雖も同盟國としての義務を履行するを疑はないことを述ぶる必要に際會した眞因を一應忖度して見ねばならぬ。

此點に關しては、「デーリー・テレグラフ」紙の英外相の該演說に對する論評が、多大の光明を投げ與へて居るものと見ねばならぬ。即ち同紙が指摘したる如く、「…日本は戰後に於て對外政策を變更せんと思惟しつつあり。又日本が獨逸の敵國中に加はりたるは、過ちて爲したるものなり」との風說が近頃英國に於てさへ流布して居ることが、直接にその外相を驅つて特に右の如き言明をなすに至らしめたものであると推定するのは、決して不當なる見解ではあるまい。孰れにしても斯の如き風說が行はるるは、我國民の立場より見れば心外千萬のことであるが、併しながら、此風說はその內容より之を見れば、寺內首相の戰後に於ける日獨同盟の可能性に關する言明に餘程接近して居るものであるとは、注意して之を觀察せねばならぬ。即ち此風說が戰後に於ける日本の政策の變更を云爲したり、又は日本が獨逸の敵國となつたのは過誤に出でたものであることを言ひ觸らしたりして居るのは、人をしてそれが全然寺內首相の言明を根據として居るものであ

ることを認定せしむるに十分であつて、而して此認定を打消すためにも亦、極めて確實なる反證の提示を必要とするものであることは、言ふまでもないことであらねばならぬ。

是等のことを考へ合はす時は、寺內首相の對米國記者言明は、歐米の大新聞のそれに對する批難が尙ほ未だ表面に現れて居ないにも拘はらず、その影響は過去に於てすら全然絕無であつたと斷言することは出來ないのである。況んや、それが將來に於て我國の政策の上に何等の障害を提供することが決してあるまいものとは、猶更決めて掛ることが出來ないのである。果して然らば、今に於て此言明の意義を各方面より闡明することは、我國民に取つては、決して無用の閑事業とすべきではない筈である。

寺內首相の對米國記者言明の意義を尋するに當つて、先づ第一に知らざるべからざることは、該言明の確實性である。此點に關しては、その寺內首相との會見の記事を手記したメーソン氏は、この會見中に於ける兩者間の談話を錄したる日本語の原稿が、首相及び當時の外相たりし本野子爵、並に當時の內相にして現時の外相たる後藤男爵の檢閱を經たるものであつて、且つそれが首相側で定めた飜譯者の手に依つて英譯せられたものであることを明記し、且つ鐵道院の用紙に認められたるその日本語の原稿の一端を寫眞版にして該記事の間に挿入して居る。尤も「アウトルック」記事の拔萃が「ジャパン・アドヴァータイザー」に掲載せられると間もなく、本野子爵だけは、自分がそれに毛頭關係のない旨を明言せる書柬を同紙に寄せたから、此點に關してはメーソン氏側に能動的若しくは受動的誤解のあつたものと看做して、本野子爵の責任がそれに依つて解除せられたるものと推定するのが適當である。けれども他の關係者の一人たる後藤外相は、之に關して何等の取消的言明を試みて居ないから、多分その事實を認めたるものと解釋すべきである。若し夫れ寺內首相に至つては、談話筆記原稿の檢閱の事實に關して

は毫も取消を試みて居ないが、その談話の內容に關しては屢ば訂正的言辭を提示して居る。卽ち彼は第一の場合に於ては、國際通信の手を經て、「日獨同盟の出現は、…一に今次大戰の結果に懸る。而して大戰の終熄より生ずる世界形勢の變動は、實に逆睹すべからざるものなり。若し國際政局の急に驅られんか、日本は全然天下に孤立の地位を守るを得ず。或は獨逸と同盟するの餘儀なきに至るなきを保せず」と言ひ、第二の場合に於ては、自ら直接「デーリー・メール」通信員に對して、「余に質問せられたる純然たる假定的にして且つ主要なる問題は、戰後如何なる狀態かの下に於て日獨同盟の成立は想像し得べきことなりや否やと謂ふに在りき。余は答へて言へり、若し一國にして全然孤立し何等の援助を有せず、將亦同盟的關係を有せずんば、此國はその存立問題の來らん時、他の大國よりの申出でを詮議すべき理窟なり。本問題は全體に於て假定的にして、日本の政治的前途企圖及び希望に對して何等の關係を有せざりしなり。然れども本問題を余に提起せられし以上は、巧に之を避くること能はざりき。」と述べて居る。(六月十五日時事新報第三面參照。)

寺內首相の「デーリー・メール」通信員に對してなしたる言明は、「アウトルック」誌上のメーソン氏の記事と多少の相違があるから、枝葉の點に於て幾分右談話の內容の訂正になるものと假定しても、而かも尙ほその根本の要點に於ては、國際通信の報道と共に、全然何等の訂正とならないのみならず、寧ろ之を確認する結果を呈し、從つて毫も世人の之に對する疑惑を解く力を示して居ないのである。蓋し世人は當初より、寺內伯が全然假定的條件の下に日獨同盟の可能性を說いたことを知つて居たが、只縱令假定的條件の下に於てなりとも、今日に於て日獨同盟を夢想することの不當を鳴らしたものであつた。然るに寺內首相の訂正的言明は、他の如何なる點を否定して居たにせよ、只此一點に至つては、その言愈よ多くして、その肯定の度の益す強きを加へたのみであつた。是れ世人が幾度寺內首相の訂正的言明を讀んでも、今に及んで尙ほ釋然たる

ことを得ざる所以である。

寺内首相がグレゴリー・メーソン氏を引見したのが三月八日であつたといへば、丁度獨逸政府の例の「伯林＝東京」の大計畫が、南獨に於ける有力なる一新聞紙「ミユンヒナー・ノイエステ・ナハリヒテン」に依つて摘發せられて世界の視聽を聳動し、ロンドン・タイムスが之に關して、「日本はホーヘンツオルレルン家の戰車の兩輪に結び附けらるゝことを肯んずるものにあらず」との警句を掲げた時より、多くの日數を經過しなかつた際のことであつた。されば斯かる時機に當つて、メーソン氏が日獨同盟の可能性に就いて寺内首相の意見を叩いたのは、新聞雜誌通信員の本能より出でたる當然の態度であつた。只夫れ此事は質問者の側より見てこそ當然の態度であつたとはいふものゝ、その對者たる首相の側より見れば、相當の用意を以て之に對する答辯を與へなければならないものであつて、場合に依つては、責任ある答辯を拒絕しても差支ないものであつた。寺内首相が「本問題を余に提起せられたる以上は、巧に之を避くることを得ざりき」と言ふは、彼自身が外國記者のために煙に卷かれたことを自白するものであつて、堂々たる一帝國の宰相の威嚴を傷け、延いて國民全般の體面を損ふことの甚だしき言ひ分である。外國の一記者のために苦もなく煙に卷かれる樣な政治家の手に、曠古の時運に於ける帝國の政治を託するのは、國民の立場より見れば、危險千萬なことであり、また首相の立場より見れば、斯の如き簡單なる試錬の前に容易に蹉跌したことが明白になつた以上は、此際決然引責辭職すべき筈である。内閣の内部に如何なる事情が伏在するにもせよ、政治家としての素質の缺乏せることとの斯程まで甚しいことが、偶然の機會に於てにもせよ、寸分疑ふ餘地なきまで證明せられたに拘らず、尚ほ恬然として其職を固守するは、立憲政治道德上許すべからざる罪過であらねばならぬ。

政治が民衆化するに從つて責任の地位に在る政治家の個人格（パーソナリティー）が益す重要視せらるゝに至るは、一見パラド

××

クシカルの觀を呈するが、實に當然必至の勢であることは、近代政治の特徴を注視するものゝ齊しく同意する所である。民主々義の最も完全に發達せる米國に於て、大統領の個人格が如何なる君主國に於ける帝王の人格より以上に遙に重要視せらるるは、人の周知する所であるが、此事は單に事實上の現象たるに止まらず、法制上に就いて之を見るも、聯邦政治に關する總ての行政上の任務が、一切大統領の手に集中せられて居ることは、注意して觀察すべきことである。斯くの如き行政集中の政治組織は、その建國の初に當つてアレキサンダー・ハミルトンの主唱した所に從つて設定せられたものであつて、而してそれが實際の運用上多大の效果を示したものであることは、全身民主々義の血肉で固められた人ともいふべきトマス・ジエファソンすら、此組織に對して絶大の讃辭を捧げて居る事實に徴しても分明するのである。而して此行政組織の劈頭に立てる大統領の權限が、最も明々地に發現するのは戰時中に於てであることも亦、米國憲法の規定より來て居ることである。短見なる我國の觀察者は、或は米國參戰以來のウイルソン大統領の行政上の活躍の凄まじい勢を視て、民主々義の逆轉であるかの樣に囃し立てて居るのは、冠履轉倒も亦甚しき言ひ方であると謂はねばなのぬ。併し乍ら斯の如き權限を帶ぶる大統領は、同時に廣大無邊の政治的責任を負擔するものであつて、殊に政治道德上於ては、國民間の輿論に追隨し、國民間に鬱積する意向希望に對して、明確なる表現を附與せねばならぬ義務を有するものである。さればウイルソン大統領が、米國參戰の前後に亘つて天下に呼號したる聲言は、米國民一般の意向希望が、彼の頭腦を透して濾過せらるる間に當つて、純化せられ結晶せられたものに外ならないのである。而かも之と同樣の事は、多少の程度に於て他の進歩せる立憲國に於ても見ることが出來る。英國のロイド・ジヨージ首相や、佛國のクレマンソー首相の折に觸れての聲明の如きも、常に自國民の健全なる分子の輿論を反映して居るものと見て大過なきものと考へられるのである。現

に角欧米政治家が、常にその一言一句を苟くもせざるは、民主政治に於ける政治家の個人格の地位の自覺より來るものであらねばならぬ。殊に國際的意識の過度に鋭敏なる現代に於て、彼等が外國に於て發表せらるべき見込ある言辭に關しては、多大の注意を以て之をるとは、彼等の自國の政治に對する責任感の如何に强述べ烈なるかを語るものである。寺内首相が常に聲言を緊要とする重大なる機會に於てすら固く沈默を守るに拘らず、一外國記者との對談に於て不用意の失言をなし、而かも之に對して「巧みに之を避くることと能はざりき」との一言を費して、以てその一切の罪過を償却し得たりとするは、その立憲政治的責任感の如何に稀薄なるかを明示するものである。或は立憲政治的責任感を寺内首相に期待するのは、甚だしき誤謬であると言ふ者があるかも知れぬ。蓋しそれは當つて居るであらう。けれども寺内首相の失言を糺彈する尺度となるものは、寺内首相其人の心的傾向ではなくして、我國家の實際の利害であらねばならぬことは、改めて言ふまでもない事である。

それにしても獨逸政府の「伯林＝東京」の大計畫の摘發が可なり聯合諸國民の神經を惱まして居る瞬間のこととなれば、我國の責任ある政治家としては、殊に此題目に關する言議を愼重にせねばならなかつた時に當つて、寺内首相が一外國記者の質問に對して、日獨同盟の成否は一に戰爭の終結の模樣に繋つて居るとか、乃至、戰爭終結の模樣次第では、日本は永久孤立の地位を守ることと能はざるに依り、獨逸と提携しないとも限らないとかいふ事を、無雜作に述べ立てたのは、抑も何の必要に出たものであるかは、我等の到底諒解することを得ざる疑問である。寺内首相が「本問題を提起せられたる以上は、巧に之を避くることを得ざりき」といふは、何の意味をも成さざる遁辭である。又寺内首相はメーソン氏に對して、更らに語を繼いで、戰局の現狀より推せば、日獨同盟を誘起する條件の到來しやうとは考へられないことを言明したけれども、そは或

る條件の到來した場合には日獨同盟が成立すべきものであるといふことを諷した上段の暗示を打ち消す力を有して居ない。その後國際通信を經てなされたる訂正的言明も、「デーリー・メール」通信員を向つてなされたる辯解的談話も、共に右の暗示を取消す效果のなかつたことに於ては一つである。寺內首相としては、寧ろ率直にその失言を認めて處決するいが、日本の國家の爲めにも、將又、彼自身のためにも、共に得策であつた筈である。然るに彼が事茲に出でずして、「乞ふ余を以て單に日獨同盟のポシビリチーを割引しつつありし來訪者の所説に同じつつありしものと解せられたし」との泣言を外國新聞通信員の前に並べたに過ぎなかつたのは、單に聽者に無理の注文を强ふるものであるのみならず、同時に見るに堪へざる陋態を示すものであつた。

日英同盟繼續中に於て、而かも我國が聯合諸國と相提携して對獨墺戰爭に從事して居る際に當つて、寺內首相が、縱しや假定的條件を前提としてにもせよ、日獨同盟の可能性――首相の言明の通り極めて微弱なる可能性と見ても、兎も角その一種の可能性――を述べて、日本の國際的信用を毀損するを意としなかつた理由は、どう見ても我等の諒解に苦しむ所であることは前に記した通りであるが、强ひて善意に首相の意中を忖度すれば、彼は此際戰後に於ける日獨同盟成立の可能性を仄めかして置くことは、講和會議に於ける條件を、少しでも日本のために有利にするために、世界政治の局面の上に重要なる一石を投ずる所以であると思惟したのであると察せられないでもない。萬一さうであつたとすれば、彼の國家の利害を思ふ誠意は之を諒としなければならないけれども、その判斷の誤謬に關しては、竟に辯護の餘地なきを如何ともすることが出來ないのである。斯の如きは畢竟バルカン半島上の諸小國の政治家にならば相應はしい考とすべきではあるかも知れないが、名ばかりでも世界に於ける列强の班に伍して居る日本帝國の政治家の念頭に上るべき筈のものではない。加之、斯の如き兒戲的威嚇が何等かの

効果を奏した時代は、過去に於ては或はあつたかも知れないが、現代の國際政局はそのためには餘りに進歩し過ぎて居るのである。縦しまた、彼が誤れる判斷の上に立つて、その様なさもしい考へを抱いて居つたにしても、それが後に至つて彼自身に依つて與へられたる訂正やら辯解やらのために、木葉微塵に破碎し去られたのは、誠に是非もない次第である。

我國民の最大多數は、恐らく現今に於ては、日獨同盟が如何なる條件の下に於ても現出しやうとは思つて居ないであらう。獨逸國民の不屈不撓の精神と、その壯烈なる戰鬪的氣魄及び實力を嘆稱するのは、全く別問題である。加之、獨逸國民の精神、氣魄、及び實力の偉大なるだけ、それだけその世界征服を最終の目的とする領土的野心は、極力之を阻止せねばならぬことは、我國民の疾くより覺悟して居る所である。而かも我國民が一歩を誤つて、獨逸と提携することに依つてその勢力を强大にする様なことがありとすれば、その時は結局我國がロンドン・タイムスの喝破した通りに、ホーヘンツォルレルン家の戰車の兩輪に結び附けらるべき運命に陷るかも知れない時であらねばならぬ。否斯の如き形勢が到來した曉は、我國が永久に此地位を維持することが出來るかさへも、極めて測り難いものがあるのである。蓋し獨逸の外交の變幻極まりなく、且つ陰險惡辣の甚だしきものであることも亦、歷史的に見て隱れもなき事實である。夫の言論に於てマキアヴェリズムを批難しながら、實行に於ては極端に之を踏襲したるプロシア中興の明君フリードリッヒ大王の遺策は、ビスマーク公か帝國統一策のために之を用ひて成功したものであるが、現今に於ても尙ほそれが獨逸政治家の本能となつて存續して居るものであることは、最近に於けるブレスト・リトヴスクの露獨單獨條約と、その後に於ける獨逸の對露政策の實際との間に於ける矛盾撞着に徵しても、之を察知するを難しとせざる所であるが、殊に最も切實に之を實證せるものは、夫の先月瑞典の社會黨機關紙「ポリチーケン」に依つて

摘發せられたる戰前に於ける駐英獨大使たりしカール・リヒノスキー公の手記に成つた秘錄の内容であるとは、聯合側の一員たる我國民の今に於て尙ほ忘るることが出來ない所である。此際に於て日獨同盟の夢を說くことは、我國民中の極めて少數の一部分の徒の意中に徂徠する侵略的意圖に合致するものであるかは知らないが、爾餘の大多數の國民の意向とは全然沒交渉なる妄言であることは、言ふまでもないことである。

寺内首相の對米國記者言明を掲載したる「アウトルツク」の記事の内容が我國に知れ渡る樣になつてから、我國に於ける有力なる諸新聞紙が、相率ゐて首相の不謹愼なる失言を糺彈し、輿論も亦大體に於て之を支持したのは、甚だ心强いことであつたと謂はねばならぬ。此事は一方に於ては、寺内首相と國民の健全分子との間に重大なる意見の不一致があることを證明するものであると同時に、他方に於ては我國民が漸く外交上のマキアヴエリズムを排斥することを學ぶに至つたまでも、その國家的理性上に於て進歩の跡を示し來つて事實を語るものである。國際的信誼を尊重することは、卑屈なる事大主義の他主的外交とは、全然その選を異にするものである。我國民がこの事理を的確に體得して居ることを證明したのは、單に我國家自身のために慶すべきことであるのみならず、一般に聯合諸國民に取つても、分けては同盟の對手たる英國民に取つても大に頼母しき感じを起させることでなければならぬ。只寺内首相が國民が明示した此感情に共鳴したことを證明するに足るべき何等かの言動に出でなかつたのは我等の遺憾に堪へずとする所であるが、我等は責めて我國民が首相の失言を詰責することに依つて表明したる國際的良心が、世界政局の表面に於て、首相の頑冥を償却して尙ほ餘りあることを看取せられんことを希望して已まないものである。

（七―六―一二）

グレー卿の「國際同盟論」を讀む

法學博士　吉野作造

（一）

勝つことと夫れ自身が戰爭の至上目的なりとする少數の偏武論者を除いては、今日世界の何人も多少の煩悶を抱きつゝ此戰爭と世界文運の進步との關係如何を眞率に考へないものはない。蓋し戰爭は偶然にして起るものではない。一部の人が言ふが如く、之を舊文明の破壞と見るべくんば、其廢墟より生るべき新文明について無關心で居ることが出來ない。否之に對して多少の希望を繫け、又多少の努力を吝まざらんとする者もあらう。少くとも今度の戰爭が富を破壞し、人命を毀損し、道德的秩序を蹂躪する等、其要求する犧牲の莫大なるに想到しては、人誰か今次戰爭の文明史的意義について熱心なる省察を加へずしては居られよう。

斯くも多大の犧牲を要求する今次の戰爭は、吾人に、又世界人文の進步に何物を貢献するであらうか。吾人の省察は先づ此問題から發途する。若し今度の戰爭が吾人の生活と世界人文の進步とに格別の關係が無いものなら、吾人に戰爭に對する興味の起り得よう筈は無い。現に此戰爭の文明史的意義の探究に無頓着な人、又は國民は、其交戰國たると否とを問はず、戰爭其物に甚だ冷淡なるの事實を見るではないか。我國の一部の所謂偏狹なる國家主義者の間には、無關心の域を通り超して、日獨同盟論を說くやうな者すらある。

全體として之までの日本の民心は國家的問題に熱するに易くして、世界的問題に對しては比較的感興を惹くやうに訓練されてゐない。現に世界人文の進步と云ふやうな廣い感激に基いて國民全體が動いたと云ふ例は無い。國家の爲めと云ふことであれば、世界の文化と

何の關係があらうがあるまいが、國民は輕々しく之に動いて居つた。最近西伯利出兵問題に對する異論の民間に盛んであつたのは、或意味に於て所謂狹い意味の國利以外に國民の感興の範圍が擴張された證據と見られないことはない。けれども何れかと云へば世界全體の文化と云ふやうな題目で國民的運動の起り、又之を起すのは馬鹿〱しいとする思想はなか〱盛んであると云はなければならない。故に一般世人の眼光は精々國家の利害と云ふ問題以外に及ばない。之れ世人が今次の戰爭の世界文化に對する關係の考察に冷淡なる所以である。

啻に之のみではない。彼等自身の戰爭觀も亦自ら其調子極めて卑いものがある。其最も淺薄なるものに至つては、今次の戰爭をサラエボに於ける不良少年の放つた偶然の彈丸一發にあるとするものがある。稍々史的背景に根據して戰爭の意義を說く者に至つても、或は之を民族競爭の發現となし、又は目して以て英獨兩國の爭覇戰とする。眼光の之れ以上に達せざる限り、彼等は今次の戰爭其の物に重大なる意義を認めざるのみならず、戰爭が如何に局を結んでも世界の人類は之によつて何等得る所がないと主張せざるを得ない。何故なれば戰局今日の形勢を以てすれば、英獨の競爭も、又東歐民族の複雜な關係も、徹底的解決を與へらる可き見込がないからである。且つ又戰爭の本當の意義が、單に之れ丈けで止るものならば、如何にして我々は米國參戰の意義を解する事が出來るか。戰爭に參加す可きや否や、並びに參加するとすれば、何れに就くを可とするやの判斷が、總て目前の所謂國家的利益の打算から來たと米國の參戰を解するは、或は怖る、己れを以て人を測るの譏を招かんことを。

吾々が斯んな調子の低い所にさ迷うて居る間に、歐米諸國の人心は段々に戰爭の深い意義を尋ねて居る。初めから彼等が戰爭の意義を今日と同じ狀態に感得して居つたとは云はない。戰爭した直接の動機は或は低い狹い所にあつたかも知れない。けれど彼等は時を經るに從つて反省し又覺醒した。深い意味を探究し、又

深い意味を戰爭に賦與した。斯くして彼等は此の戰爭によつて是非共解決せねばならぬ大問題を明白に意識し、今や全力を傾注して之が爲めに努力し、又之に對して準備しつゝある。獨り我國が東亞の邊陲に位するとは云ひながら、同じく交戰國の一として今尙低級なる甘夢を貪つて居るのは慨はしき限りではないか。而して英國前外相グレー卿の「國際同盟論」は、歐米に於ては其れ程の重大事ではないとしても、我々の隋眠に對しては確かに一大警鐘に値ひするものがないでない。

（二）

グレー卿の國際同盟論は六月廿一日倫敦發電報として我國に傳へられた。卿は最近同盟の小論文を發表し、多少世上の耳目を聳動したと云ふので、其大要が我國にも傳へられたのである、電報であるから固より十分卿の所說を悉くす事は出來ないと思はるゝが、併し其要點は大體明白に之を知る事が出來る。

卿は先づ今度の戰爭の意義から說き起して居る。卿の云ふ所に據れば、今度の戰爭では個人若くは國家の存在や、又大陸の運命が大いに危機に瀕して居るが、それよりも尙著しく脅かされて居るものは、近世文明其物である。而して此近世文明が衰亡に歸するか、或は危機を脫して將來に發展するかは、一に繫つて世界の人心が今次の戰爭の與ふる敎訓を完全に了解するか否かに依つて定まる。之を了解しないとなれば、今度の戰爭は實に無益の一大慘禍と云はなければならない。然らば、今次の戰爭の與ふる敎訓とは何かと云ふに、世界平和の確保は結局各國民の協同の努力に俟たなければならないと云ふ事である。所謂國際的協同の思想は過去に於ては實現の不可能を考へられて居つたけれども、若し今次戰爭の敎訓に依つて世界の人心が眞に此點に覺醒する以上は決して不可能ではなからう。斯く論じて卿は所謂國際同盟の空想に非らざるを斷じ、更に進んで其實現並びに確立維持に必要なる二大條件を說いて居る。二大條件とは何ぞや、（一）は當局者が熱心と確信とを以て國際同盟の思想を受納し、單に之を

表面虛飾の辭令たるに止めずして、其實際政策の眞實の根幹たらしむる事であり、(二)は之を設定せんとする國の政府並びに人民が之が創設によつて或犧牲乃至拘束を甘受せざる可からざる事を明白に覺悟する事である。

第一の點に就いては、卿は此思想の戰前に於ては十分明白に意識せられなかつた事を是認して居る。今日は如何と云ふに之れ亦十分には答へ難きも、少くとも米國大統領ウィルソンに於ては此思想の極めて明白なる體現者を見ると說いて居る。而して卿のウィルソンに對する傾倒と信頼との深き、ウィルソンが斯くの如き態度を持すると云ふ事は「之れのみにて國際同盟の思想に新生命と意義とを與ふるに十分なり」と云ふに至つて居る。卿は、永く傍觀者であつたウィルソンが今次の戰爭に對して最後に、(一)吾人の棲息する世界を不幸なる慘害より救はんとせば、吾人は獨逸に對し干戈を採つて起たざる可からず、(二)各國民の自由と平和との將來に於ける確保は國際同盟に據らざる可からずとの二つの結論に到達した。斯くしてウィルソンは他國に卒先して國際同盟論のチャムピオンとなつた。尤もウィルソンが此思想の主張者として卓然特異の地位を取つたと云ふ事は、必ずしも他の與國は此戰爭の經驗から彼と同一の結論を導き得なかつたと云ふ意味ではない。只他の與國は直接に戰爭其事に忙殺されて居つた。而して何の爲めに戰ひつゝあつたかと云へば其目的は素より米國の說く所と結局に於て異るものではなかつた。之れウィルソンによつて說かれたる國際同盟の思想が、英佛諸國に於て、亦熱心なる共鳴を見る所以である。若し夫れ敵國の墺太利に至つては、內々此思想に贊同の意を表して居つた事は、今日已に公然の秘密である。諸小國に至つては其交戰國たると中立國たるとを問はず、其思想の實現と彼等の利害と完全に一致するものなる事を疑ふものはない。して見れば、今日國際同盟の思想に對して同情を表せざるものありとすれば、そは唯獨逸に於ける軍閥の一派のみである。何となれば彼等は國家の發達と安全とは專ら

兵力によると考へて居るが故に、兵力の使用に對する何等の制限にも服する事を肯んぜざるが故である。故に軍閥の一派が勢力を占めて居る間は、獨逸が國際同盟に入つて來る見込は無い。而して兵力の使用は結局に於て敵を損すると共に、又味方を傷くるものであり、彼等の發達と安全とは兵力によるにあらず、法律と條約とに基くの外は無いといふ事を悟るにあらずんば、結局彼等の蒙は啓かれない。ウィルソンのいふが如き國際同盟の成立は、獨逸が眞に同盟の利益を感得して來るにあらずんば不可能である。而かもすべての國が洩れなく之に加入するにあらずんば、同盟によつて期する所の目的が達せられないから、獨逸が從來の迷夢から醒めて此同盟に來り投ずるといふ事が同盟の實現に至大の關係があると說いて居る。

第二の點に關しては、彼は犧牲乃至拘束の何たるやについて多少細目に涉つて論じて居る。從來諸國は、例へば仲裁裁判の條約を結ぶにしても、すべての國家の行爲を擧げて公平なる裁判の裁定に任かすといふ程の雅量を示さなかつた。若し夫れ國際間の約束を破るが如き不信の國に對しては、武力に訴へて雌雄を決するの外、之を强制する何等の方法がなかつた。國際同盟は一方に於て同盟の基礎たる公約を確立する爲めに聯合の力を用ゆるの必要を認め、又聯合の力を以てする强制に服從すべき事を要求して居る。而して此事並びにすべての國家の行爲を仲裁調停に附すべしとするの要求も、共に基くは所、協同と信賴との團體生活に於ける基本條件を國際生活にも及ばさんとするものである。此點についても卿は獨逸の態度について多大の疑を抱いて居る。卿はいふ、將來の世界の平和は國際間の相互の信任に基かなければならない。獨り獨逸は永久に世界に於ける獨逸の優勝的支配權を確立する事によつて將來の戰爭を避くべしとして居る。併しながら或一國の支配權の確立によつて、果して世界の平和は保障せらるゝを得るや否や。獨逸も亦世界の平和を欲する點に於て吾人に劣るものではないと思ふけれども、併し彼の執る所の法則は、實に戰爭より世界を救

ひ得るものではない。之れ歷史の敎ふる所であつて、又今度の戰爭の吾人に與へんとする一大敎訓である。獨逸が十分に此敎訓を學ばない限り、國際同盟を完全に成立せしめる事は出來ない。

（三）

グレー卿の國際的同盟論は、少くとも新聞に報道せられたる範圍に於ては、此思想の實現に必要なる條件の陳述に止まつて、如何にして之を實現せしめることが出來るか、更に言ひ換れば如何にして獨逸を反省せしめて此同盟の中に迎ふる事が出來るかの具體的問題には觸れて居ない。故に其意味に於ては獨逸國民の反省を求むるものと見られないではないが、兎に角我々は之によつて聯合諸國の有力なる政治家の間に、國際同盟の思想が現實の問題となつて居り、又之が攻究と準備とに精力を傾けて居るものもある事を知ることが出來る。卿の云ふが如く此思想は過去に於ては餘り實際の問題とはならなかつた。學者の机上の問題としては極めて古いものである事は言ふまでもない。併し實際政治家の攻究に上つた事は今度を以て初めとしないまでも、今度ほど眞面目に取扱はれた事は無からう。之れ特に卿が之を以て今次戰爭の一大敎訓といふ所以であらう。

尤も考へ樣によつては、國際同盟の思想は今度の戰爭に於て初めて適切に與へられたる敎訓では無いとも云へる。何故なればかゝる思想は十九世紀の末以來諸國の有力なる政治家の腦中に頻繁に往來して居つたからである。前露國皇帝の發起を動機として起つた萬國平和會議も、畢竟此思想の閃動の一端である。之に對する努力は其後も屢々繰返された。機運熟せずして每に失敗に畢つたけれども、吾人は之によつて此思想の深き根柢を近代の歷史に有つて居る事を見逃してはならない。而して此種の思想の實現と發展とを妨げたものは實に獨逸の態度であつた。獨逸は世界列國に於ける自國の立場を確保するの政策上の主義として軍國主義を執つた。軍國主義の一面は自家獨得の優越の主張である。協同の誼に基く一切の團體的制裁の否認であ

る。猜疑と不信とは隣邦に對する最善の防備である。而して唯の一國でも斯くの如き態度を有するものがある以上、他は安心して一切の門戸を開放する事が出來ない。すべて協同は全員一致の信認を基礎とする。一人の背信は直ちに全體の不安を來さざるを得ない。最近歐米の風雲の險惡を極めた事の根本責任は、主として獨逸にあつた事は疑を容れない。而して今度の戰爭は猜疑不信の競爭が結局すべての國に不安を持ち來たすものではない。個人の社會的生活に於て、信頼と協同とが基礎たるが如く、國家間の生活に於ても亦之をしてすべての關係を律せしめなければならないとを一層明かにした。今日までの不安なる狀態に堪へ切れなかつた彼等が、戰後世界の經營に於て信頼協同を第一義とすべき事に目を開かんとするのは、決して意味無き事ではない。斯くの如く觀て我々は、よしんば國際同盟の組織其物が戰後に於ても未だ十分成功しなかつたとしても、此思想の根抵に橫つて居る協同信頼の意味が、幾分でも今日の世界の人心に浸み込んで來たと云ふ丈けで、今度の戰爭は世界人文の進步の上に決して徒爾ならざるべきを信ずるものである。

今や世界は斯くの如き思想に動きつゝある。而して我國の當局並びに國民は、此點に關してどれ丈けの理解を有つて居るか。從來の歷史に於て、我國は口舌に於て最も頑强なる世界大勢の反抗者であり、又行に於て最も臆病なる大勢の服從者であるの事實を示して居る。此點に於て次のグレー卿の一言は、正に我々に向つて一大鞭達を加ふるの概がある。

They must lead, not follow;
They must compel, if necessary, not be compelled.

我國の現在及將來に於ける軍國化と民本化の二大運動の批判

▽軍國化より民本化へ

室伏高信

一

「日本の將來における軍國化と民本化」について考へる前に、われ等は先づ民本主義(デモクラシー)と軍國主義(ミリタリズム)との關係について考へる必要がある。一、民本主義と軍國主義とを對立させるのは不當だと主張するものがある。二、民本主義と軍國主義とは元來同一物の兩面であると主張するものがある。その何れのものが正しいにしても、「民本化か軍國化か」といふ問題は起らないからである。

二

民本主義と軍國主義とは、もと〳〵カテゴリーの違つてるものであるから。この二つのものを對立させるのは不當であるといふ論は、法律學者の間に屢々行はれる論理である。それ等の人々に從へば、民本主義とは、事物の實體についての主義の問題であるが、軍國主義とは、實行上の方法についての種類であるといふのである（美濃部博士、「世界の再造」）美濃部博士が、民本主義をもつて事物の實體についての主義の問題であるとしながら、何故に軍國主義を實行上の方法についての種類であると爲したのであるか。軍國主義をもつて實行上の方法の問題であるとするならば、民本主義もまた政權運用の方法であるといふことができよう。その方が遙に徹底した考へ方である。何れにしてもこれ等の考へ方は、形式の異同によつて、事物の分類をしようとする企であつて、斯様な考へ方は、事物の實體に突入して、その創造の各階段を、歴史的に批判するものの側から見れば、甚だ物足らない考へ方である。ただに物足らないのみならず、この考へ方をもつてしては、一、精神の同一において形式の變化する場合、並に二、形式の同一において精神の異つてゐる場合を説明することできない。民本主義のうへからいつても、希臘の時代において行はれたものと、今日において要求せられてゐるものとの間に、その心においては凡て一つでなければならないが、その形においては、進化の各階段毎に違つてゐる。例へば「パブリック・メッス」が要求された時のデモクラシーと、代議政治において人民が解放せられると

信ぜられた時代のデモクラシーと、更にこの代議政治に對する懐疑から出發して、「ダイレクト・デモクラシー」が要求されつつあるものとを比べて見れば、何れが眞の民本主義であるか。民本主義は、今日まで既に樣々の形によつて表現せられた。今日以後においても、樣々の變化は免れることができない。この場合に、形式論者は如何なるものを民本主義だと言ひ張ることができるのであるか。

軍國主義についても同じことである。それは樣々の形において表現せらる。カール・リープクネヒトは、獨逸青年に與へたるその紀念すべき「軍國主義」の講演のうちにおいて次のように述べた。軍國主義は、『國家及領土の、肉體的、政治的、社會的、經濟的の狀態に從つて、その驚くべき多種多樣なる形』を當て辨めるものであると。リープクネヒトのいつてゐるとほり、それは戰爭のうちにも出現するものであるとともに、資本主義のうへにも、階級的政治のうへにも、警察政治のうへにも出現するものである。その形は、軍國主義自身の進化の各階梯においてみな違つてゐるのみならず、それが資本主義のうへに出現する時、戰爭のうへに出現する時、階級政治として出現する時、その時々によつて、軍國主義の形體は各別々である。これを一つの形式によつて觀念しようとすることは不可能のことである。不可能のことであることが了解せられるとともに、それが、形式を超越したる存在であることを知りえられるのである。

三

軍國主義も民本主義も、ともに形式を超越したる存在である。それは前にも述べたとほり、多種多樣なる形において出現する。その形體は複雜であり、多角的である。けれどもそれが如何樣に多面多角の表現をするにしたところで、民本主義はどこまでも民本主義である。軍國主義はどこまでも軍國主義である。即ち軍國主義はどこまで行つても軍國主義である。民本主義はどこまで行つても民本主義である。例へばミリシアはそれが如何に國民皆兵の形をとつて出現しても民本主義であり、軍國主義は如何に微弱であつても軍國主義である。ナポレオンが如何に國民投票の形式によつて皇帝に選まれたにしても、それを民本主義と稱することのできないのは、今日獨逸がリトアニアや、ポーランドや、クールランドの方面において行つてゐるものと少しも違つてゐるところはないが、これに反して、白耳義は、如何に皇室を戴いてゐたにしたところで、民本主義の國家たることを失はないのである。即ち民本主義も軍國主義も、ともに形式を超越したる存在である。一つは自由を代表する。他は强制を代表する。自由の政治は民主々義である。强制の極致は軍國主義である。軍國主義とは、專制政治の近代化したものである。近代の專制政治が即ち軍國主義である。それは對外的には大國主義である。即ち自己のために民族複合の國家を要求するものである。内においては、貴族的、資本主義的、或は中產階級的の政府を要求するものである。こ

の要求のために、世界政策を實行するとともに、また內に對しては社會征服を行ふものである。世界政策とは、一民族——正しく言へば一民族の支配階級のために——のために、他の民族を强制することである。社會征服とは、一階級の利己心のために、他の、より多數なる人々の階級を强制することである。だからリープクネヒトの言つてゐるとほり、軍國主義は、「內部の敵」と「外部の敵」とをもつてゐる。軍國主義が、外部の敵に對する時に、これを對外的軍國主義(Militarism for abroad)といふことができる。また內部の敵に對する時に、これを對內的軍國主義(Militarism for home)と稱することができる。だから軍國主義をもつて、單に對外的のものであると思ふのは、軍國主義の社會征服について理解のない結果である。けれども對外對內の兩方面をもつてゐるものは、獨り軍國主義においてだけではない。民本主義においても同じことである。民本主義は內においては人民の解放を主張する。即ち人民の自由組織を主張するとともに、外に對しても、民族の解放を主張するものである。日本においては、今日までは、民本主義とは單に對內的のものとして考へられてきた。そうしてインタアナショナルの方面においては、民本主義の干渉する範圍でないかのごとくに考へられてきた。けれどもこの世界大戰は、內においてよりは、却つて外において、デモクラシーの重大であることを明確にしたのである。「國境を出でざる自由」とは、今日においては最早や自由ではない。國境を出でざる民本主義は、今日においては最早や民本主義ではない。一つの國家が、內において如何に平等の社會組織を規定するにしたところで、外に對して侵略的態度を取る時は、その國は決して民本主義の國家であると稱することはできない。日本の民本主義者と稱するものが、內においての自由を主張しながら、その同じ筆と舌とをもつて、民族複合的大日本主義または大亞細亞主義を主義とすることは、ナポレオンを夢みつつ、尙ほ口に民本主義を說くものである。そのやうな民本主義は、單にこれを主張するものの利己心に過ぎないものである。自己の醜き利己心をもつて、他の人々、階級、民族を支配しようとするの心である。その心は自由の心ではなくて、放縱の心であり、從つて强制の思想に接續してゐるものである。われ等はこのやうな「僞りの民本主義」(Pseudo-democracy)から解放されなくてはならない。

四

米國の一學者(Baldwin, War and Militarism)は、軍國主義を論じて、軍國主義とは、「心についての質」の問題であると指摘した。軍國主義が「心についての質」であればこそ、それは各種の形において、また各種の場合において出現することができるものである。その心は利己心のために權力を求めるの心である。對內的には社會的及國家的の覇權(ヘゲモニー)を要求することともに、對外的には、世界的覇權(ウォールド、ヘゲモニー)或は世界的領土(ウォールド、ドミニオン)を要求するの心である。これに對して民本主義とは、權力そのものに反對するものではないが、「利己心のための權力」に對しては、飽くまでも反對するの心である。その心は對內的にも對外的にも活動する心であ

る。活動の部面が無制限であることは、心の本質である。こゝにおいてか、軍國主義と民本主義との對抗は、決してカテゴリーの違つてゐるものでないのみならず、正に相對抗する、正面的の關係であるといふことを知ることができるのである。民本主義が、未だその對外的任務を自覺しなかつた時代においては、民本主義はただ一部の階級または權力者に對してのみ反對してきたものである。けれどもそのような時代は、民本主義の第一期に屬してゐる。今や民本主義は、その世界的任務を自覺しつつある。軍國主義の側からいつても、それが單に對外的のものであると思ふのは、極めて淺薄な觀察である。今日の世界において、强制または專制の代表者は、言ふまでもなく軍國主義である。これに對して民本主義は自由を要求するものである。その對立は正面的の對立である。

國民黨の第四十議會報告書の結論は、犬養氏自ら筆をとつて書いたものとも傳へられた。それによると、民本主義と軍國主義とは、同一物の兩面であると述べてゐる。また民本主義の軍國化、軍國主義の民本化をも主張してゐる。けれどもかゝる議論は、ただ軍國主義に對する無理解、並に民本主義に對する無理解を表白してゐるに過ぎないものである。彼れは現代精神の奥底に立ち入らずして、または立ち入るだけの準備なくして、徒らに流行語を並べ立てようとするから、このような、驚くべき、「大膽なる誤謬」に陷るのである。

五

然らば日本の將來は、民本化するであらうか、軍國化するであらうか。私はこの問題に入る前に、もう一つ考へなければならないことがある。それは日本の現在がどういふ狀態にあるかといふことである。日本の現在の狀態は、强制の狀態にあるか、自由の狀態にあるか。われ〳〵が筆をとつて、簡單な一文章を草しようとする時でも、この問題から、常に無關係でゐることはできない。われ〳〵の思想の表現は、思想と感情とが、常に國家生活に對して、熱愛的のものであるのにもかかわらず、自ら脅威を感ずることなくして、自由に行はれることはできないのである。何故にそうであるが。日本の内部において、自由を脅威する政治の存在してゐることを、われら自ら自覺してゐるためではないか。日本の内部において、われ等はどれだけの自由を許されてゐるか。どれだけの言論の自由、どれだけの集會の自由があるか、新聞雜誌が頻々として發賣禁止をうける時、選擧が屢々政府の干渉をうける時、われ等はどれだけの自由を感ずることができるか。軍閥の榮える政治、軍閥が政權を掌握して、政黨が是々非々を主張してゐる政治のもとにおいて、われ等はどれだけの自由を感ずることができるか。日本が軍國化しつつあるといふの感じは、如何ように鈍感の人と雖、これを感觸せずに生活することはできないであらう。私は嘗つて日本における軍國主義の社會征服を指摘したことがある。その軍國主義の社會征服は、寺内内閣になつてから、益々激しさを加へてきたようである。

六

リープクネヒトは、嘗つて日本を指して第二の獨逸であるといつたことがある。近頃シベリア、イルクーツクに於ける勞農政府は、ボルシエヴヰキの外相チチエリンの名をもつて、日本は侵略主義をもつて一貫してきた。歴代の政府はこの侵略主義のために百般の施設をしてきた。これは歴史の證明するところであると宣言した。私はこの觀察の當否をここに論ずることを避けるものである。けれども日本の態度が、稍もすれば外國人によつて、侵略的であると考へられるやうになつたことは、近來の著しい事實である。「ウオア、エンド、ピース」の五月號には、「日本の政策」と題した注意すべき一論文を載せられてある。その論文によると、日本の政府並に各派の態度から推論して、日本の政策が、デモクラシーと逆行しつつあることを、詳に述べてゐる。われ等は日本がシベリアにおいて何を爲しつつありやを論ずる考は少しもない。けれどもウヰルソンは何故に日本の出兵に反對するか、ロシア人は何故に日本を恐れるか。日本を恐れること、日本を猜疑することが、恐れる者、猜疑するものの誤謬であるならば甚だ結構であるが、これによつて見ても、日本の軍國主義または軍國主義的傾向が、漸く内外の注目を惹いてきたことを明らかにするものであつて、日本の軍國化は、將來の問題として論ずるよりも、寧ろ今日の問題として論ずることが適當であらうと思ふ。日本の社會とは、今や軍閥の榮ゆる社會ではないが。日本の政治とは、軍閥の榮ゆる政治ではないか。軍閥の意思が、軍國主義そのものであることは、少しも證明を必要とすることではないのである。それのみならず、一般の國民さへも、二、三の戰爭に勝てるために、未だ戰勝そのものに對する誤まつた教育のために、その精神が驕慢になり、輕薄となり、武力的となり、そうして小民族に對する博大なる同情の念に缺けて、稍もすれば小民族に對する迫害によつて、日本人としての威嚴を濫用しようとするやうな、成金的の氣分に醉うてゐる、不心得な人民が少くないのである。未だ學者などの間にも、戰勝の光に醉うて、徒に大國家的の貪慾論を主張してゐる人も少くないやうである。遼東還付のことがあつてから二十何年、日露戰爭があつてから十何年、この短い間に、日本人の精神には、著しい缺陷が生れてきた。彼等は遼東還付の際に、小民族としての日本が、如何に悲しいものであたかについて、少しも回想して見ようといふ考がない。また日露戰爭の前に、小弱なる日本が、如何に大ロシアの軍國主義のために脅威をうけたか。そのうけた時の心が、如何に苦しく、傷ましいものであつたについて、少しも思ひ返して見る餘裕がない。丁度ナポレオンのために、獨逸民族が蹂躙された時に、エナにフヒテが生れた。フヒテの民族主義が、小民族のための、傷ましい自由の叫びであつたにもかかわらず、一八六七年、一八七〇年の戰爭に勝てる獨逸が、民族自由主義から、一轉して軍國主義に急流したやうに、勝てる日本は、その精神狀態に、著しい變化を起した。その變化とは缺陷であつた。缺陷とは、日本の精神が、博大なる人道的同情の念に缺乏

してきたことである。

私は日本の現在の外交政策については、こゝに一言もすることを避けるが、現在の政策がどうであつても、日本そのものの意思が、軍國化してきたことは、少しも疑ふの餘地がない。軍國主義の社會征服、軍國主義の政治征服は、見事なる勝利を示してゐるではないか。然らば將來はどうであらうか。將來もまた軍國主義が榮えるであらうか。

七

この問題に答へることは極めて容易である。われ等は現在の日本における幾多の現象のうちにおいても、この答を見出だすことができる。けれども現在の事實は、如何やうにも說明することのできるものであるかも知れない。過去の事實と現在の事實、過去から現在に接續してゐる事實――これを傳統と呼ぶ者もある――も、必ずしも明日を語る材料といふことはできない。私は傳統主義を打ち擲てるものでは勿論ない。けれども眞の傳統とは、日本主義者などの主張してゐるやうな、現在の事實ではない。また過去から現在への事實をいふだけではない。もつと深くして永い根柢のあるものでなくてはならない。即ち過去に存在し、現在において滅びず、更にその存在が、歷史的考察によつて、永遠のものであると信ぜられる時に、それを眞實の傳統と稱することができるものである。過去から存續して今日も尙ほ存在しつゝあるものであつても、その存在が旣に危殆に瀕し、そのものの存在が、旣に滅落の運命に陷つてゐるものは、これを傳統と稱することはできない。或ものが傳統であるか否かを知るは、そのものの歷史的判斷によるべきものである。

眞の歷史は、人間生活の原始に遡らなくてはならない。從つて眞實なる傳統は、人間史において見るべきものである。人間史の立場から判斷せらるべきものである。他の言葉をもつていへば、歷史的進化の立場からして、事相の判斷を爲すべきものである。その事相が、進化の如何なる階梯にあるかを見ることによつて、われ等はその次ぎに來るべきものを知るのである。この立場から日本の將來を見るならば、日本の將來が民本化するか、或は益々軍國主義に狂注するかの問題は、極めて簡單な問題である。

八

ヘルマン・フアナウは獨逸人である。「私は獨逸人であるが故に」といふ書物を書いた。その書物は、彼れが熱烈なるプロシア主義の攻擊者であることを示してゐる。彼れはまた近頃「來らんとするデモクラシー」の一書を公けにした。彼れは獨逸の民主化を信じてゐる。そうしてこういふた『王朝か人道か』と。またいふた『幾百の王朝は仆れた。軍國は仆れた。國民は仆れた。人道は殘つた』と。獨逸においては、この點は極めて價値ある言葉である。その王朝が、軍國主義の體現であり、それがまた人民の自由の敵である時に、『王朝か人道か』といふ叫びは、正に人道を愛する人々の爲めに叫ばれなくてはならないものである。たゞ日

本においては、王朝は日本民本主義の具現である。この日本においては王朝(ダイナスティ)とは、人道と對立すべきものではなくて、人道の側に立てる、光輝ある永遠である。卽ち光輝ある傳統であると稱することができるのである。

それ故に日本の明日を語るものは、矢張り世界の明日を語らなくてはならない。特に日本及日本人が、既に世界の他の人々とともに歩るきつゝある時に當つては、日本の明日を語るものは、また世界の明日を語らなくてはならない。世界の明日を語らずして、日本の明日を語ることは日本の孤立を信じてゐる人々である。單に孤立を信じてゐるのみならず、日本の民族が、人間としての進化の階梯を進まないものであると信じてゐるものである。世間の一部には、世界の大勢を語ることをもつて、日本と無關係のように說く人もある。けれどもこのような人々は、日本の進化を信ぜざる人々である。また日本人が、一つの人間であることをも信ぜざるものである。否らざれば、傳統をいふことについて、偏狹な觀察を下して、自分で、自分の世界を、卑く、小さく、短いものと考へこんでゐる人々である。

日本の將來が、民本化するか、軍國化するかの問題は、極めて簡單な問題であると私は述べた。私はその言葉を繰返す。自由とは、人間の生活において、永遠に求められてゐるものではないか。歷史的進化の立場から判斷せよ。自由とは、人間史上の、不斷不朽の、最も優れたる傳統ではないか。だから歷史的進化は、われ等に自由を約束してゐる。自由の組織――民本主義――を約束してゐるのである。日本のみが、何故にこの歷史の約束から隔離されなければならないか。こう考へたならば、問題は極めて簡單である。將來の日本は、民本主義の日本でなくてはならぬ。

九

その將來も、實は近づきつゝある。若き人々の心のうちには、既に民本主義が、强々刺激を與へた。民本主義は、日本の敎育ある若き心にはもう强き深き烙印を捺してしまつたのである。常に靑年と交りつゝあるものは、この事實を、無感覺に過すことはできない筈である、寺內內閣は、如何にも、民本主義を追ひ拂うべき使命をもつて生れたのであらう。日本の政治界には、このような思想が、今に尙ほ冷却するに至つてはゐない。けれどもこの寺內內閣になつてから、民本主義の叫び聲は、日本の如何なる時代においてよりも、最も猛烈に起つてきたではないか。この點において、寺內內閣はその存在の第一義を失つたものである。そうして如何に歷史的進化の要求が、强い力であるかを示してゐるものである。若き人々の心には民本主義の焔が燃えつゝある。この焔をして、健全なる發達に導くのが、政治家の任務ではないか。(六―二十)

▽兩主義の衝突を懼る

法學博士 農學博士　新渡戸稲造

軍國主義並に民本主義とは、多分ミリタリズムとデモクラシーの意であらう。この二つを相對峙して反對の主張を表すものと觀るのは、必ずしも當つた說とは思はれない。四十年許り前スペンサーの最も行はれた時代にはこの二つのものが相容れない傾向のやうに說かれて、其後英米國では幾分か同じやうに考が維持されて居るかと思はれる。今年の初めであつたか、米國の婦人で紐育に辯護士をしてゐる旅客が、日本に立寄つて一夕の話を交へた時に、自分は民主主義者で軍國的思想には反對だといふ事を頻りに述べて「米國は民主主義の國柄であるから、軍事的の行動に出でない」と云つたが、我輩は其時に「羅馬が民主主義の盛んな時、即ち共和國であつた時には、屢々戰をして、且つ戰に成功した。貴國に於ても母國の大軍を敵手として獨立の戰に成功した。又內國亂としては世界に未曾有の戰爭をした。此等の事實から思ふと、民國必ずしも平和國とは云はれない」と述べた事があつた。佛蘭西の共和國が決して非軍國であるとは云へまい。故に單に民本とか軍國とか云ふ丈けを以て、根本よりプリンシプルに於て相反したものとは、我輩に於ては受取り難い。「國民を擧げて兵」といふ事は、思想に於ても事實に於ても有り得る事と我輩は信ずる。

唯然し軍國主義は平時行政の上には命令的、社會に於ては階級的に政治に於ては官僚的に成り勝ちである。この命令を尊崇する者は民主的思想の容れない所である。階級的の區別は平等を重んずる民主主義の好まぬ所である。官僚的の政治は國民の意思を尊重する民主主義とは融和し難い所がある。故に軍國主義は、主義として民本主義に反對と云ふよりも、其の產む處の子が望ましからざる態度を以て民に接すると云ふ所に、互に相容れない所が生ずるのであると吾輩は信ずる。

所がこの兩思想の暗鬪が現時我邦に行はれて居る。中には既に明に表面に戰つて居るものもあるやうであるけれども、未だ〲顯はれないで默して反目の態度で居るが、早晚明らさまに相接戰する時期が來るに違ひない。然るに斯く云ふ時には、軍國主義の方が一時は戰に勝つ。即ち民本主義などを唱へる者は、牢に入れられたり、首を斬られたりする事實は、歷史が明かに語つて居る。然しさう云ふ事ある每に民本主義が、思想としては戰つて行く。だから民本主義を唱へる者が、もつと縛られる時代が來なければ本物に成るまい。さうしてそんな時代は近くありさうに見える。若しさういふ亂暴な事をしないで民本主義が行はれたら、實に崇めた國柄であると思ふが、英吉利でさへも衝突は、歷史に於いて汚點を貽して居る位だから、感情に奔り易い我國民が、穩かに此衝突を避ける事は六つかしいと思ふ。と云ふと革命でも起るを期待するやうに思ふかも知れないが、僕はそんな極端な事を謂ふのではない。たゞ犧牲に爲るべき個人は出るだらうと思ふ。出なければ思想は擴がるまい。

▽我國の現在及將來に於ける軍國化及民本化の二大運動に對する批判

陸軍中將　佐藤鋼次郎

本問題は余自から選定したのではなく本誌の記者から此問題に就て意見を問はれたのであるから、意見を述ぶるに先ち本問題を如何に考へたかを玆に述ふるのは無益でなかろうと考へる。本問題中の軍國化とは無論ミリタリズム化と云ふことに解釋するが、さて世間には第一に軍國主義の解釋が區々である、又民本化と云ふことはデモクラシー化と云ふことであろうと思ふが、是れも解釋が種々あつて今日尙ほ我碩學鴻儒が新聞に雜誌に口角沫を飛して論議中てある。從て其解釋次第では本問題に對する意見も自ら異なるであろうと思ふ。しかし余が解釋する所の意義とせば、自今世界の列强は益々軍國化し、併せて民本化するに相違ない、然らば我帝國も此大勢に後れず富國强兵の實を擧げて、世界の生存競爭に打ち勝つべく勇往邁進しなければならない。

元來軍國主義なるものは左程憎惡すべきものではない。然るに英米人は之を視ること蛇蝎の如くに嫌忌するのは、軍國主義其物を憎惡するのではなく、其弊害を憎惡するのである。即ち軍國主義の最完備せる獨逸國民が、傍若無人に侵略主義を振り廻すを見て、獨逸國民其物を恐怖し憎惡するのである。元來英米人の憎惡して名命せるミリタリズムなるものは之を煎じ詰めれば本來プロシャズムである。元來軍國主義の本家本元は普魯西のフリードリヒ大王で、大王が皇太子時代にアンチ・マキヤヴエルリ卽ち彼の有名な君主經國策の反對論を著し君主仁政論を鼓吹したがそれは權謀で、大王卽位後の擧動は却て全然マキヤヴエルリ式てあつた。是卽ち孟子の所謂『以レ力假レ仁者覇』の語に適中して居て、恰も覇道の眞相を發揮して居るものである。目的の爲には手段を撰まぬ、必要の前には法律も道德もない、一切萬事軍事萬能主義を以て押し通さうと云ふのがフリードリヒ大王式で、現時のカイゼルは全然此プロシャズムを發揮しつゝあるので、英米人の之を憎惡するのは尤の次第てある。併し本來の軍國主義とは國民が尙武的精神に富み平時に於て有ゆる手段を盡し、戰爭の準備を完全にするの意義である。然らば我國をして此主義を採らしめんとするに、批難すべき點のあるべき筈はない。

デモクラシーの解釋に就ては近來學者の問題になつて居て、元來デモクラシーなる語は主權在民主義から由來したものてあろうが、それは我國體と相容れない、そこで近來殊更民本主義と稱しデモクラシーの譯語、民主主義と區別し、我歷朝の　天皇皆民を國の本とし億兆を安撫し賜ふ、波の五箇條の御誓文の如きは民本主義の神髓を發揮したものであると稱し之を民本主義と云つて居るやうである。民本化なるものが此主義のことであるに於ては、何等不賛成のありやう筈がないばかりでなく、政治は無論人民全體の爲に爲すべきもので、君主又は少數貴族の爲にすべきも

でないのは多言を要しないから、我國に於ては特有の民本主義を發揮し、世界に率先して模範的社會政策を實行すべきである。政治の根本義として個人の自由平等は素り之を尊重しなくてはならぬが、之が極論に走り共產主義無政府主義などなつては一大事である。そこで國家の目的の爲には個人の自由平等は或程度まで犧牲に供しなければならぬ、が是れは一に國民の自覺即ち國家的觀念に依るのである。獨逸は決して君主專政ではない。カイゼル一人のみが如何に戰爭を好んでも、國民の多數が不同意であつては斯樣に國民が擧國一致最後の一人まで戰爭を繼續せんとする決心の臍を固めやう筈がない。

我國に於ても次の戰爭は國民的戰爭であるに相違ない、然らば貴族と庶民、富豪と貧民資本家と勞働者等の社會的關係を調和し、打て一丸となし之を民本化し、擧國一致次の戰爭に對し國家總動員の準備を完全にし、以て我國家を軍國化し、我建國以來の大精神たる王道に依り、世界的に發展せんことは吾人の切望する所である。

▽民本主義と軍國主義の兩立

法學博士　吉野作造

（一）

民本主義と軍國主義とは從來相容れざるものゝ如く考へられて居る。併し正確に云へば此兩者は、同一線上に相對立する觀念ではない。軍國主義と相對するものは平和主義であり、又民本主義と相對するものは官僚主義である。唯從來軍國主義は官僚主義と伴ひ、平和主義は民本主義と伴ふを常とするが故に、軍國主義と民本主主とが又自ら相對立するものゝ如くに考へられたのであらう。而して所謂民本主義に立つ英米は、軍國主義に對しては殆んど何等の感興無く、又所謂軍國主義に立つ獨逸は民本主義に對して極めて冷淡であつた事は、少くとも戰前までは一點の疑を容れざる事實であつた。

此關係は今度の戰爭になつて、少しく變調を呈したと云はれて居る。何故なれば民本主義の英米が、俄然として一個の大軍國と變じつゝあるを以てゞある。或人は此現象を解して英米の傳習的誤謬より覺醒して、獨逸を模倣せるものなりとし、從つて民本主義の凋落を意味するとする。又或人は之を解して、人民全體其物が軍國的に動ける民本主義の怖るべき一新現象なりとする。何れも從來民本主義のチャムピオンであつた英米が、其軍國主義的經營に於て、今や却つて本場の獨逸を凌がんとする

の色あるを以て、驚異の眼を睜つて居る。而して之れ皆其基く所は、民本主義と軍國主義とは本來相容れざるものでありとする考にある事は言ふを俟たない。從つて又我國の將來に就いても、民本主義的に進むものか、軍國主義的に進むものか、又其何れかの一方に進ましめねばならぬものかといふやうな問題が起るのである。

(二)

軍國主義といひ平和主義といふは、もと國際政策上の主義である。少くとも國家の國際的生活を主たる着眼點として割り出されたる政治上の主義である。而して國際政策上の主義が、或は軍國主義となり、或は平和主義と分るゝ根本は何れにあるかと云へば、國際的生活の本質に關する見解の相違によると思ふ。國際的生活の本態に關しては、古來二つの異つた考が行はれて居る。一つは協同で他は競爭である。前者は各國家長短相補ひ各々其特能によつて全人類の進歩に協力するといふ世界的人道主義と相通ずるものあるは言ふを俟たない。之に反して競爭は云はゞ極端な孤立的個人主義のやうなもので、國と國とは其力を競うて相爭ひ他を壓倒する事によつてのみ自家の生存と安全とを期し得べしとするものである。斯く明白な形であらはれないまでも、又斯く明白なる國民的意識に導かれないまでも、從來の歴史に表れたる各國家の國際政策上の主義は、其間厚薄の差はあれ、必ずや此何れか一方の主義に導かれて居ることを認めざるを得ない。而して、今日我々日本國民に採つても、我國今日の國際政策は此何れの主義に依つて居るか。又此何れの主義に據らねばならぬものかは、政治現象説明の問題として、又政策指導の問題として極めて肝要なる研究たるを失はない。

特別なる一國の政治史上の問題として、又廣く國際的生活一般の歴史の上の問題として、協同と競爭との關係は極めて興味ある題目であるけれども、之を詳述する事は今我々の仕事ではない。只ある一國の當局者並びに國民の多數が、國際的生活の本態を協同にありとするの信念に立てば、其國は即ち平和主義の國であり、之に反して競爭にありとするの信念に立てば、其國は即ち軍國主義の國たらざるを得ない事を一言するに止める。從つて我々は當局者並びに國民の國際的生活の本態に關する信念如何を見て、大體に於て其國が平和主義の國であるか、軍國主義の國であるかを判斷する事は出來る。

但し或國をとつて平和主義の國なりと云ひ、軍國主義の國なりと云ふのは、其根本主義に就いて判斷するのである。軍國主義だからと云うて、全然平和を問題としないと云ふのではない。固より軍國主義の國では、國家と國家との間に平和的協同の永續性を信じないから、若し彼が對手國と和親すると云へば、夫は和親其物が目的たるに非らずして、自家の軍國的經營に之を利用するに過ぎない。獨逸が露西亞と單獨講和を締結せるが如きは、正に此見地から判斷すべきものであらう。之れ予輩が屢々兩國單獨講和を目して、獨逸作戰計畫の一部なりと主張せる所以である。之と同様に平和主義の國であるからと云うて、必ずしも絶對に

軍國的經營を否認するとも限らない。尤も例へば露西亞今日の政府當局者の如く、絕對的平和主義を採つて一歩も讓らないものはある。けれども普通一般の考から云へば、絕對的平和主義は世界の總ての國乃至人類が殘りなく協同の確信を有するに至れる時に云ふ可きである。一人でも競爭の主義を奉ずるものゝある以上は、世界は常に不安に襲はるゝ。例を軍備制限の問題に採らんか、軍備の制限は差當り世界の平和を保障するに足る最も有力な方法であるけれども、併し斯くの如きは全員一致でなければ實行は出來ない。一人でも制限の拘束を奉ぜざる者ある以上、誰しも皆不安を感じ制限を斷行する事は出來ない。否彼等は更に進んで其全體と步調を合せざる者に向つて强制の手を加ふるの必要を見るだらう。斯う云ふ場合に少數の異論者を强制しない方が寧ろ彼等を從はしむる所以であると示ふのが露國レーニン一派の主張である。英米は之に反して、獨逸のやうな普通外れの軍國主義者を抑へつける事に依つて初めて世界の平和は不安の狀態から免れ得るとする實際的見地に立つ。斯くして結局の平和的安定を得るの目的の爲めに異論者を拘束するに足る力を養ふといふ必要が起る。斯くして英米の軍國主義は發生したと見なければならない。故に結局に於て平和を理想とする國に於ても、其平和を確實に齎らす爲めの手段として軍國主義をとるといふ事はあり得る。

斯く考へて見れば當今世界に行はるゝ軍國主義には二つの種類があると云はなければならない。一つは軍國主義其者を目的とする者であつて他は軍國主義を平和的理想の手段とするものである。日本の將來に就いて問題とせらるゝ軍國主義とは此何れを云ふのであらうか。

（三）

民本主義と云ひ、官僚主義と云ふは主として內政上に表はるゝ所の政治主義である。而して之が軍國主義若くは平和主義の國際政治上の主義と相對照して唱へらるゝ所以は、前者は專ら平和主義を伴ひ、後者は多く軍國主義を伴ふからである。一々說明するまでもなく斯くの如きは史上に其例に乏しくない。

人民全體は平和の永續の上に大いなる利害關係を有つて居る事は大體に於て爭ひ難い。動もすれば、事あるを好み、又事あるに依つて利福を增すの機會を多く有する者は、官僚の階級である、併しながら更に考へて見れば、國民一般の國際生活の本態に關する信念は必ずしも協同主義なるを常とするとは限らない。此點に關する我國今日の國民的信念の如きは寧ろ競爭主義に偏するの傾向ありと認む可きではあるまいか。從つて民本主義が流行すればとて國民の信念が根本的に變らない以上は、常に必ずしも平和主義に徹底するものとは限らない。只併しながら軍國主義者は殊に軍國的施設其物を目的とする所謂軍國主義者は、目前の對外的國力を整理擴張するに急にして、如何なる形に於ても民本主義の行はるを好まざるの傾向がある。何故なれば民本主義の要求は、其國民の信念が競爭主義に偏する場合と雖も、性急なる軍國主義者には甚だ不便なものであるからである。斯くして所謂軍國主義者は民本主義を生來の仇

敵の如く見做して之に反對し、之を壓迫せんとするのである、民本主義と軍國主義との衝突は主として斯くの如き場合に起るのである。

（四）

今日のやうな國際生活の下に於ては、如何なる國に取つても軍國的施設の缺くべからざるは論を俟ない。唯軍國的施設經營の根本方針は、之を夫自身の目的とするに置くべきや、又は之を他の目的の手段たらしむるに置くべきやは、愼重なる考慮を要すべき重大な問題である。主觀的に云へば世界的協同生活に關する理解如何の問題であり、又客觀的に云へば當該國民の品格に係はる問題である。

我國の將來に於ける民本主義と軍國主義との消長如何、又兩者の關係を如何にあらしむべきかの問題は、上記の根本問題に對する態度如何によつて自ら異らざるを得ない。而して予輩一個の見解としては、少くとも戰後の世界は協同主義を以て國際的生活を統制すべき時代であると信ずるが故に、平和主義を根本の理想とする上に立つて軍國的經營を指導せねばならぬと考ふるものである。人或は云ふ、平和はもと人類の理想なりといふも、古來一日として平和であつた時代は無いと。併し平和であつた時代が無いからといふて之を理想とすべからずといふのは、古來黃金時代といふものは無かつたからといふて、社會の向上發展に熱中するを愚蒙なりとするの類である。古來變轉常無き幾多の歷史的事變は、少くとも後世の文化開發と關係ある點に於ては、平和的安定の爲めに動いた——恰度時計の擺子が中心に安定せんとして左右に動搖するが如く——ものと解せなければ、其歷史的意義が分らない。何れにしても今日の時勢に於て、軍國的施設經營は絕對に之を缺く事を許さない。而して之を予輩の主張するが如く、平和的大理想によつて指導せらるべしとする時は、それは今日明日に發展しつゝある所の民本主義の潮流と、恐らく何等著るしき衝突を見る事は無からう。尤も日本今日の事實の偽り無き說明としては、國民の信念が平和的理想に對する理解が餘りに淺薄であることを認めなければならない。故に國民の信念を此儘にして民本主義の流行を見る事は、必ずしも國際政策の根本義を平和主義に徹底せしむる所以となるとは限らない。從つて我國の將來といふ事に關して、攻究せらるべき最も根本的な問題は、國民の敎化といふ事であらう。併し此等は國民敎育といふ方面から大いに攻究もせられ、又努力もせらるゝとして、扨て其根柢の上に政治上の主義方針を論ずるといふ段になると、民本主義の流行は必ずしも軍國主義と相容れざるものではないといふ結論に達せざるを得ない。

唯事實の問題として我國將來の軍國的施設經營は、果して今日已に萌芽を發しつゝある民本主義と衝突する事無くして行けるだらうかどうか。我國政界の現在の事情を目前に展開して、近き將來に於けるそれの進み方を想像する時に、何となく此兩者は激しく反撥すべき運命にあるかの如くに感ぜらるゝ。何故に斯く感ぜらるゝかと云へば、それは我國の軍國的施設經營は、事實上夫自身を目的とするの信念によつて、即ち

國際的生活の本態を競爭にありとする根本義によつて導かるゝだらうと思はるゝからである。若し予輩の憂ふるが如く、此意味の軍國主義か横行する事となれば、其結果は啻に民本主義を抑壓して、國家の精力を無用に内爭に消耗せしむるのみならず、又國家をして國際的協同生活の埒外に孤立せしむると云ふ、怖るべき不詳事を齎らす事である。之れ予輩が常に此意味の軍國主義に極力反對して已まざる所以である。予輩は黄金時代の容易に到來せざるを信ずると同じく、軍國的施設經營の將來に於て又決して等閑に附すべからざる事を疑はない。唯之を其最も純なる形に於て主張され實行されん事を念とするのみである。斯くして初めて軍國主義は民本主義と兩立し、又平和主義と相悖らない。從つて又我々の政治的見識は豐富なる内容と餘裕ある態度と伴つて、世界の各種の變局に對して狼狽する所なく、悠然として之に處するの途を謬らざる事を得よう。

吉野博士、大山郁夫の二氏は本月公論欄に論文を寄せられたる外、引續き七月十五日發行の「秘密と開放」號に何れも長論文を執筆中なるを以て今月丈け評論欄を休まるゝことゝなれり。右讀者諸彥の御諒恕を乞ふ(編者しるす)

著者がその燃ゆるが如き心血を濺いで成りし最近出版界の大著出づ

忽ち再版

現代文化の哲學

野村隈畔著

不健全なる現代文化はその根本方向と精神的統一とを失ひて今將に壊滅せんとしつゝあるは吾々の直摯な生活要求に省みて何人も否定し得ない所である從つて現代に於ける吾々の根本的な生活要求は此不健全な病的文化を改造して新しい溌溂たる自由文化を建設するにあり而て此建設に根本方向と文化價値とを提供するものは政治でも教育でも宗教でもなく徹底的な文化哲學である事は現代人の均しく認むる所である。此時に當りて著者は心血を濺いだ本書を公にせらる之れ實に暗黒なる現代文化に對して一大光明を點ずるものであり。更に獨創的な此新著は學界に對して大なる暗示たるを疑はない。

四六判最上製美本
紙數五百頁箱入
正價金壹圓六拾錢
郵稅金八錢

日蓮宗大學講師
『法華』編輯主幹
文學士 小林一郎先生新著

（日蓮主義講話の姉妹編）

忽再版

日蓮主義概論

日蓮主義は現代の人の宗教的要求に應ずべき最も進歩せる教義なり。國運の發展も個人の安心も此の教義に基きて初めて可能なり。本書は著者が何れの宗派にも囚はれざる自由の見地より日蓮上人の眞精神を發揮せんが爲に特に執筆せるものにして先づ法華經の梗概を擧げ次に日蓮上人の教義の精髓を語り現代思想との交渉近世科學との關係に論及し極めて大胆に又極めて眞面目にその所信を告白せるものなり思想問題に注意せる人は必ず本書を一讀するの要あるべし。

四六判最上製美本
紙數六百卅頁箱入
正價金壹圓七拾錢
郵稅金八錢

東京市神田區
表神保町七

大同館發行

振替貯金口座
東京八七貳番

新東京市長 法學博士 子爵 田尻稻次郎先生序

▽西村文則先生新著

▽定價八十錢・送料六錢・中判總布

中流生活の改造

實質なく、精神なく、根柢なく、虚僞、形式、冗漫、無用の中流生活を改造せよ。是れ刻下の最大急務なり！

住宅問題、衣食問題、來客待遇問題、時間活用問題、雇入問題、貯金問題、負債整理と金融問題、簡易生活と安價生活問題、複合收入等著者の觸るる所一として緊切至重の活問題ならざるなし、堅實眞摯の中流生活者の良參考たらんことを切望す。

東京京橋南紺屋町十二
實業之日本社
振替口座東京三二六番


"JUNO"
ジユノー萬年筆
(1)
¥1.50……¥100.00
目錄進呈
特約店募集
(2)快ろよい金ペンの走り心地
これが萬年筆の生命です。幾百種の萬年筆の中金ペンの構造最も完全でスラ〳〵と氣持よく書けるのはジユノーです。インキ止の裝置これ亦最も完全、殊に新製品手帳用最小形萬年筆益々好評是非御愛用を願ふ
全國有名なる各文具店にあり
東京市本郷區春木町三丁目
"本舗 南江堂文店
大阪市東區南久寶寺町一丁目
關西代理店 原田商店
東京市神田區仲猿樂町
北海道代理店 ミヨシ商店



不昧公の御優寵を蒙りたる御側工人

小林如泥翁（近世名工名人叢話第二）

高村光雲

私は往年出雲の國に小林如泥と云ふ名工があつて、建築に、彫刻に、指物に、其他種々の方面に數多の傑作を殘して居ることは、豫て承知して窃に其人を敬慕して居ましたが、前年國寶調査の爲め彼地に赴いた際、親しく其作品に接し、又其人の事歷をも詳かに聞くことを得ましたので、一度或る美術家の集會せられた席上で、一寸御話したことがありましたが、今回松平家で、如泥翁とは最も關係の深い不昧公の傳記を刊行されると云ふことを聞きましたから、此を機會として、私の見た如泥翁を聊か世間に紹介して見たいと思ふのであります。

扨、此如泥と云ふ人は、非常に技巧に長じて居たのみならず、其人と爲りも餘程脫俗して面白い所があります。それで此如泥翁が名工になつたのは決して偶然ではない。斯程の名工を作り上げましたのは、松平家代々の中に治郷公——不昧と申された方があります。此方は私が今更申上ぐる迄もなく、なか〳〵偉い御方であつて、殿樣でこそあれ、諸藝に堪能で、御茶は殊に得意であり、專門家を淩ぐ卓拔な意匠と一家の見識を持たれ、能く斯道の工人を誘掖獎勵されました。現

に今日でも不昧流と云ふ御茶の流儀が存して居り、器物にも不昧好と云ふ形も殘つて、小堀遠州の後は不昧公と云ふやうなことになつて居る有樣である。此不昧公が始終如泥翁を御側に置かれて、斯うでもない彼あでもないといつて、責めに責め拔いた。又當人も熱心な人であるから、繪にも描けない、圖にも現はせないやうな事をさへ、不昧公の心持を能く酌み取つて出來るだけ製作をした。それに不昧公も表高十八萬六千石だが、内高は三十萬石もあるなんといふ御高であつて、加之に諸藝に趣味を持たれた方だから、費用の掛かることは何程掛かつてもお厭ひなし。時日もまたお構ひなし。それで御扶持を與れた上、製作が善く出來れば大層御褒めになつて、銀何枚とか、或は金何枚とか御褒美を下すつた。惡く出來れば何度でも拵へ直さす。是れより外奬勵の仕方はない。私は是れが最も結構な奬勵法であらうと自分技術家としても考へます。安全に御扶持を戴き、善ければ御褒美を下され、惡ければ小言は仰しやらぬが、何度でも氣に入るまで遣り直させる。斯う云ふ奬勵の仕方なれば、相當に腕のある人ならば、其技術が巧くならねばならぬ譯だ。況して非凡な手腕を持つた小林如泥、他人に眞似の出來ない事を遣つたのは、如泥翁の技術と不昧公の奬勵とが二つピシャリと合つた結果なのだと思ふ。譬へて見れば不昧公の奬勵法は宛も金の鈴を鳴すやうなもので、チリンと一つ音は小さくても腹へ浸み込みます。が、後世の奬勵の仕方は破鐘の如く、聲は大きくても一向腹に響きがない。人が金を出して拵へた物を橫合から非難する位のものだ。自ら大金を擲つて何度でも遣り直させる、技術家と一緒になつて苦心をして物を作らせると云ふやうな時勢でもない。寔に已むを得ない話である。如泥翁の如き一大名工が、丁度不昧公の時代に生れ合せて、數多の傑作を後世に殘すことゝなつたのは、眞に千載の一遇とでも謂ふべきでありませう。

小林如泥翁の先祖は、信州の松本から松平家の祖先に御供をして出雲の松江へ行つた人で、姓名を小林安左衛門と言つた大工である。(安左衛門と云ふ名は代々

稱へて居たやうである）それで先祖の安左衛門が信州から出雲へ御供をしたと云ふことを調べて見ると、松平家の御先祖は信州松本の城主松平直政公と仰しやつた。此方は德川家康公の御孫さんに當つて、阿父さんは秀康公と仰せられ、家康公の御子さんである。一旦豐臣家へ御養子になつたが、大坂關東不和の時に關東へ戻られた。其御子の直政公と云ふ方が此松平家の御先祖である。此方は始め信州の松本に封ぜられて居たが、何か譯があつて出雲の松江へ御國替になつた。其時に出雲國へ大工の安左衛門と云ふ人が御供をした。是が小林如泥の先祖である。然しながら此時はまだ御家來といふ身分ではなかつたやうである。小林家にある如泥の「勳功錄」と云ふ記錄に據りますと、祖先から數代の間はマアお出入の大工さんと云ふ位のものであつて、如泥翁の阿父さんの安左衛門の代になつて、始めて御家來になつて安永八亥歳の三月に御扶持を頂戴した。その御扶持銀が三百七十五匁三人扶持である。此安左衛門と云ふ人は丁度十二ヶ年間御奉公をして、寛政二戌歳の九月に病死しました。それが「勳功錄」では初代になつて、名人の如泥は二代目になつて居る。これに據つて考へて見ますと、先代はまだ御家來分になつて居なかつたことが證據立てらるゝのである。それから如泥翁は矢張り二代目安左衛門と云つたのである。翁の幼少の名前は何んと云つたか分らんが、阿父さんの存生中、即ち天明三年から七年間、親子共に御邸の御大工をして居つた。其時分から不昧公の御意に叶つて、大層技巧も進みました。寛政二年の九月になつて阿父さんが亡くなつたので、其年の十一月に先代の跡式を承け繼いで、矢張り給銀三百七十五匁三人扶持を頂戴し、二代目小林安左衛門と云ふ者になつて、御大工を仰付けられた。それから後に至つて剃髪を仰付かつた。是れは何ういふ譯であつたか、不昧公が側へ置いて、何うかして細工をさせたいといふやうな事で、それには私共には分りませんが何か剃髪の必要があつたと見えて、大變に剃髪を强ゐたのであります。然るに當人は一向坊主になる氣がないので、不昧公か

ら、坊さんにならないかと何度言つてもならない。そこで一策を按じ、御酒を十分飲まして酔はしめ、寝て居る處をパチリと髷を剪んで坊さんにして仕舞ひ、豫て準備してあつた十徳を無理やりに着せた。此時は大變な御扱ひであつて、御給銀といふのが御給米と改まつて拾石三人扶持を下され、さうして御細工人を仰付けられ、奥御納戸御好御用掛を仰付けられた。此時に如泥と改名を許された。(如泥の名は、翁が非常に酒を嗜みて、何時も酔つぱらつて居るので、不昧公から如泥と命名せられたと云ふ事である)

如泥翁は此の如く非常に不昧公の御意に叶つて寵愛せられましたが、随分我儘も言つたやうである。それを又只の人の我儘と違つて不昧公が能く御聽きになつたやうである。それに就て斯ういふ事實がある。文化六年三月十七日に、自分の屋敷に種々御用の御細工物を御預りして居るといふ所から、火除地と稱へて自分の家の後ろ地面を幅四間二尺、宍道湖の水際まで拝借を願ひ出た。然る處、早速殿様が御聽届になつて、水際まで小林如泥に生涯御貸下を御許しになつた。此事に就ても御話がありますが、是れは後で詳しく述べることにしませう。そこで如泥翁は文化十酉歳十月二十七日を以て病死しました、享年六十一歳であります。生涯の中、天明三年から文化十年まで三十一年間勤務して居りますが、其中に親掛りで勤めをしたのが丁度七年、之を差引くと二十四年間も獨立で御奉公をして居る勘定である。又「勤功錄」で見ますると、右の三十一年間に三十五點製作をして居るが、實際はなかなかそんな事ではない。少くも一ヶ年平均一點はあるだらう。其間に又諸家からの依頼もありませう、此等の製作物は或は諸處へ散ばつて居るだらうと思はれます。尤も翁は流石名工だけあつて、さう矢鱈に製作をしなかつたから、其製作の割合に少ないと云ふことは事實であるに相違ない。それから三十一年間に江戸と御國へ往復したのが都合五度、之を平均して見ますと丁度御國に三年、江戸に三年と斯ういふやうな勘定になる。――キッチリさうでもあるまいが――それで江

戸の事もなかなか能く承知の筈であるから、江戸の名工の仕事も、諸家の結構な物も拜見をした上、種々工夫に工夫を凝してやられたことゝ察せられるのである。『勤功錄』を見ますると、種々詳細な事も載つて居りますが、如泥翁の履歴を極搔摘んで御話すれば、マア以上のやうなものであります。

　これから不昧公に關係ある製作上の逸事を一つ二つ御話をして、其後で如泥翁の製作品に就き、聊か説明をして見たいと思ひます。先づ不昧公の御好みで三ッ組の盃を拵へたと云ふことは名高い話であります。私が傳聞する所に據りますと、不昧公が何れの御邸で見られたのか、三ッ組で大層御意に叶つた盃があつたので、或日如泥を御召になつて、『予は餘處で斯ういふ盃を見た。大層それは善い盃であつた、何うかアヽ云ふ盃が欲しい、お前一つ作つて呉れないか』と仰しやつた。所が、如泥翁は早速御請を致した。元來翁は餘程頭が曲つて居つて、何んでも當前ぢや通さない人だ。何か不昧公を一つ屁込ませやうと云ふ考を持つて居た所であつたから、不昧公の仰しやつた事を聞くと自分は能く考へた。爰で一寸如泥翁の特技を述べて置きたい。翁は轆轤細工即ち轆轤で挽く細工に餘程長じて居つた。それと共に曲物――板を自然に曲げて器物を造る、今日云ふ曲木細工――是が決して他人に眞似の出來ない妙技を持つて居る。それから絲透しと云つて、厚板を細い鋸で模樣を透して陰陽の絲透しといふのが最も得意であつた。それで如泥翁は不昧公から御請をして、種々苦心をした揚句、一個の盃を拵へ上げて、『御意に召すか召さぬか、出來ましてございますから』といふ事で御前へ上納した。所が其形が少し歪で圓くない。其圓くないと云ふのが甚だ六ヶ敷ので、轆轤で挽けば圓くなるのが當然であるのに、歪に挽くには餘程の苦心と工夫とがなければ出來ぬ。不昧公は御手に之を取揚げられて、『是は結構だ、面白い、お負けに小口木でない、横木で挽き上げた手際は感心した、アヽ好く出來た、殊に刳物で少し歪といふのは最も敬服した。然し予が餘處で見た盃は三ッ組であつた。』と斯

ら仰しやると、如泥翁が「御前に差上げました私の製作致しました盃も三ッ組でございます」と申上げた。「所が是は一個、まだ二個足らぬ」と仰しやつた。すると其處がどうも餘程如泥翁得意であつたらうと察せらる、「どうぞ此方へ」といつて、殿様の手から受取つて、縁に指を當てスーと捻ると、子持仕立で、中から盃を一個出した。それから又一個出して、「是れが本當の三ッ組でございます」と申上げた。そこで不昧公が手を拍つて非常に敬服された。此盃には糸底もあれば玉縁もある、一番止の盃が聊か玉縁が厚い位のことで、スッカリ三個組んで見ると一個になつて仕舞ふのである。是はマア一つの御話であるが、此三ッ組の盃に就て斯ういふ話がある。第三回の內國勸業博覧會の時と思つて居るが、――或は私の覺え違ひかも知れん――小林幸八と云ふ人が、矢張今日出雲の挽物師でなかなか名人、是が櫻の木で三ッ組の盃を製作して島根縣の部へ出品した。それを見付けたのは審査員であつた故小川松民氏である。一體審査といふものは、誰が見ても分る物といふよりも人の氣の附かぬ物で、金賞をやるとか銀賞をやるとかいふ物を發見するのが審査員の自慢とする所である。それで目を皿のやうにして小川松民氏が見付出したのは、生地ではあつたけれども挽物の盃が出て居る。それにチョイと目が附いた。「形もよい手取、肉合等申し分はないが、盃が唯タ一つで其價が二圓幾らとか、どうも櫻の盃にしては不廉ぢやないか、地方の物は廉いといふけれども是は馬鹿な値段だ」といふので、島根縣の委員に向ひ、「此盃は大變好く出來て居るが價が法外である。一體工藝品といふものは價からして相當しないと賞が取れない、美術品とは少し違ふ、相當の價に下げたらば褒賞位にはなるかも知れない、或は間違ひではないか、モウ一遍調べて呉れ」と云ふと、委員が「イエそれは出雲の特産三ッ組でございますから不廉ことはない」と答へる。それで能く見ると成程下げ札に三ッ組と書いてあつて、之を弄つて見ると中から一枚スッと出て來た。又一枚出た。遂に三枚になつた。此小林幸八は「小林如泥も

人間である、己も挽物師の一人だ、やれない事はない」と言つて、一生懸命になつて漸つと其處まで出來たが、如何に幸八が名人でも、とう〳〵横口は挽けない、それに形も眞圓である。然し此人も實に感心な人で、今尙ほ生存して製作に從事して居るさうである。

今一つ、是は子供欺しのやうな話であるけれども、然し如泥の話として傳はつて居るから述べて見ませう。能く殿樣にある事で、是は江戸の或御邸で、殿樣方が御出會になつた。斯ういふ時には能く國自慢をするもので、或る殿樣が「私の國に上手な彫刻師がある、是は非常に寫生が上手で、殊に鼠を彫ることが巧い」といふ話をすると、不昧公も自分の家の如泥といふ者は日本に比類がない、お負けに自分が仕込んだから偉い者だと思つて居る。そこで、「己の方にも如泥といふ彫刻師が居る、是れは頗る技術が巧い、何んと慰みに一つ競技をやつて見やうぢやないか、お前の方で鼠を一つ彫らせなさい、私の方でも如泥に一つ鼠を彫らせる、さうして鼠と鼠とを競べて見やう」といふ殿樣の不負の考から、邸へ歸つて如泥翁を呼び寄せ、「今日は何處其處の邸で是れ〳〵の話があつた、一つお前に鼠を彫つて貰つて驚かしてやらうと思ふ、何うか巧くやつて吳れ」といふ御話、是れには流石の如泥翁も弱つた。元來如泥といふ人はさういふ寫生などゝいふものはチヨツとも心掛けない。例へば鼠を彫つても寫意を主とした高尙なことをやる人だから、是れは困つた事だとは思つたが、何しろ殿樣の仰せであるから御請けはした。所が何時まで經つても一向拵へない。モウ明日が競技といふ日になつても、如泥は酒のみ飮んでグー〳〵臥て居つて起きない。そこで段々催促した所が、「宜しうございます、拵へます」と言つて、何か目算があつたと見えてやつと一疋の鼠が出來上つた。誠に早や武骨な、玩具にありさうな鼠を拵へて殿樣へ差上げた。不昧公は御覽になつて、「是は些と困つたな」と思召したが、然し今更已むを得ないから、それを持參された。さて當日になつて向ふの工人も殿樣の御供をして其席へ出た。所が、どうも向ふのが巧く出來て、

如泥の鼠は些とも鼠らしく無い。一體の風評が先方の工人に勝を得られさうで、如泥の方に評判が落ちて來ない。そこで不昧公も心配されて、「私が見ても向ふが巧い」と言はれた。其時如泥翁は、「是はどうしても、鼠と云ふ物の批判は猫にさせるに限る。人間に描く見えても、猫の眼から見たら鼠に見えます。此鼠を二ッ列べて置いて、猫を連れて來て一つ勝敗を決して貰ひたい」と述べた。すると『成程是れも一理ある』といふので、早速猫を連れて來てお放すと、猫は一も二もなく、如泥翁の鼠を喰へて何處へか駈け出して仕舞つた。そこで如泥の方が巧いといふ事になつて其日はお終ひになつた。後で聞いて見ると、それは唯だ殿樣に負けさしたくない爲に窮した案で、大きな鰹節で鼠を拵へたのだ。それで猫は之れを見るや、大好物の鰹節であるから矢庭に喰へて行つたといふ事で、是は少し大道講釋の左甚五郎の話のやうでありますけれども、然しさういふ事もあつた。

或時不昧公が何か出來ない相談をして、一つ如泥を困らしてやらうと思召し、如泥翁を呼んで申さるゝには、「如泥、お前に賴みがある、實は此瓢簞の內へ一つ紙を貼つて貰ひたい」如泥の考へでは、是は些と六ッかしい話。瓢簞の內に紙を貼るといふことは、口が小さくて眞中が細く、上下が廣くなつて居る、その內へ紙を貼れといふのだから無理な注文であることは分つて居る。所が、如泥翁は『承知致しました』と御請けをした。如泥翁の性質として、何んな困難な事でも、引受ける時に困つた顏をするのは嫌ひだ。澄して『宜しうございます』と手輕に言つて後で苦む、此事に就ても非常に考へた末、トウ〳〵氣が附いたのは、御國の野平と云ふ處に紙漉場がありまして紙を漉いて居る。其處へ瓢簞を二つ持つて遊びに出掛けた。さうして紙漉の婆さんを相手にして、其處で馬鹿を言ひながら酒を飲むのである。二日か三日通つて居る中に、紙の材料を二つの瓢簞の內へ流し込んではこぼし〳〵して、其內部をスッカリ乾かして、米だとか小豆だとかいふ物を入れて、幾回となく揮つて紙の面を滑く堅め、そして

自分の瓢箪を鋸で挽割つて見ると、チャンと內部へ白紙が貼れて居た。そこで、殿樣より御預かりの瓢箪を持つて御殿へ罷出で、「巧く貼れませんが、斯樣に出來ました」と言つて差出した。不昧公之れを御覽になり、「成程是は貼れて居る、貼れては居るやうだけれど、口元の處だけで胡魔化してありはせぬか」と思召し、侍臣に命じてその大瓢箪を鋸で二つに挽割らして見ると、チャンと內部一面美事に紙が貼れて居るには不昧公も大に驚かれたと云ふ、是も不昧公が如泥翁に屁込まされた一つの事實である。

　如泥翁は或時珍しい竹を見付けたので、茶杓を拵へて不昧公に御覽に入れると、公は御手に取られて、「アヽ、好く出來た、誠に好い竹で、製作も大層面白い。が、惜しいことに此節の際に蟲の穴がある」と仰しやつた。すると又口の減らない人だから、「それは私も取換へやうと思ひましたが、そんな竹の代りは無いので、蟲の穴のあるのを承知でやりました。其茶杓は銘を「五月雨」と申します。」「何故さう云ふ。」「五月雨のくもの晴間に星一つ」とこぢつけた。そこで不昧公も「成程」と感じて其茶杓を御納めになつた。

　不昧公に關係した逸事は以上述べた位にして置いて、是れから如泥翁の製作に就て少しお話して見ませう。是は何れの依賴であつたか分らないが、其品は竹の花生で今に現存して居るさうである。それで此竹筒の花生を切ることは茶人の方では大變六ッかしいものださうで、一寸考へると竹筒ぽを切るのは何んでもないやうでありますが、實際はなか〳〵切れないものである。我々の切るのは竹の廻し切と稱へて、さゝくれの出來ぬやうに廻しながら切るのであるが、其竹挽の鋸は兩方から目が三角に出來て居て、これでさゝくれの出來ないやうに注意して挽いても、何うしてもさゝくれが出來ます。又挽跡を鉋で削つたり、小刀で仕揚げたりしちや面白味がない。ザク〳〵と切ッ放したのが宜いのださうである。所が、如泥翁が竹を切るのに、非常に出來惡い事をやつて居る。直徑三四寸位の古い竹を、尺位の目の荒い大鋸で無造作に一氣呵成にザク

〳〵と切つた小口を見ると、宛で縞のやうに鋸の目が立つて居る。それで少しのさゝくれも拵へない。此等は何んでもない樣であつて、餘人にはマア出來ない筈の事をやるのが翁の特技である。

それから又依怙地な話でありますが、四分板の打付箱。四分板といふものは御承知の如く杉でも檜でも、四分と四分の墨を打つて、其墨の眞中を前挽と云つて、大鋸で挽き割るので、板の厚さは二分五厘位で、之を削り揚げると餘程巧くしても二分には仕揚がらない。其四分板の打付箱、是れは誰にも出來さうなものだが、所がなか〳〵出來ない、無造作に切つた其四分板を五寸釘で叩き付けて箱を造る。尤も昔しの五寸釘と云つても五寸はない。正寸は二寸位で大五寸といふのが三寸位のものです。其幹身も四角なもので、今の圓い西洋釘とは全く違ふ。鍛冶屋さんがトン〳〵叩いて拵へた眞四角な物だ。その五寸釘を厚さ二分の板へ持つて行つて打付けた。それが割れもしなければ、殺げもしない、左右の板が孕んで釘を通した跡が火脹れの樣にあり〳〵と見えて、普通の打付箱だが何んとなく面白味がある。是れがまた餘人に出來ぬ仕事である。

それから圓窓の縁を槇の木で拵へた。槇といふ木は皮肌を見ると檜と杉を打混ぜたやうな肌をして居る。それの本末の揃つたのを宜い程に切つて、皮付の儘グッと曲げて枌剎にしてピシャッと付けて、それが圓窓の縁になつて居る。是れが又何うも出來ない仕事だ。杉だの、檜だの、槇だのといふ木は、兎角皮が剝がれたがつて始末にいけぬ物である。これを其皮付の儘でギユッと曲げて圓窓の縁にすると云ふのはチヨッと出來ない。如泥翁は時々さういふ惡戲をする。然し是れもなか〳〵餘人に出來ない惡戲である。

如泥翁は、それだけの製作をする程あつて、生來なか〳〵剛氣な人であつた。寒の中でも仕事をする時には、――是がマア如泥翁の精神だが――單衣一枚であつて、綿の這入つた物などは着たことがない。それで何か製作を一つ仕遂げて、殿樣の御意に叶つたとか、自分も滿足したと云ふ時には止度もなく酒を飲んだも

のだが、イザ仕事に取懸るとなると鬼神のやうだ。前にも云ふ如く、ヒユー／＼と吹き來る北海の朔風ももものかはで、褞袢一枚の外、決して餘計な物を身體に着けたことのない人だ。それで欅の一尺角といふと隨分太い、之を切りますのに一氣呵成、鋸をズバリと入れた以上は決して休みもしない、息をも吐かないで、一息に切つて了ふ。それでなくては迚ても巧いことは出來ない。是れは何にもあることで、鋸挽き一つでもなか／＼油斷は出來ない。挽きかけて、二寸挽ては休み、三寸挽ては止めるやうな、ぐず／＼した挽方では、其度に鋸の調子が狂ふて、滿足に正確に挽けるものではない。モウ此處だと氣合の這入つた處で、ズーッと急がず撓まず、ユルリとスラリ切落して了ふ、是が如泥翁の仕方であります。是は現在見て居られた人の、弟子から弟子に傳つて居る話で、其切落した小口を見ると、丁度建築家が繪圖を引いて、切斷面を示したやうに、一つ勝手に線が揃ふて見事な挽目である。『どうせ切崩して仕舞ふのだ、どうでも宜い』と云ふ樣な事はしない。其位な氣象を持つて居つた人であります。

それからチヨッと後へ戻りまして、前に述べた火除地の事ですが、是は四間二尺幅の道路を自宅から湖水の汀まで不昧公に願つて拜借したのであるが、火除地なんていふことは巧く附けた表面の名目で、內實は自分が仕事をしながら湖水の風光を觀賞したいといふ考から、さう云ふ事をやつたかも知れません。それで其地面は岡崎運兵衞といふ人の所有地であつたが、殿樣の御聲掛りといふので同人も仕方なく明渡した。所が其道路の兩側には家を建てさせないから、澤山の空地が出來た。そんなら自分が入用かといふとさうでもない。本人は其儘にして平氣で居るので、其近所に居る人が、彼處に地所が明いて居るから、彼處に畑を作りたい、が、岡崎に賴むと年貢を取られるから、如泥さんに賴んであの地所を借りやうといふ相談、なか／＼借りる人に拔目がない。そこで如泥翁の處へ來て、『何うでせう、彼處に一つ大根を作りたい、菜ッ葉を作りたいが』といふて賴むと、『宜しい、どの位入用だ、そ

なら垣根を拵へて、菜でも大根でも蒔いたが宜い」と、サッサと許した。さうすると皆なが喜んで菜や大根を作る。そこで岡崎が怒つた、「是れはどうも怪しからん、人の地所へ勝手に菜や大根を作つて垣根をするとは何ういふ譯だ」、「イヤ是は小林さんから拜借致しました」。すると如泥翁を訪ふて、「甚だ困るぢやないか、アヽ云ふ事をしては‥‥彼處はお前の火除地だといふから、それなら宜いが、アヽ云ふ物を作つちや困る」と云ふと、如泥翁は唯だ笑つて居る、平氣なものだ。「火除地で明いて居るから、家を建てゝは不可いが菜や大根を造るなら宜い、貸してやらッしやい、貸してやる方が宜しい」といふて澄して取合はない。お影で兩側の貧乏人は、無税で地面を借りて居る事が出來た。さう云ふ處へ行くと小林大明神だ。大變無頓着のやうだが、無頓着なんだか、又は何か考へがあるのか、一方には無頓着のやうで、一方には「ナニ此人は大地面を持つて居る人だから、此位の地所を貧乏人に只貸してやつても何でもない」といふやうな、なか／＼横着な考へもあつたらしい。

又出雲の松江には、今日でも節季にお拂ひをすることに、「如泥拂ひ」と云ふ名が殘つて居る。「今日はどうもいけない、有る時に來なくちや拂はない」と云ふのが「如泥拂ひ」だ。是は殿樣から御金を頂戴すると、大晦日に玄關へ箱を置いて、さうして其中へお錢を入れたまゝで、懸取が來ても一向に取合はない。書付を持つて來て「ヘエ如泥先生、御勘定を」といふと、「アヽ玄關にお錢があるから、書付を入れて勝手に勘定して持つてお出で」と言つて、自分は内に居つて澄して居る。昔は質樸な世の中、殊に出雲なんといふと皆んな神樣の寄合ひだから、なか／＼狡猾いことなどしない、チャンと銘々に勘定をして、さうして持つて行く。段々勘定をして日暮頃になつて來た人は、「先生御勘定」、「アヽ箱にあるから持つてお出で」、「モウ箱の中にはございません」、「箱の中にない、それでは來年だ」斯う言つて追ひ歸して仕舞ふ。どうも大變、貰ひ損つた者は來年まで勘定を待たなくちやならぬ。それでも

矢張りそれで通つて居た、なかなか脱俗して面白い所がある。

それから如泥翁は、能く市中へ自分で酒を買ひに行つた。其時は手振で、板を五枚懐へ入れて酒屋へ行き『酒を一升呉れ』と云ふ、番頭が桝へ注いで『如泥さんお酒』と差出すと、懐から例の五枚の板を出して、ギユツと組合はして、『アヽ此中へ明けて呉れろ』、そこで其中へ一升の酒を明けると一滴も漏らない、これを大抵の人が拵へるには釘で叩き付ける、おまけに隅の所は漆で詰めたりしても、水を入れると滴れる。所が翁の此板の組合せはピツタリと吸付くやうに巧みに出來て居る。是等は實に如泥翁の如き名人にして始めて爲し得る技巧であつて、只だ／＼感服の外ないのである。それに今一つ刀架の話がある。或る人が翁に刀架の製作を依頼した。すると間もなく出來上つて持つて來た。『アヽ有難う、大層好く出來た』と云つて据へて見ると、何うしたものか其刀架がグラ／＼する。そこで『如泥さん、どうも此刀架はグラ／＼するが、困つたものだ、斯うグラ附いては刀は掛からない』と言ふを、如泥翁は聞いて打笑ひながら、『刀架だから、只ださうやつて御覽になつては不可い、マア刀をチヤンと大小とも掛けて御覽なさい』と言ふ。そこで刀を架けて見ると成程翁の云ふ通り、ピシヤリと据つた。即ち大小の重量で刀架がシツカリ緊つて動かなかつた。是等は皆な名人の悪戯で、依怙地な仕事であるけれども、それが矢張り名物になつて殘つて居る。是れは別にさう云ふ注文をしたのでも何でもない、刀架なら當前に拵へて行けば宜い譯だが、何うもそれでは面白くない、一つ動く奴を拵へて驚かしてやらうといふ考であつた。所が、案の定依頼主が此方の注文通りにはまつたので、一つ屁込ました次第である。さう云ふ事は腕に覺えがあるからやれる藝當である。

それから現在東京には、可なり多く如泥翁の遺作が保存されて居りますが、爰に一つ如泥翁の傑作がある。それは只今は上野の帝室博物館の所藏になつて居るが、元とは大崎の御茶屋にあつたのださうです。大

崎と云ふのは品川の大崎の御茶屋である。是は麻の葉陰陽の透しで、洒落や道樂の製作でなく、珠のやうな汗を流し、一心不亂になつて遣つた作品であつて、材料は清水桐を使つてある。厚身は左樣、六分か七分もあつて非常に結構なものである。それから紅葉館にも一つ矢張り同じやうな遣り方で桐の透しがある。是は石州太田村といふ處の欅で拵へてあるが、一寸見ると桑かとも思はれた。博物館には其他に袖垣と云ふか、棧戸と云ふか、同じやうな物がある。一寸脇障子のやうなもので、竹で縁が出來て居る。それで右の博物館の麻の葉の陰陽透し、紅葉館の五七の大閤桐の陰陽透し等を優秀の作品として、それからモウ一つ、是は夫程結構な物ではないが、矢張佳作として見るべきものがある。それは矢ノ倉に常盤と云ふ料理店がある、此處の主人はなか／＼物好の人ですが、桑の四方棚を持つて居る。それには七寶の浮彫がある。或時私に默つて出して觀せられた。私は之を一見して「小林如泥でゝもなければ出來ない仕事だ」と云つたら、主人は「如何にも能く御覽じた、小林如泥と云ふ事で持つて居ります」と言つたことがあつた。これも桑の四方棚ではあるけれども、なか／＼普通の指物師などの及ばない所があります。序に麻の葉の事を説明して見たいと思ひます。是は實物を見れば一目瞭然であるが、先づ麻の葉の縁を糸鋸で透し、其中を藥研に彫つて陰に現はし、日向の方は三角方を透して縁を細く殘してある。斯う話しですれば雜作もなく出來るやうだが、實物を見ると一寸手を出す氣になれないのである。今日のやうに機械の揃つた世の中で、鋸といへば御承知の通り、西洋から糸のやうな鋸も來るし、又足踏の簡便な機械もありますが、然し何程西洋の道具が精巧でも、到底あの麻の葉は透せないと斷言します。其材料は桐で厚さが六分以上、極薄く見て六分ある。六分厚身の物が向ふから此方へスッキリッと拔いてある。さうして糸のやうに透かしてある孔を覗いて見ると、誠に仕揚げの鉋で削り揚げたやうに奇麗になつて居る。それから百年後の今日でも塵埃が一つ溜つて居らぬ、フーッと

吹くと塵埃は悉く飛んで仕舞ふ。是れが若し鋸の挽つ放しでは、到底、塵埃が挽目に溜つて、今時分は殆んど其孔が埋つて仕舞つて何うすることも出來ない。それは何故かといふと、是は云ふ迄もなく、竪の板を斜めに麻の葉の線を挽いて來れば、一方は何うしても倒目になり、一方は追い目になる。此倒目に塵埃が附着すると、なか／＼吹いた位では取れるものでない。是はマア私の想像でありますが、之を製作するには、先づ以て糸のやうな鋸を自分で作つて、正面へ歯を切つて左右は鑢のやうに目を切つて、一方では挽きながら、左右で磨いて行つたものだらうと思はれる。是れはホンの想像で、そんな事でゝもあらうかと思ふ位で、此透しの遣方は迚ても我々には眞似も出來ぬ業であります。

今一つ感服するのは、針を入れた孔がない事である。前の舶來の糸の子を持つて參つても糸の子の太さが二厘あると。針の太さが二厘半なければ其糸の子がズッと通らない。それを挽いて來れば針の孔だけ歴然と殘る。所が、博物館の麻の葉透しは、中心の玉を殘して玉の際まで眞ッ四角に挽付けてある。何處から針を入れたか分らぬけれども、入れたには違ひない。そこが妙で、入れなければアレだけの板へ鋸の入れやうはない。先づ鋸よりも針の研究を第一にして第二が鋸、それから先きはチョッと分らなくなるです。それで、今日は前にも述べたやうに非常な機械揃ひの世の中で、アンなものは雑作もないと言ふ人があるかも知らぬが、然しアノ博物館にある麻の葉の糸透しの通りには私は出來ないだらうと思ふのです。

それと又一つ糸透しの中で敬服するのは、麻の葉といふ物は割物で、一厘違つても中心の見當が違ふのである。中心へはキチンと線が一つに集つて來なければ麻の葉は纒らない、それを如泥翁は樂々と挽いて居る。是れは矢張り不昧公の御好みで、生涯の仕事として遣られたものであります。此糸透しといふものは、如泥翁の作品中でも有數なものであるが、前からも述べる如く博物館にあるのが、殊に優秀の作であります。

れから紅葉館にあるのも同樣の遣り方であるけれども、私共に言はせると、博物館の方は桐材にして遣り惡い、紅葉館の方は欅材を用ゐて五七の桐を透してあつて、博物館のと一對の物と思はれる。

夫れから小品ではあるが如泥翁の作に巨燵櫓がある。其構造は上下が圓くて、三本の柱で組立てある。一體普通の巨燵櫓なんと云ふ物は、隨分不作法不風流なものであるが、此巨燵櫓は實に絹夜具を掛けて、御殿の座敷に置いてもそんなに見苦しくなく、好ましい形をして居る。是は桐製である。元來桐材は結構なものではあるが、造る物に依つて非常に困難である。此櫓は上下の丸い框が凡そ二寸四方――二寸角位である。それをグウーと曲げて、合せ目は枌剝にしてピシヤリと付け、さうして三本の柱を立て、見地の板に花形を透し、夫から火氣の散する樣に拵へてあつて、隨分曲げ木の方で苦心した形跡が見える。何しろ桐の二寸角を眞圓くグウーと曲げて來てピタリと留める。それが何所で繼合せたか分らないのみならず、百年後の今日まで使用して決して離れも狂ひもしない。我々も多少木材に接してあの木が宜いとか、此木が惡いとか云ふ位は知つて居るが、如泥翁が木材を自由自在に取扱ふやうなことは到底出來るものでない。今一つは島桑の煙草盆、是は桑板を矢張り圓く曲げて板の厚さを見せて、重ねて接合し、銀の針金で綴目が出來て居る。然し是れはホンの形容で、其實は木と木の合目で附着して居るのです。其形は釣瓶型で上部が廣く下部が萎んで居る、之を相當に分のある桑の板で不同（むら）なしに曲げた手際は實に恐るべきだ。是れも依怙地に試みた作であるが、何（ど）んなにして拵へたか些とも其遣り方が分らぬ、到底判斷が附かない。それに此煙草盆の手が鯨でこそあれ、其製作は眞中を一つ結んで、それを撫肩に持つて來て、左右へ捻つて煙草盆の横腹に樂々と取付けてある。其仕方が自分の心の儘に、糸か飴細工でゞも結んだやうに毫釐の差もなく出來て居るに至つては實に驚くの外ない。それから一寸二分の香盒がある。それは蓋の表に蝶の模樣を蒔繪で置いて、其裏には「夢」と

いて彫刻で現はしてあつて、是は不昧公が居間へ御置きになつたものださうです。其形は撫肩で、矢張り持前の曲げ木で、是れも何處で接合したか、何う見ても分らぬ、それに蓋と身の合口も巧く出來て居て、曲木であるけれども何處へ蓋を持つて行つて嵌めてもスックリと嵌つて蓋がガタとも言はない。

如泥翁の作品は前にもいふ通りなか〳〵數も少くないが、其作品を能く調べて見ると、たとひ僅の小品でも何處にか、普通工人の及ばぬ所が必らず一ヶ所や二ヶ所は發見される。其邊から考へて見ると、技倆の拔群なるは云ふ迄もなく、總てに就て餘程意匠にも富んで居つて、其製作に依り、一々道具から工夫して、他人の容易に出來ないことを好んでやつたやうに思はれるのであります。

序ながら述へて置きたいのは、出雲にはまだ如泥翁の工場と見られる室が殘つて居り、その天井に車が一個殘つて居るさうである。是れも想像の話しだが、此車が仕事をしたのだらうと思はれる。即ちミシンの足踏機械のやうに自から車を造つて、上から綱とか鎖とかを卸して、鋸で仕事をするやうに工夫をした、矢張り當時他人には出來ない事をしたのであらう。が、惜しい事には其方法が傳はつて居ない。其理由は元來此如泥と云ふ人は一風變つた仁で、弟子はあつたが、其弟子は勿論、たとひ懇親の友でも決して工場へ入れて一緒に仕事をしたことがないさうである。是れはさうかも知れない。遺作の上から考へて見ると意匠や製作の工風に夢中になつて居つて、不知不識の中に自分の壽命がなくなつたんだらうと思ふ、決して了簡の狹いの何んのといふやうな事は云へない。それで當人は、自分が生きて居る中に十分見込のある人があれば、之れに傳授して置かうといふ位の考はあつたらうが、然し作品の中には、見れば眞似の出來るものもあるから、無暗と下らなく弟子に濫用されて、詰らぬ物が出來た日には却つて不可い、そんな種々の點からして弟子達にも工場を見せることを忌んだのかも知れない。それで一生涯の中に是はといふべき人も見付からなか

つて、とう〳〵之を讓るといふことも出來なかつたらしい。さういふ譯であるから其技倆といふものは今日遺作に於て見られるけれども、其製作の仕振といふのは、何うしてやつたか殆んど分らないことが多い、誠に殘念な事である。

それから又如泥翁は、彫刻ばかりでない、建築にも長じた人で、現に松江市に殘つて居る堂宮の中にも翁の建築になつたものが少くない。其一二を擧げて見れば、市内天神町の天滿宮境内にある辨天社がこれである。又奥谷の春日神社の隨身門、是れも確か如泥翁の建築である。それから佐藤某の茶室などもある。又彫刻には末次神社の龍の彫物、是れは金屬であつて、其圖樣は自分の好まぬ寫生風でなく、後藤風のノロ〳〵とした、極高尚な龍が彫つてあります。是れは私も前年同地に出張した時分見たことがありましたが、詳しいことは忘れました。次に市内白潟の賣布神社にも彫物の龍がある。城山の稻荷社に狐が二匹ある、是れは杉の赤身で彫つてある。

先づ概略はその位のものでもありますが、然し出雲と云ふ土地にさう云ふ名人が一人出ますと、一粒萬倍で、矢張り種子を下されて、それからそれへと後進が其土地から出るのは尤の次第で、今日は矢張り如泥翁から直接に承けた譯でなくとも、間接に不昧公の嗜や、如泥翁の遺作等を見聞して、自然に美術家、工藝家の生れ出る處のやうになつて居る。それで不昧公に於かれては、非常に多趣味の方であつたから、唯り如泥翁を取立てられたのみならず、漆工の上にも名工を使はれ、燒物に於ても改良を謀られ、刀劍に就ても十分丹精される抔、各方面に向つて奬勵されたのであります。

如泥翁の歿後、其末流と云ふ次第ではないが、何んとなく名人如泥の意氣を承けて居るやうに思はるゝのは、前年亡くなりました荒川龜齋といふ先生、此人は松江の人で、なか〳〵彫刻の名人であつた。今は其子息が矢張り彫刻家として世間に立たれて居る。それから今日出雲出身の技術家としては彫刻で米原雲海、青

山泰石、加藤昙雲、荒川嶺雲、山本幽雲の諸氏、彫金で鹽津親次、內藤卿雲、足立碧圃の諸氏、挽物師で小林幸八氏、其他指物塗師等にもなか〱名工が澤山あります。私が知つて人だけでも島根一縣內で斯く多數の人が出來て居るのです。是は全く不昧公の餘澤と、又如泥翁の如き名工の現はれた結果が十分に與つて居ると思はれる。それにつけても此奬勵といふことは實に大切なものであると思ひます。

附言。小林如泥翁の墓は、松江市寺町の淨敎寺にある。碑石の表面には「遷眞院如泥日觀信士」とあり、側面には文化十年十月二十七日、六十七歳で物故すと云ふことが記してある。夫れで去る大正元年は百年忌に相當せるも、不幸にして流石の名匠も其血統が絶え果て今日では其祀を奉ずる者がないので、同地美術家達の發起で、其菩提寺なる淨敎寺で壯厳な百年祭を執行し、同時に遺作品の展覽會をも開設し、又同寺內に如泥翁の紀念碑を建設することになり、其費金は富豪紳士の寄附を仰ぐのは翁の性質から考へて面白くないと云ふ所から、同縣を始め東京の美術家並に美術に關係ある人々より多少の義金を募集し、立派なる碑石を建設したのである。

月下の桂濱に立ちて

田中貢太郎

—みましよ見せましよ浦戸をあけて月の名所が桂濱—

—土佐は良い國南を受けて薩摩あらしがそよそよと—

—土佐の高知の播磨屋橋で坊さんかんざし買ひよつた—

—私の情夫さんは浦戸の沖で雨にしよんぼり濡れて松魚釣る—

○

初夏とは思はれないやうな寒い寒い海風が上甲板の上を駈け廻つてゐた。舳に在る船室の横手に五人の者が坐つて、その風に首を縮めてゐた。鼠色に氣味惡く光つてゐる海の色と、白い湯氣のやうな雲を浮めた空にまばらに見える星の光とが、その周圍に微かな明みを作つてゐた。

五月十一日の日は數十分の前に終つて、もう十二日になつてゐた。船室の横手に坐つてゐる者の中には、桂月翁と、奥樣と、私との三人がゐた。他の二人は知らない學生であつた。私等は徳島へ渡らうとしてゐる所であつた。十二歳の時に高知を出たきりになつてゐた桂月翁が、今回三十八年振りに展墓の爲に故郷に歸る事となつたので、私もこの一行に交つて歸省してゐる途中であつた。高知へ歸るには、直行の船もあるが、ついでに吉野川の谷を見やうと云ふ事になつて、徳島行に乘つたものであつた。

船は六百トン位あつた。兵庫の上島町から乘船する時、何時も赤切符で通す桂月翁も、女連れと云ふ所から二等切符にしようとしたが、土地の勝手が分らない爲に、まごまごしてゐる内に賣切れとなつた。仕方なく三等を買つて乘込んだが、乘客が多いので客室へは這入れない。それでも翁の姉さんになる人は、船に弱いので、無理に席を拵へて置いて、三人で上甲板に出たものであつたが、敷物にする物もないので、その儘潮霧に濕つた冷たい甲板の上に蹲んでしまつた。其所へ二人の學生がやつて來た。

「船童さんにお錢をやつて、敷物をからうぢやありませんか、」と、奥樣が云ひ出した。

私は小さな銀貨を手にして、三等室の方へ降り行つたが、船童らしい者が見付からなかつた。三人は仕方なく其所へごろ寝をする事になつた。この一二年、身

體が惡い爲に風邪をひかないやうにと用心してゐる私は、白い夏インバを用意してゐたので、ごろ寢は別に苦痛にはならなかつたが、翁と奥樣とは、袷と袷羽織を着た儘であつた。

「仰向に寢て、背中をつけると暖かいよ。」と云つて、翁はズツクの袋を船室の板壁へくつ着けるやうに置いて、それを枕にして仰向になつた。

翁の左側にゐた奥樣は、風の方へ洋傘をさしかけて、その蔭に風呂敷包を枕にして横になつた。私は翁の左側で、下駄の上へ風呂敷包を重ねてそれを枕にして寢た。私の隣にゐた二人の學生は、もうとうに横になつてゐた。

機關の音は獸の喘ぐやうに鳴つて、不快なその響が甲板を這ひ廻つた。海風はますます寒くなつて、翁の着物の裾を吹き亂した。痩我慢の强い翁も寒いのに弱つたのかむつくりと起きて、何か云ひながら艫の方へ行つた。私はおかしくなつたので、心の中で微笑してゐた。

「さア、さア、彼方へ行くぞ、船童に二十錢遣つて、筵を二枚敷いて貰つた。早く行かないと人に坐られるぞ。」と云ふ翁の聲がした。

私は飛び起きて、枕許に置いてある物を手探りに掴んで、翁の後から從いて行つた。煙突と機關室の天井窓のある間に筵を敷いて、もう十二三人の者が横になつてゐた。天井窓から明るい火の光りが立ちのぼつてゐる。その左右には鷄籠らしい空籠を澤山積みあげてあるので、それが風圍ひとなつてゐた。翁が船童に敷かした筵もその中にあつたが、坐らうとしてみると、一方の筵には、若い男が延々と横に寢そべり、一方の筵には、ねんねこ半纏で赤兒を背負つた女が坐つてゐた。私は若い男の膝に手をかけて揺りながら、「おい、此所へ寢られちや困る、起きないか、」と叱るやうに云つた。

若い男は蛇が鎌首をもたげるやうに、頭ばかりあげた。「何つ、何つ、何つ、」と云つて怒つた。

「何ぢやないよ、此所へ寢られちや困る、起ろ、」と、私も負けてはゐなかつた。

「まア好い、まア好い。この方は初めからゐたかも分らん、」と、翁が取り做すやうに云つた。

私は口をつぐんで、奥樣をその筵の端へ坐らして、自分では天井窓にくつ著けて敷いた筵の隙へ行つて横になつた。頰杖をして話し込んでゐる二つの顏が頭の所にあつた。其所は機關室のほでりで甲板も筵も溫かすぎる程熱してゐた。

翁は若い男の顏の方へ足を投げ出して、マニラ麻の大綱の束てあるのに背を凭せてゐた。赤兒を脊負つてゐた女は、「これを連れて居りますさかい、どうもすみません、」などと云つた。

翁はその前日、尼ヶ崎の親類へ行つて貰つたと云ふ四合壜に詰めた酒を持つてゐた。翁はそれを飲みはじめた。船童は翁の命を受けて牛肉の罐詰などを持つて來た。

紀淡海峽に這入ると、潮の爲に船が搖れ出した。うとうとと睡つてゐた私は、眼をさました。煙突の左右に立つた風取に並んで、一艘づつ釣してある短艇がぐらぐらと動いて見えた。煙突の上の方を見ると、五つ六つの星が綺麗に光つてゐた。翁は艫の方へ歩いて行つた。

私は又睡りに落ちたが、船の動搖で間もなく起された。それは船が鳴門へかゝつた所であつた。「××君、××君、鳴門へ來た、これを見にやアいかんよ、」と、翁が云つた。が、私は睡いので狸寢入をして返辭をしなかつた。前日の夕方に飮んだ酒の醉がまた蘇生(よみがへ)つて來たらしい翁は、面白さうに手など叩いてゐた。「おい××君、××君、」と、私の名を續けざまに呼んだ。私は矢張り狸寢入を續けた。

夜が次第に明けて來た。筵の上に横になつてゐた者の中には、ぼつぼつ身體を起して坐る者が出來て來た。船の動搖もなくなつたので、私も頭をあげてみた。船の右舷には、すれすれになつて淡路島の生々した山の影があつた。船は西へ西へと進んでゐた。

翁は一人の男をつかまへて、吃り吃り何か云つてゐた。話のあひ間には、鷄が羽たたきをするやうに兩手を膝の上で叩いたり、頭をがつくりとさげて、無邪氣

な笑ひ聲を立てたりしてゐる。『君は好い人だが、氣が弱いよ、併し心配する事はない。』と、翁は云つたりした。相手は顔の長手な、背の高い二十四五歳の男で、左の袖に大きな穴の開いた穢い半纏を著てゐた。その男と翁との間には、舳にゐる時にやつて來た小さな學生の一人がゐた。

　翁の眼の前に寢そべつてゐたセルを著た若い男が起きあがつた。それは翁の敷かした筵を横取りした男であつた。翁の眼はその方に行つた。

『‥君の眼付が惡いな、僕は人相の事は少しやつてゐるが、』と、翁は若い男の小さな顔を見詰めて云つた。

　若い男は默つて不快な顔をした。翁は又云つた。『君はこすい男だな、どうもこすい眼だ。』

『何と云や、何時俺がこすい事をしたら、何時俺がこすい事をしたら、』と云つて、若い男は怒り出した。

　翁は引締つて見える眞赤な口元に無邪氣な笑ひを湛へて、兩手をばたばたとやりながら、『怒つたか、怒つたか、まア、さう怒らなくても好い。僕は何も君が惡い事をしたとは云はん。僕は世の中の道を說いてゐる。たとへば此所の事でもだ。膝もくづせないで坐つてゐる人さへあるに、ふんぞり返つて寢てゐる人もある、へゝゝゝ、お分りになりますか、』と云つて、手を叩いて頭をがくりとさげる。

　若い男は吃りの醉ばらひに困つたと云ふやうな顔をして、何時の間にかゐなくなつた。

　夜は全く明け放れた。起き上つて左舷に立つて見ると、船は小さな入江を臨んで陸地の方へ近付いてゐた。海の面は鉛色になつてゐた。黒い帆をあげた澤山の漁船が入江の方から出て來た。ふと見ると、今、船の通つて來た鳴門の空と思はれる所に、堆朱の色をした輕氣球のやうな太陽が薄絹のやうな海霧の中から出てゐる。翁の姉さんになる切髮の婦人も、何時の間にか客室の方から來てゐて、奥様と一所にその陽を見てゐた。

　入江は小松島であつた。船はその淋しい海岸町に一時間ばかり停船するので、乘客の大半は其所で降りて、德島行の輕便に乘り換へたが、私等は船で行く事にし

て、矢張り上甲板の筵の上に殘つてゐた。船の上から見ると、町の裏手になつた小さな停留場には、短い列車が横たはつてゐた。

「船長が怪しからむよ、客を何と思つてゐるだらう、」と云つて、翁は客を一晩中放りつぱなしにしてあつた事に付いて云ひ出した。私はその相手になつてゐた。

其所へ胡麻鹽の口髭の生へた船長の姿が見えた。翁は手をあげて招いた。船長は不審さうな顏をしてやつて來た。

「怪しからむぢやないか、そんな事で世の中の道が立ちますか、」と云つて、翁は右の手を突出し突出しして云つた。

船長には何の事やら分らなかつた。船長は呆れた顏をして立つてゐた。

「さうまで分らなくちや仕方がない。この船は不幸ですよ、何故さうお分りになりません、」と翁が云つた。

「私も、あんたの云ふ事は分らん、」と、船長は嘲けるやうに云つて、舳の方へさつさと歩いて行つた。

翁は笑ひ出した。その中に船が動き出した。穴の開いた羽織を著た男だけが傍に殘つてゐた。「なに、君、心配は入りませんよ、君は直ぐ運が向いて來る、」と、翁は奧樣の手籠の中から二つばかりの林檎を取つて、その男にやつた。男は淋しさうにそれを受けた。

船は入江の口を出離れた。二三人の水夫が來て、甲板を洗ひはじめた。私等は艫の腰掛に腰をかけてゐた。

「怪しからむ。何故客が降りた後で洗はない。あんまり客を馬鹿にしてゐる。ちつと犧牲になつて、云ふてやるものがないといかん。僕が犧牲になつてやる。」と、翁は怒り出した。

水夫は遠慮もなくポンプで海水を撒いて、ブラシで板の上をこすりこすりした。

「何故洗ふ。後にしたら好いぢやないか、おい何故洗ふ。」と、翁が叱るやうに云つた。

「汚れたから洗ふよ、他に理屈はない。なア、」と、水夫の一人は澄まして云つて、仲間と顏を見合はせた。

奧樣と姉さんとが、翁の傍へ行つて、まだ何か云は

うとしてゐる翁をなだめなだめした。

船は徳島灣に這入つてゐた。私等は海水を撒く水夫に追はれて、客室へと降りて行つた。

○

三時過ぎの暑い陽が勾配の急な山坂を照してゐた。坂路の左右は段々の畑になつて、一面に麥が作つてあつた。桂月翁のズックの袋を背負ふた肥つた車夫が先に立つて、坂路を登つてゐた。袋の中には麓の酒屋で酒を詰めさした四合壜の口が見えてゐた。車夫の次には、翁の姉さんがゐたが、それは黒犬を縛つた綱の端を帯にしばり付けて、それに曳かれて喘ぎ喘ぎ登つてゐた。その犬は車夫が車の前曳に連れてゐるものであつた。姉さんの後から、奥様が登つてゐた。二人とも着物を尻端折つて、湯もじを垂らしてゐた。この後を私が行つてゐた。私は着物を脱いで手に持つて、肌には猿股一つの上に晒木綿の襦袢を著てゐた。翁は双肌を脱いではつたのやうに痩せた赤黒い兩手をあらはして、私の後からゆつくり登つて來た。鶯の聲が頻りに山の下の方でした。

私等は阿波と讃岐の境になつた雲邊寺山に登る途中であつた。長曾我部元親が阿讃の地を攻略した時に馬を立てたと云ふ山で、其所には四國八十八ヶ所の札所の一つで雲邊寺と云ふ寺があつた。その朝、徳島に著いた私等は、直ぐ池田行の汽車に乘つて、池田で晝飯を濟ますと、吉野川に沿ふた國道を一里ばかり來て、白地と云ふ村から車を捨てたものであつた。

麓から頂上までは、二里ばかりあると云つてゐた。はじめ十五六町ばかりの所は、きついきつい坂路であつたが、その後は山の中腹を曲り曲りして行く平坦な路となつた。その路を登りながら見ると、ふくらみのある舂ぎつたやうな山が、四方にそゝり立つて、空は狹かつた。麓の方を見ると、吉野川の谷が擂鉢の底のやうに見えて、その間に藍色をした流れが微かに見えてゐた。池田の町も見えた。ふくらみのある山の中腹から下は、どの山もどの山も段々の畑になつて、人家がその間に飛々にあつた。

路が平坦になつて來ると、汗が引込んで寒くなつたので、私は羽織を著た。遲蒴の蕨の拳が眼に付きはじめた。蕨好きの翁がそれを取り出した。私も草の中を分けて蕨を尋ねた。小さな虎杖も蕨と一所に生へてゐた。綱を解かれて自由になつた犬は、嬉しさうに人々の傍を駈け歩いた。

薄曇のした西の空へ陽が落ちかけてゐた。頂上へはまだ半路もあつた。私等は蕨を取る事を廢して、路を急いだ。姉さんの帶には、また犬の綱があつた。

頂上は森林におほはれて、その下は薄暗く淋しかつた。青苔の生へた石段を登つて雲邊寺の庭へ出ると、本堂の前に一株ある八重櫻の一面に花を付けたのが眼に付いた。本堂の並びの小さな堂の前で、汚ない寺男が堂の戸締りをしてゐた。寺の右手の隅には茶店があつた。

私等は寺で泊めてくれる事を聞いて、一泊する積りで、酒まで用意してゐるので、その事を寺へ交渉せうとしたが、勝手が分らないので躊躇してゐると、三人連の四國遍路が石段を上つて來て、左の方の内玄關らしい所へ這入つて行つた。で、其所に何人かゐるだらうと思つて、私と奥さんとが行つてみた。

丁度その時、内から年寄りの寺男が出て來た所であつた。寺男は疊の上に蹲んで、庭に立つてゐる遍路の一人に、「お通夜堂に泊るなら、木賃が十四錢宛で好え、米はいるばあ炊いてやる。」と云つた。その遍路の右の足の甲は、怪しくなつて草鞋がけの黒い足袋がじく〱して見えた。神經質の奥樣は氣味惡さうに眉を顰めた。

「この組も泊めて貰ひたいが、」と私が云つた。

「矢張り十四錢なら好い。」と、寺男は云つた。

「……十四錢でなくて、五十錢でも、一圓でも好い。私等はお山を見物に來たもので、遍路ぢやない。」と私は云つた。

其所で本堂へ泊めてくれると云ふ事になつて、裏口に廻つた。通夜堂は庭の先にあつて、三人連の遍路が縁側へ腰をかけて休んでゐた。庭の先はつは蕗などの、生へた崖になつて、山から引いた筧の水が崖の下の水

桶で溢れて見えた。蛙の聲が其所でも此所でもしてゐた。

私等は庭先に蹲んで草鞋を解いた。見付の室が寺厨(くり)になつて、圍爐裏に勢よく火が燃えてゐた。はじめの寺男が來て、通夜堂の通りの湯殿に指をさして、湯が沸いてゐると云つた。

「……おや、今の汚ない人たちの這入らない中に這入りませう、貴君が早く行つて浸(つか)つてゐて下さいよ、」と、奥樣が私の方を向いて云つた。

私は急いで著物を脱いで、湯殿へ行つた。湯桶は五右衛門風呂で、湯は薄濁りがして汚なかつた。私は顔も洗はず身體だけ浸して待つてゐると、奥樣と姉さんとが來たので、早速湯殿を出たが、手拭を捨てゝゐるので、手を振つたり足を振つたりして、身體の露を落として著物を著た。

湯に這入らない桂月翁は、もう本堂の正面の室に通つてゐた。本堂と室との界には大きな木連格子のやうな格子が這入つてゐた。「本堂へ尻を向ける事も出來ないね、」などと翁が云つたが、間もなく本堂の横手の室と代へてくれた。其所は平床も中床も付いた客間らしい構への室であつた。隣の室には巡廻に來た巡査が泊つてゐると云つてゐた。

寺男が來てから金の火鉢に圍爐裏の燒き落しを入れて來て、その後から茶を持つて來た。ズックの袋の中の酒は、茶碗にうつされた。車夫の袋にも瓢箪に入れた酒があつた。精進料理の飯の仕度も出來て來た。茶店に罐詰があると云ふので、車夫に買ひにやると、顔の白い娘が貝などの罐詰を二つ三つ持つて來た。給仕に來た小僧は年寄のやうな顔をしてゐた。「君は學校へ行つてゐるかね、」と云ふやうな事を話の糸口として、翁の說法がはじまつた。小僧は淋しく笑つて聞いてゐた。酒好きの車夫は、大きな人の好さゝうな顔を眞赤にして、舌なめずりをして、「いくら飯を喫ても、これをやりませんと、腹に隙が出來て、とても走れません。」とも云つた。翁の羽たゝきの手がもう出て來た。

火鉢の緣にのせてあつた鐵瓶がひつくりかへつた。翁の話しもその拍子に切れて、もう寢ると云ふ事になつた。隣室にゐた巡査は何時の間にか他の室へ逃げて行つてゐたので、その方へ二人の婦人が寢て、翁と私とはその室に寢たが、床に這入つてみると、蚤がうるさく這ひまはつた。夫人が隔の襖の傍へ來て有明の洋燈の光の下で蚤を捕つてゐるのを夢心地に見た。

朝は雨であつた。八重櫻の傍にあつた杉の大木の梢あたりで、小鳥の啼聲がしてゐた。「小鳥が啼いてゐるから、雨は休んだらしい」と翁が云つたが、緣側の戶の隙から見ると、雨は止んではゐなかつた。小鳥は雨のかゝらない杉の葉蔭に啼いてゐたらしかつた。

朝飯の後で、住持に逢つて寺の事を尋ねやうとしたが、病氣だと云つて逢はないので、寺男に聞く積りで、翁と二人で寺厨に行つた。圍爐裏の傍に老婆と一所に二三人の寺男がゐた。翁は一寸挨拶した後に、圍爐裏の前へ兩足を投げ出して、「圍爐裏の火は好いな、」と云つて、敷島に火をつけた。

高い膳を出して飯を喫つてゐた寺男の一人は、圍爐裏の上の茶釜から茶柄杓を取つて、翁の足の上をかはしながら茶を入れて、「足に茶がかゝるよ、」と云つた。翁は足を引込めて、「知つてやつたではありません。書生流にやつた事です。」と堅くるしく云つて、二度も三度も頭をさげた。

○

高知市に著いた桂月翁は、市内の鷹匠町の小澤と云ふ家と、市外になる下地村の濱田と云ふ家との二軒にゐた。小澤は高知市の南を流れてゐる鏡川に沿ふた家で、裏庭には淡竹の竹垣があつて、行々子がその中へ來て鳴いてゐた。家の前の枝を拂つたばかしの桑畑の先には、小さな鏡川の河原が見えてゐた。川の向ふは廣い田圃で、小雨の中で稻を植ゑたり、牛を入れて田を鋤いてゐる者も見えた。田圃の果には、筆山と云はれた潮江山の低い脈が連つてゐた。小澤の主人は淋しさうに言を云ふ圓みのある男で、同市にある商業學校の校長であつた。翁の一番上の姉さんの娘が其所に嫁い

でゐて、その姉さんと云ふ人は孫の守をして其所に一所にゐた。

濱田の主人は、休職の陸軍中佐であつた。眼の光の柔らかな淡泊な人で、無事に苦しむ時には、子供子供した唇から謠曲の文句を漏らした。桂月翁に劣らない酒豪で、翁の奥さんが東京を出る際、「濱田さんもお酒がいけますから、二人で毎日飲まれちや、濱田の奥さんにも濟まない。」と云つて心配せられた程あつて、よく飲んだ。ある晩などは、飲んでゐる中に養生の話になつた。興に乘じた二人は素裸體になつて、先づ桂月翁が拳を揃へて、中佐の臍の下をグンと押すと、中佐の臍がその爲に上の方に向いた。「向いた向いた、臍が上へ向きや、まア命は大丈夫だ。」と云つた桂月翁は、傍にゐる中佐の夫人と子息に向つて、「奥さんも坊ちやんも、お喜びなさいませ、」と、頭をがつくり下げて見せる。すると今度は、中佐が拳で桂月翁の臍の下をグンと押す。「向いた向いた、お前も大丈夫だ。」と云ふやうな他愛ない酒興が何時までも續いた。

桂月翁はこの二軒の間にゐて、二人の姉さんと奥さんとをつれて、市外の三四ヶ所にある墓地へ行つたり、近村にある親類へ行つたりした。手結といふ所には、翁の妹に當る人が居り、市内にはお母さんの姉さんになる年寄もゐた。私は墓參や親類廻りには、避けて從いて行かなかつたが、翁が立田村と云ふ高知から五里位ある村へ行つて、大町家の遠祖を祀つてゐると云ふ家へ行つた時だけは一所に行つた。

この家は田圃の中にある農家であつた。家の周圍には清い水の流れる溝があつて、淡竹や樫などがその屋敷を取り卷いてゐた。庭先に桑畑があつて、次の室には蠶も飼つてあるらしかつた。郵便局に出てゐると云ふ息子は、色の白い若い男であつた。床には遠祖が京都から勸請して來たと云ふ八坂神社の名を書いた軸がかけてあつた。遠祖は大町神社と云ふ小さな社にして、その家に行く路ぶちに祭つてあつた。その社と並んで、小さな祠があつて、それは手討にした女中の墓だと云ふ者があつた。

この夜は泊めて貰つて、翌朝歸らうとすると、息子の嫁に貰つたばかりだと云ふ若い女が、新らしい草鞋を出して來た。乳へ紐を通してない土佐風の草鞋であつた。翁はその草鞋を手にして、「何故、紐を通して置かないのか、土佐人はどうも不親切だ。」と云つて、呆れで立つてゐる若い女の顏を醉つた眼で見詰めるやうにして、「これで一つお說法をしませうかね、」と翁一流の道を說きはじめた。終りには草鞋の穿き方まで說明し出した。

○

薄月のさした潮の上を滑るやうにやつて來た屋根船は、入江の右岸に聳えた浦戶山の麓の人家の下に寄せて行つた。舳には二つの提灯を釣してあつた。船の中には、桂月翁と共に桂濱に遊ばうとする俳人の一團がゐた。

桂濱は、浦戶山の山脈が南に崩れて、龍頭岬と云ふ岬をなしてゐるあたりの海濱の名で、月を觀るに好い所とせられてゐる。桂月翁の雅號は、此所から出たものであるが、十二歲の時に出たきりで、一度も歸鄕した事のなかつた翁は、桂濱を知らないので、月下の桂濱に遊びたいと云ふのが年來の希望であつたが、それが漸く實現せられやうとしてゐる所であつた。

岸の上には、浦戶村役場と云ふ文字を書いた提灯が見えてゐた。私と舊知のある山本と云ふ助役が一行を迎へる爲の火であつた。山本助役の傍には七八人の少年がゐた。

十三日頃の月魂(つきしろ)が、鼠色の雲の間から出たり隱れたりしてゐた。山本助役の案內で浦戶の人家はづれの坂を南に越へて、右に浦戶山に沿うて步いた。土用竹の垣根をした人家が路の兩側にあつた。其所が桂濱部落の人家だ。人家がなくなると、左に浦戶港の口があらはれた。前岸になつた種崎の松原は、靄のかゝつたやうになつて見えた。

そのあたりから龍頭の磯の岩に荒海らしい趣が出て來た。山と海との間が迫つて、狹い小さな路には、野茨の花が潮の香の中に交つて匂うてゐた。その路を

行き詰めて、小松の生へた丘を南に越すと、目差す桂濱の磯であつた。兩方に小さな鼻がでつぱつて、磯の砂は楕形になつてゐた。右の方の鼻の上には、一二本の格好の面白い松の枝がなだれて、その下に祉らしい物があつた。其所には龍宮を祀つてあるので、土地の人は龍王の鼻と云つてゐた。

桂月翁は龍王の鼻に眼をつけた。山本助役の提灯の火は龍王の鼻の方へ動き出した。提灯の後から桂月翁はじめ十二三人の者が從いて行つたが、その内の十人ばかりは浦戸から來た少年であつた。俳人の多くは磯の砂の上へ坐つて翁の歸りを待つてゐた。提灯の火は岩の角に隱れたり見えたりして、上へ上へと登つて行つた。船の中で酒の世話をしてゐた一人の若い妓も、砂の上へ白い足を投げ出して、提灯の火を見てゐた。

桂月翁が歸つて來た時には、俳人の中にはその儘砂の上で睡つてゐる者もあつた。「先生、浦戸の少年が紀念に何かお話を伺ひたいと申しますから、」と、つゝましやかな山本助役が云つた。

桂月翁が頷いて砂の上に坐ると、十五六人の子供がその前に圓くなつて坐つた。その中には二三人の女の子もあつた。

「月夜に提灯と云ふ事があるが、」と云つて、翁は無邪氣な聲で話し出した。子供は皆笑顔になつて聞いてゐた。

「今晩のやうに月があつても、あんな岩山を登るには矢張り提灯が無くてはならない。皆さんが勉强するにも、月夜に提灯を持つて歩くやうに用心してかゝらねばならない。」などとも云つた。月はその聖者のやうな翁の頭を薄くぼんやりと照らしてゐた。

武者小路兄へ

有島武郎

武者小路兄。

あなたや同志の諸君が合理的な生活を深く望まれる結果、あなた方の實際生活を改造しやうと企てられたに付いて、世間が色々な評判をし、既にそれに關して意見を公表したものさへあるのを知りました。早計に失するかも知れないが、私にも少し云はせていたゞきたいと思ひます。

昔から人類の生活はその進化境過の變化につれて幾度か調節され改造されて來てゐます。過去と云ふ霞を透して眺めてゐるから、その調節作用は緩漫なもののやうに見えるけれども、而して何んでもない自然な徑路のやうに思へるけれども、假りに想像を過去のその時代々々に遡らして、考察して見ると、人類生活の樣式は可なり根本的な變化を幾度か經て來てゐるし、新しい樣式が古い樣式に取つて代はる時には、出產の時と同樣な生か死かといふやうな危機を潜つてゐる事を發見します。然しながら人類が眞に甦生する爲めには、眞に活動的な生活を持續して行く爲めには、いやでもこの危險を犯して、新たな道を切り開いて行かなければなりません。

而して今の時代はその飛躍の時機である事を思はせます。奴隷使役の時代に代つた封建制度の時代、封建制度の時代に代つた資本制度の時代――卽ち今の時代は既に老ひました。オーエンが出、サン・シモンが出てから百年の餘になります。日本が封建制度から資本制度に移つたのは五十年前の事だとは云ふけれども、歐洲に十分發達してゐたその制度をその儘輸入したのだから、その凡ての特長と共に弊害も思ひ存分五十年の間

に現はれて來てゐます。

如何なる時代の如何なる制度にも弊害の伴つて起るのは知れ切つてゐます。然しながらそれを恐れて現存制度の弊害がつのりつのつて、人の心まで萎まして仕舞はうとするのを看過してゐる譯には行きません。如何んな弊害が起つて來るかは知らないが、兎に角今の制度よりも人類の生活をより幸福に導くと思はれる境遇に轉化する必要は日に日に逼つてゐます。

あなたも私も割合に安固な衣食住を保障されてゐる家に生れて來てゐます。それだのに、この人から羨まれるべき生活の中にも、私達は絶えず疚ましい思ひをして生活してゐなければならないのです。第一私達は都合のいゝ境遇に生い立つたといふ點から私達自身の才能をすら割引きして考へなければならないのです。公然とこれは自分が自分の力で造り上げた才能だぞと云ひ切る事が出來ないやうな立場にゐます。私達の持つてゐる品性でも、健康でも、愛心でも、こんな境遇にあればこそと省みねばならぬ弱さを持つてゐます。私達の本性が味はうとする幸福にさへこんなハンディキャップを置かねばならないのですから、物質的の幸福に對して疚ましい思ひをし續けなければならないのは勿論の事です。私達はその存在をぎごちなく縛られてゐます。本統の自由はありません。資本制度の恩澤を十分に受けてゐる私達ですらさうなのですから、この制度のまゝ子である人達の悲境は更らに思ひやられます。

私の若い友が云つた事があります。今の制度の下にあつては、資産階級の人の中に特志な人があつて、自責に堪へないで勞働者になつたとしても、その人が餘計に働けば働くだけ、勞働階級の人の働く分野を蠶食して迷惑を及ぼす結果に終るに過ぎない。こんな制度には何處か間違つた所があるに相異ないと云ふのです。これは本統に考へて見なければならない事です。

生産過剰の私有を正當とし、その量の大小を以て人間の沽券を決めるといふ事は餘りに情けない事です。かう簡單に云へば誰れにでも直ぐ判る事のやうに思へ

ますが、實際になつて見るとこの小ぼけな現象が中軸になつて、生活機關が動いてゐるのですから恐ろしいのです。議會は民意を代表せずに金意を代表してゐます。社會は――人が集つて出來上るべき筈の社界は――金が集つて出來上つてゐます。戰爭と平和は結局資本家といふ少數者の手によつて勝手に左右されてゐます。而して多數者の生命は無殘々々その犧牲になつてゐます。かゝる現象は長い説明を加へるには餘りに平明な現象です。如何なる權力がそれを被ひ隱さうとしても、被ひ隱す事の出來ない程平明な現象です。私のこの小さな手紙がそれを云ひ現はしたからといつて、若しこの手紙を生き埋めにしやうとするなら、この手紙の呼ぶ聲より百倍も千倍も有力な大きな聲が叫び出すに違ひない程平明な現象です。

　もう凡てのごまかしは無駄な事です。社會を治める人も治められる人も、この一事にしつかりと氣がついて、回避する事なしに、金の洪水から人間を救ひ出す爲めに力を盡さなければならない時が來ました。姑息な彌縫をして、一時を凌いではゐられない回轉期が到來してゐます。

　それを無視する者は滅びます。人類の意志はかゝる人類進化の邪魔物を踏みつぶさないでは置きますまい。

　それなら次の時代に資本制度に取つて代るべきものは何んでありませう。夫れは如何なる形式を取るにせよ、廣い意味に於て人間が金に支配されず、金を支配する制度であるべき事だけは明らかです。今の制度の下では資本主も勞働者も共に金に支配されてゐる點に變りはありません。資本主は金を集める爲めにその力量の全部を集注し、勞働者は力量の全部を提供して、生活を支へるだけの金を得やうとしてゐます。人類全體がこういふ風に金の締め木にかけられて、藻搔き苦しまねばならぬといふ事は悲慘極る事です。人類の尊嚴が何處に認められませう。人類の本統の自由が何處に發見されませう。

　あなたがこの不幸に忍び得られなくなつて、實際生

活の改造に着手された事を私は尊い事だと思ひます。その方法の内容はまだ全部發表されない事であるし、又是れから研究を重ねて行かれる事と思ひますから、委しく立ち入る事は避けますが、あなたが思ひ立たずにはゐられなくなつたその心持ちを私は尊く思ひます。而して何事につけても、他人の新しい企てに對して、一とひねりひねつて皮肉な見方をしないでは氣のすまないある種類の傍觀者をはしたないと思ひます。他人の企てを批評する權利は、それを企てた人と同等以上の熱意を持つた人にのみ許される事だと私は思ひます。

私は殊に藝術家なるあなたがこの企てに走られた事を愉快に思ふものです。私一箇の見解によれば、今の時代にあつては、藝術家は謳歌者であるよりも改革者である事を餘儀なくされると思ふからです。奴隷使役の時代から封建制度に代る時には、宗教が强權に結び付いて人心を收攬してゐました。封建制度から資本制度に代る時には、科學が思潮の根柢を支配してゐました。

然し科學は科學自身が告白する如く到底人間の全存在を滿足させる力ではありません。科學の力を借りて自然を征服しやうとした第十九世紀の文化は、その功績と共に存分に弱點を暴露してゐます。この缺點を補ふ力は藝術にあると私は思ふものです。實際藝術の勢力が實生活の中に浸徹して、生活の實質に影響した著しさからいふと、現代に比すべき時代はなかつたと思ひます。イブセンが婦人問題や信仰問題に與へた暗示、トルストヰ、ドストヰプスキーが露國の國運に與へた威力、ロダン、セザンヌなどの思想的影響は他の時代に見難い强烈なものであります。それは現代の藝術家が强ち他の時代に立優れてゐるといふ譯ではなく、現代は藝術以外の精神活動から未來に對する暗示的な指示を受け難いからの事です。殊に未來を嗅ぐに鋭敏な鼻を有する者は藝術家です。彼等は未來を直覺します。現在のやうな時代の回轉期に當つて、藝術家の見地が重く見られるのは當然です。

それだけ藝術家には尋常ならざる覺悟が要求されてゐます。あなたは先づ立つてその要求に應じやうとされるのです。私も藝術にたづさはる一人としてあなたに對して敬意を表します。

然し率直に云はして下さい。私はあなたの企てが如何に綿密に思慮され實行されても失敗に終ると思ふのです。失敗に終るのが當然だと思ふものです。あなたがこの企ての緒にも就いてもそられない時、こんな事を云ふのは幸先きの惡い事のやうですが、私は思ふ所を云ふより外はないのです。あなたの社界を周圍から取かこむ資本主義の社界は何んといつてもまだ十分死物狂ひの暴威を振ふでしやうから、ドハボールの移民達が外界から被つたやうな壓迫を受けられるでしやう。あなたの社界の內部の人も、縱令覺悟は出來てゐても、今まで訓練を經てゐない境遇に這入つては色々の蹉跎を牽起すでしやう。

けれども失敗が失敗ではありません。今までかゝる企ては凡て失敗に終つてゐます。然しそれを普通の意味の失敗とは云へません。若し今の世の中でかゝる企てが成功したやうに見えたら、それは却て怪しむべき事であらねばなりません。そこに人は乾度妥協の臭味を探し出す事が出來るでしやうから。

要するに失敗にせよ成功にせよあなた方の企ては成功です。それが來るべき新しい時代の礎になる事に於ては同じです。日本に始めて行はれやうとするこの企てが、目的に外れた成功をするよりも、何處までも趣意に徹底して失敗せん事を祈ります。

未來を御約束するのは無稽かも知れませんが、私もある機會の到來と共に、あなたの企てられた所を何等かの形に於て企てやうと思つてゐます。而して存分に失敗しやうと思つてゐます。草々。一九一八、六、二〇、

航空機襲擊と我防空設備

仲木貞一

「伯林より東京へ」

レーニン一派の過激派政府が、聯合軍に裏切つて、獨逸と和議を結び、矛を全くおさめた時、西部戰場に攻めあぐんでゐるカイゼルが、東方に手を出しはしないか、變幻出沒極まりなき獨軍が、或は西比利亞に居住する多數の捕虜を動かして、東洋を攪亂するの擧に出はしないかとは、當時可なり多數の人々が憂慮した事柄であつた。

丁度、その時であつたらうか、「伯林より東京へ」と云ふ言葉が、頻りに獨逸國内で稱へられたのは。それは、確かミユンヘネル・ノイエステ・ナハリヒテン紙に初めて載せられた言葉であつた。神經過敏に傾いてゐた我政府當局者中の或者、及び豫て我國防空設備の絶無なのを慨嘆してゐた有識者の或者等は、新聞を通して又は雜誌に依つて、頻りに我が空界の危機を稱へ、今にも我が東京市が爆彈下の慘劇を呈出するかの如くに絶叫した。或は、此等は、此の機會に於て、豫て貧弱極まりなき我が航空界を振起せしむ可く、又世間の注意を玆に集注せしむ可く、一種の方便論として稱へられたのかも知れない。

然しながら、獨逸の空中艦隊を全然考へに入れておかなかつた倫敦市民は、何う云ふ報ひを得たらうか？到底飛來する事の不可能と思はれてゐた埃及の國上に尨大なツエペリン飛行船の姿を現はしたるは、去る四月の事ではないか？彼等獨逸人には、殆ど不可能と云ふ言葉が無いかと思はれる程、海に陸に空に、人の意表に出づる不思議の行動をとる。殊に航空機を最も有効に使用する事は、如何なる國も到底及ぶ所でない。

今にして、我が防空問題を確實に設定して、相當設備を施して置かない時には、倫敦市民以上に臍を噬む時が來やうとは、眞面目に我が防空問題を考慮してゐる人達の定言である。

然らば、獨逸の空中艦隊の實力は、果して我が遠隔の日本を空襲す可き餘裕を有してゐるだらうか？空襲するとすれば、如何なる方法を採るだらうか？彼等が空襲に使用する武器は如何なる物であらうか？此れを防禦す可き方法如何？倫敦、巴里等に對して行つた空襲の狀況は如何？又その効果如何？――其所に幾多の考究す可き問題が廣く展開されてゐるのである。

飛行船の威力

獨逸は開戰と同時に、獨逸の最も誇りとするツエペリン飛行船を白耳義に侵入せしめて、リーユ、アントワープその他の都市に陸兵の迫る前に、空中から爆彈の襲擊を行はしめた。

我國と違つて、航空砲の夫々備のある此等都市でも、一萬呎以上の此等航空機に對しては、何等危害を加へる事は出來なかつた。遂に海を渡つて遠く倫敦グラスゴー市に迄空中から殺到したが、最初の中は、此と防戰する事は出來なかつた。英國内に於ける輿論は沸騰して、遂に航空砲と防禦飛行機の多數の設備を見るに至つて、漸く空中魔の襲擊から少しく免れる事を得た。然し、彼飛行船隊は初め月夜又は日沒に乘じて來た物が、遂には暗夜に悠々來るやうになつた。二萬呎以下の高度であつたのが、二萬呎以上の雲の中から、下界に恐しい爆彈を投ずるに至つた。然し、遂に英國飛行隊と、航空砲射擊術進步の爲めに、飛行船は倫敦市上にその姿を現はし得なくなつた。その代り、大型飛行機は、數十隻隊を爲して、一夜に數回の襲擊を試みるやうになつた。彼の巴里市に對しても同樣である。

一體、この倫敦市を襲ふ飛行船は、如何なる力を有してゐるかと云ふと、大さ約五萬五千立方米突、二噸半の爆彈と二門の機關砲と廿三四名の乘員とを搭せて、一時間六十哩の速度で卅時間の航行に堪え、二萬二千呎の高空に昇り得るとは、彼の佛國内に擊落された、

最新式ツエペリン第五十三號等を調査して知り得た事實である。彼等は二萬呎以上の雲の上を、然も暗夜に航行して、如何にして自身の位置を知り得るかと云ふに、それは、本國ナウエンその他の無線電信局と絶えず交通してゐて、自己の位置を判斷するのである。二萬呎以上の雲の上にあつて、よく地上の狀況を知り得ると思ふが、これは、初期には、一種の薄い鋼板製の箱を飛行船から針金に依つて地上近く懸垂して、それに乘込む者が、電話に依つて、雲の上の本船に地狀を報告してゐた。然し今日では單に精巧な眼鏡に依つて、船長が地狀を望見する事と思はれる。彼等は假令目的の都市が暗黑にしてあつても、海岸又は河に臨む都市は、その水面と地上の色との差に依つて、甚だ容易に目標を辿り得るのである。

開戰前のツ式飛行船數は、四十五隻であつたらうと想像されてる。戰後製作を急いて、最近迄に五十三隻としたが、地上の砲擊に依つて、又は飛行機の襲擊に依つて、暴風に依つて、漸次破碎されて行つて、今日では僅かに十三隻を殘してゐるとの事である。而してこの多くは北海上を陸上の警備用として使用されてゐる有樣である。又パルセバール、グロス等の軟式飛行船シユナ・ランツ式木骨飛行船は、十數隻所有してゐたが、此等亦半數に減少して、然も軍用として價値は、甚だ少いのである。

さて、此等ラ式飛行船は、自國の海岸に近い根據地から、百五十哩前後を隔てる倫敦その他の都市を襲擊するのは、全く朝飯前の仕事である。只彼等の恐れるのは、北海の上を吹卷る暴風である。最近に至つては英國の防禦設備である。佛國巴里に對しては、その防空設備が餘りに嚴重に整つてゐる爲めに、飛行船は勿論飛行機を以つてしても到底思ふ儘の襲擊が出來ないのを以て、彼の七十五哩の遠距離から彈丸を射擊する巨砲を使用してゐる譯である。

さて、此所に十數隻の半ば無駄に遊んでゐるツエペリン飛行船を以て、日本に遠東征爲し得るやと云ふに、若し、彼れ等獨逸人が積極的に日本を攻めんとの意圖

を有し、幾何かの犠牲を覺悟して、相當の設備を行ふならば、絶對に不可能の事ではない。獨逸本國の根據地から、亞比利亞の東端迄は、五千何百哩、約六千哩と見做すと、彼等は六十哩の速度で卅時間宛を航空爲し得る。即ち一飛びに、千八百哩を飛び得る。三回に分つて、その着陸場に燃油その他の必要品を備へておけば、一ヶ月そこいらの航行には、水素瓦斯の充塡を必要としないこの飛行船は、悠々として東征の途に上る事が出來る。彼等は電氣装置の起重機を有してゐるから、地上に降下して來なくとも、相當高所に止つてゐて、地上の物品を船内に運び入れる事が出來る。平均六十哩の速度で一時間を航するとすれば、亞比利亞の東端迄百時間即ち四日餘りで到達出來る。又亞比利亞一帶は、平坦な大陸であるから、相當の高度に於ては一定の風が吹き、あはよくば貿易風に乘合はせる事が出來るかも知れない。若し途中逆風に逢ても一週間の日程を片道に見ておけば十分であらう。露本國は勿論亞比利亞は、今日皆獨逸の勢力下にあると云ふから、その任意の土地に豫め燃油食量その他の必要品を備へ置かしめる事はさまで難事であるまい。巧妙の獨探の手を經てすれば、容易に行はれる事を思はれる。

浦鹽又はその附近の獨逸の勢力範圍にある所を起點として、其所から日本海を縱に下つて、日本の中央を走る山脈を山越しにして、東京又は大阪の上に出づるのは、僅か七百哩の行程である。午前六時に根據地を發すれば、夕方の六時には東京又は大阪の上に來る事が出來る。此所に卅分間の仕事をして、一旦根據地に引上げ、其所から更に本國に引上げて行くのに、前後二週間の日程を見積つておけば十分である。

これに對して、我が東京市は如何なる防禦法を採るであらうか？飛行船の姿を見て、所澤乃至は追濱の航空隊に、直ちに電話を掛けても、そこから東京迄飛行機が飛來するのは、いくら急でも卅分乃至一時間は掛る。その間には、飛行船は十分の仕事をして、引上げて了ふ。それが、日沒以後であれば、日本の飛行機は夜飛ぶ事とを知らないから不可能である。假令飛行船

の居る間に飛來しても、日本の飛行機には常に機關銃は附けてない。もし幸ひ取附けてあつて、その彈が巧く命中しても、十八個の瓦斯嚢に分離して塡めてある水素瓦斯は、小銃彈で穿たれた穴からは殆ど漏出する事がないと云つても過言でない程である。又飛行船の上から此れに投下す可き手投燒夷彈なる物は未だ日本に出來てゐない。然らば、飛行船を地上から砲撃す可きかと云ふに、飛行船機を打つ可き航空砲は、未だ研究中であつて完成されては居ない。完成されてゐてもその練習の機會は未だ一度もない。まして、この砲が東京附近にある筈はない。其所で市中の歩兵をして、一齊射撃を行はしめる。然るに小銃の空に於ける有効距離は漸く二千米突で、然も相當練習が積んでゐて初めて有効である。飛行船は第一、二千米突以下の高度に飛んでゐやうとは思はれない。つまり、東京市民は坐つてゐて、彼等の爲すが儘の暴行を甘受するより外はない。然し、人々の内には、日本には神風が吹くからと云ふ事を云つて、努めて樂觀しやうとしてゐる者がある。今日の如き何等防空設備のない有樣では、萬一飛行船の襲來があるとすれば、全く神風を頼みにするより外に道はないのである。

議會でも、防空問題空中勢力の充實と云ふ事は常に問題となり、殊に本年の議會に於ては、政府當局者も昨年の如く「航空機は未だ兵器に非ず」とは答辯しなかつたが、大藏省が豫算を削除した儘に、矢張り小規模の擴張に止めてゐるのは、矢張りこの神風を信ずる物か、然らずんば、到底玆數年間は、我が空界は敵に脅される事斷じてないと豫想してゐるかの何方かに相違ない。

爆彈の破壞力

扨て、飛行船が投下する爆彈の威力は如何なる程度の物かと云ふと、その爆彈の大さにも依るが、普通西洋式の堅牢な石造家屋では、三四階を貫いて、而して爆發する。稍小型の物にあつても、その中にある三四百發の彈子を炸裂させるに十分な高爆發藥を有し、全重量は六百封度に達し、六十個を備ふと云ふ。一發よく數

十間の四方に恐る可き危害を及ぼす。尙煉瓦石造の堅牢な家屋でない、日本のマッチ箱の如き建物に對しては、此の種類の爆彈は、餘りに尖銳過ぎるので、アーセン式の傘を上部に有する物又は底部に護謨を附けて地上に衝突の後、跳躍して空中で炸裂する物、又は時限爆發に依つて、木造家屋を貫いて、地中に穿入する如き事無いやうな種類の物を用ひる。更に我が日本の如き木造家屋に對しては、燒夷彈と稱するアルミニウム粉末を原とした高溫度を發するテルミットの內外に黃燐、樟腦等を充塡して、地上その他の物に衝突すると同時に、直ちに炸裂して、附近に攝氏五千度位の高溫度の物體が飛散して、木造物に直ちに火を放つ物、及び例の毒瓦斯を充塡した彈丸、及びセルロイド製の發火板と稱する小さな物體を無數に空中から撒布して於いて、その上に一發の爆彈を投ずれば、此等に一擧に火を起さしむる方法等を、甚だ容易に、何等の抵抗なしに、半ば遊戲的に用ふる事が出來る。此等爆彈を投下するには、今日最も精巧と稱せらるゝザイス式又はゲルッ式の測定機に依つて、高度と風速と船速とを算出した上、適當の角度を持つて、殆ど精確に電氣釦の壓下と同時に、續々飛行船から放下されるのである。歐羅巴の都市では、敵の空襲と同時に、市民は地下室に逃遁して、危難を防ぐやうにしてゐるが、木造家屋に對しては、普通爆彈は、屋根及び床を貫通して地中二三米突の所で炸裂するから、地下室に逃れても、亦地雷に逢つたと同樣の結果を招くのである。

爆彈の襲擊に對して、此れを防ぐ唯一の方法としては、襲擊を受くる市街の全燈を滅して、强烈な探照燈を空上に照し返して、彼等乘員の目を射る事と、重要建物を砂囊を以て全く布包する事、金網を以て、屋根上數米突の所を一面に張る事等であるが、更に奇拔な物としては、全市上に繫留氣球の數百個、數千個を二萬呎以上に飛ばして、此等に爆發藥を裝塡して、宛も海中の敷設水雷の如く、此れに觸れる飛行船乃至は飛行機をして、瞬時に爆破せしめんとする考へである。尙英國が飛行船の襲來を受け初めた最初の頃、或飛行雜誌

で、旣に飛行船襲來を防ぐ方法を募集したが、それには、二個の飛行機が長い綱を引張りて、飛行船をそれでからめ取る法や、鋏の刄の如き物が絶えず回轉する機械を飛行機で引曳して飛行船に衝突せしめる法等を考案した物があつたが、飛行機が飛行船を雲間に發見すれば、旣に勝利を得たものである。彼のワンホード少尉が白國海岸に於て飛行船を手投爆彈で爆破させて以來、飛行船は飛行機に依つてのみ爆破せしめ得る事を立證したのである。又熟練なる砲手が偶に航空砲を以て、地上から破擊する事が出來るのみである。この航空砲は七糎半以上十糎半位の口徑を有して、九十度程度の角度で、頗る迅速に標準の取れる物でなければならない。二萬呎以上の高度に於て有効な働きをする爲には、特殊な遠測機、照星等を有してゐて、彈道を知る爲めに曳煙裝置の彈丸を發射する。然し、非常に速度の速い飛行機に對しては、極めて熟練な砲手のみが命中彈を送り得るのである。從令この砲があつても、その技に達しない者に取つては、猫に小判も同様である。

尙敵の空中艦隊襲來に對する防禦法としては、其空中艦隊が、目的の市街に達する前に、これを豫知して防禦法を逸早く講ずる事は必要である。卽ち巴里に於ては、戰線に於いて、その頭上を橫斷して、內地に向ふ飛行船又は飛行機を逸早くも、巴里警備隊に急報する。この敵機船襲來を見張りする場所は、戰線は勿論、巴里に至る迄數個所に設けられて、其所には大きな喇叭狀の聽音機が絶えず四方に回轉してゐて、如何に高空の微弱な發動機の音でも、これを聽取し得るやうになつてゐる。又その音に依つて、飛行機船の高度距離方向等を判定し得られるやうになつてゐる。一度この報が巴里警備隊に到達するや市中の電燈を消させると同時に、市の四方に配置してある。飛行隊をして空中に出動せしめる。敵機船が市上に來てからでは既に晩い。今日の空中戰は、高所にあるのが勝利を占める原則となつて居るから、敵機船の未だ殺到せぬ内に、相當の高度に飛行機が昇騰して、敵機船の至るのを空中で待つ

のである。それと同時に、地上から探照燈を射出す事、砲撃を行ふ事は勿論である。倫敦に於ても同樣である。只その第一の見張場所が英國の東海岸であつて、然も面積が極めて廣ひが故に、巴里市に對する如く完全に行かない。これ、倫敦市が巴里市よりも多く敵の空襲を受ける所以である。斯くの如き設備のない都市は、敵の空襲と共に、一擧に燒土に化す可き事は理の當然である。

飛行船は多量の爆彈を搭載爲し得る事と、長時間の飛行力を有する利點のある代りに、船體が頗る尨大で容易に敵の目標となり易いと同時に、速力が飛行機よりも遲く、運動鋭敏を缺くが故に、風に抵抗する力弱く、更に輕快なる戰鬪飛行機に對しては、全く抵抗力を有たない有樣である。宛もそれは彼の鯨とその捕鯨船との關係の如くである。又開戰當時、新式ツエペリンの浮揚力は、從來の如き燃燒し易い水素瓦斯に依らずに、不燃燒の特殊の瓦斯に依ると傳えられたが、これは、全く噓傳であつた。流石の獨逸もまだそのやうな重寶な新瓦斯は、今日までに發明してゐない、又雲と擬ふ黑煙を周圍に發散して飛行するとも稱へられたが、これも亦噓傳であつた。只瓦斯囊上部に機關銃を備へて、上方の飛行機に對して、優に挑戰し得る事は事實である。又開戰後に製出された物は、大體の形狀を甚だ流線狀となして、速力を增す事を計り、無線電信室、機關室等を完備させ、武備を十分にする等、著しい發達を示してゐる。

大型飛行機の遠航力

飛行船の能力はこの位として、最近盛に使用されてる大型飛行機の能力を見るに、飛行船に增して、その能力は忽かせに出來ないのである。今日獨逸が長距離襲擊用に使用してゐる飛行機は、ゴタ市で作られるゴタ式と稱する翼長百呎に近い大型の物で、二百五十馬力以上の堅牢な發動機を二臺又は三臺附けて、半噸の爆彈と、四人の乘員と、三門の機關銃とを備へて、十時間の航續力を有し、一時間九十哩の速度を有する恐しき飛行機である。この飛行機が倫敦又は巴里を襲擊

するには、五六十臺も群を爲して、二十臺以上が夫々隊形を編成して、司令機の指導に依つて、艦隊運動の如く、隊伍整然と襲撃を行ふ。その投下する爆彈は、一臺が半噸宛を携へるとして、五十臺で廿五噸と云ふ恐しき數に上る。事實は、燃油を多量に搭載する結果、半噸迄には上らないやうであるが、三臺で一噸の爆彈は優に携行出來るのである。即ち六十臺で廿噸の爆彈を敵市に投下し得られる。尚その爆彈には普通爆彈の十倍に近い大さを有する魚形水雷と同樣の形と大さとを有する物がある。この一發の威力は、普通爆彈の十倍に價する事は當然である。この八九百哩の航續力を有する飛行機が、僅か三四百哩の往復距離しかない倫敦に向つて、白國内の根據地から屢々遠征を企てる事は、決して不思議の事ではない。

この飛行機は、ツエペリン飛行船の航續力に比べては約半數である。故にこの種の飛行機が、西比利亞を横斷して、日本に殺到するとすれば、ツエペリンの場合に設ける着陸地を、その倍にすれば可い。然も速度が速いから、飛行船よりも速く、浦鹽附近の根據地に到達し得られる。然し、約七百哩を隔つる浦鹽東京間を、只一飛びに往復し得る事は困難である。其所で、航續力を增す爲めに、乘員、武器等を減じて、燃油を多量に積むやうにするか、又は此れに浮箱を附して、水上飛行機と化して、海上適當の所に着水して、其所に待合はす飛行機母艦のやうな秘密船舶に依つて、歸航の燃油を供給さる可きかである。

尚遠距離飛行に對する今日迄の實驗研究を見ると、その方法一つで、普通飛行機で尚且つ可なりの長距離を飛行し得てゐるのである。古くは千九百十三年に佛國のボンメルンは巴里から西班牙のメディナ市迄六百廿五哩を八時間廿三分に飛び、ブランドションクは佛獨露に亘つて一日に三千二十五哩を飛行し、最長連續飛行は八百六十六哩に及んでゐた。又獨逸の新進飛行家ストックフエラーは廿二時間四十七分間空中にあつて、千三百八十七哩の距離を飛行し、更に同じく獨人ボエムは廿四時間十二分の飛行で、二千吉米即ち東京

から臺灣に至る距離を破つた。又戰爭少し前には、露國の宙返り飛行家ネステロフ中尉が、ペトログラード附近のガッチャ飛行場からキエフ迄七百哩三十四時間で飛んだが、同じ頃に獨人ヘル・バッサルは伯林から君府に向つて、途中ウイン、ブカレスト、その他一個所に着陸したのみで、無事長距離飛行に成功した。又開戰後佛國のポーシャン大尉は佛國から獨逸ミユーニヒ市上に投爆を行つて、その儘伊太利に赴いた。又ピール・マーシャル少尉は、佛國ナンシーから露國に飛ばうとして、八百哩を十一時間に亘つて飛行したが、發動機の故障の爲め、露國境を去る六十哩手前の波蘭のコラムに着陸を餘儀なくされた。又伊國のロリエチイ大尉は、一名の砲手を同乘して、伊國のチユランから倫敦迄六百五十餘哩を七時間廿分に飛行したが、此等は皆普通小型の飛行機に、多量の燃油を搭載して、冒險的に遂行した長飛行であつた。これに反して、長距離飛行專門に作られたこのゴタ式と云ひ、伊國のカプロニ式英國のハンドレー・ペーヂ式と云ひ、競つて、今は長距離遠隔の地に向つて飛行を行つてゐる。ハンドレー・ペーヂの如きは、倫敦附近のヘンドン飛行場を出發して、途中八個所に着陸の上、遂に君府に殺到して、大空襲を行つた。其總距離は二千哩に及び、時間は卅時間以上に達してゐる。又伊國のカプロニ式は、三葉三頭の發動機を附して、アドリア海を越えて、墺國ポーラ軍港を空襲した華々しい記錄を擧げてゐる。彼のダヌンチオが八時間以上の同乘飛行を行つたのも、この式の複葉の稍小型の物であつた。

此等の大型長距離攻擊用の飛行機は、機體その物の構築が、長飛行に適するやうに出來てゐる上に、發動機亦二倍以上あつて、途中故障に際しても、降下を除儀なくされないやうに設計してあり、發動機その物亦堅牢確實で、耐久力專門に作られてある。であるから、積載物及び人員を減少する事に依つて、可なり多量の燃油を特別に塔積する事が出來るのである。故に西比利亞の一端から七百哩を隔てる東京に向つても、あながち、海上船舶の力を借りる事なくても、十分の油を

携へさへすれば、悠々飛行出來る筈である。

元來、飛行機をして長時間の航空に耐えしむる可く最も努力したのは、獨逸である。獨逸は、千九百十二年に、佛國陸軍の大演習に、飛行機が恐る可き威力を發揮したのを見て、急に國内に於ても飛行機を奬勵して、機體及び發動機の優良な物を得る爲めに、カイゼル並びに國内一同は、多大の力を注いだのである。然もツエペリンを軍用の目的で多數製出したと同樣に、飛行機を亦全然軍用を目的として、それにかなふ物をと要求したのである。卽ち政府の採用する飛行機は、偵察將校同乘の上で嚴密な試驗を施し、飛行家亦一定試驗の上は、皆豫備軍人飛行家に編入された。尙最も耐久力ある發動機として、ベンツ、メルセデスの二種を得て、これを益々改善せしめるやうに保護奬勵したのである。大型飛行機は勿論ツエペリン飛行船、小型のアルバトロス式戰鬪機皆メルセデス式の重い冷水式發動機を取附けて、聯合軍を種々苦しめてゐる有樣である。これに對して、伊國はイスパノ・スイザ式、英國はロルス・ロイス式、佛國はサルムソン・カントンユンネ式等の何れも冷水式の確實堅牢な大馬力の發動機を製造又は改善せしめて、獨逸式の大馬力と競爭せしめてゐる有樣である。又獨逸は豫て飛行機を用ひて、飛行船同樣遠隔の地を空襲する事を目的としてゐたから、開戰の年の春季には、國内の各飛行隊に非常召集令を下して、國内に强飛行の大演習を行つた。それと同時に、時間と距離に於ける世界の記錄を皆自國民の手に掌握せん事を心掛けた。その其結果、千九百十三年迄では時間と距離との記錄は皆佛人の手に歸してゐたのを、翌十四年に至つては、ランドマン、ボエムの二氏に依つて見事に獲得する事が出來た。又高度に於いても獨人エームリヒが二萬五千七百五十呎と云ふ記錄を作つたが、只速度に於ては、到底佛人の敵では無つた。これその使用されたアルバトロス式と云ひ、D・F・W式と云ひ、皆重く且つ遲く、只長時間の飛行に耐え得られるやうに設計された軍用飛行機であつたからである。故に、開戰後間もなくツエペリンと相次いで、この普

通の飛行機を以てして、倫敦襲撃を敢行して、世間を驚したのである。

獨軍航空隊の特長

獨逸の飛行機は、其發達の當初から長飛行强飛行に適するやうに出來てゐた。その最も祖を爲す墺國エトリヒ式飛行機は、實に鈍にして、確實な飛行機であつたのである。これに對して、佛國その他の飛行機は輕快敏銳を目的とした物である。その結果として、聯合軍側の飛行機は、概して一騎打ちに長け、奇勝を博する事を以て主眼とするやうになり、獨軍の飛行機は一騎打ちよりも、隊伍を組んで、弱劣な敵を打落す戰法を取つてゐる。フオン・ビユーローの參謀であつたフオン、ヘブナー將軍が、昨年末獨軍航空隊の總司令官に任命されてからは、益々此の編隊法の戰法に依つて最も少い犧牲を拂つて、大なる効果を擧げるやうになつた。それと同時に、ゴタ式大型飛行機を多數急造し、又國內時計工場を製造場として益々多數の機體を作つた。現在の機數は二千五百臺(隊數三百內投爆隊二三、追擊隊四〇、防禦隊八〇、着彈觀測隊一〇〇、他は豫備隊及び練習用)を所有するとの佛軍の調査である。聯合軍側略此れと同數を所有して、歐洲戰場に相對峙してゐる有樣である。尙比較的鈍くて遲いゴタ型大飛行機には、前方、上方に砲を備へる外に、後方の備砲はトンネルに依つて下方をも打つやうに出來てゐる上に、重要部分には相當の裝甲を施してあるから、到底普通の飛行機は、何れの方面からも立向ふ事が出來ない有樣である。

今日聯合軍側の飛行隊は、彼のスパッドの如き精銳な機體を益々多數に作り出して、敵機の驅逐を計ると同時に、ゴタ式に劣らざるコードロン、ヴォアザン、ショートその他の大型飛行機を旺に作つて、戰線後方の兵站部鐵道輸送地を突き、又獨逸國內の兵器製造工場を襲ふてゐる。獨逸はこれに對して必死的防戰を爲すと同時に、同じく敵地內へ深く侵入して空襲を行ふ事に忙しい今日、とても東洋に、その內の數臺をも派遣する餘裕ないと云ふ者があるが、若し、それも必要

とすれば全體の内から數臺乃至十數臺を割く事は全く不可能の事ではない。然も東京の如きマッチ箱を幷べたやうな都市に對しては、只一隻の飛行機から投ずる半噸弱の爆彈で、その大半を燒拂ふ事は容易であらう。獨逸飛行家はその技術決して英佛飛行家に優りはしないが、組織的の空中戰法と勇敢な精神とで、常に優秀の地位を占めてゐる。又遠距離襲擊に對しては、聯合軍側よりは、一日の長を有し、その方法極めて巧妙なのである。最近米國の飛行學者は、紐育市及びワシントン市等に對して、獨逸空中艦隊が來襲し得るや否やの研究を發表してゐるが、それに依ると、飛行船が太西洋を一直線に横斷して襲擊して引返す事は、稍々困難であるが、墺國ポーラ港からモロッコに出て、燃油を取り、其所から太西洋上の小島に赴き、其所で潛航艇が密かに用意しておいた燃油を積込み、南米に赴いて、其所から太西洋岸に添つて空襲すれば可能であり、又海上で潛航艇から燃油を直接取る事も出來、更にドイチランド型大型潛航艇が飛行機を積んで來て、米國近海に來て、これを組立るか、或は彼のウォルフ海賊船の如く、飛行機を甲板上に積んで、目的地の近海迄、都合よき國旗掲揚の下に航行し來つて、其所から飛行機を飛ばせれば、苦もなく米國都市を空襲出來ると警告してゐたが最近の海外電報は、空襲に對する準備として、紐育市は消燈させられた事を報じて來てゐる所を見ると、いよいよその危險は事實に近寄り來つた物と思はれる。

この海上よりする空襲は、我が東京市に對しても同樣である。彼のウォルフ號の如き海賊船を、東洋の海に放つ事ありとすれば、全く日本の都市は危險と云はなければならない。

彼の後藤氏が、六時間廿一分で所澤大阪間三百哩を初めて飛び得たと云つて、それを謳歌してゐる時代ではない。この位の飛行は七八年前の海外の記錄に幾多もある。長岡中將が、今回空中文明博覽會を開くに當つて、「斯の如き物を今日催すのは、日本の國恥である」と叫んだと同様、海外に知らして誠に恥しい

なのである。然らば、日本の航空界を、國防の上から、將亦空中文明開拓の上から、今後如何にして、これを發展進歩せしむ可きかは、別の問題である。（了）

「春秋會」の解剖

逸　名　氏

一

△春秋會と云ふものが出來たのは、明治四十二年か三年だつたと思ふ。第二次桂內閣の時で、桂が新聞記者操縦の便宜のために、二三の記者を慫慂して作つたものだと云ふ風說も出たが、幵んな意味は毛頭なかつたと云ふのが事實だ。

△何んでもケネデーが澁澤や桂の援助を得て、國際通信社を創立したのも其の頃で、次で國際新聞協會と云ふやうなものも出來たが、是れは善い意味で政府も慫慂したことだらう。其の國際新聞協會から思ひ付いて、都下の新聞雜誌社長とか主筆記者とか云ふ重立つた連中で社交的の會を組織したら何うだと云ふ話が出て、遂に春秋會となつたものだ。

△誰れが主になつて奔走したかは知らんが、何んでも當時朝日に居た土屋元作なども、熱心に說き廻はつて居たやうだつた。目的は前に言つたやうなわけで、何にも是れと言つて纒つた事はなかつた。唯だ斯うして親睦を計つて居る內には、何にか便利な事もあるだらう。そして段々新聞の品位を高むることにしたいと云つたやうな話だつた。

△つまり國際新聞協會は外國記者と內地記者との親睦、意志疏通と云ふ事だつたが、其れは外國關係の記

者で外國語を話す者でなければ一寸入會しても面白くないと云ふ所から、內地の新聞記者だけで、親睦、意志疎通の會を起さうぢやないかと云ふ話になつたのだ。

△大概一社から一人や二人づゝと這入つた。會費は入會金が拾圓、每月壹圓づゝと云ふ定めで、役員は一年の期限で會長一人、評議員十八人を總會で選擧し、評議員から二人の幹事を互選すると云ふ事になつて居るだらうと思ふ。會長には御承知の通り創立以來ズット箕浦勝人が選擧されて居たが、箕浦が遞信大臣になつた時に、黑岩周六と代つた。

△箕浦が罷めると云ふ話になつた時、會長候補者として德富と黑岩の二人があつたが、朝日の松山とか日々の羽田とか云ふ連中が、何うも此の兩人は孰れも會長にしたくないと言つて、時事の石河幹明に望を屬し、石河の入會を慫慂したが、石河は這入らなかつた。

△石河も創立の際には入會したけれども、段々と會內の空氣が變な風になつて、寺內朝鮮總督が新聞壓迫をやるなど言つて、其れに抗議を申し込むとか何んとか實際運動を始める傾向になつて來たものだから、是れは評論家の態度として穩當でないと思つた事などもあり、又た大臣などを招待したり招待されたり、隨分面白くない感じを起したので、社員を一人身代りに入れて、自分は退會したものだつた。

△其れで松山や羽田の勸誘に對しても、自分は寧ろあんな會は廢したが可い位に考へて居る所だから、會長になる事などは眞平だと云つて謝絕したので、止むを得ず黑岩を選擧する事になつたのである。而して現在の幹事は萬朝の斯波と實業之日本の增田だらうと思ふ。評議員は大概一社一人宛出て居るやうだ。

二

△春秋二季に總會をやつて、臨時に例の招待會を開くのだが、近年は餘り開かぬらしい。其の招待會の利益と云ふのは、或程度まで秘密を漏らすと云ふのにあるけれども、何うせ程度は知れて居るので、石河などのやうに『くだらない』と云ふ考へを持つ者も次第に多くなつて、自然繁昌しなくなつたのである。

△併し此の會も利用すれば一寸便利な點もないではない。例へば寺内々閣が出來た時に、此の會員を招待して挨拶をやつたやうに、會と云ふものが出來て居れば誰れか彼れかと選擇するのに面倒がなくて宜いと云ふわけであるが、石河のやうに會員外の有力者も居ると云ふ今日の狀態となつて見れば、モウ代表的の會と云ふ意味がないから駄目だ。

△其れに四十二年頃には主筆なり編輯長なりをやつて、一寸有力な記者であつたものが、今日では既に落伍して居る者もあるが、一方には若手が仕上げたり、或は新らしく新聞記者になつたりした有力者が、春秋會を馬鹿にして入會しない者もあると云ふ有様で、春秋會も近來何うも振はなくなつた。尤も最初から振つた會でもなかつたが……

△現に時事新報社などは、申しわけ許りに一人入會して居るだけである。其れから、新聞記者の會が或實際運動をやると云ふ癖が付くと、モウ到底繁昌はしない。評論だけなら、如何に意見が違つて居ても社交は圓滿にやつて行けぬ事もないが、實際運動をやる事になると、トテも纏りが付く筈がない。

△又た會としては運動をやらぬとしても、會員の重立つた連中に運動をやる者があると云ふ事になれば、何んとなく其れ等の連中から利用されはしないかと云ふ疑念が生ずるのみならず、世間から彼是の噂を立てられるやうになるので、自然公平な連中は寄り付かぬと云ふ事になる。

△經濟學上に於て惡貨は良貨を驅逐するとか云ふ事があるやうに、斯んな社交團體でも惡會員は良會員を驅逐する結果を見るのである。春秋會としては、運動とか決議とかをやつた事實は稀なやうだけれども、會員の重なる者に運動をやる者があるので、近來世間から妙な目で見られるやうになつたのである。

△吾輩は新聞記者が政治運動をやるのは甚だ宜しくないと考へて居る。新聞記者は報道し批評するのが職分である。此の領域を越えて、實際運動を起すと云ふ事になれば種々の弊害を生ずるのである。

△新聞記者の實際運動は例の憲政擁護運動から著るしくなつた。爾來何々記者團と云つたやうなものが、何かと云へば直ぐに決議を發表する。實行委員を擧げると云ふやうな有樣となつたが、是れは唯だ二三の音頭取りが居て、其の他は全く御座なりに贊成するとか、默認するとか云ふ場合が多い。そして其の音頭取りは多くの場合、後方から操縱されて居ることもあり、全然自發的のもある。

三

△黑岩は權兵衞内閣攻擊以來、ひどく政治運動に深入りしたので、彼れが春秋會々長となつたら、春秋會のする事は、一々疑の目を以て見られるやうになつた。彼は毀譽褒貶の多い男があるが、彼の敵が貶すやうに惡黨でもなく、彼の味方が譽むるまでに立派な男でもない。

△先年加藤高明が東京日々新聞を引き受けた時に、三井では大恐慌で、此方でも新聞をやらうと云ふ話になり、井上馨と黑岩と會見した事がある。其の時井上が瓢屋から伊藤博文を招んだので行つて見ると、黑岩と云ふ男は思つて居たより立派な男だ。決して惡黨ではない。貴公も一度彼れに會つてやつて吳れと言つたさうだ。

△すると伊藤は黑岸自身は立派な男かも知れんが、彼れが作つて居る新聞は決して立派ではない。あの新聞から傷けられて泣いて居る淑女なども隨分吾輩は知つて居る。吾輩はあの新聞から政治的生命を奪はれても、彼れと交際などはしたくないと答へたら、井上は頗る困つた顏をして居たと云ふ事だ。

△其の話があつて間もなく、井上は隨分萬朝から攻擊された。三井も攻擊された。吾輩は其の眞相を玆に書く事は出來ないが、理想團の發企者としては多少妙な感がある。原富太郎を攻擊した時なども、吾輩の友人が仲裁に這入つたが、夫れは黑岩の關知する所でないかも知れぬ。

△黑岩が白熱的に山本内閣を攻擊し初めたのは、例の巡査が日々新聞記者を斬つたとか斬らぬとか、政友會

の壯士が朝日新聞記者を毆つたとか云ふ問題からで、やまと新聞の松下や都新聞の大谷誠夫などと共に、日々新聞と朝日新聞の爲めに運動を起してからである。

△當時松下は憲政會、大谷は陸軍側に同情を持つて居る者として知られて居たから、日々新聞と朝日新聞とを御爲めごかしに味方に引入れる策もあつたかも知れぬ。併し黒岩だけは全く正直に新聞社會共同の問題として馳せ參じたと云ふ事を聞いた。

△そこで松下は涙を流さん許りに黒岩の義俠（？）を感謝し、極力煽て上げたものである。常に松下の敵であつた黒岩が、共に手を携へて行かうと云ふことになつたのだから、松下は百萬の援兵を得たやうに喜んだであらう。松下の心底を看破し切れぬ黒岩でも無いだらうが、大隈内閣擁護にまで引きずられて行かうとは思ひも及ばなかつたであらう。

△朝日新聞と日日新聞とは自分達の社員が原因となつて、斯う大勢の新聞が同盟して運動を始めたと云ふ次第なので、人一倍熱心になつたのは自然の勢ひ、知らず〳〵深入りして大隈内閣擁護とまで行つて了つた。尤も黒岩にも松山にも羽田にも、下地に政友會を好かないと云ふ共通點があつた事は勿論であるが、黒岩などは大隈に對しても好感を持つて居なかつた。イヤ却つて惡感を持つて居たかも知れぬ。

△所が段々松下と交際する間に、黒岩はスッカリ松下に魅せられて了つたらしい。黒岩と云ふ男は徹底せずんは止まざる男で、非常な凝り屋である。一旦斯うと思ひ立てば、必ずやり遂げねば止まぬ。可い加減にして置くと云ふ事が出來ない人間である。斯んな性分を持つて乘り込んで來た、其處を巧く松下から操縦されたと云ふ關係だらうと思ふ。

△黒岩と云ふ男は、一旦刀を拔いた以上、相手を斬りきざまなければ黒岩様の估券が下がると思つて居る。黒岩がやり出したから大變だと云ふ感じを社會に與へて置くが、其の新聞經營法であり又た其の處世術であらう。其れだから他から少しでも踏み付けにされるやうな事があれば、屹度之れに復讐し、黒岩様に無禮を

やると此の通りだぞと云ふ見せしめを作つて置く。

△權兵衛内閣は憲政擁護運動に對する新聞の同情に裏切つて出來た内閣であつた。然れば、黑岩は此の内閣を新聞で倒さなければ新聞の估券に關する。新聞の同情を失へば凡ての内閣斯の如しと云ふ實例を示して置かなければならぬとも思つたのであらう。近來彼れも年を取つて、元氣が頗る衰へたやうだけれども、若い時は凡て此の筆法でやつたらしい。

△彼等は實際大隈擁立に功があつた。山縣なども彼等が權兵衛を攻撃したと云ふ手柄に酬ゐる爲めに、彼等の言ふ事も聽いてやらねばならぬ義理を感じたであらう。又た彼等を利用すれば政友會を打破する事が出來ると思つたであらう。憲政擁護運動以來新聞の勢力に恐れても居たであらう。

△彼等の運動さへなければ、清浦内閣は强ち流產しなくとも濟んだのである。海軍大臣だと言つても、山縣が盡力さへすれば何うにでもなつた筈である。而かも乾兒の清浦を見殺しにして、急に大隈を出す氣になつたのは、新聞の勢力を借りて、先づ政友會を打破しやうと決心したからであつたのだ。

△斯うして彼等は憲政會と長閥から利用された姿になつた。例の七人組とか八人組とか云ふ連中、即ち松下、黑岩、松山、羽田、大谷、松井と云つたやうな連中の内、少なくとも黑岩、松山、羽田の三人は憲政會や長閥から利用されるために利用されたのではない筈。唯た結果から見れば利用された形になつて居るのだ。

△所が黑岩は益々深入りした。或は大隈から金錢上の恩惠をも受けたであらう。併し夫れは今日の社會で强ち惡德呼はりをする程の事はない。松山と羽田は元來自分達の社員の事から權兵衛内閣攻撃の同盟に這入つたと云ふ關係にあるのだから、松下や黑岩が餘り深入りする態度に慊焉たらざる所もあり、社の方針とも衝突すると云ふので、大隈内閣の末葉頃から、既に同盟から脱退して居る筈である。

△其の後松下も死ぬし、羽田も死ぬと云ふ有樣で、黑岩も段々に熱が冷めて來た。若しあの同盟が今日も依

然として維持されて居たなら、寺内攻擊は非常な勢ひだつたらうが、何うも氣勢のあがらぬのは、同盟が既に解體して居るからである。

四

△此の大隈内閣擁護の運動をやつた連中が、皆な春秋會の主立つ者で、殊に黒岩が會長になつたものだから、春秋會までが累を蒙つて、何かをやると直ぐに誰れかゝら利用されて居るのぢやないかと疑はれる傾向があるけれども、實は黒岩の勢力はモウ春秋會を利用し得る程に大なるものではない。

△過日霞倶樂部對後藤外相問題が起つた時に、春秋會が仲裁の勞を取つたなども、別に深い意味はなかつたのだ。尤も黒岩は之れを機會に一と運動起さうと思つたかも知れぬ。霞倶樂部對後藤外相問題の内情を少し話して見よう。

△政友會擔任の記者團が十日會、憲政會のが櫻田會、國民黨のが國民倶樂部、新政會及び無所屬のが無所屬記者會、内閣擔任が永田倶樂部、外務省のが霞倶樂部、内務省のが大手倶樂部、文部省のが竹橋倶樂部、其の他大藏省のが何、陸軍省のが何と、各省に一つ宛ある。そして會費として毎月五十錢乃至壹圓と云ふ所を各社から徴集して、茶菓の料にしたり、會員の病氣見舞などに使用して居る。

△而して政黨本部なり各省なりの一室を借り受けて、毎日其處に詰めて居るが、仕事と言つては碌になく、一日中碁を打つたり、無駄話しをしたり、一口に言へば先づ毎日ゴロ／＼やつて居る有様である。其の中には隨分立派な男も居る。大概は私立大學卒業で、帝大の學士なども居る。そして總じて政黨擔任の方が各省のよりも程度が上らしい。

△霞倶樂部對後藤外相問題と云ふのは、後藤外相が地方官に對して『新聞を指導し云々』と訓示したのが怪しからんとか不都合だとか言つて、倶樂部の決議として外相に抗議を申し込んだものださうな。

△すると後藤がクワッとして、宜しい、然らば倶樂部の室は借さないから早速立退けと云つて、室に鍵をか

けて了つた。是れは後藤も大人氣ないとも言へるが、記者連も亦た妙な事をするものだ。彼等は何うせ眞面目に考へたわけでもなからう。單に豪がつて見たに過ぎまい。

△牧野外相の時代にも、何か大臣不信任と云つたやうな決議をやつて、牧野に提出したさうだが、牧野は『然うか』と言つたぎり、知らん顔で默殺して了つた。所が後藤はあんな氣象だから、忽ち喧嘩を買つて出たのだ。

△すると記者連は『後藤は無禮だ』……どつちが無禮だか判からん話だが、ワイ〳〵と騷ぎ出して、後藤に談判すると、後藤は濟ましたもので『吾輩は諸君に禮を盡した積りだ。牧野君などは默殺したさうだが、其れは諸君を眼中に措いてないからだ。吾輩は諸君を尊敬して居るから相手になつてやるのだ。要するに諸君を人間扱ひしたわけだ』とある。

△斯うなつては記者連、何うする事も出來ない。そこで各政黨、各省の記者團に檄を飛ばして應援を求めると云ふ事になつた。然るに時事新報だけは初めから『外相に對して申分があれば、時事新報紙上で議論をすれば宜しい。新聞記者が團體を作つて、紙上外で運動を起すのは其の分でない』と云ふ意見で、此の運動に加はらなかつた。此の運動ゝ要するに二三人の音頭取りがあつて、深い考へも覺悟も決心もなく、前例もあるのでやつて見たと云ふ位の事であつたらう。何か後方から煽動した者があるかと云ふと、然う云ふ樣子も垩く見へなかつた。

△各政黨、各省の記者團も亦た野次馬的に霞倶樂部を援助する意味の强い決議をしたが（十日會だけは默殺して知らぬ顔をして居た）然ればとて何うして其の趣旨の貫徹を計るかと云ふ事に就ては何の考へもなかつたであらう。

△兎も角もと云ふので、各團體から代表者が集まつて詮議したが、霞倶樂部からは、各社から醵出して三百圓位の資金を調達するのが先決問題だと云ふ提議をしたが、是れには贊成する者がなかつたさうだ。

△所が各社では見捨てゝ置かれぬ事になつた。外務省と新聞記者との聯絡が斷たれて、材料が手に入らぬからである。或記者は社長から叱かられて運動から手を引くもあり、或記者は主筆から小言を食はされて縮み上がるもあり、二三日間もゴタ／＼して居た。

△そこで春秋會が仲裁に入つたのである。或は後藤外相が春秋會に仲裁方を賴んだとか、或は霞俱樂部が始末に困つて春秋會に泣き付いたとか云ふ噂もあつたがそんな事はなかつたらう。春秋會は社長や主筆連の集りだから、社員の斯うした有樣を見捨てゝ置くわけに行かなかつたのである。

△斯くて黑岩會長に中央新聞の吉植など四人か五人代表者となつて、先づ後藤外相と會見する幕となつた。黑岩は後藤外相の出やうによりては大にやる口吻で出かけたが、會見して後藤の申分を聞いて見ると、何んでもない話。指導と云ふのは言葉通りの指導で、命令とか壓迫とか云ふ意味はない。政府が國民を指導するのに何の不思議がある、イヤ當然の話しであると云つたやうな事で（其の他當時の新聞に出て居る通り）先づ一番に黑岩が後藤に同情して了つた。

△其れから決議を取消して妥協しろとか何んとか云ふ段になつたが、霞俱樂部は既に各記者團の應援まで依賴したのであるから、今更オイソレと仲裁に應ずるわけにも行かず、磨つた揉んだとやつて居る内に、黑岩が怒り出して、然らば自分は會長を辭任するとまで言ひ出した。

△斯うなると霞俱樂部中に免職になる者が數人もあるらしい。そこで彼等は靑くなつて今度は各記者團に對して、折角だが仲裁に應じて手を退いて吳れと賴み廻はると云ふ喜劇となつた。實にタワイもない話で、世間で想像するやうに、政治的意味があつたわけではないのだ。

五

△其れからアウトルック問題だが、春秋會が之れに容喙して、外國に電報を打つたのは、甚だ宜しからぬ事であると思ふ。あんな事はヨシ寺内に多少の間違ひが

あつたとしても、內地の新聞は大に筆を愼まなければならぬ。又た攻擊をしやうと思へば各新聞紙上でやるべき事で、國民を代表してなど言つて電報を發すると云ふ事は僭越な事柄でもあり、新聞記者の職分でもなく、第一國家の爲めに害になる事である。

△其れにあの寺內の談話を讀んで見ると、議論としては少しも惡い點はない。唯だ政治問題としては非難をする餘地はあると云ふまでの事である。吾輩ならば「开んな事は今日問題とならぬ」と跳ね付けるのだが、寺內が外交に慣れないものだから、言はでもの事を言ひ過ぎた嫌は確かにあると思ふ。

△其れにしても、春秋會の電報は愚の骨頂である。然り愚であつたと云ふに止まり、是にも亦た毫も政治的意味はないのだ。唯だ會長が黑岩だから、寺內々閣の外交を妨害する目的でやつたのであらうと疑はれる點もなきにしもあらずであるが、會員の動機は良い事と思つてした事であらう。

△電報料の五六百圓を加藤高明が出したなど云ふ風說もあつたやうだが、春秋會は千五六百圓の金を現に持つて居る事だから、开んな事は決してない筈である。唯だ憲政會には多少惡意があつて、あれで何にかの反響を豫期したかも知れぬ。斯んな風に春秋會が世間の疑ひを受けるやうになつたので、春秋會に對抗する會を起さうと計畫して居る者もあるやうだが、其れは恐らく物になるまい。春秋會も此の上運動がましい事をやれば、內部に議論が起つて遂には解體するし、運動目的の記者團はトテモ成功しないのだ。

奧野他見男新著

逢ひたい見たいは山々なれど

菊半截型
紙數三百廿頁
定價六十錢
郵稅六錢

◎善良なる著者を赤坂新橋と誘ふた惡友は大學の某助教授
◎藝者と相撲取り片ッ端から薙ぎ倒し「色男でも力があるぞ!!」
◎「ねえ、あたし貴方を好いたわ」と寄り掛れば
◎「おれは精神が確つかりしてゐるから欺まされんぞ!!」
◎此の筆。此の想、流石は日本一の諷刺滑稽文學者。

忽ち十二版

奧野他見男著

（好評嘖々！賣行き飛ぶが如し）

あの山戀し 海戀し

第十版
定價六十五錢
郵稅八錢

■發行所 東京中澁谷町 振替東京七八六四 東文堂 ■大賣捌 東京神田 東京堂

人物評論（九十五）

白樺派の人々

▽彼等に感謝する

佐藤春夫

○白樺派――何々派などと一口に呼ぶことはあまり、好ましいことではない。けれども、便宜上、世間のいふとほりに、それを襲用することにする。それらの人人にもそれぞれに、尊重しなければならない特質のあることは勿論である。けれども假に一くるめにして見る場合には、そこから何か共通したものを感ずることが出來る。言はゞ彼等の考へのロオカルカラアである。それを言はうとすると、矢張り武者小路氏の色彩がいちばんの基調になつてゐるやうである。

○或る時に、或る人がこんなことを言つたことがあつた。「白樺の同人は、皆して俺がえらい俺がえらいと吐鳴つて居るが、それではその白樺の同人同士では、誰が一ばんえらいのだらう」と。その時に、私は次のやうに答へた「それは、武者小路氏に尋ねれば武者小路氏が一番えらいのであらう。長與氏に尋ねれば長與氏が一番えらいに違いない。さうしてそれは決して間違ひでない」と。私がさう言つたのを、その人は一場の冗談だと思つたらしく笑つて仕舞つたけれども、實際それでいいのだと思ふ。私だつてさうだ、私に尋ねれば、私もさう答へる「私が一番えらいのだ」と。さうして、そ

皆へは、決して私自身の尊敬して居る何人をも傷けたとは思はない。

○彼等は個人主義者だ、いい意味で。さうして彼等はいかにも自由さうに自分自身を語りつづけて居る。語りつづけて飽きない。それを或る人は可笑しいと言ふ。私は別にそれは可笑しいとは思はない。

○彼等は皆、理想家ぞろひである。さうしてすべての理想家が笑はれるやうに、彼等もしばしば笑はれて來た。多分これからさきも笑はれるだらうと思ふ。彼等は理想家らしい我儘と、理想家らしい尊大とを持つて居る。さうしてそれに相當するだけの權威を多少はもつてゐる。彼等は學者らしくなくつて、權威ある者にやや似て居る。

○彼等は正義だとか、人道だとか、愛だとか、それに似通ふたやうな言葉を言ひながら、その内容がどんなものであるかを一向に說き明さない。それは内容がないからだ、とそんな風に彼等を考へて居る人人も、世間にはあるやうである。成程さうだと言ひたいけれども、よく考へるとそれは無理である。何故かといふに、彼はただそれらのものを題目にして、詩人のやうに歌ふて居るのだからだ。普通詩人は美を歌ひはする、けれども詩人そのものは決して美學者ではないやうなものだ。要するに彼等のためには、彼等が善を愛して居る、或は愛しやうとして居ることが、本當の心持からであるか、僞善者のやうにであるかを、よく考へて見てやるべきである。さうして、勿論彼等は本氣で、心からさうしやうとして努力して居ることは確かである――やうに私には思へる。

○善は美だと言ふ、古くさい、通俗な思想に對して、彼等は潑溂たる形を與へやうとして努力して居る。これを非難したり、贊成したりすることによつて、我々は一度は是非ともしなければならない種類の考察と反省との好機會を、彼等によつて得させられた。全く我々の社會では、その必要なことをややもすると忘れがちであつた。彼等が今までにした仕事を、いかに些細に見積つても、確にこれ丈けのことを我々は彼等に感謝していい。感謝するの義務がある。

○彼等は人間の眞實といふものを、藝術の上で力說した。これは言ふまでもなくいい事である。それがどれだけ完全に出來たかどうか、それは今我々が問ふ可き問題ではない。

○それ等の人人が集つて、「新らしい村」の計畫があるといふことを聞いた。どんな具體的な方法で、それが行はれるのかは知らないけれども、美よりも善の方を重じやうとした彼等の考へ方が、ただ藝術といふものでは滿足しなくなつて、さういふ實世間の實行にとりかからうとするのは、いかにも尤もなことである。彼等の夢を笑へ。彼等の夢を笑ふな。

○この不合理なわれわれの時代と場所とが、物質的な方法で合理的であることも、もとより必要である。しかしわれわれの心そのものがもし今のままであるならば、いかなる物質的の合理も結局は無駄なものになるのが當然である。私は白樺の人人が集つて企てるといふ「新らしい村」に對しては、堺利彥氏などとは違つた期待を持つて居る。私のいふやうな類のコンミユニズムも、いままでいくらもあつて、いくらも無駄で終つたかもしれない。けれどもいいことは幾度企てられて、幾度失敗しても

決して所謂無益といふものではない。寧ろ、幾度も幾度も懲りずに企てらるべきものである。さうしてこんな計畫は、武者小路氏のやうな眞劍な理想家であり空想家である人人が集つて行はれるのに、最も望ましい計畫である。

○白樺の人人のやうに、衣食の道が充分であれば、何でもしたいことが出來る。とそんな馬鹿な卑屈なことを言うものではない。何でも出來るやうな境遇に居て、彼等のやうな道を撰んで居ることとこそ彼等を尊敬すべき所以でもある。

○私は「新らしき村」の計畫が、出來るだけ大きく、どこまでもどこまでも波及するといいと思つて居る。

○兎に角、これらの現實的な夢想家の一團を、私は相當に尊敬して居るのだ。それは彼等の要求どほりを支拂つて居るかどうかは知らないけれども。

▽白樺派の人々についての感想

本間久雄

白樺派の人々とはどういふ人達であるか、又どれほどの數に上るか、私はこれを詳かにしません。最近、白樺派の人々の文集であるとして公けにされた『白樺の森』などを見ましても、白樺派の人としてそこに、少くも十三四名を數へることが出來ます。

私はこれら十餘の人々とは、個人的に殆んど一面の識もありません。又それらの人々の中には、私がたゞの一つの作すら讀んだことのない人も居ります。私の讀んだのは、ほんのその中の二三氏の作だけです。而もたゞ讀んだと云ふだけで、極めてアト・ランドムに氣の向いたとき拾ひ讀みをしただけで、別に研究的に讀んだわけでもありません。ですから白樺派の人々に對する概括評をすることの出來ないのは云ふまでもなく、その中の二三氏に對する批評においても、ほんの一面的觀察であることは申すまでもありません。

白樺派の人々の中で、私の最初に讀んだのは武者小路實篤氏のものでした。數年前のことですが、殊に同氏の、雜誌「白樺」に連載された感想文を一時愛讀しました。何でも生一本にぐいぐいと、思ひ通りに押し通してゆかうとするドン・キホーテ式な、理想家的な氏の態度には、確かに一種の痛快味がありました。同氏が青年の間に多くの崇拜者を得たのも所詮この生一本な、理想家的態度にあつたと思はれます。

しかしながら、私は間もなく同氏の作品を讀むことを止すやうになりました。それは、氏の餘りに多くドン・キホーテで、其上、餘りに多く誇大妄想狂者であるのに、私は反感を持ち始めたからであります。氏の長篇『彼が三十の時』などは、この誇大妄想狂的なドン・キホーテとしての氏を遺憾なく現はして居ると思ひます。私はこの作を、私も三十才のとき

に讀みました。そしてこの作の主人公の性格なり、生活なりと、私自身の性格なり生活なりと、よく比較し、對照していろ〳〵反省して見ました。そして彼我の間に餘りに甚だしき懸隔のあるのに驚きました。つまり、『彼が三十の時』の主人公の性格なり生活なりには、私が、「かくありたい」「かくあるべきである」と思ふものとは大ぶ異つた多くの要素があつたのであります。言葉を換へて申しますと、「俺は偉い」「彼奴は弱者だ」「俺は彼奴を輕蔑してやる」と云つたやうな、自我的な、一圖に思ひ上つた、誇大妄想的感情があの作の基調となつてゐて、謙虚な、自分を尊重すると共に他をも併せ尊重するといふやうな博大な、道徳的感情などは殆んど見出すことが出來ませんでした。この作を讀んでこの作者には、本當の個人主義は到底わからないと思ひました。そしてそれ以來、私はこの作者に叛きました。この作者を棄てました。事實、私はこの三年ばかりの間、この作者のものは、たゞの一つも讀んだことがありません。

志賀直哉氏の作品もずつと前から讀みました。六七年前のことゝ思ひますが、やはり雜誌「白樺」に出た氏の『兒を盜む話』といふ短篇を讀んだとき、私は、我國にも異常な作家があるものだと思ひました。それ以來、私は志賀直哉氏を尊敬して來ました。氏には、作品の數が比較的少ないやうです。しかし、藝術的價値は、量の問題でなくて質の問題であること云ふまでもありません。この意味で、志賀氏に作品の少ないことは、藝術家としての氏に何等累するところのないこと亦云ふまでもありません。

藝術家としての志賀氏の氣質(テンパラメント)には可なりに複雜なものがあります。私は今年始めある雜誌で、志賀氏に與へた公開狀で、この事を論じて、惡魔主義的氣質と、人道主義的氣質の交錯と申しましたが、この見解は今以て變りません。志賀氏は一種のデカダンであると共に又一種の人道主義者です。而もこの二つが氏の一身の中で相剋つてゐるところに氏の複雜な一種ユニツクな氣質が釀されてゐます。私は氏のこの複雜な、特殊の氣質を尊重します。

乍然、私をして更に氏を尊重させるものは氏の深刻な洞察力です。異常なる心理描寫です。『クローデアスの日記』や『范の犯罪』などを見てもこのことは、よく解ります。『クローデアスの日記』は例の沙翁の『ハムレツト』の中の敵役のクローデアスを、その日記に事よせて新しく解釋したもので、見樣によつては、一種のハムレツト評、シエークスピア評とも見られます。

氏によつて解釋されたクローデアスは決して在來の人々の解釋したやうな惡人ではありません。至極卒直な、眞面目な、哲人肌の、本當の戀愛に生きてゐる立派な人物になつてゐます。そして其反對に在來の人々が哲學者、詩人として解釋したハムレツトが「氣障な、講釋好きな、身勝手な、芝居氣の強い、そしておしやべりな奴」として解釋されてゐます。氏のこの解釋は一見矯激のやうな、故意と奇を衒つたやうに思はれますが實際『クローデアスの日記』を讀むと、シエークスピア及びその創造したハムレツトが淺薄に見えるほど、氏の解釋には、穿つたところがあ

り、且つ新味があります。この一篇によつても氏の洞察力のいかに深く、鋭いかゞわかると私は思ひます。

有島武郎氏のものを讀み出したのは、私に取つては極めて最近のことでもあり、且つその數も少ないので、氏について多くを云ふことを、こゝでは差控へます。しかし私の讀んだ範圍では、氏は、思想的にも感情的にも、「大きな」作家です。氏が私淑されてゐるらしいホイツトマンの影響なども事實に於て、氏の人格に多大の影響を與へてゐるらしく思はれます。それに氏は何と云つても年輩です。私達よりも十近くも年が上です。それに加へるに夫人を失つたこと、小さな小供さん達と男やもめで養つて居られること、その他「實際生活上の經驗が、精神上可なり深刻な影響を氏に與へてゐるやうです。つまり實際生活上のこれらの經驗は、單なる經驗でなく、氏に取つては貴い體驗となつてゐます。氏の作品はさういふ體驗の上に立つてゐます。ですから、讀んでゐて少しも危つ氣がありません。いかに理想的なことが書いてあつても、それは決して單なる理想に流れません。飽くまで現實的な感じを與へます。こゝが藝術家としての氏の第一の强味であらうと思はれます。感情のデリカシイといふ點では志賀氏の方が優れてゐるやうですが、力强い、どつしりした、大陸的な感じを與へる點では有島氏が遙に優れてゐるやうです。尤もかういふ優劣を定めることは間違つてゐます。吾々は、たゞ各作家の各氣質を尊重すべきです——尊重に値しない氣質は例外ですが——志賀氏の氣質と有島氏の氣質とは、夫々違つた意味で尊重さるべきものであります。

白樺派の外の人々については、私は今、殆んど、云ふべき何物をも持つてゐません。たゞ概括して一言したいことがあります。それは外でもない、文藝と貧富の關係です。白樺派の人々は何れも金錢上、經濟上、物質上、有利な位置に居る人です。所謂富者階級の人々です。ある人は白樺派の人の藝術を、この人々が富者階級であるといふところに歸してゐます。平易な言葉で云へば、彼等には金があるから、生活上の心配がなく、從つてあれだけの仕事が出來たのだ。俺達に金があれば、もつと立派な藝術がつくれるといふやうなことを云ふ人があります。これも無論一理があります。しかし、又その反對の事實も考へなければなりません。世間には金があるために藝術上の仕事に携はらない人があります。否、比々皆然りです。言葉を換へて云へば、生活上何等の心配がないために、從つて精神上何等の要求をも持たないまでに、だらけてゐるのが富者階級の實際の狀態です。この意味から云へば、富者階級にあつて、而も尙精神上の要求に燃えてゐる人、——白樺派のある人々の如く——殊に民主主義的、社會主義的要求に燃えてゐる人は、寧ろ、貧者階級にあつてさういふ要求に燃えてゐる人と同じく、或ひは夫以上に尊敬すべき人ではないでせうか。藝術家としての價値、人としての價値は決して、貧富といふ外的狀態によつて勘定さるべきものではありません。たゞその外的狀態を、いかに自己の中に取り入れるか、いかに體驗するかによつて定まるものです。これは判り切つた道理ですが、富者階級なるが故にといふ

理由で白樺派の人々の藝術が、時として、アンダア・エスチメートされる傾きがあるやうですから、私は特に以上、判り切つた言を敢てしたのであります。

思はず豫定の紙數を超過しましたが、序でに最近問題になつた「新しい村」について私の所感の結論だけを述べて筆を措きます。

武者小路氏によつて發表された「新しい村」は、あれだけでは、兎や角批評めいたことを云ふのはまだ早過ぎる感がないでもありません。實行としては無論のこと計畫としてさへ、恐らくまだその緒にもついてゐないだらうと察せられます。しかし、少くも武者小路氏の意見から推測し得る「新しい村」は、社會主義的傾向の一つの表現と見れば面白いが、現代の社會問題として見れば、餘りに意義がなさ過ぎます。餘りに夢想的で現實離れがしてゐます。あゝいふ回避的、逃避的でなく、どうしてもつと積極的な計畫にしないでせう。或る山奥に這入つて、そこに一つの村を開拓するなどいふことよりも、眼の前の生きた社會の中に開拓すべき「新しい村」がいくらもあるではありませんか。例へばウイリアム・モリスのマートン・アベーの工場經營のやうなことをやるのも面白いではありませんか。私は武者小路氏によつて提唱された「新しい村」の餘りに逃避的、餘りに好事的、餘りに遊戲的、餘りに夢想的であるのを遺憾とします。

▽白樺派の人々

田中純

今の世の中には、飛び離れて偉い人が居ない代りに、また飛び離れて馬鹿な人も居ない、どれ程馬鹿な人間でも、物を食べることを——食物を獲る方法ではない——忘れて餓え死にすることがないと同じやうに、どれ程偉い人間でも、物を食べることに全然こだはらないで生きて行くことは出來ない。一方に、貧富の隔りをます／＼大きくし、賢愚の差別をます／＼強くして行くやうな社會現象があると同時に、また一方には共同的利害觀念の必要を刺戟したり、優雅な生活の中に非優雅な一面があり、愚かな生活の中に愚かでない一面があると云ふ事實を發見させたりする機會が、ます／＼多くなつて行きつゝあることも事實である。兎に角、樣々な社會意志が、吾々の時代の生活を縫つて居る。從つて、少數の天才の意志が、全社會の意志になつたり、少數の愚物の意志が、全社會を動かしたりするやうなことは、だん／＼少くなつて行くに違ひない。

社會上の事實としては、天才主義は今やその痕を絶たうとして居る。しかし個人々々のテムペラメントとしては、天才主義は未だ未だ大きな力を持つて居る。さうした天才主義的な氣質が、人間の心に無くなる時があるか無いかさへも、吾々は斷言することが出來ないのだ。

世の中の人間を、飛び離れて傑い人間と、飛び離れて愚かな人間とに分けて見ることの出來る心は、もしくは分けて見たい心は、今の世では貴族的なテムペラメントである。それの出來ない心は、非貴族的なテムペラメントである。

同じやうに白樺派の人々とは云つても、その作品の持つて居る興味や、その主題や、その藝術的傾向は、それ〴〵の作家によつて可なりに違つて居るのだから、それを普通の意味で藝術上の一派として論じることは無理である。或る人は、彼等を人道主義者だと言ひ、或る人は彼等を藝術上の無技巧派だと言ふけれども、例へば武者氏と志賀氏との作品を、同じ意味の人道主義的作品だと誰が言ひ得るか。またこの二人の技巧に何か共通したものがあると誰が言ひ得るか。本統の藝術は全く個人の仕事である。それを或る團體の仕事に概括しようとする處に無理があるのだ。

たゞ、白樺派の人々を一つの群として考へる時に、私の頭に何時も浮んで來るものが一つある。それは、あの人達の間に、同じ傾向の或る氣質が、テムペラメントが流れて居ることである。而してその氣質は、恐ろしく天才主義的な、貴族的な氣質である。詳しく言へば、世の中の人間を——彼等自らをも加へて——飛び離れて傑い人間と飛び離れて馱目な人間とに別けて考へねば氣が濟まないやうな傾向の性格が、あの人達を特に濃厚に色づけて居ると云ふ事實である。

勿論、白樺派の人々の中にも、多少の例外はある。例へば、里見君などは、かうした傾向の非常に少い人である。しかし、さうした氣質が少ければ少い程、その人は白樺派の主流から遠ざかつて居るかの如き觀があるのも事實である。

かうした氣質には確かに人氣（ポピュラリテー）がある。何故ならば、大抵な人が、その少年期や青年期に於て、必ず一度は、かうした天才主義的な氣質によつて、自分自身を感激させる一時期を經過するからである。

しかし、現代に於て、かうした氣質の素朴性を何時までも持續し得る人は少ない。大抵な人々が、其後の様々な經驗によつて、この素朴性を磨りへらされて行く。或る人々は、全然痕迹がなくなる迄にそれを磨りへらしてしまうし、或る人々はまた、時々或る機會に、さうした氣質の表出を經驗する程度に、その素朴性を保留して置く。

白樺派の人々の傑い點は、彼等のこの異常なねばり強さにある。何時までもその天才主義的な感激性の氣質を、彼等自身に保留して居るばかりでなく、それによつて時代の感激を呼び起さうとする努力と信念とを失はないで居る點にある。吾々は彼等の幼稚を嗤ふことも出來るし、彼等の一般人の經驗に對する不遜を非難することも出來るが、しかしその爲めに、彼等のやつて居る仕事の價値を冷笑し去ることは出來ない。吾々のこの不幸な懷疑の時代に、兎に角あれ丈けの氣質の素朴性を保留して吳れ、あれ丈けの情熱を示して吳れることは、それ丈けで旣に吾々の感謝に値ひするではないか。

しかし彼等とても、何等までその素朴さを失はないで居られるかは疑

間である。現に武者小路氏が近頃書くものに見えるあの一種の焦燥は、かうした貴族的な氣質と、それを擲りへらさうとする或る他のものとの戰ひを、自らにして示して居るのではないかと思ふ。少くとも、氏の心內に於ける、貴族的な氣質と非貴族的な氣質との對立が、漸く明になつて來て居ることは事實である。

近頃、武者小路氏を中心にして、新らしい一種の共產村を建てることが計畫されて居るそうだが、これなどは最もよく、この二つの氣質の對立して居ることを語るものではないかと思ふ。詳しい具體的な計畫が發表されて居ないから、未だそれを批評することは出來ないが、あゝした計畫を武者氏がするやうになつたこととそのことに對しては、充分理解が出來ると思ふ。

一面から云へば、それは矢張り氏の貴族的な氣質の表現である。あれ程偉い人間と馬鹿な人間とが判然と見えて、あれ程馬鹿な人間が嫌ひでは、馬鹿な人間を除外した一つの王國でも建てねば、恐らく生きてる氣はしないだらう。しかしまた他の一面から云へば、それは氏の非貴族的な氣質の變態な表出でもある。氏の言葉の中にあるあの共產主義者らしい口吻がそれを證據だてる。一方では何人をも新らしき村に受け入れて各人の共同經營に委せると言ひながら、他方では村人達が武者氏を信じ切つて異れることを豫想して居るなどの矛盾も、要するに氏の內心に對立して居る二つの氣質の矛盾の表白に外ならないのだ。

この二つの氣質の對立が、これから何う片づいて行くか？ それが白樺派の文藝運動の將來と、所謂「新らしき村」の運動の將來とにかゝつて居る興味深い問題ではないか。

▽「白樺」を代表する武者小路氏

久米正雄

白樺の人たちの中で、好きな人は澤山あるけれども、人間として誰に一番興味があるかと云はれゝば、自分は矢張り武者小路氏だと答へる。此の人は何と云つても白樺派の代表的人物である。「白樺的」などと云ふ言葉は、此人あつて初めて出來たやうな氣がする。其意味で此人の「白樺的な、餘りに白樺的な」所が、一部の人を強く引きつけると共に、又一部の人にひどく反感を持たれるのだらう。武者小路氏は敵も多いが味方も多いに違ひない。自分なぞも人間として一番好きになれるのは或ひは此人ではなからうかと今だに思つてゐる。が、此人は、全部的に傾倒して行かないと氣嫌が惡いらしいので、いゝ加減な態度で訪問でもすると、ゲーテを訪ふたハイネの憂目、セザンヌから受けたゴーガンの恥辱を受けはしまいかと恐れて、まだ個人的に逢つた事はない。

武者小路氏の人格の私に興味を與へる所は、一言にして云へば「可愛い」からである。どんなに强がつても、偉らがつても、「野島先生の夢」のやうな出鱈目を書いても、如何にも可愛いゝ氣がするからである。私

は決して氏を見下して云つてゐるのではない、大人にも可愛い大人があるものである。

氏はきつと本來可愛い、いゝ人なのである。それが氏の鳥渡した敗けぬ氣で、その本性の上にいつも自己誇大と、自己輾旋のドライブをかけてゐるのである。私は白樺の六號なぞを見る毎に、大部分にはひどく眞個の事を欲はり乍ら、又氏自身の自信や何かの問題に觸れると「よもや本心ではあるまい」と、思はるゝ節が往々ある。若しあの自信に一種自己暗示的な誇張がないとしたら、眞に氏は大正の大ドンキホーテであつて、氏の存在それ自身が一個の奇蹟のやうな氣さへする。氏が世界的大創作の豫約期を、五年乃至十年と切る如き、私は何だか餘りに空威嚇を覺ゆるものである。

氏は書いたものだけを見てゐると、今迄に一度も悲觀やら自己嫌惡やらに陷つた事が無いらしい。其意味で氏の人生觀は正しく煉獄の火をくぐらぬ人生觀には違ひない。之を具體的に云つても、氏は失戀をしたらしいが、それも殆んど成人しない時代の事らしく、長じて文筆に携るやうになつて以來は、自分が全部的に認められないと云ふだけの苦勞しかしないらしい。人類を救はうとしても救ひ切れぬ苦勞しかないらしい。自己を救はうとしても、救ひ切れぬ苦しい破目に會つたためしなどは、唯の一度も無かつた如く思へる。

今度の新らしき村の計畫なぞも、自分が堪らなくなつてした事ではなくて、矢つ張り氏の一種の趣味から生じた如く思はれる。併しいづれにもせよ、あゝ云ふ事を敢行出來るのは、吾が武者小路氏あるのみである。大正のヨハネ、大正のヴインチ、大正の透谷たる氏の健在は、やがて「後に來る者」の偉大さを豫約する點だけでも、祝福するに足るものである。「新らしき村」の誕生は、やがて眞の「新らしき鄕」の出現を豫約せぬでもない。

たゞ私は今後の武者小路氏に、もし氏が陰性の神經衰弱にでもかゝつて、すつかり自信を失くして了ふか、又は五年十年經つて、思ふやうな創作が出來なかつた場合、どんな顏をし、どんな態度を取るか、心配し乍ら興味を持つてゐるものである。今迄の日本の創作と比較する時、氏の創作には確かに一頭地を拔いてゐるものがある。が併し、問題は要するに、五年か十年内の仕事にあるからである。

氏は七度倒れても七度起き上ることをモツトオとする人である。しかも私には氏自身、一度も倒れた事のない人のやうな氣がしてならない。氏が血まみれに倒れて、しかも起き上るのを見たいと思ふもの、豈私のみでもあるまいと信ずる。

▽一點の赤い火

上司小劍

白樺派の人々と言つても、私は殆んど其の人を知らぬ。有島生馬氏に

二三度會つたのと、武郎氏にはいつだつたか、帝國劇場で、私の背後の椅子に生馬氏が居られて「兄さん、兄さん」と傍の上品な紳士を呼んで私に紹介されたので、初對面ながらも極はめて親しみの深い言葉つきで少しばかり話をしたことがあるだけである。作物は他の人のも少しづゝは讀んでゐるし、武者小路氏のなんぞは、ズッと初期のものをも讀んで、あの人の思想には敬服もしたし、また餘りに幼稚だと思つたこともあるが、要するに人間を知らぬので、今一息何うも傾倒する譯には行かぬ。それは書いたものを讀んで感心してゐても、其の人に會つてみて愛想の盡きるといふやうなこともあるし、書いたものを讀んだゞけで、無條件に其の人のえらさを信じなければならぬこともあるが、この同じ島國に住んで、同じ時代の空氣を吸つてゐる人ならば、矢張り直接に其の人を知らなければ、書いたものもよく嚙み締められない。

私は白樺派と世間から呼ばれてゐる人の中で、一二度でも其の人に會つたことのある有島武郎氏と同生馬氏とのものを一番多く讀んでゐる。さうして一番感心もしてゐる。何うもこの二人の人には、決して濫作がないといふのを信ずることが出來るだけでも有り難い。初めから安心して讀める。特に武郎氏のに於てさうである。無論氏等と私たちとは物を觀る立場が違ひ、住んでゐる國が異つてゐるから、(境土上の國ではない)書かれるものも矢張り、道が變つてゐて、幾ら耳を澄ましても、此方の調子に合つて來るといふことはない。氏等が何んでもない小ひさなことゝ觀らるゝものが、私たちには可なり大きなことで、私たちの馬鹿〳〵しいと觀ることが、氏等には重大なものであつたりする。

親しく會つた時に感ずる其の人柄な、春風のやうな温味は、氏等の作物にも其まゝある。私はこんな善き人々と、國を異にして住まなければならぬ今の世をば咒ひたいと思ふ。しかしながら、臆病な私は、血で血を洗ふやうな戰ひによつて、これ等の善き人々と國の併合を策したいとは思はぬ。無抵抗主義の世界平和、人類平等の理想をば、棚から落ちて來る牡丹餅のやうにして待ちたいと思ふ。果報は寢て待てといふことを、私は幼い時よく祖母に說き聽かされた。

一國の改革といふことになると、差し障はりが多くて、臆病者には手が出せぬが、「世界の平和」と高飛車に打てば、厭やな探偵もやつて來ない。ギロチンに載せられるやうな心配は毛頭ない。臆病者のストラッグルはこれに限る。

奇警な眼光と輕妙な文字とで、この矛盾の多い世の中のアラを拾ひ取り、摘し出して、冷笑したり嘲罵したりするのも、安全な戰鬪の一種であるが、これは何うも少しコセ〳〵してゐていけないのと、世間のみを觀て、已れ自身を知らぬ輕浮な態度がおどましい。いづれにしても、世界平和の理想ほど堂々たるものはない。

人間も動物の進化したものに違ひない。さうして、人間の社會と蟻や蜂の社會とは、もとより大差がない。宇宙の無限大に比べたら、この差は殆んど分らないくらゐだ。世界が蟻や蜂の自由にならないと同樣、人間の自由にもならない。けれども蟻や蜂は、其の能力の及ぶ限り社會の

組織を齊整して進歩の極に達してゐるらしいから、人間の現在のやうな亂脈醜態を現はすことがない。苦痛も煩悶も尠い。人間はなほ進歩の道中に在るのだから前途に横たはる幾多の障礙をストラッグルしなければならない。

何んだか餘計なことを言つて了つて、恥しいやうな氣がする。白樺派と言はれてゐる人々の多くは、私たちと立場が違ひ、國が異なり、道が變つてはゐこそすれ、前途の大きな理想に向つて突進し、戰鬪しやうとする其の大きな的の同じであることを疑はぬ。さすれば、雨霰雪や氷と變つてゐても、落つれば同じ谷川から、洋々たる大洋に注がうとするのは一つであると言へる。私がズッと前、白樺派なるものが、今のやうにわい〳〵と世俗の問題にならぬ折に、この一種の戰鬪信號ともいふべき小ひさな赤い火の點ぜられてゐるのを認めて、竊に尊敬してゐたのである。しかし一昨年から昨年頃のやうに、徒らな世間の空景氣に騷がれては、昔の自然主義文學の全盛明とやらを再現させたやうで、白樺派も些か世間といふ俗物から、いゝゝゝじや〳〵むじやにされたやうな形がある。しかし怜悧なるこの派の人々は、すツカリこの俗界の調子に乘ることなく、退いて沈默し出したやうに見えるから、諸氏の事業の大に今後にあることは確かである。

終りに、白樺の『新らしい村』といふことに就いては、まだ何も知らぬ私に、何んのいふこともない。田園や修道院は、よく生きた老爺の棄てどころになつたり、華嚴の瀧の代りに用ゐられたりしたこともあるが、『新しい村』は無論そんなことでないにきまつてゐる。

▽「白樺」の人々

江口　渙

■雜誌「白樺」が創刊されてから早くも八年の歲月が過ぎた。思へは長い月日である。その間に「白樺」は單に同人同志の「白樺」ではなく何時の間にか天下の「白樺」になつた。その間に於て大正初頭の文學史に人道主義時代と云ふ一エポックを劃すに到つた白樺派の努力は實に眼醒しいものがある。この派の中心を形造つてゐる作家は武者小路實篤氏を初めとして有島武郎、有馬壬生馬、里見弴、志賀直哉、長與善郎などの諸氏であつて、最初は謂はゞ單に學習院と云ふ學閥によつて結束したものとも見ることが出來る。然し最初から皆一個のトルストイアンとして出發しトルストイアンとして結束したのは無論であらう。その必然の結果として當時の文壇の主潮であつた自然主義思想に對して猛然として反抗するに到つたのである。然し同人諸氏が次第に成長するに到つて相互の作風の色彩傾向は次第に顯著な相異を示して來た。それとともに「愛の哲學」は二つに分れて一方は武者小路氏を先驅として長與氏を殿軍とした「人類の愛」「世界の幸福」に重點を置いた思想となり、一方は有馬武郎氏や里見弴氏のやうな「個人に對する愛」又は「ネキストゼネレーションに對

する愛」に重點を置いたものとなつた。そして今では單に作風の上からばかりでなく思想の上から云つても兩者の間には截然たる區別がある。

白樺派の諸作家の中で現在の最も世間の聲望を背負つてゐるのは云ふまでもなく有馬武郎氏である。眞に愛することは眞に生きることであると恒に力說してやまない有島氏の藝術にとつて必ず愛が藝術的要素の最高位に置かれてゐるとはもとより當然の事である。氏が說く愛の哲學の中で最も顯著なものは親の子に對する愛である。自己が自巳のネキストゼネレーシヨンに對する愛である。凡そ種の保存は自巳にとつてやがて自巳保存の別種の形式である。故に飽まで自巳を熱愛し尊重するものは同時に又自己の種を熱愛し尊重しなければ止まない。この意味に於いて有馬氏が「子を持つて知る子の恩」と云ふ新しいプロパーブを創出したその心持には充分同感する事が出來る。然し忌憚なく云へば氏が力說する「愛」の本體は一見主情的に見えながらその實むしろ甚だ主知的である。主智的であると云ふこの一事は氏が力說する「愛」の本體が氏にとつて性格的なものではなく、むしろ大部分後天的なカルチユアーの上に築き上げられた事の證左ではあるまいか。その結果か否か自巳の哲學の宣傳に對する此の態度も、とかく倫理的常識的となる傾きの見える處に私は一味の不滿を感じる。

有馬氏の作品には「カインの末裔」や「凱旋」の如き純藝術的衝動から生れたものと、「死とその前後」や「平凡人の手紙」の如き理想主義の宣傳から生まれたものと二種がある。そして私自身の藝術批判から云へば後者よりは前者の方が遙かに卓越してゐると云ふ事が出來る。殊に前者に屬する諸作に於いて屢々示されたる純藝術的構想力の豐富にして堂々たる事と、淵深なる古典的背景を具備した表現の恒に奔放にして强靭なる事とは、やがて氏が現在自任しつゝある愛の宣傳者としての有馬氏が何時かは純藝術家としての乃至は詩人としての有島氏にその席を讓らなければならない證左ではあるまいか。私はこの意味に於いて氏の將來に大きな變化の起るべきを信じてゐる。

有馬氏に比すれば志賀直哉氏はスケールに於いては稍々小さいかも知れないが藝術家としての素質に於いては遙かに純一無垢である。志賀氏が人生に對する凝視の飽くまで嚴粛にして透徹力の深甚なる事とその描寫の對象を的確に把握し至純に表現する能力を有する事とは現文壇に於いて多く其比を見ない。この事は昨年の文壇第一の傑作と云はれる「和解」に就いて見ても好く解る。あれほど激越なシンセリテイの迸出から生れた作品に於いてすら必ずその急所急所に對して充分なる正視と正しい客觀化とを施す事を忘れてゐない。この一言は氏が一面衷心からの「まこと」に生きる人であると同時に、他面に於いて頭腦の極めて明晰清澄な人であることを證據立ててゐる。その上氏の藝術的表出は可なりに多數のサイドを持つてゐる。「好人物の夫婦」の如き輕妙自在なものや、「襖」の如き人生の機微を極めてデリケートに表現したものや、「剃刀」の如き變態心理の開展を甚だ的確に描いたものや、その外殆ど一作毎に異つたサイドを見せてゐると云つても好い位である。然かもその悉くに確實な微

庭力と充分な實感が示されてゐるのは無論である。或る意味に於いて氏の作品は日本の自然主義が踏んで來た途の數歩先を更により正しく歩いてゐると云ふ事も出來る。實際日本の自然主義も志賀氏が踏んでゐるやうな途をかつて踏む事が出來たならばもつと大きな開展を見る事が出來たかも知れない。

■里見弴氏が心理描寫に於いて卓越してゐる事は無論今更云ふまでもない。殊に氏の心理描寫は多く主智的探求に依るのではなく、むしろその描かんとする心境の中へ自らをぐんぐんと入らせて行つてそれと共に推移展開しやうとするが故に、その描出し得たるものは好く生彩を帶びる事が出來るのである。然かもそれを覆ふに更に氏獨特な潑剌たる才氣をもつてしてゐる。これ氏の作品が恒に奔騰して止まざる溪水の如き姿態を有する所以である。唯氏の缺點とも云ふべきは餘りに才人であるがために時に自らの才に躓いて思はぬ不覺を取る事と同種類の題材を餘りに屢々蒸し返しこね返す事とである。

■里見弴氏に比すれば有島壬生馬氏は自然詩人叙情詩人としては更に卓越してゐるが心理解剖家としては遜色がある。氏の傑作と言はれる「死ぬほど」や「陳子へ」の如きさへその人生に對し人間心理に對する透徹力に於いては、遂にありふれたセンテイメンタリズム以外へ一歩も踏み出してゐない。然し氏の特質である自然詩人乃至叙情詩人としての卓越はその缺點を補ふに充分である。かの「ゴンドラの一夜」に於ける淸麗な月光の如きリリシズムや「蝙蝠の如く」や「ボージユの森」に於ける洋靄の色彩派(カラーリスト)の手法を移した色と光と影との鮮かに交錯調和した自然描寫や「獸人」に於ける巧緻な記述は全く氏に非んば遂に成しとげ得ざるものである。かう云ふ點に於いても私は氏の近作よりも舊作の方が好きである。

■長與善郎氏は何時も思ひ切つて長編の力作を書く人ではあるが、いまの所ではまだ海の物とも山のものとも定つてゐない。氏の長編には隨分力強い處も見えるが、力强いのに委せてぐんぐん書いて行くためか可なり無駄も多い。氏はもつとその作品の單純化に對して心を用ゆれば好く大成することが出來るだらう。但し長與氏は白樺同人中最も先驅者武者小路氏の好い方面の感化を受けてゐる人である、この點に於いて氏はまことに出藍の譽があると云へるかも知れない。

■私は武者小路氏を藝術家乃至思想家としてよりもむしろ一個の優れた人格者として取り扱ひたい。何となれば氏の作品は大抵の場合氏の理想主義の單なる傀儡に過ぎないために可なり實在性を缺如してゐる。然しその間に示されたる氏の人格そのものに對して充分尊重すべきものがあるからである。氏が長い間人道主義の先驅者として絶叫して來た「人類的愛」の宣言は氏にとつて充分性格的なものであるが故に、何時も思索らしい思索の篩をくぐらない單純至極なものであるに關はらず好く熱と力とを保持して後進靑年の心を動かすに足りる。實際氏の人道主義はその單純な處、生一本な處、無反省に勇敢な處が却て後進靑年の心を支配するのかも知れない。この點に於いて藝術家思想家と云ふよりも人格の人、感化(インフルーエンス)の人、と云ふべきである。

■然し氏の人道主義は全く單純至極なむしろお粗末至極なものである。第一氏の人道主義の中には何等經濟的觀念を含まない。その上何等の對社會的な實行的要求を含んでゐない。今後の社會に當然起る可き階級戰、勞働問題、財の獨占的傾向並びに大資本主義に對する處分などの社會問題の委目に亘つて氏は怖らく考へて見た事もないであらう。これ堺枯川氏などの實行家にとつて非常な不滿を感ぜしめる原因である。

■前號の本誌に於いて堺枯川氏が武者小路氏の白樺村建設は社會的には何等の影響もないであらうと云つたのは確かに眞實である。無論武者小路山房の建設は究極に於いてトルストイが晩年に於いて耽溺したかの地主的遊戯と同一結果になるのは明白である。然し武者小路氏一個にとつては左まで無意義ではないであらう。何となれば餘りに長い間人道主義のために力戰した結果氏は今創作的に大分疲れてゐる。故に日光の山奧の淸澄の山氣に打たれて靜かに捲土重來の力を養ふ事は氏にとつて最も必要である。その上白樺村の村長にでもなつて小作人を相手に實人生の生きた學問を修める事が出來たら、氏の作品も生田長江氏などに自然主義前派と云ふが如き名稱を附せられる事がなくなるであらう。然しことに依れば地主的遊戯がすつかり氣に入つて氏は案外收つて終ふかも知れない。私は氏がそんな事にはならずにもう一度文壇へ捲土重來せんことを熱望する。そして「自然主義以後」になり切ることを熱望する。

■又堺枯川氏は武者小路氏の日光行きが加藤農園、蘆花別莊と同一になるだらうと云つてゐる。然し私はさうは思はない。加藤農園のことは知らない。然し武者小路山房は蘆花別莊と同一にならない事だけは確である。武者小路山房は東京から遙々訪ねて行つた崇拜者を粕谷に於ける如く素氣なく追ひ返すやうな失敬な事は無いだらう。否、武者小路氏御手植の苹か何かで出來るだけの御馳走をした上に歸りの旅費位はくれるかも知れない。この點に於いて武者小路山房は蘆花別莊にまさる事萬々である。

▽「白樺」派の批判

柴田勝衛

今日の作家は皆な夫れ相應に思想と云ふものを有つて居る。尠くとも斷片的な思想ぐらゐなら大抵な作家が有つて居る。寧ろ有たない人の方が尠いと云つても可い位だ。何となれば今日の文壇は、思想の無い作家を容るる可く、昔のやうに寛大ではないからである。然かし乍ら其の思想が生活と渾融し、人格の背景を成して居るやうな作家、否な其の思想が直ちに生々した力となつて、恒に他の者に働き懸けるやうな作家を求める段になると、これはさう澤山ない。輙ち今日の文壇にはアイヂヤを有つた作家は多いが、アイヂヤ・フオースを有つた作家は尠いとも云ひ得る。所が個々「白樺」派の人々の中には、單なるアイデヤでなしに、所謂アイデヤ・フオースを有つた作家が發見されたのであつた。それが則ち

今日「白樺」派の人々の文壇に認められた動機でもあり、又其の將來の囑目されて居る點でもある。武者小路實篤、長與善郎氏等の人道主義的な作品には勿論の事、現實に深く根差した、志賀直哉氏の印象的な短篇にも、或は又有島武郎氏のデモクラチツクな諸作の中にも、露骨と隱約との相違こそあれ、凡て此のアイデヤ・フオースの發露を見ざるは無い。或る理想を目指して進みつゝある作者の本然的生活から生れた熾烈な欲求が、其の作品を通して讀者にアピールされて居ないものは無い。此の特質は彼の泉鏡花氏に私淑し、好んで古い言葉を現代の言葉にまで活かして使はうとして居る里見弴氏の作品中にさへ、容易に看取される所のものである。世間の人々は「白樺」派の人々を一括して人道主義者と見做す時に、武者小路、長與氏等と有島氏三兄弟との作風の相違に驚かされるであらう。又志賀直哉氏の作風が此等の諸氏と更に一層違つて居る事に驚かされるであらう。然し此れは世間の人々がイズムと云ふものに囚はれた觀方をして居るから驚かれもするので、もつと自由な觀方をするならば別段不思議な事でも何でもない。各自の表現に個性の差別相の現はれるのは、文學の本質から云つても寧ろ當然の事である。自分は唯だ「白樺」派の重なる人々が、今の文壇に於て此のアイデヤ・フオースを最も豐富に有つて居ると云ふ點に、此の一派の人々に共通な特色を認める。其のアイデヤの内容には無論人道主義も含まれて居るだらう。然かし單にそれ丈と定めて終ひ度くない。何となれ作家に取つては人間が主で、イズムは從であるから、そして作家の一生の間に、イズムは何う變つて行くかも知れないからである。然かし此のアイデヤ・フオースの力は、今の文壇に取つて全く驚異に値す可き一つの現象である。彼の自然主義を代表して居る、ニヒリステツクな作家正宗白鳥氏にも然うしたアイデヤ・フオースが認められぬ譯ではない。けれども白鳥氏の人生に對する否定が、現在の程度に止まつて更にもう一歩徹底的に踏込んで行かない以上、氏のアイデヤ・フオースは本當に生きて働く所まで行かぬのではあるまいかとも想はれる。恰度此の白鳥氏の否定と反對の方面に摑つて、人生の肯定を目指したのが、「白樺」派の人々である。「留女」の作者志賀直哉氏にも左様したアイデヤ・フオースがある。「死と其前後」の作者有島武郎氏にも之がある。「蝸牛の如く」の作者有島壬生馬氏にも之がある。「俄あれ」の作者里見弴氏にも之がある。「その妹」の作者武者小路實篤氏にも之がある。「項羽と劉邦」の作者長與善郎氏にも之がある。否なそれ許りではない、柳宗悅氏の哲學にも之がある。其處には固より人によつて力の過不足はあらう、けれども自分は此等新人の過去十年間に於ける文學的生活から贏ち得た此の力、此の生命を我が文壇の爲めに、我が社會の爲めに頼もしく思ふ。然かし夫れと同時に、同じく「白樺」派の人々と云つても、其の末流者の中にはアイデヤが單なるアイデヤに止り、アイデヤ・フオースとなつて作品の上に働き懸ける可く、餘りに影の薄い人達の尠くない事を見逃がす譯には行かない。

○

此のアイデヤ・フオースの歸結は實踐躬行に在る。例を遠くレーニン

トロツキイの政治に求める迄もなく、近く武者小路實篤氏等の「新しき村」の計劃に見出す事の出來るのも、此の場合省察を促される所の多い問題である。「新しき村」は一寸想像すると、隱遁的生活の變態のやうに看られる懼れが無いでもないが、尠くとも武者小路氏が雜誌「白樺」の五月號に、其の新計劃を空想的に書いた「新しい生活に入る道」と云ふ記事に就いて見るに、それは隱遁どころか社會をより善くせんが爲めの協力的生活に外ならない。而して氏は此のユウトピアの建設に向つて、自分の思想を他人の前にアピールして居るのである。自分の善いと信じた事を他人にも勸めようとして居るのである。自分の幸福を他人にも頒たうとして居るのである。それ故これは從來我が國にも屢々其の例のあつたイゴイステックな又はニヒリスチックな隱遁者の生活と同日に談ず可きではない。然かし乍ら此の問題は斯くの如き欲求を有つに至つた氏の思想を考へさせるよりは、寧ろ此の計劃が果して可能なものであるか何うか、若し可能だとすればそれが何の邊まで生長して行くものであるか何うかを想はするものである。尤もお互ひに理解のある、堅忍な志を懷いた極く少數の同志が集まつて試みるなら、敢て實行の出來ない事でもあるまい。遣れる所まで遣つて見るもよからう。だが玆に一つ務應を要する問題は、有らゆる生活問題が經濟的基礎の上に築かれて居ると云ふ事の外に、もう一つ藝術が理想と現實との撞着から生れると云ふ事を忘れてはならない。凡そ藝術家の心境には、此の理想と現實との二大王國が恒に相對抗して、其處から藝術としての力が生れて來るものである。然るに其れが若しも「新しき村」の生活に入つて、極端な自己卑下の精神に慣らされたなら、藝術としての大切な力は何處から湧いて來るだらう。自分は左様した强ひられた謙讓心から全く精神的に枯死して了つた幾人もの僧房生活者を見て來て居る。又此の反對を考へて見て、假りに藝術的良心の自由が許されたとしたら何んなだらう。文學は元來貴族的な精神から生れるものだと云はれて居るやうに、其等の人々の自尊心は己れの愛妻に向つて「馬鹿」と叫ぶより更に切實な醜い輕侮を他人の心に投げ與へるやも測り難い。我々の日常生活には盈されざる自由も尠くない代りに、此等の無氣力を刺喫し、此等の放埒を縛めて與れる經濟的乃至は社會的の制約がある。と云つて自分は何も現在の自分等の生活を讃美する者ではないが、「新しき村」の建設も亦現在の此の生活と同じく、矢張り理想を逐うて進みつつある生活過程の一階段であつて、實際に着手してみたら其處にはまたそれ丈新しい問題が横はつて居る事であらうし、現に角新しい民約を作り出すことは小說や戲曲を作つたり雜感を書いたりするより餘程困難な仕事であらう。

新刊紹介

每號頁數增加の爲め、新刊紹介は數ケ月間掲載するの機を得ざるは寄贈書肆、著者並びに讀者に對して申譯なき次第なり。本號亦豫定の頁數に達したることを以て詳しき紹介をなすの餘白なきも、徒らに遲延に遲延を重ねるよりは、一先づ書名、定價、發行所のみにても記載し置くの至當なるべきを思ひ、左に最近數ヶ月分の寄贈書の一部に對する右三點を列擧することゝしぬ。各位に於てよろしく諒恕せられんことを乞ふ。(編者しるす)。

▽經濟學原論(定價四圓五十錢) 飯倉幡司譯 實文館發行

▽社會と經濟(定價三圓八十錢) 津村秀松著 實文館發行

▽戰爭と經濟(定價三圓) 津村秀松著 實文館發行

▽德川慶喜公傳(定價二十圓) 澁澤榮一編 富山房發行

▽近世哲學史(上下)(定價各二圓二十錢) 北聆吉譯 早大出版部發行

▽修道百話(定價七十五錢) 村田無道著 日東堂發行

▽信の內村鑑三と力のニイチエ(定價一圓三十五錢) 湊謙治著 警醒社發行

▽髑髏の皮(定價三十五錢) 上司小劍著 新潮社發行

▽死(定價五十五錢) 有島武郎著 新潮社發行

▽ルーテル(定價二圓) 村田勤著 實業の日本社發行

▽英國戰時の努力(定價一圓) 加藤直士著 實業の日本社發行

▽人のアラ世間のアラ(定價七十五錢) 生方敏郎著 來山堂發行

▽漱石俳句集(定價一圓) 岩波書店發行

▽美術の都(定價一圓六十錢) 澤木四方吉著 日本美術學院發行

▽俳人子規(定價八十錢) 木下春雄著 實業の日本社發行

▽月並研究(定價一圓) 村田義一著 實業之日本社發行

▽日記一年(定價五十錢) 新潮社發行

▽俳句提唱(定價八十錢) 荻原井泉水著 層雲社發行

▽一燈錄(定價一圓) 笠田敏野著 國の友社發行

▽民本主義について(定價一圓二十錢) 室伏高信著 上田屋發行

▽支那鐵道概論(定價一圓八十錢) 石川石代著 鐵道時報發行

▽最善生活法(定價三圓) 三戶、秋穗共著 國民書院發行

▽露國革命と社會運動(定價一圓) 昇曙夢著 國民書院發行

▽露國革命の眞相(定價八十錢) 內仁、矢野共著 博文館發行

▽世界史論進講錄(非賣品) 興亡史論社

▽君主經國策(非賣品) 編纂發行

▽羅馬史論(非賣品) 同

▽生命の文學(定價一圓六十錢) 松浦一著 實文館發行

▽世界の衣食住(定價二圓四十錢) 櫻井鷗村著 實文館發行

第三十版

德富健次郎著

新春

□三六判四百六十頁□
□綠金裝羽二重表紙□

定價壹圓六拾錢
送料——金八錢

□著者スケッチ色刷二葉□
□特撮寫眞版五葉□

龍舌蘭は六十年で花が咲く。著者は人生五十にしてやつと「新春」に到達した。それ程彼が負荷は重く、束縛は強く、苦闘は長かつた。彼が「新春」の歡喜の深大なる所以である。

本來の面目、赤裸の自然に復へつた一のアダムが一のイヴと天人の前に晴れて一になる時、其處に新天地が開かれる。醒めたる一對の増すに從つて世界的イルミネーションは次第に點火される。爆裂彈にあらず、砲銃火にあらず、一切の强制を須ひぬ眞の革新は其處から生れねばならぬ。「過去」の抑壓に苦しめられ進出の路を容易に看出し得ぬもどかしさに焦躁し或は自棄する青年男女に向つて、老少の下壓上壓の中間にはさまれて苦しまぎれの冷笑若くは妥協に遁るゝ中年男女に向つて、若い生命の上壓を苦しみ妬む老年男女に向つて、「新春」は胸を開いて語る。彼は已に貳萬五千人に語つた。彼は更に一人もヨリ多くの人に語りたい。

何故なれば、「我は復活也、生命也、我を信ずる者は死ぬるとも生くべし」と著者の身を假つて宣するは卽ち自然の聲で、自然は一切を愛するからである。

東京京橋三十間堀三丁目
■ 福長書店 ■
振替東京四〇四六六番

（中付三の二）

依り御申込つ

目
數

（内）

第一編　文學的内容の分類●文學的内容の形式●文學的内容の基本成分●文學的内容の分類及び其價値的等級　第二編　文學的内容の數量的變化●Fの變化●fの變化●fに伴ふ幻惑●悲劇に對する場合　第三編　文學的内容の特質●文學的Fと科學的F●

版る

郵稅金八錢

炎熱の裡・黄塵の巷に在つて、平凡なる俗務に惱殺せらるゝ人士も、一度本誌を手にすれば、其怪奇異常なる事件と思想に、心機一轉の爽快感を飽喫し得ん。

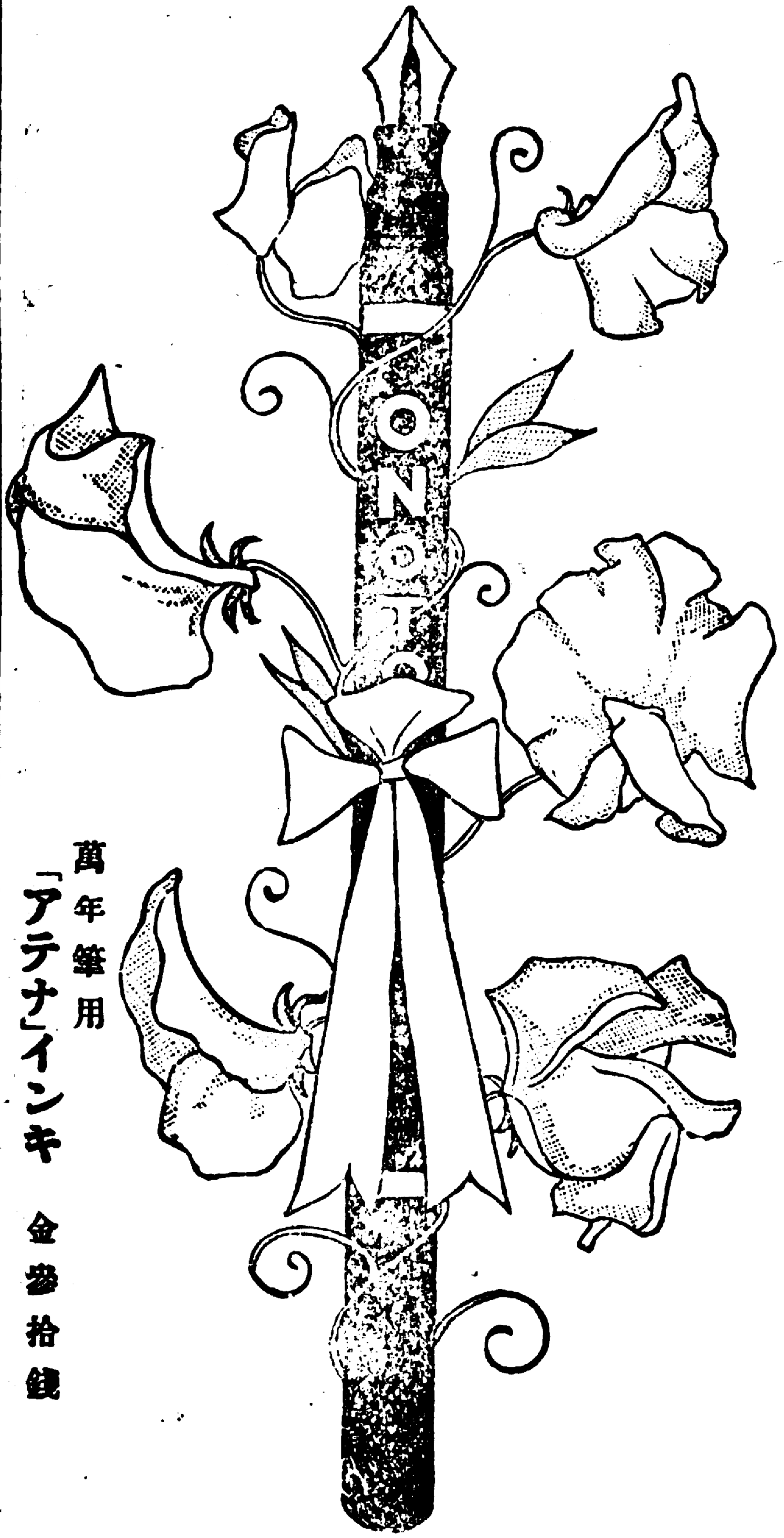
▽中央公論臨時增刊『秘密と開放』號△

▼定價六十錢郵稅四錢▲

オノト萬年筆
オリオン萬年筆
アルピオン萬年筆

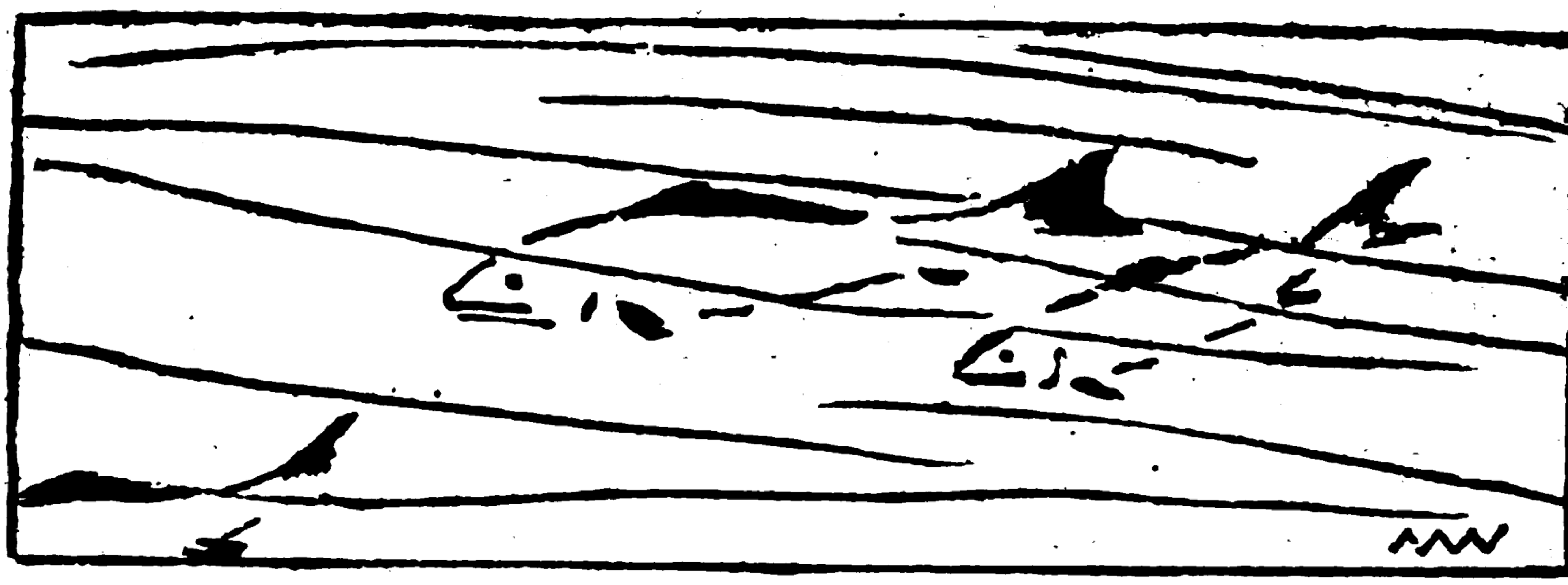
無飾金七圓以上
飾付金八圓以上
無飾金貳圓八拾錢
飾付金五圓五拾錢

送料各金拾二錢



萬年筆用「アテナ」インキ　金參拾錢

東京日本橋通
丸善株式會社
大阪心齋橋筋
京都三條通
福岡上西町
仙臺國分町



李太白

A fairy tale

佐藤春夫

あなたは、支那の李太白といふえらい詩人を御存知でせう。さうです。その人は、紀元八世紀ごろの人です。さうして、そのころにはこのわれわれの世界にも、面白いことが只今よりももつと澤山あつたものと見えます。李太白その人に就ても、さまざまな面白い話が傳へられて居ます。李太白のお母さんは、宵の明星が懐に飛び込んで來たと夢みて、この大詩人を孕んだのでした。さうしてこの星の精を享けて生れて來た人は、自然と普通の人間とはちがつて居ました。その人は謫仙人だつたのです。何か身に過があつて、仙界から俗界へ——このわれわれの世界へ、流し者にされた人だつたのです。このことはやはり當時のえらい人で、賀季眞といふ人が、李太白の詩を一目見ると、直ぐそれを看破してこの方、誰しも知らないものはありません。

この賀季眞といふのは、當時、太子の賓客になつて秘書監といふ役目を

つとめて居た人でしたから、李太白の噂は、賀季眞の口から、時の天子の玄宗皇帝といふ方のお耳に入りました。天子といふものは、恒に、立派なものや珍らしいものや美しいものがお好きなものですから、わけてもこの玄宗皇帝といふ方はさう云ふ方でありましたから、この珍らしい天才のことをお聞き傳へになると、天子は、直ぐさま麒麟殿まで文章を獻上するやうにと、李太白にお命じになりました。李太白は天子の仰を有難くお受けして、早速一篇の文章をお目にかけました。それを御覧になつた天子は、一方ならずお喜びになつて、李太白を金馬門まで急いでお呼び出しになりましたが、其處で翰林學士といふ名譽をお授けなされました。これ以來、天子は李太白と一緒にお遊びになることを、樂しくお思召すやうになりました。ところが、一體、李太白は非常な酒飲みで、天子の御前でも、何でも、一向憚らずに酒ばかり飲んで居るのでした。或る時などは、天子が御舟遊びのお仲間へ李太白を加へやうと、彼をお召しになつたとお思ひなさい。すると、彼は酔つぱらつて居て、

「酒を飲んで居る間、私は仙人でございます。」

と、天子のお使ひに對つてさう答へたきりで、天子のお召に應じようともしません。こんな事が度々でございます。けれども、天子は、そんな事を少しもお叱りにはなりません。反つて面白いことに思召してゐらつしやいます。天子には、李太白のほんたうにえらいことがよくわかるので、李太白をよほどお好きなのでした。

ところが、或る日の事でした。天子は宮殿の沈香亭で、珍らしくもないお酒盛りを初めて居ました。さうして歌をうたふのを聞いて居られましたが、どれもこれもお氣に召しません。それは皆古めかしくて、

退屈なものばかりでした。そこで、天子は、何か新作の歌でも欲しいものだと思ひ立たれるのでした。さうして李太白をお召しになりました。李太白はこの時にも、やはり何日もの通りにぐでぐでに酔つて居て、殊に、その日は殆んど前後をも辨へない程なのです、けれども天子の御聲であるから、魂が仙界へでも飛び去つてしまつて、その脱殻でもあるかのやうに打倒れて居る李太白の體を人人は屍をでも運ぶやうな工合にして、やつと天子の御前まで連れ運んでまゐりました。さうして李太白の顔の上へ、水を吹つかけます。李太白ははじめて少し酒から覺めたらしく、きよとんと目を瞬ります。これを御覽なされた天子は、いと興ありげにその李太白を見やりながら、勞るやうなお聲で、

「李太白よ。これ。目を覺して私の傍に居るこの美しい妃を、おん身の美しい文字で飾つてやつてはくれまいか。おん身のやうなえらい詩人は、我々に美の新らしい見方を教へてくれるものだから。」

と、さう仰せられました。するとお側の人人のうちの一人が、氣を利かして、李太白の手の指の間へ筆を挾ませてやるのでした。これを見て、もう一人はまた彼の膝の前へ紙を展げるのでした。天子のお聲で我に返つた李太白は、坐り直さうとしましたが、靴が邪魔になつていけません。そこで人人の一人に言ひつけました。

「ちよとこの靴を脱いで下され。」

さう言はれたのは、高力士といふ身分の高い家柄の貴い人でした。天子はただ默つて笑つて見て居られます。高力士はやむなくその貴い身をかがめると、自分自身の冠でさへめつたには脱がないその手で、李太白が投げ出した足の靴を脱ぎましたが、思はずも險しい目をしました。靴が脱いで貰へると、李太

白はまた一人の人に言ひつけました。

「ちよつとその墨を磨つて下され。」

さう言はれたのは楊國忠といふ人でした。この人は玄宗皇帝が最も愛して居られた妃の楊貴妃の弟なので、姉さんのおかげで世間ではもとより、宮廷のなかででもよほど巾を利かせて居た人なのです。墨が磨つてもらへると、李太白は、おもむろに墨を含せた筆の穂尖から、蠶が絹絲を吐くやうにすらすらと三篇の詩を綴り出しました。それ等の間、高力士は楊國忠にむかつて、何かしきりと囁いて居るのでした。すると、自分の事が歌はれるといふので、李太白が書きくだす一字一字をぢつと見おろして居た楊貴妃の耳もとに、弟の楊國忠の低い聲が語られました。楊貴妃は弟の言葉の意味がわかつたのかどうか、ただこともなげに笑つて、あでやかに頷きました。そのかがやくやうな笑ひのなかからは、あの西域の薔薇の水だといふ換骨香のやうにいみじくも豊かな香があたりに湧き漂ふやうで、見る人の身をも心をもうつとりさせるやうな笑顔でした。併し、そのかげに恰も薔薇の花のやうな刺を匿して居ることを知るものは、ただ妃自身と、高力士と、楊國忠とがあるばかりでした。高力士は、李太白が今書いた詩には、妃を諷刺し嘲罵した一句があると言ひ出したのです。それは妃が天子の外に別の人のことを心に思うて居るに違ひないといふ意味だといふのです。

寶帳のかげに、夜更けてから、ひそかに語り出された楊貴妃のささやきは、何ごとであつたか、それをわれわれは知るべくもありません。ただ天子が后のその言葉を斥けるわけに行かなかつたことだけは、事實によつて知れます。天子は李太白をあの通り深く愛しては居られましたけれども、愛妃ほどに

愛して居られなかつた事も是非ない事です。

間もなく、或る日、天子から金と錦袍とを賜はると、李太白はもう宮廷詩人ではなかつたのです。曾ては仙界から放逐された李太白は、今はまたかうして人間の皇帝の宮殿からも放逐されました。彼が天子の宮廷に居たのは、僅に三年ばかりでした。

長安の都を立ち去るやうになつた李太白は、わが身をあの古の謝安石が、暫く東山に世を忘れたことにひきくらべながら、都を北にのこして、南の方、汴梁、金陵、宣城、秋浦のあたりをさすらうて居るのでした。それは彼が人間の姿でこのわれわれの世界へ出て來た時の故郷に近い地方です。かうしてさすらうて居るうちに、幾篇かの淋しく哀れな詩が出來ました。髮は白くなりました。或る時には清障の縣令をして居る甥を訪ねたり、或る時には廣城の宰をつとめて居る從兄をたよつたり、或る時にはまた舊友である道士を、その道觀に訪ねて行つて、仙丹を錬つて居る舊友のそばで、鏡にむかつて白髮を歎きながら身の老いを歎くのでした。李太白は、もはや、歳六十を越えて居たからです。

こんな老いの身を、この上にも苦しめようといふのでせうか。李太白の身の上には、又しても災難がふりかかつてくるのでした。それは支那の歴史に名高い安祿山の亂です。圖らずも、この戰の影響が、李太白にまで及ぶことになりました。「私の故鄕は名馬の產地です、名馬を澤山獻上いたしますから」と、胡地へ歸つて兵馬を集めて來た安祿山の謀叛の戰の最中に、永王璘といふ人が、南方から兵を起したのです。この人は皇族でした。さうしてそれは勤王の戰であつたのに、永王璘は勅を待たずに兵を擧げたといふので、鄱陽湖のあたりまで來たころには、反官軍の爲めに喰ひとめられるやうなことになりまし

た。これには政治上の關係で何か深い仔細があつたのでせう。兎に角、永王璘は反軍の大將といふので、捕へられて斬られてしまひました。この日頃、李太白はしばしば永王璘と往來する間柄であつたことが、やがて李太白をもこの戰の關係者だと疑はせるのでした。こんなわけで、李太白も一時は囚はれとさへなつたのです——後に善い友達の奔走で赦されるやうになりはしましたけれども。

こんな境遇になつた李太白は、仙界を戀ひ慕ふこころがいやが上にも切なくなりまさります。それにつけても、酒と詩と月とを、彼は今更に一層愛しないでは居られません。月を飽かずも眺め入る時、酒に醉ひしれた時、詩を思ひつめる時、それらの時こそ正しく仙界の時であります。それは刹那であつて然も永遠であるからです。月と詩と酒と、それは李太白にとつては、言はば、有難い魔法の器です。俗界に逐はれて來た李太白は、それによつて、僅の間ながら仙界へ歸るのです。李太白はそれらのなかだちで、あの忘れ難い故鄕である仙界を、ふとありありと見ることが出來るのでした。李太白の仙界に對する鄕愁は、かうして僅に慰められるのでした。

さて、それは或る初秋の夜のことでございました。李太白は舟を石江の牛渚磯に泛べて居ました。もとより船には酒を置き、空には月が懸つて居るのです。ただ彼の身のまはりには親しく心のうちを語り合ふべき友達とてもなく、我と我が影とそれに月と、相對して三人だけの宴でありした。影と形とは互に歎きあひ、月は高く中空から彼等の歎きに答へるのです。遠く西蜀の方から流れ出す楊子江の水は、ひとたび中途で分れるけれども、石江のあたりまで來ますと、再び漢水の流れと合して、洋々たる大河になつて居るのに、わけてもその夜は、夜の影と月の光とが生み出すいみじき作用によつて、水のおも

ては一しほに涯しもなく見えるのでした。ここには旅びとを乗せて江を横ぎるために、楊子江にただ一つといふ渡船場があるのですけれども、夜も更けたこととて渡舟の帆影も見えません。目をさへぎるものもない水の上には、ただ月の影ばかりがきらきらと水にうつつて、そよかな風のまにまに、或は長く、或は幅廣に揺れ動いて、そのなかを李太白の舟は、舟そのものがもの思ひに耽つて居るかのやうに、靜かに、動くともなく動いて居ます。舟の主は杯を手から放さない。又、目を月から放さない。心には飄颻たる思ひのなかに、歎きが酒のやうに溢れて居ました。彼は端なくも日本の晁卿――安部仲麻呂――を思ひ出すのでした。故郷に歸らうと企てゝ、歸ることもならず、たゞ海の上の遠い月を眺めて、この月こそ故郷のあの美しく優しい形の山の上に今しもかかる月であるかと、悲しんだ人の心は、やがて李太白自身の悲しみであつたからです。李太白は思ひつゞけました。なるほど晁卿の故郷は遠い。しかし李太白の故郷は尙ほ遠い。それは天であるから。晁卿は再び歸れる日がないとも限るまい。けれども自分には歸るべきてだてもない。晁卿の故郷は目を上げても見えない、自分の歸りたいところは、いつも斯うして目の前に見えて居る……それはせめても慰めであらうと言う人があるかも知れない。けれどもそれは他人の悲歎を深く知らうとしない人の言ふ言葉である。いかにしても歸るべき術もない故郷が、目の前に斯うまで見えて居ることこそは、悲しみを一層にそゝるばかりである。李太白はこんな風に思ひ沈んで居るのでした。

やがて、やをら嗄れた聲を上げて歌ふのでした――

五鶴西北來　　飛飛淩太淸

仙人綠雲上　自道安期名
兩兩白玉童　雙吹紫鸞笙
去影忽不見　回風送天聲
我欲一問之　飄然若流星
願餐金光草　壽與天齊傾

——見て居ると大空の西北から五羽の鶴が飛んで來た。高く高く仙人のゐます太淸境をも凌ぐばかりである。鶴はめでたい鳥であると聞くのに、今、五羽も翼をそろへて下りてくるのを異み見て居ると、果せる哉、その眞中の鶴の背には、綠雲の上高く仙人がゐますのが見える。折から仙人の聲がして、私は安期生である、海上の仙人である。その聲に更に瞳を凝せば、仙人を乘せた鶴の左右には、各、白玉をも欺くばかりの淸らかな童子が居て、聲ほがらかに紫鸞笙を合奏して居る。あれよと見る刹那、五羽の鶴も、仙人も、白玉の童子も、忽然姿が見えなくなつて、たゞ紫鸞笙のゝどかな歌聲ばかりが、雲間から風にひゞきを傳へてくるばかりである。噫、兼ねてから仙人に逢つて問ひたいと思ふことがあるのに、いざ言問はうとすれば、影は流星のやうに消えて、もう居ない。それにつけても歸り行きたいのは仙境である。金光草は仙人の琪樹瓊花の一つであると聞く。せめてはこの草をなりと搜しあてゝ、天と齊しきほどの盡きない命を盡したい……それは、曾て李太白が、その幻をまのあたりに見た時に得た詩であります。李太白は歌ひながら、今さらに、自分の空想と幻影とに醉ふのでした。さうして今からして居るうちにも、若しや鶴でも舞ひ下りて來て、

「私は安期先生のお使ひである。おん身の願ひは聞かれた。おん身の仙界での罪は赦された。さあ早く私の背にお乗りなさい。」

さう言ひながら、舟を目あてにおりて來はすまいか……。空を見ますと、たゞ月ばかりが冴え渡つて居ます。「願はくは金光草を餐うて壽を天と與に傾けん」と、歌の餘韻は水のおもてを逼うて、流れ行く水と一緒に何處かへはる〳〵とたゞよひ消えて行くのでした。ふりかへると、金陵の瓦官閣が、月の光で中空へくつきりと浮び出て、李太白の美しく悲しい歌に聽き入つて居たやうに聳えて居ます。

李太白は、深い溜め息と一緒に目を伏せて、舷に身を倚せながら、それにしても、自分には一體何の過があつて、仙界から逐はれたのであらうかと考へつづけます。さうして、ちようど舷に浮んでゐた靜かな月の影を、李太白は小兒のやうにものを思ひつめた無心で、その手のひらに掬うては捨て、掬うては捨てして居るのでした。この水のおもての月の影は空の月がうつるのではなく、水の下にも別に月があつて、その何處とも知れない水の底の月の光が、かうしてこゝまで泌み出してくるのであるかも知れない、と、こんな子どもらしい空想も湧くのでした。さうして、尙も手のひらに水を掬うては捨て、掬うては捨てして居るのでした。ちようどその時です。ひえ〳〵とした風が、ゆるやかな河の流れに逆うて、そよかに低く水のおもてをかすめて吹き渡つたので、水は一面に細かなさゞれ波を立てゝ、月の影をこなごなに碎きながら、遠くの方へそれを持つて行くのでした。流されて行く月の影を追ひながら、李太白は、その水のおもてを何ごゝろなく見やつて居ました。その瞬間に、彼は恰も仙術を初めて得た人のやうに身はかろ〳〵となり、平滑な漣漪の上をやす〳〵と步行できさうな心持ちに打たれました。李太

白は、突然立ち上りさま悠然と船から流れる水の上に片足を載せました。兩足を載せました。さうして二足、三足、月の影の浮んで居る方へ、水上を歩み渡つたやうに思へた刹那、身は遽に金石像のやうに重くなり、水のなかへずぶ〳〵と墜ち込んでしまひました。水のおもては人を呑みながら、不思議と波立ち騒ぐやうなこともなく、たゞ鷹揚な渦がくるりと一つ大きく渦巻くと、あたりに碎けて居た月の光が一度にその渦のなかへ滑り集つたやうに見えましたが、それも束の間に消去つて、水は直ぐもとの平靜にかへり、休なく流れつゞけます。舟の上には、半ば空しくなつた酒壺のなかに、月の影が小さく圓く少し慄へながら浮んで居ます。こんなわけで、ぼんやりして居た舟人が、舟の上に居なくなつた李太白に氣附いたのは、よほど時を經てからのことでした。

　水の中に墜ち込みました李太白は、いろ〳〵な魚が風に吹きまくられる木の葉のやうにひるがへりながら、彼の身のまわりを逃げまどうて居るのを、夢のやうに見たきりで、それからは氣が遠くなり、ただちようど疲れ切つた時に深い眠に誘はれたと同じやうに、身は涯しもない底の底の方へ涯しもなく墜ちて行くのを感じました。さうして何となく幼な兒の時に、窓の外の高い月を見ながら搖籃にゆられた時の快さを思ひ出しました。その時のお母さんの子守歌が今も何だか聞えるやうな……

　それからどれくらゐ時を經たかは解りません。李太白は再び氣がつきました。さうしてわけもなく、ほつと深い息をしました。すると口のなかへ、不思議なことには、得も言はれない香のする乳よりももつと甘い酒が、口一ぱいに流れ入るのでした。さてこの酒は、一たい何の酒であるのか、酒には通じて居る筈の李太白にさへ、それがどうも解らないのです。李太白は知つて居る限りの酒を考へ合して見るの

です――それは「洞庭春」でもなければ、「富水春」でもない。「若下春」でもなければ、「土窟春」でもない。「石凍春」でもなければ、「松醪春」でもない。「竹葉春」でもなければ、「梨花春」でもない。「甕頭春」でもなければ、曾て宣城の紀叟の酒肆で酌みなれた「老春」でもないのです。

「はて、」

と、李太白は考へました。その拍子に、その名の知れない美酒が、またしても口一ぱいに侵入して來ます。

「はて、これは河東の桑落酒でもない。西域の葡萄酒とも違ふ。烏孫の青田酒とも違ふ。おお、この清冽な匂ひは、夕立の水から醸すといふ霹靂酒に少しはどこかが似て居る。
けれどもこの舌ざわりを何に譬へよう。若しかすると、これは昔の「蘭生」と名づけられた漢の武帝の酒であるかも知れない。それとも隋の煬帝の「玉薤」ででもあらうか。いやいやそれとも……」

李太白は不思議のあまり、聲を上げて自問自答しながら、尚も考へつづけて居りますと、突然、何處ともない近いあたりでからからと笑ふ人聲に驚かされたのです。あたりを見わたせば、闇であるのか、それとも李太白の目が見えなくなつたのか、ただほの暗いばかりで何一つろくには見えませんでした。此處は果して何處であらうか、さう云ふ疑問が、その時、やつと初めて李太白の心に起りました。今までは酒のことばかりに氣をとられてしまうて、第一にうかぶ筈のこの疑問をすつかり忘れて居たのでせう。

「李太白よ。お前の言ふのは皆當らない。」

再び、聲がさう言ふのです。

李太白の目は、だんだん慣れて來たせゐか、やつと少しづつあたりが見え初めました。そこで聲のする方を捜しながら見ると、輕羅を透したやうな蛋白石色のうすらあかりのなかに、何人とも知れない一人の老翁が見えるのでした。初めて一目見た瞬間、李太白は、吐息のために曇つた秋の鏡のなかに自分自身を見出したのではないかと思つたのです。けれどもそれが間違ひであつたことは、直ぐに知れました。いかにも白髮三千丈といひたいばかりの老翁ではありましたけれども、その顏のなかには何處をたづねても、愁の影であらうと疑はれるやうなものは、毫しも見られなかつたからです。反つて、童子でなくして、どうして得られたかと思ふやうな、それほどまでに樂しげな晴やかな笑が、額にも頰にも輝き溢れて見えるのでした。さうして李太白はこの老翁をたしかに一度どこかに見た覺えがあるのです。それは飲中八仙のなかの誰かであらうか。いやいや、この老翁はそれらの人人に似ては居るけれども、それよりももつともつと高い氣品を、譬へば幽谷の蘭蕙の香に類したやうな氣品を、その風骨のなかに具へて居るのでした。自づと俗人でないことが知れますと、若しやこれが仙人ではなからうかと、李太白は悟るのでした。それにしてもここは何處でせうか。

かうして老翁の顏をつくづくと見て居るうちに、李太白の眼は全くはつきりと見えるやうになつてきました。今まで吐息に曇つた鏡かと疑はれたものは明鏡よりももつと淸澄で、蛋白石の世界かと見えたものは草入水晶のなかの世界よりももつともつと透明なのです。さうして、それは瑠璃玉のなかに封じこめられて、森羅萬象を覗き窺ふやうに、目のとどく限りは、どこもかしこも、ただ一色に青いのです。

あの宣城の清渓のほとりに佇んで、目を伏せて水中を覗き込み、目を上げて秋旻を仰ぎ見た刹那とても、決してこれほどまでに青くはありませんでした。こんななかに住んで居れば、心の臓までがひとりでに青い色に變つて行きさうにも感ぜられるほどなのです。これはさましく或る深い深い水の底であるに相違ありません。月の光さへもここまではとどき兼ねるかのやうに、仰げば、ただたなびく光は、無限の高さからゆらゆらゆらと揺れ流れて、あたり一面に沁み渡り、降り漂うて居るではありませんか。それは譬へば、あまりの巨大さに反つてわれわれの目には仰ぎ見る術のないばかりの巨人の妻——それは翼が垂天の雲ほどあるといふ鵬をその肩の上へ、ちよこんととまらせることの出來るほどの女が、今大海の眞中を、恰も淺瀬を行く人のやうに歩渉(かちわた)りしようとして、うつかりその裳の一端をこの水の底へ落し、その乳光を放つ紗の裾が、すがすがしい水のなかにひたされて、なほこの上にも皎潔であれよと流れ浣がれて居るかのやうに動くのでした。さうして、空のごとき廣大さのこの乳光を放つ裳は、その襞になるところがほのかな影になつて、たとへば九天から竪に流れる虹のやうな大きさと色どりとを見せて、水のなか一面を時々斜にとほり過ぎるのでした。恐らくは、これ等の世にもいみじき光が、貝の夢をおびやかして眞珠となるのでもありませうか。この美しく壯大な景色を見るにつけて、李太白はふとこんな怪奇で、荒唐無稽で、ばかばかしく大きな幻想を呼び起したのでした。けれども、水中のこの美しい景色よりも、またその怖ろしいばかりの幻想よりも、もう一層李太白を驚かしたことは、李太白自分自身が、何時の間にか魚(さかな)になつて居ることでした。

「李太白よ。どうした。わたしを忘れたか。私はいつかお前の幻に姿を現じたあの鶴の上の安期生であ

る。」

あつけにとられて呆然として居た魚の李太白を眺めながら、あの白髮の老翁は、またも優しい聲でかう言ひました。李太白はこの言葉を聞きますと、なるほど何時か五羽の鶴や二人の淸らかな童子と一緒に、一目見た仙人に相違ないと思ひます。さうしてそのあたり仙人に會へるばかりか、その仙人から親しく自分の名を呼びかけられる有難さに、跪いて身を屈めようとしましたが、何ぶんにも、魚になつては居ますし、それもなつたばかりのことですから、魚のお辭儀はどうしてよいものやら解らないのです。せめては人間のするやうにしてでも、仙人にお辭儀をしなければなるまいと、慌てて頭を下げつたものが、その機みにつひよたよたと游いでしまひました。その恰形があまり可笑しかつたものと見えまして、自ら安期生と名告つた仙人は、聲を上げて笑ひました。

「さては安期先生でございましたか」仙人の笑ひ顏を見ますと、その懷しさにつり込まれて、極まりの惡いのも忘れた李太白は、勇氣を出して尋ねます。「それで此處は一たい何處なのでございませう。さうして、また私が息をするごとに、かうして私の口のなかへ流れこむ美酒は、これは一たい何と申すお酒でございませう。」

すると仙人は、やはりにこにこしながら、言ひますには、

「その酒は何か、まあ言ひ當てて見るがいい。お前はその味をどう思ふ。」

「私はさきほどからこの酒のことばかり、一生懸命で考へて居りました。それでも一向に解りません。若しやこれは異臘にあると云ふ、美人が口の中で嚙んで作る酒でもありませうか。何にせよ、私はこ

れほどの酒が、またと世にあらうとは思ひません。」

「お前がさう言つてくれるからには間違ひはなからう。それで私も安心した。李太白よ、實は私は近いうちに神女達を招いでお酒盛をしようと思つて居る。それで今夜はこの酒壺へ一ぱい酒を汲みに來たところであつた。」

いかにも、見ますればさまで大きくもない白玉の酒壺がこの老翁の片側に置かれて居るのでした。

「さうして、ここは何處でございませう。」

「此處か。ここは私が酒を醸すところだ。酒の河だ。」

仙人の安期生が、李太白にむかつて親切に説明をしたところに依りますと、ここは酒の河の流れで、その水の澄むときには粟清となり、濁るときには醠となり、紅い夕日を溶しては醍となり、木々のみどりの雫を集め、青い月の光をうけては醽となり、ほの白く濁るときには醆となり、またやや澄むときには醲となり、醇ともなり、醨ともなり、酣ともなり、醑ともなり、醴ともなり、醕ともなり、醋ともなるのだといふことでした。さうしてその味は、日により、刻により、場所によつて異るのださうです。それは美人の口のなかで、宿されたどころではありません、天厨から溢れ出て來るのです。西王母が漢の武帝に獻じたといふ言ひ傳へのある瓊瑤酒とても、實はこの流れから汲み出されたものだつたのです。さうして、今、魚の李太白が口一杯に吸ひこむのも、さすがの李太白が知らないのも道理、これは元碧之香酒と云つて、やはり玉酒の一種であつたのです。さて、この酒のおかげで、李太白も不老不死の命を授けられたと云ふのです。

これを聞きました魚の李太白は、うれしさのあまり我を忘れて、その小脇にある鰭をぴくぴくと動し、尾をひらひらとひるがへして雀躍いたしました。けれども、身は既に魚になつてしまつて居たことをひと度思ひ出しますと、李太白は、せつかくかうして不老不死の命を授けられても、なんとはなくつまらないやうな心持もしないではありません。ふと思ひ出されたのは、月のよい晩などに川のおもてに潑溂と跳ねかへつて銀色を閃かす魚どものことです。かうして魚になつてしまつたからには、せめてあのやうに躍り上つてでも月を眺めよう。おお、それがいい。それがいい。それは樂しさうな事である。と、そんな事を李太白が考へて居りますと、その時、

「李太白よ、魚よ。」

かう呼びかけた安期生の聲は、先刻のやうななつかしい優しさうなものではなく、魚の李太白をぴくつとさせたほど、それほど嚴かなものでした。

「李太白よ、魚よ、魚の李太白よ。」安期生は言ひました「お前は曾て仙界に居た時に、あまりに自分の才を自負しすぎて、不羈放埓の行のみ多く、そのために遂には俗界へまで逐はれたにもかかはらず、尚もその同じ性癖を改めようとはしないで、人間の世間ででも宮廷から逐ひ出され、さてはまた謀叛の疑ひまでも蒙つて、それにさへな懲りず、仙人でもない身をもつて水上を歩行しようなどと、途方もない考を起した果は、見よ、こんな水底に墜ちて來て、とうとうそのとほり小さな魚にまでなりさがつたではないか。氣の毒と言はうか可笑しいと言はうか。實に仙界の輕佻兒とはお前のことである。俗界の俗人どもはお前を嘲笑ひ、仙界の仙人たちはお前を惜しんで居る。」

仙人の白く垂れた髯のある胸の前に、姿勢を正して眞直ぐに浮んでゐた李太白は、かう言はれて初めて我が身を知りました。

「けれども」

安期生はしばらくして又言ひました。

「私たちはお前の珍らしい才を憐まずに居られない。またお前の仙界に對する切ない憧れにも同情せずには居られない。それ故、實は私たちの仲間でも、赤松子や鬼谷子などとも相談し合つて、もう一度お前を仙界へ呼び返してやらうといふことになつて居た。もしもお前に身の愼しみがあつたならば、今しばらくのことで、鶴の背にのせられて仙界へ歸れたのであつたらうに。それをさへも待てずに、お前はもう魚になつた。何といふ可哀さうなことであらう……。けれども、ここに一つお前にとつて不幸中の幸ともいふべきことがある。それはお前が生前にほんたうに酒を愛した徳によつて、私の酒の河へ墜ちて來たことだ。私はもともとお前がすきだ。だから、お前が私の領域のなかへ墜ちて來たのを幸に、私はお前にこの酒の河から天界へ行く道を敎へてやらう。」

安期生はだんだんともとのやさしい聲にかへつて次のやうに申します。——元來この酒の河は、遙に一すじに流れて天の河に通じて居る。若し眞直ぐに酒の匂を嗅ぎわけて、それをたよりに行くとすれば、こゝからしばらく遡つて行くと酒の河の酒は、何時の間にか菖蒲の匂ひと味ひとを感じさせて、菖蒲酒に變つて行くのに氣がつくであらう。そこは仙境蓬壺の近くなので、そのあたりには水のなかに仙人の街がある。もし夜ならば、そこから花のやうな燈が水を透して涙の眼で明りを見るやうに見えるであら

う。更に進んで行けば、琅玕の洞があつて、その洞のなかへは月の光も日の光も達しないけれども、琅玕それ自らが光を發して、洞のなかはそのために自づと明るい。そんなところを幾日も幾日も游いで行くと、再び日の光が見えて來る。その時はちようど大きな虹のなかを游ぐやうに眩ぶしい。その時分から酒の河の酒は、何時何處からともなくだん〳〵と馥氣清冽な達の酒、碧洞酒の味に變つて來るのです。それは仙界でも名高い崑崙山の醴である。やさしくほがらかな歌の聲が、水のなかまで銀線のふるへるやうに洩れ聞えてくるならば、それは西王母や、赤松子の幼な妻の炎帝の少女や、そのほかの神女達がうたふのであると思ふがよい。さてそのさきはもう眞黑などこかである。其處は地から天へ通ずる間道であるが故に、その大きな神祕を誰にも知らせまいとして、其處を通る時には誰しも一時は目がくらむのである。しかしその眞黑闇を溯り盡したならば、今度はまたあまりの明るさに反つて暫らくは眼が見えなくなるであらう。さうして酒は月の桂の雫をあつめて出來た切桂酒に變つて行く。此處こそは既に天の河である。九天の上である。安期生はかう言ひながら、一一その場所を自分の目の前に思ひ浮べるらしく、遠いあたりを見入りながら、大ていこんな風に、この酒の河を辿つて天の河へ溯つて行く道筋を、李太白に精しく敎へるのでした。けれども目の前に、それを傾聽して居る魚に氣がつくと、この小さな魚と、その渺渺たる行く手とを思ひ比べて、わがことのやうに思はず歎息せずには居られませんでした。

「口で言へばほんのこれだけのことである。けれども、魚の李太白よ、お前はその小さな尾と鰭と、それに不老不死の命とを力にして、その無限の涯を行くのであるか……。さて、天の河へまで昇つたならば、第一に紫微宮の天皇大帝の御座へ伺候して、お前はお前の罪を謝しなければならない。それから

歳星をたよつて行け。さうしてお前の身の上を相談するがよい。其處にはお前の前生の從兄の東方朔が居る筈だ。私の言ふことを篤と覺えて置くがよい。饗宴の酒の用意に來て、私はお前に遇うたのでつひ思はず永話をしてしまつた。また遇ふ日もあらうぞ。」

さう言ふかと思うと、厚くお禮を述べようとする李太白をも待たずに、安期生はそのかたわきに置いてあつたあの白玉の酒壺に手をかけるよと見る間に、身を屈めてその壺のなかへ這入つてしまひました。一たいこの白玉壺は、見るからとても人の體などを入れられるわけはない程小さいものなのです。せいぜい生れたばかりの子どもぐらゐよりは這入りますまい。その上、白玉壺は、透明であるのに、今目の前で確にその壺に這入つた筈の安期生は、外からは全く形も影も見ることが出來ないのでした。白玉壺はただ今までどほり酒の河のなかに漬かつて、その水を一ぱいに飲んで居る外には決して木の葉一枚も這入つては居ません。水で洗ひ清められて一しほ美しくなつた眞珠色の月の光を上から浴びて、床しくも耀やかな清光を放つて居るこの白玉壺のまわりを、魚の李太白はあまりのいぶかしさに、幾度も幾度もぐる〳〵と游ぎまわつて見ました。しまひにはその尖つた顏を壺の壁(へき)におつと押しつけて覗いて見るのです。けれども壺のなかにはやはり何も見えません。ただ壺の壁(へき)のおもてに、何やら二つ並んで青く光るものが、自分の鼻の尖きのところに見えます。何であらうかとよくよく見ますと、それは魚の李太白の自分自身の目が映つて居るのだつたのです。魚の李太白は、白玉壺を鏡のつもりにして自分の姿を見てやらうと體をひねつて居ると、そのうちに皎々たる白玉壺は、清麗な水のなかに溶解されてしまひでもしたのでせうか、形がすつかり見えなくなつてしまひました。さうしてそのあとには、今まで壺が乘

せられ居た碼碯の岩がはつきりと現はれ出ました。李太白は自分の目の見違ひではなからうかと考へた末、思ひきつて、壺のあつたあたりを身をもつて横ぎつて見ました。それでも水の外には何も體に觸れるものはありません。

ひとりとり殘された魚の李太白は、このまのあたりの不可思議を、しばらくは恍惚と見入つて居ましたが、何を思つたのか、尾を大きく活潑に振り動かすと、體を眞直ぐに突立てて、ひらひらと上の方へ突き游いで行かうとします。

「これ、李太白。何處へ行くか。」

聲は、いま姿を消した安期生の聲でした。

「先生、未だおいででしたか。私はちよつと水のおもてまで參ります、私のこのうれしさを舟人に知らせるために。」

「おろかな事を云へ、お前はまだあの舟人の事を思うて居るのか。」

「でもあの舟人は、私の居なくなつたのを嘸かし案じて居る事でございませう。私の眺めて居た月も、未だあのとほり中天にかかつてゐます。」

「おろかなことを言へ。お前が江上に泛んで居てから、もう三百年の月日を經た。今人不見古時月。今月曾經照古人。古人今人若流水。共看明月皆如此……」

「おや、先生。先生は私の詩を御存知でゐらつしやいますね。」

魚の李太白は、驚いたらしく、また嬉しさうにさう言ひました。

「おろかなことを言へ。お前の詩のなかのいいものは、みな我々の竹枝であつたのだ。」

安期生の聲はかすかになつて、とうとう聞えなくなりました。今度こそは全く一人でとり殘された魚の李太白は、ここでいよいよ決心をして、天上への涯もない旅行に出發いたしました。

それから、少しは游いで、游ぐこともよほど上手になつたと思ふころでした、

「申し〱、先生。」

かう言つて、李太白を呼びかけるものがあるのです。魚の李太白は、その聲を聞いて不審でなりません。そもそもこんな水のなかで、ましてや魚になつてゐる自分が、「先生」などと言つて呼びかけられるわけは無い筈だからです。

「申し〱、先生。」

聲はそれでも未だ頻に呼びかけます

「申し〱、先生。」

聲はだんだん近づいて來ます。

魚の李太白は、不意に思ひつくのでした。これはもしかすると、今までのことは悉く、安期先生に遇つたことも、天の河への道筋を精しく敎へられたことも、自分が魚になつて居ることも、さうして不老不死の命を授かつたことも、一息ごとにかうして吸ふ元碧之香酒とやらいふこの美酒の味も匂も、さてはこれほど美しい水中の月夜も、それらはみんな夢であつたのではなからうか。然う氣がつきますと、李太白は考へました、この「申し〱」には、これはうつかりと返事は出來ない。もしそれに返事をし

て、その瞬間に、この樂しい、夢ならば決して覺めたくはない夢から覺めるやうなことがあつては大變だ。かう思ひながら、李太白は、その聞える聲をわざと聞えないふりをして、尙も游ぎつづけて行くのでした。

「申し〱、先生。」

聲はますます呼びつづけます。

もうかうなつては止むを得ない、たとひ夢からさめるとしても、何とか返事をしなければなるまいと思つた時でした。聲の主は、やはり「申し〱」を言ひつづけながら、とうとう魚の李太白の體にさわるのでした。李太白はいまいましいばかりに思ひながら、すこし自暴自棄の心持ちで、思ひ切つて夢ならば覺めよとばかり振りかへります。

「誰だおれを呼ぶのは。」

振りかへつて見ますと、舟人ででもあらうと思つたのが、思ひも寄らず、直ぐ李太白のうしろには、小さな、それでゐて目くるめくほど眩しく光り耀いた金色の何者かが居ます。

「おやおや、未だ夢なのかしら。」

と、獨言を言ひながらも、李太白はこの得體の知れないものを不意に見たので、びつくりして少々怯かされたくらゐでした。

「いえいえ、決して夢ではございません。先生、これはみんな本當ですとも、本當のうちの本當です。御安心なさいませ。」

金色をあたりの水にきらきらと泌み漂はせたこの小怪物は、さもさも懷しくてならないと云ふ口調で、魚の李太白の獨言にさう答へるのです。李太白は一層いぶかしくてなりません。少しは怖ろしくもあります。

「さうして、さう云ふお前は一たい何者で、また何で私を呼びとめるのだ。」

「先生、もう私をお忘れなさいましたか。」

「忘れるも、何も、私はもともとからお前を知らない。」

「先生、まあよく私をごらん下さい。」

「よく見ようにも、お前はあんまり眩しすぎる。」

「それでは私が申し上げます。私は、むかし〱先生のお机のお近くに侍つて居て、朝夕先生の御寵愛を受けましたあの金の龜なのでございます。」

さう言はれて見ると、李太白も直ぐ氣がつきました。それは、思へば、李太白が初めて都へ出て來た時のことでした。紫極宮で初めて賀季眞に逢つてから、二人は直ぐ無二の親友になりましたが、訪ねてくれた賀季眞をもてなさうために、李太白は手もとにあつた置物の金の龜を賣つて、酒を買つたことがありました。眩しいのも道理、今、李太白を呼びかけたのはその金の龜だつたのです。

「おお、さうであつた。勘辨してくれ。さう言はれて氣がついた。お前があの金の龜ならば、何でお前のことを忘れるものか。お前のことは賀季眞の思ひ出と一緒によく思ひ出す。詩にまで歌つたほどである。謫仙人だと私のことをよく知つてくれた知己のためであつたればこそ、お前を手放しはしたやうな

ものの、その時でさへ惜しく思はぬではなかつた。それにしても、あまり思ひもかけぬところでめぐり逢つたので、つひお前とは氣がつかなかつた。」

李太白はかう言つて金の龜に詫びるのです。すると金の龜はうれしさうに息をはずませて言ひますには、

「それと申しますのも、みんな先生の御かげなのです。私は先生のやうなえらいお方に愛せられたばかりか、遂には先生や賀先生のやうな清淡風流の人々のために、身を零落させて酒の代になつたといふので、私はこの仙界の酒の河に召されて、何時まででも永生きすることを許されました、みんな先生のおかげでなくて何でせう。只今、途中でふと安期先生にお目にかかつて、圖らずも、今日先生が魚になつて天の河までおいでになるといふことを承り、せめてはその遠い遠い道中の御供をして、前の日のお恩返しの幾分でもいだしたいものだと、かうしてお後を慕うてまゐりました。どうぞ、道中の御相手に、また御案内に、私を御一緒におともさせてくださいませ。」

魚の李太白は、この金の龜の篤い友情をこころから喜びました。二人はかうして、一別以來のことどもを、思ひ出すままにまに、語り合ひながら、前と後とに相並んで游いで行きます。李太白は、ふと自分はどんな魚になつて居るのだかそれが知りたくなつたのです。さつき白玉壺に映つた時には、たゞ顔がかすかに見えただけでした。さうしてあひにくと水のなかは鏡の中のやうである代りには、鏡といふものはないのでした。そこで龜にむかつて尋ねます。

「私は一たいどんな魚だらう。」

すると、鯉が答へますには、

「先生のやうな魚は、私もこれまであまり見かけませんでした。けれどもまあ言はゞ、金糸魚のやうなものでせうか。金の筋と、赤の筋と、緑の筋と、銀の筋とが、赤金の背を竪に縫ふやうに、彩つて居ります。それは、すつきりとした立派な綺麗な綺麗なお魚です。」

妙なことには、李太白は自分の形を鯉からよく聞いた時、ああ魚になつたのだといふ自覺が、今更一層はつきりとしました。すると「枯魚過河泣」といふ昔の歌の曲が思ひ出されます。同時に感興がむらむらと湧き出して、心のなかには一つの詩がひとりでにでき上りました。これで見ますれば、李太白は魚になつてしまつてからもえらい詩人です。

白龍改常服　偶被豫且制
誰使爾爲魚　徒勞訴天帝
作書報鯨鯢　勿恃風濤勢
濤落歸泥沙　飜遭螻蟻噬
萬乘愼出入　柏人以爲識

李太白は、こんな詩が頭のなかでできましたから、一つ朗吟して見ようと、大きな口を圓く、上を向けて開ると、聲を張り上げました。水中のことですから、魚の詩人が一息歌ふごとに、文句と一緒に、ちようど口の圓さほどの大きな泡が、口から、ぱくつ、ぱくつ、と出ます。あとへ、あとへ、あとへ、とつづいて出ます。聲に應じて出ます、ちようど、折から空は曉であると見えまして、その紫色の黎明は、水の

底へまでひそみ寄り、酒の河の水もその色を溶して、涼州の葡萄酒のやうな色と味とを帶びて來ますと、水の世界はあたり一面に紫水晶になりましたが、見上ると、李太白の吐き出す大きな水たまは、この紫水晶のなかの白銀光の泡になつて、ころがると、まるく、あとから、あとから、ぱくつ、ぱくつ、と浮び出します。それはあたかも、糸からこぼれおちる大きな數珠玉の一つ一つのやうに、上から下へ眞すぐ一すじに連りました。それは全く李太白の詩の句を、形にして見せたやうな美しさと、輕妙さとでした。金の龜はさもさも感心したといふやうに默つて聞き入り、また上へ上へ昇つて行くその水玉の行列の、一つ、一つ、を見恍れながら、思はず歌の調子に合せて小さな四つの足を動かしながら、いそいそと魚のあとについて游ぎます。その様子には、自分の主人はえらい人だといふ得意のさまが見えるやうで、可笑しくもあり、可愛くもあります。

けれども、金の龜には、肝心のその詩の意味がよくわからないのでした。そこで魚の先生に尋ねます。魚の李太白はよく解るやうに說明をしてやります。

「むかし〳〵白龍がふと氣まぐれにいつもの衣裳を脫ぎすてて、魚の衣裳をつけて見た。さうしてとうとう豫且といふ漁師につかまつてしまつた。そこで天帝に命乞ひをすると、お前を魚にしたものは誰だ――皆身からでた錆であらうと、天帝は相手にはして下さらない。そこで魚服をつけた白龍は、泣く泣く手紙を書いて、友達の鯨に身の上を訴へた。かうなつた上は何れは自分も干魚にでもされてしまうことであらう。それにつけても、君たちとてもあまり威にまかせて、風濤の勢を笠に着て居ると、しまひには泥沙の上へ曳ずり上げられて、蟻や螻どもの餌になり、恥を曝すやうなことがないとも限らな

い。人間の世界ででも、萬乘の天子高祖が柏人の地で逢つたやうな出來事もあるのだからと、まあそんなわけだ。」

こんな風にして、魚と龜とはいろいろ話をしながら長い旅行をつゞけて居ました。龜はいつもびくびく鼻の穴を動して、油斷なく酒の匂ひを嗅ぎわけて居ました。道に迷ふやうなことがあつては大變だからです。魚の李太白は、あの「白龍が常服を改めた」句が氣に入つたものか、それが口癖になつて、何かの機みにはきつとこの句ばかり口誦んで、白銀光の麗朗たる水たまを口からころがし出します。

幾日かはこのとほりに何事もなく過ぎました。

或る日のこと、龜と魚とは大きな珊瑚の森にさしかかりました。彼等はその日一日中そのなかを游いで、その次の日も一日中そのなかを游いで、またその次の日も一日中そのなかを游いで、さうして幾日目かの夕方に、やつとその珊瑚の森の出口に近いところに、その夜の宿をかることにしました。その翌日は、朝早くから紅水晶のやうな日の出の水底を出發して、よほど游ぎました。さうして、魚と龜とは何となく、遠方から斷蒲酒の匂が漂うてくるやうに感じたころでした。魚の李太白は、逈か遠くの、やはり水の底に大きな黒い禿山の一部分が見えるのに氣がつきました。さうしてあれが蓬壺かも知れないと思ふので、龜に對つて尋ねます。

「あれは何處だらう。若しや蓬壺ではなからうか。」

併し龜もよくは知らないと見えます。

「いや。蓬壺はまだまださきのやうに覺えて居ます。蓬壺の近くならば海のなかの街が見える筈です

か。」
「ではどこだらう。斷蒲酒の匂がするやうだが。」
「さあ、私が以前通つた時には、あんな大きな山は見えませんでした。何時の間にあんな山が出來たのでせう。」
「道に迷うたのではなからうか。」
「おやおや、あの山は何だか動いて居るやうではありませんか。」

魚と龜とがこんな問答をして居りますと、微かに遠くの方から地鳴りのやうな音が聞えて來ます。や、大變だ。地震だ水の底の地震だ。と思つて居る暇もなく、龜と魚とは引きつけられるやうに、その大きな眞黒の遠山の方へ吸ひ寄せられだしたのです。同時に水が劇しい音をたてて動き出します。二人はだんだんと吸はれます。これではならないと一生懸命にもがきましたが、尾も鰭も足も何も何時どうしたのやらすつかり利かなくなつてしまつて、いかに逆うて見ても、體は山の方へ吸ひ寄せられて行くのでした。そのうち不意に瀧のやうななかへ卷き込まれると、魚も龜も、あの山のなかであるらしい眞黒な洞穴のなかへ、とうとう呑み込まれてしまひました。此處がもう仙人から敎へられたあの地から天への間道だらうか、それにしては……と不思議に思ひながら、尙もその洞のなかへ吸はれて行くうち、今度は突然非常な勢で、尾の方を前にして逆に押し返されるよと氣がついたころには、體は不意にくる〱〱と廻り出して、弦を放された矢のやうに飛ばされるよと思ふと、あたりは急に眩しく輝き出し、龜は「先生」と一聲叫んだまま、魚は「先生」と呼ばれるのを聞いたまま、とうとう氣が遠くなつてし

まひました。

大海原の眞中には、今のさきまで海一面ほどになつて浮び出て居た大きな黒山が、間もなく海の下へゆつくりと隱れてしまひますと、あとには眞晝の水銀のやうな海原の上には、一艘の大きな帆前船が、ちようど池のなかの笹船のやうに帆を上げたままで横倒しになつて漂うて居るあたりを、體も翼も足も嘴も眞青な鳥が羣れになつて、嵐のあとでよく見うけるやうに高いところや低いところを飛び交して居ました。羲和は高い天の上を、六龍を馭しながら、日車に乗つて西に急いで居ます。

魚の李太白と金の鯰とが黒い大きな山が動くと見たのは、また青い鳥の群れが白晝の怖ろしい龍巻きだと思つたのは、あれは秦の始皇帝の時代から生きて居た鯨だつたのです。それが潮を吹上げたのだつたのです。その勢には、さすがの羲和が馭して居る日車の六龍も思はずとび上つたほどでした。この鯨は身のほどをも知らないで、仙境へ押渡らうとする不敵な俗人どもの船を防ぐために、蒼梧や蓬萊の近海を守りながら游弋して居て、折にふれては姿を現はす鯨どものなかの、一番小さなものだつたのです。

それにしても、魚の李太白と金の鯰とは一たいどうしたでせう。

中學校で先生から支那の地理を教はつた方は、多分御存知だらうと思ひます。唯今の陝西省から山西省へ出る中間のところに、ちようど黄河が北から東へ曲るところに、華山と謂ふ山があります。支那の五嶽のなかの一つに數へられてゐる名山です。支那の西の方の山の宗であるといふので、また西嶽とも呼ばれます。この山には、また、仙掌と謂ふ名所があります。おほむかしに黄河の水が汎濫してこの山

の根まで押し寄せた時に、さしもの大水もこの山に打衝かつては、ここを突破することは出來なかつたものと見えます。その時、何處の國の神仙の仲間でも是非とも一人はなくてはならぬほどの、或る非常に力の强い神樣が居まして、その掌でもつてこの西嶽を擘き開いて、やうやうその水勢を切つて落してやつたと言ひ傳へられて居る場所が、即ちこの仙掌です。若しこの傳說がほんたうであるとしたならば、この山の形が斯くまでも奇峭であるのは、多分その時にその神樣の力があまつて、山全體が歪んでしまつたからであるに相違ありません。ここの絶頂に立つて下を瞰下しますと、黃河の水が北の地平線のはてから走りおりてこの山の足もとで一曲りして東に向ふありさまが、あれほどの大河でありながらたゞ一縷の絹糸とも言ひたいばかりに、諸の峯と峯との間から見えるのです。この水がこの山に突當る音は、古の秦の都のあたりへまで雷の音になつて響くと謂はれて居りますけれども、この山頂までは決して聞えません。この山頂で聞かれるものは、たゞ閑然たる天籟と地籟との天樂ばかりです。

　この西嶽華山の山頂に、雲臺といふ場所があります。其處には立派な道觀があつて、それの閣道は天に通じて居るとさへ言はれて居る程です。この道觀に一人の道士が住んで居りました。

　道士はその名を元丹邱といひました。何時の頃から、この山に隱れて居たものか、それは知りませんが、こんな仙境のなかで大地の醇和を含み、日月の光彩を吸うて雲母（きらら）の粉（こな）にいろいろの香草を副へて、それを食べ、時々月の下に座つて無弦琴を彈ずる外には、ひたすらに仙人の道を勵むうちに、とうとう天地の和氣を融合する方法を會得しました。燒金煉石の法もそれにつれて自づと知れるやうになつて、金膏金丹を錬り、玉漿玉液を調へて、身は仙人のやうになりました。御風、歩水、隨雨、化風、入壺、

入壁、禁虎、呼龍、劾魅、豈人などの諸術をも修道して、殆んど不老長生、昇天不死に近いばかりの域にまで達して居るのでした。唐の玄宗皇帝の御代には、宮廷へ召されてしばらく天子のために道を説いた事もありました。官もなく位もない一道士の鳥の衣が、萬乘の至尊の紫の衣と相對して坐つたのです。人人は彼を敬うて丹邱子と呼ぶやうになりました。それが恰も、李太白が同じ玄宗皇帝の宮廷で宮廷詩人をして居たその當時のことでしたから、丹邱子と李太白とは互に交を結びました。李太白はしばしば丹邱子のことを文章にも書き、時々には丹邱子に詩を寄せたりするやうな間柄になつたのでした。

丹邱子は、人間の皇帝の宮殿を直ぐに辭し去つて、また再び山中の道觀に歸りました。さうして世を忘れて此處に住むことが、又幾年であるかを知りません。といふのは、仙人の一日はわれわれの三年に相當するからです。われわれが何時でも仙人の歳を知ることが出來ないのもこの理由からです、さて、或る日のことでしたが、丹邱子は、ふと、吹く風の持つて來た消息によつて、李太白が水中の月を捉へようとして、誤つて水のなかへ沈んでしまつたことを知りました。さうして丹邱子は、李太白は何れ再び天へ現れるであらうと、心に考へるのでした。むかしむかし、一人の冒險好きな舟乘りが、海上に自然と浮んで居る槎に身を任せて天の河へ漂ひ出て以來、海と天の河とは何處かで相通じて居るものだといふことは、道士たちの間では知れ渡つた事柄でありました。李太白は河から流れて何れは海へ行く、海からはやがて天の河へ行くに違ひない——彼は確に昇天の資格を具へた人であつた。と丹邱子はさう考へたからです。さうして、時々、李太白のために、無事に天へ行かれるかどうかを心配することもありました。けれども根が仙人のやうになつて居る人のことですから、それを一生懸命に心配しつづけるや

うなことは決してありません。譬へて言へば、山を裹んで浮ぶ朝夕の雲のたたずまひのやうに、その心配は心のなかにひとりでに浮んではひとりでに消え、消えてはまた浮ぶのでした。

或る夜のことです。丹邱子は、天に通ずるといふ閣道を登りつめると、いつものとほり、立つて靜かに天界を仰ぎ眺めました。夕月はすでに隠れて星の降るやうな天です。山中にはもとより暦日は無いけれども、天には自づと季節が現れ出て居ます。北の方には何時も座を變へることのない天皇大帝を初めとして、そのそばには天帝星太子が低く西北につづき、北斗七星のうち六星は曠漠たる大地の果に隠れて見えませんけれども、ただ天樞だけは纔に地平から覗きでて、眞北の果に煌めいて見えます。天と地との間に漲つて居る清涼の天香によつて知れる上にも、北斗がこのとほり亥の方向を建して居ることに依つても、それは十月であることが解るのです。西嶽華山の連峰は東から南、南から西と弓なりに曲り連つて、三方の天を區切らんばかりに聳えて、就中、蓮華峰、落雁峰、朝陽峰は、それぞれに西、南、東に屹立して、天を支へる柱のやうにも見えます。それ等の上に押しかぶさつた天には、夜もまだ更けないこととて、玄武七宿の全部と白虎七宿の大部分――斗宿、牛宿、女宿、虚宿、危宿、室宿、壁宿、奎宿、婁宿、胃宿、昴宿、畢宿が、天皇大帝を中心にして、西から東へ、連峰の弓なりに沿うた半圓弧を壯麗に大空一ぱいに描き出して居ます。乳を流し溢れさせたやうな銀河は、斗宿から畢宿を殆んど眞直ぐに――諸宿の描き出した大半圓弧の兩端を貫いてちようど弦のやうな形に流れ、蓮華峰と朝陽峰との間を一息に橋渡ししてゐます。無限の大きさと無限の厚味とを持つた黒雲母のやうな暗の圓天井には、諸の星が寶玉よりももう一層に美しく、もう一層に綺羅びやかに、惜しげもなく豊饒に鏤められて

居ます。朝陽峰の肩の上に輝く紅玉は畢宿第五星天高です。その稍下に銀河の流れのなかに耀く黄玉は五車第三星天庫です。それ等の間に挾つて居る連珠は昴七星です。南の落雁峰の眞上に唯一つ目立つて輝く紅玉は北落師門です。王良は殆んど天頂にかかり、策と天津第五星とは各各その東、西に見えます。天津第五星の白い光がわけても目立ちます。天は何の變兆もなく、恒のとほりに嚴肅に運行して居ます。丹邱子は目に見える限りの星ならば、どんな星でも、悉くその名をもその由來をも知らないものはありません。さうしてかりそめにも在るかぎりの星ならば、どんな星でも、悉く丹邱子の瞳に見出されないものはありません。天を觀望することは道士の修道の一つでありますから、丹邱子は幾十年か或は幾百年かの間を、かうして星の數數を見慣れて來ました。

丹邱子は尙も空を眺めつづけて居るのです。蓮華峰のやや高いところには、憂鬱な碧玉のやうな、また閨怨の涙で濡れた眸の光のやうな織女星が、勞役に疲れきつた黄色な悲しい戀人の牽牛星と、互に渡る術もない銀河を相距てて歎いて居ます。これらの星を見たと同じ瞬間に、丹邱子はこの二つのちようど眞中に當つて、ふと、一つの全く目新らしい客星を發見したのです。

それは今のさつき一瞥した時には、無かつた星でした。それは織女星よりももつと青く、併し明るい爽快な、水に濡れて居るやうな、思ふままに琢磨した青玉のやうな星でした。それは初めは微かな光であつたけれども、直ぐ一時にはげしく燦爛と煌めき出しました。丹邱子は不思議のあまり、しばらくその新らしい客星を凝視して居ると、何時のまにか、その青玉のやうな新星の直ぐ足もとに、又もう一つの新らしい客星が湧き出したやうに現はれたのに氣がつきました。それは第一の新星よりはずつとずつ

と小さく、丹邱子でなく外の誰かであつたならば、或は見逃したかも知れません。ただその星は非常に小さいけれども、珍らしいほど鋭い金色であるために、直ぐ丹邱子の目についたのでした。丹邱子はこの二つの星に心を惹かれました。新らしく天に昇つた人は一體何人であらう……。またただの冒險好きな舟乘りででもあらうか……。ああ、然うだ。若しや李太白ではあるまいか。それにしてはあの微小な金色の星はまた何者であらう。あの青玉の星と金色の星とは何の關係があるのだらう。ただ偶然ああして同じ時に同じ場所に現れたのであらうか。いや、そんな筈はない……。それではやはり李太白ではないのであらうか。李太白が海の果から銀河へ來たにしては、いかにも少し早過ぎはしなからうか……。

丹邱子はこんな風に、半信半疑のうちにその星と李太白とを思ひくらべながら、この二つの新らしい客星をぢつと凝視するのでした。二つの新らしい客星は、暫くその現はれたままの場所を動きませんでしたけれども、間もなく徐ろに進み出します。銀河の流れに沿うて、東の方へ、いろいろの星が簇り輝めいて居る間を縫ひながら進みつづけます。この二つの星は遊星でもあると見えまして、決して離れるやうなことはなく、いつまでも現れた時のままの間隙を保つて、ゆるゆると進んで行きます。二つの星は、初め白い明るい光の天津第五星を目あてに行くやうに見えましたけれども、天津第五星の傍まで行きますと、それを通りすぎて王良の方まで進みつづけましたが、その中ほどから、遽に進路を北に指して、天皇大帝の御座へ近づくのであることが、だんだんと明になつて來ました。あの金色の微小な方の星は、天津第五星と王良との中ほどに留まりました。青玉のやうな星だけが、天皇大帝の御座の方へ

漸く進んで行きましたが、天皇大帝に咫尺すると、その前でやや久しくそこで動かなくなりました。

丹邱子は尙も瞬きもしないで凝視して居ます。靑玉のやうな燦爛たる星は、暫くするとますますその光芒を加へて、さて天皇大帝の前から、再びもとのとほりの道を引き返して、王良と天津第五星との中ほどあたりに待ち合せて居たらしいあの金色の星の側へ歸つて來ました。さてややしばらくすると、靑玉のやうな星は、突然、流星になつて、瞳に捕捉する暇をも與へずに、つと何處かへ流れたと見ると、小さな金色の星もつづいて前の流星の尾を追ふやうに、何處かへ流れて消えてしまひました。二つの流星の形を見失ふた丹邱子の瞳は、狠狠する色もなく、おもむろに虛空を一とほり見わたしましたが、恰も其の時、歲星がその四つの衞星とともに、きら、きら、と激しく瞬きをしたのを、丹邱子の瞳は素早く見とめたのです。

歲星は東方朔の居る星です。

丹邱子は何か思ひあたることでもあるらしく、それを見ると獨り頷きました。

こんな間にも、天は小休みなく運行をつづけて、斗、牛、女、虛、危、室、壁の諸宿は何時の間にやら順々に廻つて、一つ一つ西の方に隱れてしまつて、丹邱子が再び空を見まわしました時には、西の遂華峰の頂には奎宿が覆ひかぶさり、婁宿がその南側に隣りして、胃宿、昴宿、畢宿、觜宿、井宿、鬼宿、柳宿、星宿、翼宿、軫宿が、先刻の諸宿に代つて先刻の諸宿が描き出して居たと同じ大半圓弧を描き出して居ました。銀河もこれとともに、何時の間にやらぐつと廻轉して全く方向が變つてしまひました。東西に走つて居ましたものが、北の地平の果から落雁峰を少し東に避けて流れて居ます。落雁峰の上に先

刻現はれて居ました北落師門は赤い光を何處かへひそめて、その代りには天狼が青白い金剛石のやうな耀やかな光輝を、その峯の尾に煌めかせて居ます。その東南の稍高いところには南河第三星が、西に銀河を距てて、參宿の諸星と向ひあつて見えます。先刻は朝陽峰の肩に當つて見えた五車第二星天庫は、昴七星とともに、天頂の中心に近く耀いて居ます。遠い北の地平に近い天皇大帝の東側には、北斗七星が悉く現れて、帝座の東を衞護するかのやうに並んでゐます。その天樞、天璇、天璣、天權、玉衡、開陽、搖光、の七星が、あの通り相連つたさまは、李太白が常に好んで用ゐてゐた長い手のある杯、鸕鷀杓の形によく似て居る――丹邱子は、ふとさう思ふのでした。

思はずも非常に夜を更かしたことを知つた丹邱子は、やがて、しづしづと閣道を下りて行きます。目の下には諸の峯と峯との間から、黃河の水が銀の針金のやうに、夜目にも一筋に光つて見えました。長い閣道をおりて行く丹邱子の靜かな跫音は、ひつそりとした天と地との間にひびくただ一つの音として聞かれます。天と地とを一つの大漏刻であると見れば、この丹邱子の跫音は、正にその漏刻のなかに滴る水の一滴一滴とも感ぜられました。

丹邱子はかうして長い閣道を下り盡した時には、既に東の方はほんのりと白んで居るのでした。地面に下り立つた丹邱子は、白い長い髯を冷たい風に吹かせながら、夜明けに近い時刻のさわやかな新らしい空氣を、ちようど酒飲みが酒を飲む時のやうな口つきで、さも甘さうに、胸一ぱいに吸ひこみました。

その夜の次の日です。丹邱子は、少し日の暮れるのを待ち兼ねるやうな心持がするのでした。さうして、あたりがやゝ暗くなると、また黃昏のなかを、長い閣道をしづしづと登つて行きます。

その夜はちやうど三日月が、蓮華峰の眞上に、低く、大きく、うつらうつらと夢心地に懸つて居ました。もう少しのことで峰に落ちようとして居るところでした。それはごく纖細な、金環のやうな三日月です。若し洛陽や長安の俠少年がこれを見たならば、未だ紅錦の靴を穿つて居るほどな年ごろの娘の長く曳かれた蛾眉を、聯想させられたに相違ありません。それはまつたく優しい月でした。其時、ちやうど山の谷間で吼えた虎の聲の山彦のために、この三日月はぶるぶるとふるへた位でした。けれども、これほど弱々しくても月は月であると見えて、それに未だ夕日のなごりもいくらかは殘つて居たせゐもありませうか、空には星影が殆んど見えては居ませんでした。けれども、丹邱子は、今日は別だん外の星がそれほど見たいわけではありません。明星峰の眞上に必ず現れて居る筈の長庚星、卽ち宵の明星だけが、早く見たいのです。

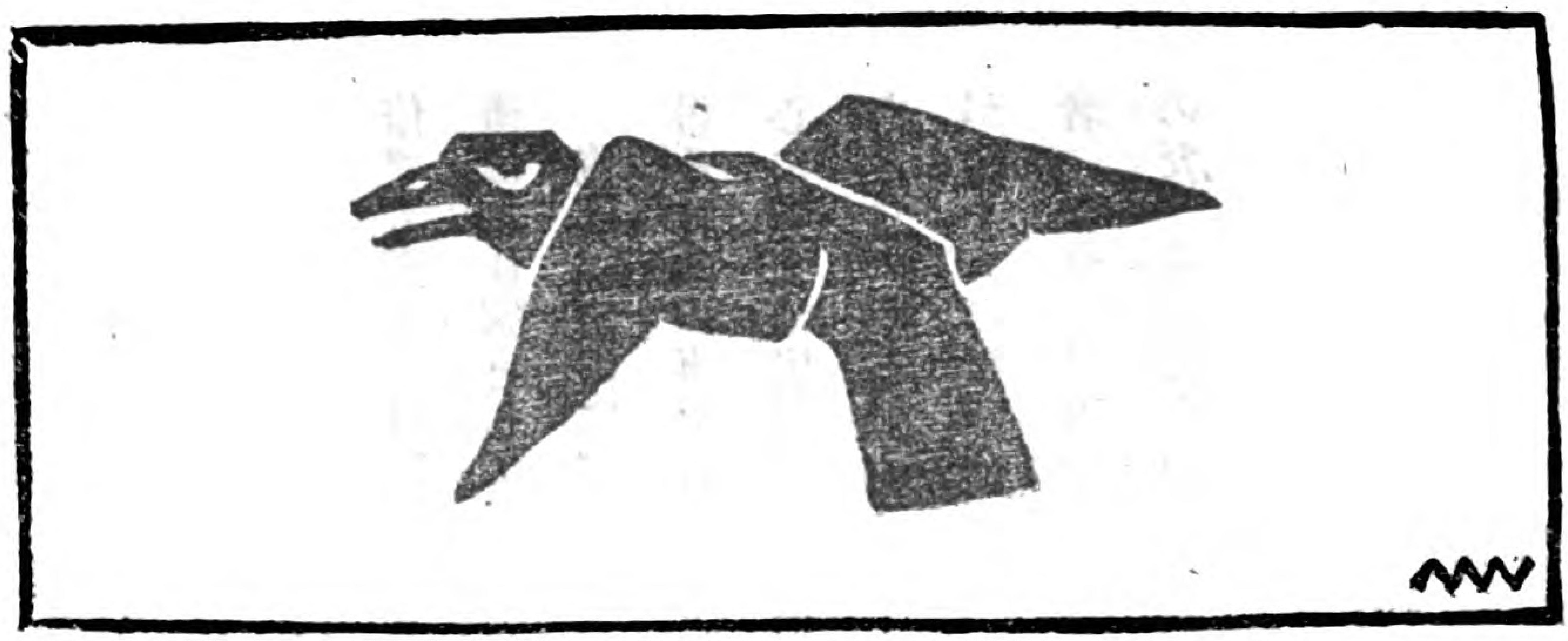
丹邱子は、顏を少し上げて、つくづく宵の明星に見入りました。その赤金のやうに光り煌く星は、今宵は一しほに冴え冴えとして、能く看ることのできる人の目には、それはちやうど慶事のある家のともし灯のやうに、がかやかに、にこやかに、はればれしく、きららかに映るのでした。丹邱子は、白髮が亂れたままで垂れかかつた、しかし童子よりももつと艶々しい額を、この時一層に明くして、天をながめたまま、呟くやうに獨言を言ひました。

「おお、やつぱり李太白が天界のわが家へ歸つたのだ……それにしては早かつたなあ。」

一たん魚になつた李太白が、大きな大きな鯨が潮を吹く時に、一緒に、九天の銀河まで眞一文字に吹き上げられて、「こんなに早く」天に歸つたことや、彼の愛玩して居た置物の金の鯱もそこへついて行つ

たことや、そこまでは丹邱子にさへも解らなかつたものと見えます。仙人の丹邱子は「それにしても早かつたなあ」と言ひましたが、あなたは、李太白が魚になつてから天へ歸るまでに、一たいどれぐらゐの月日がかかつたとお思ひですか。――それはわれわれの世界の勘定で千年あまりです。さうして仙界の一年です。

若し、あなたが、月のない星のきらきらと明るい晩に、獨りで天を仰ぐことがあつたら、ゆつくりと空の星を見わたしてごらんなさい。さうしてどれが李太白の星だかあててごらんなさい。



無名作家の日記

菊池寛

九月十三日。

到頭京都へ來た。山野や桑田は、俺が彼等の壓迫に堪らなくなつて、京都へ來たのだと思ふかも知れない。が、何う思はれたつて構ふものか。俺は成る可く、彼等の事を考へないやうにするのだ。

今日初て、文科の研究室を見た。思の外にいゝ本が澤山ある。蠶が桑の葉を貪るやうに、片端から讀破してやるのだ。研究と云ふ點に於ては、決して東京の連中に負けはしないと、俺はあの研究室を見た時に、全く心丈夫に思つた。

其上に、俺は京都其物が氣に入つた。殊に今日、大學の前を通つて居ると、清麗な水が淙々たる音を立てゝ、流れ下つて居る小溝に、白河の山から流れて來たらしい眞赤な木の實が、幾つも〱流れ下つて居るのを見た。東京の街頭などでは、夢にも見られないやうな、その新鮮（フレッシュ）な情景が、俺の心

を初秋の京都に惹き付けてしまつた。俺は京都が好きになつた。京都へ來た事は決して後悔はしない。が、俺は此の頃、つく〴〵ある不安に襲はれかけて居る。夫は外でもない、俺に將來作家として、立つて行くに充分な、天分があるか何うかと云ふ不安だ。少しの自惚れも交へずに考へると、俺にはそんな物が、一寸有りさうにも思はれない。東京に居る頃は、山野や桑田や杉野などに對する競爭心から、俺でも充分な自信があるやうな顔をして居た。が、今凡ての成心を去つて、公平に俺自身を考へると、俺は創作家として、何等の素質をも持つて居ないやうに思はれる。

俺は、文學に志す靑年が、動もすれば犯し易い天分の誤算を、やつたのではあるまいかと、心配をして居る。此の事を考へると嫌になるが、靑年時代に文學に對する熱烈な志望を語り合ひ、文壇に對する野心に燃えて居た男が、何時が來ても、世に現はれない事ほど、淋しい事はない。俺も、彼等の一人ではあるまいかと思ふ。人生の他の方面に志す人は、少し位は自分の天分を誤算しても、何うにか誤間化しが付くものだ。金の力、或は血緣の力などが、天分の缺陷をある程度迄補つて吳れる。が、藝術に志す者に取つて、天分の誤算は致命的の失策だ。玆では、天分の缺陷を補ふ、何等の資料も存在して居ないのだ。黃金だと思つて居た自分の素質が日を經るに從つて、銅や鉛であつた事に氣が付くと、もうおしまひだ。天分の誤算は、やがて一生の違算となつて、一度しか暮されない人生を、マザ〴〵と棒に振つてしまふのだ。昔から今迄、天分の誤算の爲に、身を誤つた無名の藝術家が幾人居た事だらう。一人のシエクスピアが榮えた背後に、幾人の群小戲曲家が、無價値な、亡ぶるに定まつて居る戲曲を、書き續けた事だらう。一人のゲーテが、獨逸全土の賞讃に浸つて居る脚下に、幾人の無名詩人が、平凡な詩作

に耽つた事だろう。無名にして終つた藝術家は、作曲家にも有つたゞろう、俳優にも無數に有つたゞろう。一人の天才が選まれる爲には、多くの無名の藝術家が、その足下に埋草となつて居るのだ。無名の藝術家でも、その藝術的向上心に於て、藝術的良心に於て、決して天才の士に劣つて居る譯はないのだ。彼等の缺點は只一つある。夫は、彼等の天分が、何んなに磨きを掛けても輝かない、鉛か銅である事だ。

かう考へて來ると、俺は堪らなく自分が嫌になる。俺は、何うして創作家となる事を志したのだろう。何うして、文學を志したのだろう。夫を考へると、俺は何時も、自分の馬鹿らしさに愛想が盡きる。俺が文科を撰んだのは、文學者崇拜と云ふ多曖もない、少年時代の感情に支配されて居たのに過ぎなかつた。もう一つ原因があつたつけ。夫は、俺が中學時代に、作文が得意であつたと云ふ、愚にも付かない原因だつた。こんな、少年時代の出來心で撰んだ生涯の道程を、今となつては是が非でも、遂行しなければならぬ羽目に居る俺を、つく〴〵情なく思ふ。

夫にしても、高等學校に居た頃は、少しは自信があつた。自信があつたと云ふよりも、自分の眞實の天分なり境遇なりを、自分で誤間化して行く事が出來たのだ。殊に、山野や桑田などの、燃ゆるやうな文壇的野心や、自惚に近い自信が、俺にも幾何か移入されて居た故かも知れない。高等學校に居た頃、寢室で皆が一所に、枕を並べて寢る時は、文壇に就いての話の外は、殆ど何にもしなかつた。殊に、川崎純一郎氏の活躍振が、よく我々の話題となつて居た。川崎氏は、俺達に一番近い目標であつた。あの人の眩しい程に燦然たる出世が、その頃の俺達の心を、何んなに唆つたゞろう。桑田は、そんな話が出ると、燃ゆるやうな瞬をして、

「なあに！　僕達の連中だつて、今に認められるさ。誰か一人有名になれば、もうしめたものだ。其奴が、殘りの者を順番に引立てゝ行けばいゝんだ」と、桑田は、その最初に名を成す者が、自分であるやうな自信を以て云つた。

「そうとも、文藝部で委員をして居た者は、皆文壇的に有名になつて居るんだ。矢部さんを見ろ！　小山さんを見ろ！　和田氏を見ろ！　近藤さんを見ろ！　皆、文藝部の先輩ぢやないか、なあに！　文壇なんて、案外譯のない所さ」と、天才的で傲岸な山野が、桑田に合槌を打つたつけ。俺は、かうした會話を聽く度に、山野や桑田などの烈しい希望や、强い自信の一部が、俺の心にも移入されて、何となく賴もしく思はれたと同時に、將來の文壇に於て、眞に名を成す者は、桑田や山野などで、俺は何時迄も彼等の蔭に、無名作家として葬られるのではあるまいかと云ふ不安に、囚はれずには居なかつた。既にあの頃にも、山野は學校中を驚かしたやうな深刻な、皮肉な小説を文藝部の雜誌に載せて居たし、桑田は桑田で、同じ雜誌に脚本を幾つも發表して居た。而も、夫は洗錬された技巧と、氣の利いた構想に於いて、全く水際立つた出來榮を示して居る。そして、二人とも文藝部の委員であつた。山野が、「文藝部の委員をして居た者は、皆文壇的に有名になつて居るのだ」と云ふ事は、卽ち現在委員をして居る山野が、將來容易に文壇に名を成す事が出來ると、宣言したのと全く同じであつた。

俺は、何時も山野が、自分の人格の强みを賴りとして、無用に他人を傷けるやうな、態度に出るのが不快だつた。が、夫にも拘はらず、彼奴の才分を認めない譯には、行かなかつた。山野でも桑田でも、確かに第一歩は踏み出して居るのだ。然るに俺は、あの頃は無論の事、今でも何もやつて居ない。その

上、俺一人連中を離れて、文壇に出るのには非常に不利な、京都に來てしまつた。夫には經濟上の理由もあつた。が、他の有力な原因は、俺は山野や桑田などの間にあつて、彼等の秀れた天分から、絶えず受けて居る不快な壓迫に、堪らなくなつた爲だと、云へば云はれない事もない。殊に、山野となると、意識的に俺を壓倒しやうと掛つて居た。彼奴は、自分の秀れた素質を、自分より劣つた者に比較して、其處から生ずる優越感で以て、自分の自信を培つて居ると云ふ、性質の惡い男であつた。そして、その比較の對象となるのは、大抵の場合、俺だつたつけ。何時だつか、俺が芳田幹三の「潮」を讀んで感心して居ると、彼奴は「何だ！「潮」が面白い！そいつは、少し困つたなあ！」と嘲笑したつけ。彼奴の嘲笑は、人を突き放したまゝ、傍へ寄せ付けないと云つたやうな、辛棘な嘲笑だつた。彼奴は、俺が少しでも、甘さうな物を讀んで居ると、乾度前のやうに嫌がらせを云つた。夫と同時に、俺がイプセンの「ブラント」のやうに少し難解な物を、讀んで居ると、

「ほう！「ブラント」かい！君に解るのかい！」と、云ひやがつた。こんな時、俺は彼奴を毆り付けて、やりたいと思つたが、彼奴の白皙な額と、聰明な瞬とを見ると、ある威厳を感じて、肉體的には俺よりも、よつぽど弱い彼奴を、何うともする事が出來なかつた。彼奴は、桑田、俺、杉野、川瀬などの創作家志望の連中ばかりが、集まつて居る時に、よくこんな事を云つた。

「俺達が、皆段々文壇に認められて行く。が、一人位は何だか、取殘されさうだよ。皆が、新進作家として、ワイ〳〵持てはやされて居る時に、自分一人取り殘されて居る。一寸 慘なものだらうな。が、その貧乏籤は、案外俺かも知れんて！」

彼はそう云ひながら、自信に充ちて哄笑した。そして、俺の方を意味有り氣に、チラッと見た。俺は、可なり嫌な氣持になつた。同じく創作家として、出立したものゝ内、その一人が何時迄も、取殘されると云ふ事は、如何にも皮肉な事で、殘される當人になつて見れば、全く堪らない事に相違なかつた。が、實際そうした場合は、容易に在り得る事だ。天分に一番自信のない俺は、そんな場合を想像する事を、努めて避けやうとして居る。然るに、山野は俺や、俺と同樣に自信の薄い杉野などを、嫌がらせる爲に、そんな皮肉な場合を、想像して喜んで居たのだ。

唯一人、取殘される！ 夫は考へて見ても、淋しい事に相違なかつた。俺は、東京に居て、山野や桑田などゝ、競爭的になるのが、不快で堪らなくなつた、彼等から間斷なしに受くる、不快な壓迫から逃れる丈でも、俺に取つて何れ丈、いゝ事が分らなかつた。京都に來て、彼等と全く違つた境遇に居れば、彼等に取殘された場合にも、云ひ譯は幾何でもある。又、京都に來た爲に、文壇に出る機會が、却つて早められるかも知れぬ見込が、朧げながらあつた。夫は中田博士が、京都の文科の教授である事であつた。博士は、もうよほど、文壇の中心からは離れて居る。が、夫でも文壇の一部とはある種の關係がある。博士の知遇を得さへすれば、案外早く文壇に紹介されて、俺の天分を飽く迄輕蔑して居る山野などを、アッと云はせてやる事も、決して不可能事ではない。俺が、京都へ來た理由は、そう云ふ點にも幾何かある。

十月一日。

何となく落着けない。殊に夕方が來るとそうだ。青い絨毯を敷き詰めたやうに、擴がつて居る比叡の山腹が、灰色に蒼茫と暮れ初むる頃になると、俺は立つても居ても、堪らないやうな淋しさに囚はれる。俺は自分で、孤獨を求めて來た。が、その孤獨は、直ぐ俺を反噬し始めた。而も、俺の孤獨の淋しさの裏には、烈しい焦燥の心が、潛んで居る。東京に居る山野や桑田などが、一日一日何んなに成長して居るかと考へると、俺は一刻もヂッとしては、居られないと云ふ氣がする。俺が、研究室で、バアナアド・シヨオの全集を漁つて居る裡に、桑田は兼々、書くと云つて居た三幕物の社會劇を、もうとつくに書き上げて居るかも知れない。俺が、教室で下らないノートを作つて居る間に、山野はもう半分以上譯了して居たハウプトマンの「織工」の出版書店を、見付けたかも知れない。そう思ふと、俺は愈々堪らない氣がする。今年中に、山野と桑田とは、文壇に兎も角も、一個の足溜を築くかも知れない。俺はもう決してヂッとしては居られないのだ。

俺は、彼等に對抗する爲に、戲曲「夜の脅威」を書いて居る。が、俺の頭は高等學校時代の出鱈目の生活の爲に、全く消耗し切つて居る。此の戲曲の主題(テーマ)には、少しは自信がある。が、俺のペンから出て來る臺辭は月並の文句ばかりだ、中學時代に、自分ながら誇つて居た想像の富贍な事などは、もう俺の頭の中には、痕形もなくなつて居る。が、兎も角此脚本を書き上げる。脚本が出來上つたら、中田先生を訪問する事にしやう。先生の好意で、俺の前途は案外に明るい物になるかも知れないから。

俺は今日偶然、吉野辰三君に逢つた。高等學校では、俺より一年上で、やつぱり京都の文科に來て居る人だ。吉野君と話して見ると、文壇に出やうとして踠いて居る者は、決して俺一人でない事を知つて

少しは安心した。吉野辰三！　以前俺はあの人を、何んなに崇拜したか分らない。明治四十年頃の文學世界の讀者に取つて、あの人の名は何んなに輝き、何んなに魅力を持つて居たゞろう。田山花袋選の懸賞小說に幾度も投書して、成功しなかつた俺は、吉野君の華やかな活躍振を何んなに美望したか分らなかつた。

が、天才とまで激賞された吉野君は、その後文學世界の投書を止してから、もう何年になるかも知れないが、杳として文壇に名を現す所がない。文學志望を廢したのかと云へば、そうでもない。現に文科に居て、文壇に出る機會を待つて居る。が、その機會は此の人に容易に與へられそうもない。話して見ると、吉野君も猛烈に焦せつて居る。が、あの人が「僕だつて、之でも新進作家と云はれた事があるんだからな」と云つた時には、俺は少し淋しい氣がした。吉野君は、昔の夢を餘程誇張して居るのだ。何でもあの頃、文學世界の當選小說ばかりを蒐めた短篇集が、世に出た事がある。その標題に、新進作家と云ふ肩書が附いて居たやうに記臆する。が、投書家として榮えた事を、一かどの作家でもあつたやうに幻想して、樂しんで居る吉野君に對して、俺は氣の毒のやうな淋しいやうな氣がした。然し、俺は吉野君に逢つてから、何だか賴もしいやうに思ひ出した。少年時代に、充分な才華を輝したあの人が、まだ少しも出られないで居る、夫を思ふと、俺は少し安心した。

が、此の大學の文科の連中は、何うしてあゝ、揃ひも揃つて救はれない人間ばかりが、集つて居るのだらう。殊に俺のクラスの奴等はヒドい。廣嶋の高師を出て來たと云ふ男は、昨日敎師が黑板に書いた佛の詩人ボードレールの名を、パウドレアと獨逸讀みにして、得々として居やがつた。もう、一人の男

は中田博士の質問に答へて、モンナ・ヷアンナはメエテルリンクの小説だと答へて居た。俺は、奴等全體を輕蔑してやる。高等學校に居た頃には、教室も寄宿舍も、凡てが文藝至上主義で一貫されて居た。藝術の名に依つて、凡てが許された。藝術の名に依つて、學課や教室を無視する事が出來た。然るに、妓の文科の教室の空氣は、極度に散文的だ。一人として藝術の話をする奴が居ない。高等學校出身の人達は、大抵病身の爲に文科を選んだとか、哲學科で一年落第した爲に、文科へ轉じたと云ふ連中だ。高師出身の者にも、入學資格がある爲に、彼等は學士號を得る爲に、丹念にノートを作つて居るのに過ぎないのだ。文科的な自由な淸新な空氣は、教室の何處にも存在しなかつた。こんな連中を前にして、文學がどうの、藝術が何うのと云つて居る中田博士は、丸切り豚に眞珠を撒いて居るやうなものだ。俺は、博士が氣の毒になつた。

十一月五日。

俺は今日偶然、同じクラスの佐竹と云ふ男と話をした、俺は今迄クラスの奴をスツカリ輕蔑して居たが、あの男丈は決して俺の輕蔑に値して居ない事を知つた。つい俺が創作の話を持ち出すと、あの男は突然こんな事を云つた。

「僕も、實は昨日百五拾枚ばかりの短篇を、書き上げたのだが、何うも餘り滿足した出來榮とは思はれないのだ」と、如何にも落着いた態度で云つた。百五拾枚の短篇！　夫丈でも俺は可なり威壓された。俺が今書きかけて居る戯曲「夜の脅威」は、三幕物で而も僅かに七十枚の豫定だ。而も俺は夫を可なりの

長篇と思つて居る。然るに此の男は百五拾枚の小說を短篇だと云つた上、まだこんな事を云つた。
「實は、今僕は六百枚ばかりの長篇と、千五百枚ばかりの長篇とを書きかけて居るのだ。六百枚の方は、もう二百枚ばかりも書き上げた。孰れ出來上つたら、何かの形式で發表する心算だ」と、云ふ事が大きい上に、如何にも落着いて居る。自分の力作に充分な自信を持つて居て、俺のやうに決して焦せつて居ない。俺は此男に威壓されると同時に、一種の賴もしさを感じた。京都にもかうした眞摯な作家が居るのだ。恐らく此の男の名前は、文藝雜誌などには、六號活字でゝも出た事はあるまい。が、此男は默々として長篇の創作に從事して居るのだ。此男の書いた物を一行も讀んで居ないから、此男の創作の質に就いては一言も云はれないが、六百枚、千五百枚と云ふ量から云つて、此男は何かの偉さを持つて居るに違ない。が、あの男はその次ぎにこんな事を言つた。
「僕は小說家の林田草人を知つて居る。あれは僕の國の先輩だ。今度文科へ入るに就いて、ワザ〳〵上京してあの人と會つて來たのだ。快く會つて吳れた上に、馬鹿に話がはづんでね。よく話の解る人だよ。今度書き上げた百五拾枚の小說も、實はあの人の所へ送くつて置く積だ。多分何處かへ、推薦して吳れるから」、俺は佐竹君を可なり尊敬し始めたが、之を聞くと少し此の人が氣の毒に思はれた。たゞ同縣人で一面識しかない林田草人を賴りにして、濟して居られる此人の呑氣さが、少し淋しかつた。全く無名の作家たる佐竹君の、百五拾枚の小說を、林田氏の紹介に依つてオイソレと引き受ける雜誌が、中央の文壇に在るだらうか。又門弟でも何でもない佐竹君の物を、林田氏が氣を入れて推薦するだらうか？あの人は、投書家から色々な原稿を、讀まされるのに飽き切つて居る筈だ。こんな當にならない事を當

にして、直ぐにも華々しい初舞臺が出來るやうに思つて居る、佐竹君の世間見ずが、俺は少し氣の毒になつた。實際、本當の事を云へば、文壇でズボラとして有名な林田氏が、百五拾枚の長篇を讀んで見る事さへ、考へて見れば怪しいものだ。佐竹君の考へて居るやうに、凡てがそう易々と運ばれて堪るものかと思つた。

十二月二十九日。

俺は、今日東京の山野から、不快極まる手紙を受取つた。夫は、俺に挑戰し俺を侮辱し、俺の感情を目茶苦茶に傷けてやろうと云ふ惡意に充ちた手紙だ。文句はかうだつた。

(何うだい！　馬鹿に默つて居るね。京都にも、少しは文學らしいものがあるかい。僕達此方に居る連中は、もう今迄のやうにたゞぼんやり、外國文學の本などを、弄ぢり廻す事に飽いてしまつたのだ。僕達が、高等學校時代に神聖視して居た「文學研究」なども、考へて見れば下らない事ぢやないか。僕達は、自分で創作しなければ僞だ。創作は黃金だ。外の凡ては銀だ。否夫以下の銅か鉛かだ。僕達は、もうヂッとしては居られないのだ。高等學校時代のやうに、何時迄も呑氣に構へては居られないのだ。僕達の計畫は、もうスッカリ定まつて居る。僕達は、來年の三月から同人雜誌を出すのだ。同人の顏觸は、桑田、岡本、杉野、川瀨、夫に僕、此の外に僕達より一年上の井上君、芳烏君が加はる。雜誌の名は多分「×××」と附くだらう。三月の一日に初號を出す、出版元は日本橋の文耕堂だ。もう、皆は初號の原稿に忙しい。〆切は一月三十日限だ。まあ刮目して、僕達の活動振を見て吳れ給へ。僕達は本當に黎明が

來たと云ふ氣がする）

おしまひ迄、讀み了つた俺は、烈しい嫉妬と憤とを感ずると同時に、突き放されたやうな深い淋しさを、感ぜずには居られなかつた。

この手紙の何處にも、君も同人になつては何うかとか、君も書いては何うかと云ふやうな文句は、破片さへも、は入つて居ないのだ。凡ては山野の遊戯的な惡意から出た手紙だ。同人雜誌の發行を、凱旋的(トライアンファント)に報じて孤獨に苦しんで居る俺を、飽く迄傷けてやらうと云ふ彼の性質(たち)の惡い惡戯だ。同人に加へない俺には、少しの必要もない初號の〆切期日などを報じて、俺を焦燥(いら)だたしてやらうと云ふ彼奴(あいつ)の惡意が、歴然と見え透いて居る。

山野が豫期した居たよりも以上に、此の手紙は俺を傷けた。京都へ來てからまだ半年にもならない間に、俺と東京に殘した友達との間に、早くもある間隔が作られつゝある事を、悲しまずには居られなかつた。同人雜誌の出版！　夫は何んなに華々しい事であらう。文壇に時めいて居る我々の先輩たる川崎も、矢部も、辻田も初は雜誌「×××」の同人として、その若々しい名を、文壇に認められて行つたのだ。山野や桑田が認められる順番も、もう決して遠き未來ではない。山野桑田は勿論、俺とは天分に於いて、餘り相違はないと思はれる岡本や川瀨や杉野でさへ、之でもう的確に、文壇に打つて出る第一歩を踏み出して居るのだ。然るに、俺は山野が手紙の中にあれ程輕蔑した「文學研究」を唯一の本領として、獨ぼつちで、捨てられて居るのだ。

俺は、山野や桑田が俺を同人から除外したにしろ、俺とは可なり親交のある川瀨や杉野迄が何等の好

意を示して呉れなかつた事を、恨まずには居られなかつた。

俺は山野の手紙を、ズタ〲に引き裂くと共に、絶望的な勇氣を振ひ起した。彼等が同人雜誌で打つて出るのなら、俺は單獨で、出て見せる。そして奴等の鼻を空かして、アッと云はせてやらう。が、そう決心して居る裡にも、深い淋しさがひし〲と俺に迫つて來た。俺に獨力で出る力があるか、俺は自分の天分を、夫れ程迄信ずる事が出來るだらうか。俺が、山野や桑田などに反感を懷いて、彼等を遠ざければ遠ざかる程、文壇に出る機會から遠ざかつて居るのではあるまいか。今度でも杉野にでも泣き付いて、同人に加へて貰ふ方が、俺に取つては得策ではあるまいか。が、俺を馬鹿にし切つて居る山野は、「富井などが、同人になるのなら、俺は差し控へた方が、いゝかも知れない」位の毒言は、必ず云ふに定まつて居る。そうなれば、却つて耻をかきに出るやうなものだ。俺はやつぱり、獨立してやつて見やう。「夜の脅威」を書き上げたら、早速中田さんに見て貰ふのだ。彼等が、同人雜誌などで、もがいて居る裡に、俺の物は一躍して相當な文學雜誌に紹介される。俺は、夫を考へて居ると、手紙を讀んだ時に受けたむしやくしやが、少しは癒えて行くやうな氣がした。

其處へひよつくり、吉野君が訪ねて來た。俺は、早速東京の連中が、同人雜誌を出す事を話した。俺の口調は、全く平靜を缺いで居た。が、吉野君は、何時ものやうに「朝日」を悠然と吸ひながら、

「なに君！ 同人雜誌などへは、幾何書いても仕方がないものだよ。やつぱり大きい雜誌に、書かなければ駄目さ。まあ桑田君などに、大にやらせて見るのだね。案外、そうお安くは問屋で卸さないから。僕は、同人雜誌などで、騷がないで、いゝ物が出來れば、文學世界あたりへ持ち込むよ。昔の緣で、嫌

とは云ふまいから」

俺は、吉野君が、同人雜誌を貶し付けるのを聽いて、幾何か安心した。そして心の裡で山野等の「××××」が、一日も早く發刊する事を祈つた。そして「×××」が、成る可く文壇から注目されない事を祈つた。實際俺は、俺の全人格で以て、同人雜誌「×××」を呪つて居たのだつた。

一月三十日。

俺は、今宵初て中田博士を自邸に訪ふた。俺は感激に充ちて居た。が、考へて見れば、感激した俺の方が馬鹿だつたのだ。中田博士の方から云へば、たゞ一人の學生の訪問を受けたのに過ぎないのだ。

俺は、挨拶が濟むと直ぐ、俺の脚本を出した。

「是非一つ御覧になつて下さい。出來は餘りよくありませんが、處女作ですから」

「なるほど」と、博士は顏の筋肉一つ動かさずに云つた、そして、一寸二三枚めくつて見てから、

「孰れ拜見して置きましやう」と、靜かに、附け加へた。俺が、山野等の同人雜誌に對抗する爲に、懸命の力を注いだ力作を、博士は何の感激もなしに、俺の手から受取つた。俺は夫が可なり淋しかつた。

「よかつたら、何處かの雜誌へ」と、そんな事は、口に出す勇氣さへなかつた。俺は、手持無沙汰になつて歸ろうとした。そして歸り際に、

「英國の近代劇の研究には、何んな參考書がいゝでしやうか」と訊いた。すると博士は言下に、「マリヨ・ボルサがいゝでしやう」と云つた。俺は、夫を聞くと少々落膽した。マリヨ・ボルサは、俺が高等學校時

代に讀んだ本だ。ホンノ手引草に過ぎない本だ。

俺は、博士が詩に熱心で、戯曲には冷淡だと云ふ風評を、幾度聽いたかも分らない。然し、之程博士が、戯曲に冷淡だとは思つて居なかつた。俺は、「夜の脅威」が、博士から受くる待遇に就いて全く心細くなつてしまつた。

二月二十日。

中田博士と、教室で度々顔を合すけれども、俺の戯曲に就いては何も云はない。而も博士は講義の時間にイプセンの「幽霊（ゴースト）」を散々に罵倒した。俺の戯曲は、實を云へば「幽霊」からヒントを得て居るので、俺はイプセンに對する博士の罵倒から、可なり傷けられた。博士は、恐らく夫を故意にやつたのではあるまい。が、俺は兎に角不快だつた。

佐竹に會つたが、彼奴（あいつ）は林田草人に送つた小説に就いて、林田から何も云つて來ないので、可なり氣を惡くして居るらしい。が、彼奴が、自分の小説が直ぐ林田の好意ある推薦を受けるとでも、思つて居るのは、彼の無智から出た自惚だ。

三月五日。

到頭、同人雑誌「×××」が出た。直に俺にも一部送つて來た。俺は、夫を開いた時、今迄にない不快な壓迫を感じた。夫は、山野の手紙から受けた夫よりも、もつと不快な而も現實的なものであつた。同

人の連名を見た時に、俺は到頭奴等に捨てゝ置かれたと思つた。俺は、何れ程嫉妬に燃えたゞらう。俺よりも天分に於いては、劣つて居ると思ふ岡本など迄が、俺より急に偉くなつたやうに思はれて仕方がない。

俺は、卷頭に載せられた山野の小說「顏」を、恐る〳〵讀んだ。俺は夫が不出來で、愚作で全然彼の失敗である事を祈りながら讀んだ。が、その一分も隙のない、緊つた書き出しに、俺は先づ氣押されてしまつた。殊に一句〳〵、蜘蛛の糸のやうに粘り氣があつて、而も光澤のある文章が、山野一流の異色ある思想を、グン〳〵と表現し行く邊、俺は彼奴に對して、益々强い反感を感ずると同時に、彼奴の魅力ある筆致に依つて、グイ〳〵頭を押さへられてしまつた。殊に「顏」の主題は、今の文壇には、一度も現はれなかつたやうな、奇拔な而も深刻味のある哲學だつた。若し「顏」が、山野否俺の友人の作品でなかつたら、俺は何んなに驚喜した事だろう。夫が、俺の競爭者而も俺を踏み付けやうとする山野の作品である爲に、俺は全力を盡くして、その作品から受くる感銘を排斥しやうとした。が、俺は山野の作品の價値を認めぬ譯には行かなかつた。が、夫から連想される事は、山野が一躍して文壇に認められはしまいかと云ふ事だ。俺は夫を考へると、いゝ氣はしなかつた。山野が一旦認められるとなると、彼奴は俺に對して何んな侮蔑をやるかも知れない。同人雜誌の發行を知らして來たやうな手緩るいものではない、俺は夫を思ふと黯然たる氣持がする。が俺を壓迫したのは、山野の作品ばかりではない、その次ぎに載つて居る桑田の小說「闖入者」だつて、渾然として纏つた小品だ。彼奴のきび〳〵した筆致を見た時、俺は桑田にだつてとても敵はないと思つた。が、俺はその事をなるべく認めまいと努力した。が、實際

俺の「夜の脅威」を「顏」や「闖入者」に比べると、作者の俺が何んなに、贔屓眼に見ても、奴等の物が段違にいゝ。俺は、夫を考へると、少し絶望的になる。が、山野や桑田の作品がよいばかりでなく、杉野や岡本のものでも、中々纒つた出來榮だ。俺は杉野や岡本などの素質を、俺以下のものと見積つて、やつと安心して來たが、その安心も何うやら根底から揺いで來たやうだ。俺は雜誌「×××」を手にしたまゝ午後三時頃から、七時頃迄夕食も喰はないで、ぼんやり考へ込んで居た。すると其處へヒヨックリ吉野君がやつて來た。

俺は、此時位吉野君を頼もしく思つた事はない。俺は、吉野君と一緒に「×××」の惡口を云ひたかつたからである。吉野君も恐らく、同じ目的で、俺を訪問したのかも分らなかつた。

「やあ！　君も「×××」を讀んで居たのか。僕も今朝本屋で買つたよ。案外いゝものはないね」と吉野君は、座に着くと直ぐ、其處に落ちて居た「×××」を弄くりながら話し出した。俺は、吉野君の總括的の貶し方が、可なり氣に入つた。が、俺は「本當だ」とも合槌を打てなかつた、實際俺は何の作品も感心して居たのであるから、俺は恐々ながら「山野の「顏」は何うだい。」と訊いた。

「輕妙だ。然しあんなものは、誰にだつて書けるぢやないか。少くとも江戸つ兒には書けるね」と、江戸つ子たる吉野君は昂然として云つた。俺の良心は、吉野君の云つて居る事に、全然反對した。が、俺の感情は吉野君の云つた事に滿腹の賛意を表した。

「桑田君の「闖入者」も餘りよくないね。古い！　まるで、自然主義から一歩も出て居ないのだ」、俺は段々心強くなつた。俺は、今日程吉野君を尊敬した事はなかつた。吉野君は、最後にこんな事を附け加

へた。

「要するに高等學校の雜誌に、少し毛が生えた程度のものだよ。あれで、文壇に出やうと思つて居るのは、少し虫が好過ぎるね。やつぱり、同人雜誌なんかに、幾何書いても駄目だよ。相當位置のある雜誌で、發表しなければ駄目だよ。」と、吉野君は最後に自分の持論を繰返した。俺は、吉野君の辛棘な批評を聽いて、救はれたやうな心持になつた。

が、吉野君が、歸つてしまふと俺は又、淋い心持に襲はれた。見ると、吉野君に散々叩かれた雜誌「××」は、洋燈の暗い光の裡に、放り出されてある。俺は、創作は黄金だといつた山野の言葉を思ひ出した。そして、假ひ小雜誌にせよ、活字になつて居る以上は、夫はもう立派に完成された、表現の形式である。夫が文壇的に認められる、充分な機會を備へて居た。殊に、文科大學學生の同人雜誌として、何んなに新鮮な感興を、文壇の一角に、感ぜしめて居るかも分らなかつた。俺は無名の作家達が、文壇の流行兒の惡口を、思ふ存分に云ひ會つて、自分達の認められない腹癒せを、すゝ場合を考へる事が出來た。俺と吉野君との會話も、殆ど夫に近かつた。夫は弱者の弱い反抗に相違なかつた。さう考へて來ると、また空虚な感じに襲はれた。夫にしても中田博士は、俺の「夜の脅威」を、何時迄捨てゝ置くのだらう、俺は、博士の無頓着に對して、輕い反感を懷かずには、居られなくなつた。

三月十日。

俺は、今日學校で佐竹君に逢つた時、

「おい君の長篇小說は、何うしたい」と訊いた。すると、あの男は、暗い顏を一寸明るくしながら、

「四百五十枚迄書いた。もう百五十枚書けばいゝ、この頃は創作熱が丸切り旺盛なのだ。毎晩三十枚は缺かした事はない」と、昂然たるものがあつた。

「何うしたい！　林田の所へ送つて置いた小說は」から訊くとあの男は急に顏を暗くした。

「送り返して來たよ。雜誌には長すぎるからだつて。片々たる短篇ばかりを載せたつて、一體何うすると云ふのだ。だから、日本にどつしりした長篇が出ないのだ。」

　が、俺は佐竹君の小說が、送り返される事を豫期して居たので、少しも驚かなかつた。そして、百五十枚の長篇、而も無名作家のものが、そう容易に紹介されて堪るものかと云ふ氣がした。が、俺は、此の人の旺然たる創作熱には、何時もながら、敬意を表する。何時か、あの男の部屋を訪問した時、實際あの男は、もう三百枚もあると云ふ草稿を俺に見せた。その上、少年時代からズーッと書き溜めたと云ふ高さ三尺に近い原稿を、俺の前に積み上げた。

「百枚位のものなら、七つ八つありますよ。此内で、一番長いのは五百枚の長篇で僕の少年時代の初戀を取扱つたもので、幼稚でとても發表する氣にはなれませんよハヽヽヽ」と笑つたつけ。俺は、あの人の多産に感心すると共に、その呑氣さにも感心した。發表する氣にはならないと云つて、若し發表する氣にさへなれば直ぐにも出版の書店でもが見付かるやうな、呑氣な事を考へて居るのだ。俺はあの男のやうに、發表と云ふ事や、文壇に出ると云ふ事に就いて、少しの苦勞もない心理狀態が可なり、不思議に思はれる。あの男は、只書いて居さへすれば夫で滿足して居られるのかしら。

三月十五日。

雜誌「×××」の評判が、素破らしく好い。殊に山野の「顏」の評判がいゝ。俺は、なるべく新聞の文藝欄を見まいとした。「×××」が評判されるのが、癪だからである。が、何となく「×××」の評判が、氣になつて仕方がない。俺は、白狀するが、もう三日ばかり、續けて圖書館に通つた。そつと「×××」の評判を讀む爲めにである。最初にI新聞が、六號活字ではあつたが、雜誌「×××」の創刊を祝福した、そして山野の「顏」を特に激賞した。が、夫ばかりではなかつた。夫から、三日ばかりしてT新聞の文藝欄で批評家H氏が、山野の「顏」を激賞した。俺は、夫を讀んで心の奥から、こみ上げて來る嫉妬を、何うする事も出來なかつた。到頭、彼奴に蹂み躙られたと思つた。俺は、此二三年、憂慮して居た運命が、もう的確に、實現するやうに思つた。山野や桑田が文壇の花形として持てはやされ、俺が無名作家として、永久に葬られる事、夫はもう「×××」の發行で、早くも實現の第一段に、到達したのだ。

俺は、山野の天分の力に、何うして對抗しやうと云ふのか、山野の天分が認められると云ふ事が、當然であればある程、俺の反抗は、無意味で且淋しかつた。俺はもう目を閉じて、彼奴の華々しく打つて出るのを、辛抱するより外に、何うとも仕方がないのだ。たゞ、彼奴に對抗する唯一の方法は、俺が彼奴と同時に、文壇へ出て行くと云ふ事であつた。俺は、そう考へると、再び俺の創作「夜の脅威」の事を思ひ出した。夫は餘りに、賴りにならない物に相違なかつた。が、文壇の水準以下のものとは何うしても思はれなかつた。俺は、今宵、圖書館を出ると、直ぐ中田博士の家へ急いだ。「夜の脅威」に就いての

批評を聞いた上、是非共何處かの雜誌へ、推薦を依頼する心算であつたのだ。

中田博士は、都合よく在宅した。

俺は、博士と向ひ合ふと直ぐ、

「如何です、何時かお願ひしました脚本は、讀んで下さいましたでしやうか」と切り出した。

「あ！」と博士は一寸當惑の色を示したが直ぐ「あゝあれでしたか。つい忙しくつて、讀みかけのまゝですが、孰れゆつくり讀んだ上で、纒つた批評をしましやう」と、平素ものやうに、悠然と答へた。が、俺は、博士がまだ一枚も讀んでくれて居ない事を直覺した、俺が、之程焦燥の裡に、努力して書き上げた作品を、一ヶ月半もの間、一讀もしないで、置きつ放しにして置いた博士を、俺は少し呆氣に取られて見た。が、博士には、夫が、餘り不自然ではないらしいと、見えて直ぐ話題を換へて話し出した。

「佛蘭西の近代劇の中にも、中々いゝものがありますよ。近代劇と云へば、北歐の專賣のやうに思つて居るから、困りますよ。何と云つても、芝居は佛蘭西が元祖で、イブセンなども、やはり作劇術の點に於ては、明に佛蘭西劇の影響を受けて居ますよ」

俺は、佛蘭西劇の話などを聽くやうな心持とは丸切り馳け放れて居た。中田博士の手の中に在る俺の「夜の脅威」は、一體何時が來たら、日の目を見るだろうと、夫ばかりを心配して居た。俺は、一層の事、貰つて歸ろうかと思つた。が實際中田博士の手を經ずして、文壇に一指を屆かす事さへ、俺には難かしい事であつた。

俺は、佛蘭西劇の話を、一時間ばかり仕樣事なく聽いた後、博士の家を辭した。俺は、もうスッカリ

絶望して居た。中田博士を通じて、俺が文壇に望を繋いたのは、全く俺の第二の誤算に近かつた。俺は、もう手を拱ねいて、山野や桑田の華々しい出世を、見るより外に仕様がないかも知れない。家へ歸つてから、暫くは何も手に付かなかつた。偶然の機會が突發しない限は、俺にはもう何等の機會も、殘されて居ないやうな氣がする。

四月五日。

「×××」は、第二號を發行した。山野は「邂逅」と云ふ短篇を發表した。俺は又夫を、飛び付くやうにして讀んだ。そう佳作ばかりが、續く譯はないと思つたからである。が、俺の安心は直ぐ裏切られた。手堅く而も底光りのする彼奴の技巧が、又グン／＼俺をやつ付けてしまつた。殊に、主題(テーマ)は前の「顔」の夫に勝るとも決して劣らぬほどの光つたものだつた。俺は山野に對する反抗の角を折ろうかとさへ思つた。俺の彼奴に對する反抗は、凡人が天才に對して懐く無意味な反感で、全く俺自身の心得違ではあるまいかと、思ひ直さうとした。が、山野の皮肉な笑顔を思ひ浮べると、直ぐムラ／＼とした嫉妬と反感が俺の全身を襲ふ。俺は何うしても、彼奴の作品に頭を下げる氣にはなれないのだ。

四月十六日。

山野の「邂逅」が又評判がいゝ。殊に文壇の老大家たるK氏が、彼奴の「邂逅」を激賞したと云ふ噂を、新聞で讀んだ時、俺はもう「萬事休す矣」だと思つた。もう、彼奴の聲價は定まつた。彼奴が不意に死な

ない限り、文壇に認められるのは既定の事實だ。俺は、もう仕方がないと諦め始めて居る。實際、俺の嫉妬を除いて考へれば、彼奴が認められるのは至當な事かも知れない。が、至當であるかあるまいかは、問題でない。たゞ彼奴が認められる事が不快なんだ。山野が認められたとすると、桑田の順も決して遠くはない。岡本、杉野、川瀨なども、皆相當の所へ行くに違ない。「たゞ一人取殘される者」、夫は何う考へても、俺に相違なさそうだ。

俺は、今日短い原稿を今度創刊になる雜誌「群衆」に送つた。僅か七枚ばかりの小品だ。俺は此の「群衆」を主幹して居るI氏に、たつた一度逢つた事があるのだ。俺の小品が採用されたら、山野等に對して少しの反抗は爲し得た事になるのだ。

五月三日。

俺は今朝、新聞の廣告を見た時、今日の雜誌「△△△△」の小說欄に、山野の小說「廢人」が載つて居るのを見た時、俺はアッと驚いたまゝ、暫くは茫然とした。俺は鐵槌で毆ぐられたやうな打擊を感じながら、まだ自分の視覺を疑つた。何んなに評判がよくても、文壇の中央へ乘り出すのには、間があるだろうと高を括つて居たのは、俺の誤だつた。彼奴は、俺のそうした豫想を、見事に裏切つてしまつた。もう、彼奴が流行作家で、俺が無名作家である事は、嚴として動すべからざる事實だ。俺は、眩ぶしい物を見るやうに、あの廣告を見た。山野敏夫——と云ふ三號の活字が、宛ら俺を嘲笑して居るやうに感じた。題名の「廢人」は、作家としては「廢人」に近い俺を、モデルにしたのではないかとさへ思つた。が、俺は

之程反感を持つて居る彼奴の作品が、一刻も早く讀みたくなるから不思議だつた。山野の作品を讀む爲に「△△△△」を買ふ事、換言すれば彼奴の作品の爲に、「△△△△」が一部でも多く賣れる事は、考へて見れば少し不快だつたが、夫でも俺は彼奴の作品が、讀みたくて堪らなかつた。

俺は見たくもない物をオヅ／＼と見るやうな心持で、彼奴の作品を讀んだ。讀んで見ると、彼奴の作品は、俺の嫉妬や競爭心を押除けて置いて、俺にグイ／＼と迫つて來やがる。俺は、殘念で堪らない。彼奴に對する反感が、彼奴の作品の力に押し除けられて、譯もなく感心してしまふのだ。彼奴に反感を持たない一般の批評家が、感心するのも尤もな話だ。夫を思ふと俺は情なくなる。俺は「△△△△」を手にしながら、彼奴に絕對的に打ち負かされた事を明に感得した。

俺は「△△△△」と共に、自分が寄稿した「群衆」を買つて來た。俺の小品も編輯者の好意で、二段組ではあつたが掲載されて居た。が、「△△△△」と「群衆」！　夫は雜誌として勢力に於て、無限大の隔たりが在つた。俺は山野が偶然、「群衆」を手に取つて、俺の作品に氣が付いた時「ふゝん」と嘲弄の微笑を洩す、その顏附迄が歷然と感ぜられた。

もう「勝負は在つた」と云ふ氣がする。俺の負は俺自身にさへ明かだ。なあに！　初から勝負になつて居なかつたのだ。「△△△△」の彼奴の小說の第一頁を、ヂット見詰めて居ると、無念と絕望の淚が頰を傳つて流れた。

俺が「△△△△」を見て居ると、偶然佐竹君がやつて來た。そして又何時ものやうに創作の話を始めた。

「六百枚の方は、一昨日到頭書き上げてしまつた。僕は此二三日その爲に愉快で堪らないのだ。少し靜

養したら、愈々千五百枚の物にかゝるんだ。此方が完成したらもうしめたものさ」と相變らず元氣な事を云つて居たが、ふと「△△△△」が佐竹君の目に入ると、

「山野君の「廢人」が載つて居たね。ありやそう恐るゝに足るものぢやないね。たゞ思付ばかりのものだ。藝術としては寧ろ邪道だね」と、云つた。が、俺はもう此男の罵倒から、何等の慰安をも感じなかつた。思付ばかりでもいゝ、藝術の邪道でもいゝ、文壇に認められる方が、何れ程いゝ事か分らなかつた。六百枚の長篇を終つて、千五百枚の大作にかゝつて居る佐竹君よりも、三十枚ばかりの器用な短篇を書いて、一躍して認められた山野の方が、俺には何れほど羨しいか分らなかつた。

俺は、夫から意外な事に氣が付いた。俺は何氣なく佐竹君に、「群衆」を見せて俺の僅か七枚の小品を指し示すと、夫を見た佐竹君の瞳は、異様な輝きを帶びた。

「何だ！　こんな短篇か！」と、彼の男は吐き出すやうに云つた。

「此の雜誌は一體、誰が經營して居るのだ！　一人として碌な奴が書いて居ないぢやないか！　草田花子！　あ！　此奴か！　こりや君！　此間、山本と云ふ男と、作品の賞め合ひをしたかと思ふと、獸のやうに直ぐくつ付き合つた女ぢやないか、こんな奴が小説を書いて居るんだね。」と、佐竹君は、「群衆」の寄稿者を悉く罵倒した。そして「群衆」と云ふ雜誌が低級な雜誌で夫に書いて居る者が、悉く碌でもない奴等であると結論した。

俺は、俺の僅か七枚の小品が、之ほど佐竹君を激昂させた事を驚いた。此男は雜誌「群衆」を貶す事に依つて俺の作品を無視しやうとかゝつたのだ。が、夫は全く反對の事實を語つて居る。俺の小品が七枚

でも活字になつた事は、佐竹君に取つて決して愉快な事ではなかつたのだ。俺が山野の作品に依つて感じて居るやうな反感と焦燥とを、佐竹君もやつぱり感じて居るのだ。六百枚の長篇を書き上げて、堂々と小說の大道を步んで居る筈の佐竹君が、活字になつた俺の僅か七枚の作品から壓迫を受けるとは、考へて見れば不思議な事だつた。

が、俺は俺の小品を無視しやうとした佐竹君を、決して憎めなかつた。俺は山野より天分が劣つて居る事を自覺しながら、尙山野の出世を呪つて居るのだ。まして、自分の作品に充分の自信を持つて居る佐竹君が、自分の作品が活字になる前に、俺の片々たる作品が活字になつたのを不快に思ふのは、寧ろ當然の事かも知れない。

が、俺は考へた。創作と云ふ事が、ある人々の考へて居るやうに絕對のものなら、何故に人は只創作する丈で滿足する事が出來ないのだらう。佐竹君の如きは、六百枚の長篇を書き上げた事其物に依つて、充分藝術慾を滿足して居なければならない筈だ。夫が、何うして發表する事に就いて、あゝした苦悶があるのだらう。殊に俺などは創作と云ふ事よりも、先きに發表と云ふ事に就いて、悶えて居る。本當の藝術慾よりも文壇的名聲と云つたやうなものに囚はれて居る。が、佐竹君のやうに長篇を書き上げて居る人でさへ、活字になつた俺の七枚の小品を見ると、取り據すのだから、俺が山野の作品が出る事に血眼になるのも、或は當然の事であるかも知れない。

五月十五日。

俺は、今日久し振で山野の手紙を受取つた。何うせ俺を嘲笑し揶揄する爲の、手紙だらうと思つたから、俺は一寸開封する氣にならなかつた。が、夕方になつて漸く開けて見ると、割合に親切な文面であつた。

(君も知つて居る通、同人雜誌「×××」は、創刊以來割合世間の注目を惹いて居る。もう根氣よくさへ續けて行けば、皆ある程度迄出られると云ふ氣がする。從つて、皆油が乘りかゝつて居る。夫に就いては君だが、僕達は君が京都で、獨ぼつちで居る事に對し大に同情をして居る。「×××」發刊の時にも、君を是非同人に入れなければならないのだが、君が東京に居らぬ爲、つひ色々な差支へがあつて、止むなく君を入れる事が出來なかつた。僕達は、夫を非常に遺憾に思つて居る。が、此頃は僕も外の雜誌から原稿を頼まれるし、桑田も近々外の雜誌に書くだらうから、「×××」は自然紙面に餘裕が出來るので、君の作品も紹介し得る機會が度々來るだらうと思ふ。だから、君もいゝ物があつたら、遠慮しないでどし〳〵送つて吳れ給へ。無論餘りヒドイものは困るが、水準(レヴェル)以上のものなら欣んで紹介するから)

此手紙を讀んだ時、俺は今迄山野に對して、懷いて居た嫉妬や反感を耻しいとさへ思つた。俺が山野の世に現はれて行くのを、呪つて居る間に、山野は俺の爲に好意ある配慮を、爲す事を忘れなかつたのだ。彼等に對して意地を立てゝ居るよりは、彼等に接近して「×××」に作品を發表した方が、何れ程よい事だか分らなかつた。山野の手紙を見た時、今迄俺には遮ぎられて居た光線が、初て溫く俺の身體を包むやうな氣がした。俺は直ぐ返事を書いた。餘り昂奮して、彼奴(あいつ)に笑はれはしまいかと思はれるほど、昂奮に充ち感激に充ちた手紙を書いた。そして直ぐ後から作品を送る事を云ひ添へた。俺の手紙は、明かに卑しい哀願の調子を交へて居た。俺は自分の態度の裡に征服された弱者が、强者に阿ねつて居るや

うな、さもしい態度を感づいた。今迄、極端に呪咀して居た彼の、華々しい初舞台(デビュー)に對してさへ、賞讃り言葉を連ねた。が、俺には夫を卑しむべき事として、思ひ止まり得る程の餘裕はなかつたのだ。山野の好意に縋る事は、現在の俺に取つては唯一の機會だと云つてもよかつたのだ。

俺は手紙を出した後で、直ぐ中田博士を訪問した。俺の脚本の「夜の脅威」を、貰ひに行つたのだ。博士の所へ持つて行つてから、もう三ヶ月以上になる。博士はもうとつくに、俺の脚本の事などは、忘れてしまつたと見え、偶々俺に言葉を掛ける事などが、あつても脚本の事は、噯にも出さなかつた。が、今度山野の所へ作品を送るとしても、一番纒つて居るものは「夜の脅威」であつた。考へて見れば、俺は發表の事ばかりに氣を取られて、本質的の創作には全く呑氣であつたのだ。默々として、千五百枚の大作にかゝつて居る佐竹君の事を考へると、可なり耻しく思ふ。

中田博士は、何時ものやうに在宅した。俺が來意を述べると、

「そう〱、君の脚本を預かつて居たつけ」と、云ひながら立つて、書棚の一隅を探ぐつて呉れた。そして、恐らく俺が持つて來た時の儘らしい俺の脚本を、取り出して呉れた。俺は、夫でも「夜の脅威」と云ふ表題を見ると、舊知にあつたやうに懷しく思つた。俺が此の三四ヶ月間、焦慮に焦慮を重ねて居る間にも、俺の作品は中田博士の書棚の一隅で、悠々たる閑日月を送つて居たのだつた。

「愈々發表する事になつたのですか。夫は結構です。活字になつた上で、纒つた批評をしましやう」と、お世辭を云つて呉れた。俺は中田博士の、極度に無關心な態度を寧ろ尊敬した、歸つてから一度讀み直すと、直ぐ書留にして山野に送つた。

五月廿五日。

山野から手紙が來た。俺は夫を何等の感情を交へずに、此日記に再錄して置かうと思ふ。此の手紙を見た時の、俺の感情は玆には、何うしても表現する事が出來ないから。

（僕達は皆、君の「夜の脅威」を讀んだ。そして云ひ合はしたやうに、多大な失望を感じた。僕は遠慮なく云ひたい、世間並のお世辭を云つたつて始まらないから。僕は第一、あの作の主題に失望した。あれは全然借り物ぢやないか。君自身、本當の君自身から出たものではないだらう。僕はあの主題を、君が何から借用したかを、的確に指摘する事が出來る。が、主題を借りたのはいゝとして、あの作品の全體に亘つて居る低級な感傷主義は、一體何だ！　君は高等學校の一年生時代から、思想的には一歩も進歩して居ないね。僕達は、あの頃の思想からは、もうスッカリ卒業してしまつて居るのだ。僕は君の脚本から、何等のいゝ所も見出さなかつた。然し、夫は恐らく僕一人の不公平な評價だと思つたので、君の脚本を桑田、岡本、杉野などにも讀ませたよ。が、彼等が君の作品に下した評語は、君に知らせる事は見合はせやう。夫は餘りに、君を傷ける心配があるからだ。で、僕達は遺憾ながらあの作品を、「×××」に載せる事は見合はす事にした。君が、僕の此の苦言に憤慨して、折返し傑作を寄せて呉れゝば幸ひだ。）

罠！　俺は確かに山野の掛けた罠に掛つたのだ！　彼奴は自分の華々しい成功に浸りながら、その意識をもつと高調させる爲に、俺を傷けて見たくなつたのだ。彼奴は桑田などに、

「何うだろう！　富井の奴、京都で何をやつて居るのだらう。相變らず例の甘い脚本か何かを、書いて、

るに違ない。何うだい！「×××」に載せてやるとか何とか云つて彼奴の作品を取寄せて、皆で試驗をしてやらうぢやないか」と、云つたに違ない。人の好い杉野や岡本などが、心配して止めると、彼奴は尙面白がつて、實行に取りかゝつたのだ。彼奴に似合はない親切な手紙は、かうした動機からでなければ、書かれる譯のものでない。山野に對する憎惡、永久に妥協の餘地のない憎惡が、前よりも十倍烈しい勢で、俺の心の裡にこみ上げて來るのを感じた。が、山野のトリックに掛つて、旨々と「夜の脅威」を、得意になつて差出した俺の弱さ加減を考へると、俺は自分の身をいとほしむ涙が双頰を濕すのを感じた。

×月×日。

もう「×××」が出てから、二ケ年半になる。「×××」はもうとつくに廢刊してしまつた。が、山野や桑田や岡本や杉野は、文士として立派に登錄を濟まして、「×××」同人として文壇を濶歩して居る。殊に、山野は、一作每に文壇を騷がして居る。押しも押されぬ位置を占めてしまつた。

俺と彼等との距離は、もう絕對的に擴がつてしまつた。却つて、かうなると、もう競爭心も、嫉妬も起らない。俺は彼等が流行作家として、持てはやされる事實を、平靜に眺めて居る事が出來る。一人の天才が生れる爲に、百の凡才が苦しむ事が必要だ。山野や桑田などが、持てはやされる陰には、俺一人位の犧牲は寧ろ當然かも知れない。が、永久に無名作家として終る者は、俺一人ではあるまい。千五百枚の長篇が完成したか何うかは、訊いて見ないから分らないが、佐竹君は相變らず暗い顏をして居る。

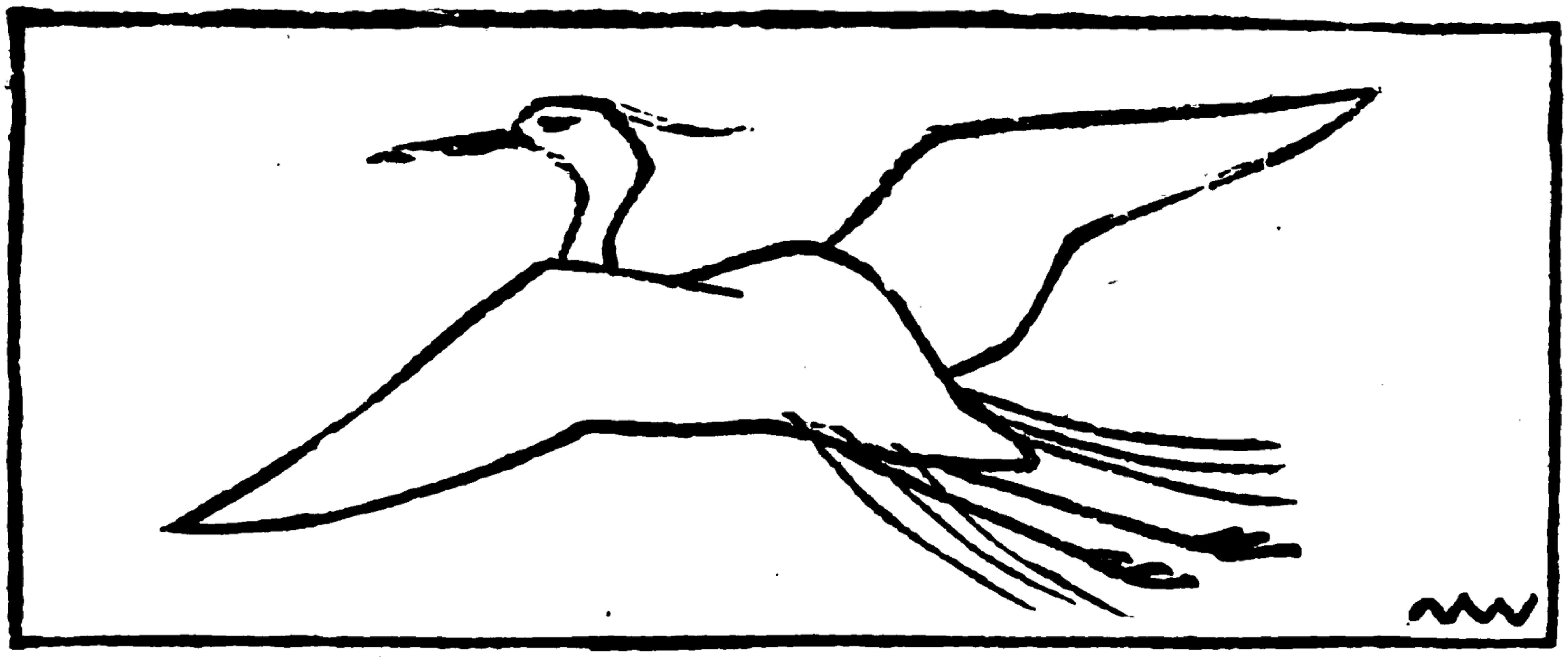
そうして、文壇に新進作家が出る毎に、猛烈に貶し付けて居る。同人雑誌を貶し付けた吉野君も、相變らず健在である。が、あの人の創作が、相當な文藝雑誌に載つた事はまだ一度もない。

文壇に於ても、運が或る點迄、重要な働きをして居るのだ。そうでも思つて、俺は諦めて居るのだ。が、俺はもう文壇に就いて、考へる事はよそう。作家としての生活以外に、意義のある生活がないやうに思つて居たのは、俺の迷妄だ。

俺は此間、ヴエルレーヌの傳記を讀んで居ると、あのデカダンスの詩人が晩年に「平凡人としての平和な生活」を、痛切に望んだと云ふ事實を知つて、俺は可なり心を打たれた。俺のやうに天分の薄いものは、「平凡人としての平和な生活」が、恰好の安住地だ。學校を出れば、田舎の教師でもして、平和な生活に入るのだ。

流行作家！　新進作家！　俺は、そんな空虚の名稱に憧れて居たのが、此頃では少し耻しい。明治大正の文壇で名作として殘るものが、一體幾何あると思ふのだ。俺は、何時かアナトール・フランスの作品を讀んで居ると、こんな事を書いてあるのを見出した。

(大陽の熱が、段々冷却すると、地球も從つて冷却し、終には人間が死に絶えてしまふ。が、地中に住んで居る蚯蚓は、案外生き延びるかも知れない。そうするとシエクスピアの戯曲や、ミケロアンゼロの彫刻は蚯蚓に喰はれるかも知れない)。何と云ふ痛快な皮肉だらう。天才の作品だつて何時かは蚯蚓に喰はれるのだ。まして山野なんかの作品は今十年もすれば、蚯蚓にだつて喰はれなくなるんだ。(六月十日作)



老僧の教訓

正宗白鳥

半身不隨で寢床に就ききりの××寺の老僧は、人の命の粘り強さを數へてゐるやうに、不思議に生延びてゐる。古稀の年齒を寢床の上で過して、村の者から、「この冬は越せまい」とか、「今年の盆までは六ヶ敷からう」とか、屢々見切りをつけられながら、三年も四年も相變らず生命だけはつないでゐる。よくなる望みのあらう筈はないが、際立つて惡くなることもなくて、月を重ね年を重ねた。

「あのお住持はこの世の業が盡きんのぢや」と、その苦しい汚らしい存命が、をり／＼人の噂に上つてゐたが、噂の上でも年一年と、その老僧の估券は落ちて、今では醜い生物か何かのやうにその消息が傳へられてゐる。夜具といへば、半歳も一年も敷つ放しで、垢や汗で汚されるだけ汚されてゐるし、排泄物の仕末も綺麗に行屆くのぢやないし、日常口にしてゐることも耄碌した世迷言に過ぎなかつた。……實際はどうであらうと、老僧の云

つてゐることは里の方へは、すべて滑稽な調子で傳へられてゐる。

寺は村全體を見渡される山麓の稍々小高い所にあつて、境内も可成り廣くて、山を取入れた庭園は自然に幽邃な趣きを見せて、筧からは土用の中でも冬枯れの頃でも、絶えず淸冽な水が滴たつてゐる。が、釣鐘のない鐘樓は物置場見たいになつて、古瓦や古材木などが轉がされてあるし、藥師堂は數年前の大風で半ば崩れたまゝになつてゐるし、本堂の扉なども酷くいたんだまゝで打やられてゐる。この寺を建てた祖先の持つてゐたやうな信心氣に乏しい今の村の者等は進んで寺や僧侶のために盡くさうといふ氣のあらう筈はないのだが、老僧の後を繼いでゐる羸弱な若僧も、讓られた寺を修繕したり、檀家に親しんだりしやうと心掛けてはゐなかつた。

老僧は讚岐の生れであるが、御維新前にこの村に渡つて來て、若い時分からこの貧乏寺を受繼いだ。そして、昔ながらの僧侶らしい勤めは一通り勤めて、屢々彼家此家の悶着を調停したり、若い荒くれ男達の喧嘩を取鎭めたり、貧しい者に多少の施しをするとか、迷つてゐる者の相談相手になつてやるとかして、大した德の高い名僧と崇められなくつても、一體の評判は惡い方ではなかつた。

若い間はとにかく、中年後にはぶく〳〵と肥滿して、他所目にも動きづらさうであつたが、それにもめげずに、老僧はよく働いた。寺のため自分のために財産を殖やすことをつとめて、力業でも利殖の工夫についても、心身を勞することを厭はなかつた。で、山林や田畝や、殊に現金が殖えてゐると噂されてゐた。

讚岐の緣つゞきの家から、自分の後繼者として子供一人貰つて來て、高野の大學林までも修業させた

のであつたが、學才があつて辯舌も巧みなこの若僧は、僻村で無智な者を相手にして、法事勤めなどして淋しい一生を終る覺悟が出來なくつて、老僧を振棄てゝ、都會を志して、永久にこの村を去つた。その時、老僧の好意からか、あるひは若僧の惡計によつたのか、可成りの嵩高な金が、貯蓄の中から持出されたと噂されてゐた。

その若僧が去つた後では、長い間新たな徒弟は入れられなかつた。子供から後任者を仕上げやうといふやうな悠長な氣持には、老僧は最早なれかつた。今の若僧を迎へたのは老僧自身に何の勤めも出來ないほどに衰へてからのことであつた。

若僧には、此處へ來る前から妻があつたので、その婦人との同棲は、老僧も檀家も最初から默認してゐたのであつた。

以前よく小學校の教員に貸してゐた本堂の脇の小座敷が、退隱後の老僧の寢所となつてゐて、彼れはそこで、數十年來自分の身のまはりの世話をさせて來たおよし一人の看護を受けて、歩みののろい死が迎へに來るのを待つてゐたのだつた。來世があるとか、地獄極樂があるとか、平生深い考へなしに口に出してゐたことは、自分が死に臨んでゐる今でも、新たな意味をもつて現はれては來なかつた。過去の所行の善や惡が念頭を煩はすこともないし、肉身も深い緣者もない身には、息ある間に誰れに會ひたいと思ふ當てもなかつた。

ただおよしだの若僧夫婦だのが絶えず枕許にゐて與れるのが何よりも望ましいのだが、およしさへ以

前のやうに身を入れて用を足しては呉れなくなつた。笑顔して撫でたり摩つたり、あるひは旨い物をわざ〳〵拵えて呉れたりすることは殆んど無いやうになつた。

「およしヤア。…‥臭うてどもならんがなあ」と、彼れは屢々呼立てゝゐた。が、この頃のおよしは三度の食事を病人に採らせる外には滅多に病室の近所に寄付かないので、日々幾度となく呼立てる病人の聲を耳に入れることは稀であつた。よしまたその聲が聞えても、成るべくなら知らん顔して遠ざかつてゐるやうにしてゐた。

「およしヤア…‥。わしが先つきから再々呼んどるのに、何で來て呉れんのぢや。」と、老僧はたびたび責めてゐた。

「私は家にも用事がタントあるんですから、貴下の所にばかり附いて居る譯には行きません。…‥貴下が不自由な思ひをしとりなさるのは、可憐しいけれどな。まあよう考へて御覧なされ。これが十日か二十日の短い間のことぢやなし、私のやうな老人にやさう〳〵は勤まりませんがな。日に五度も十度もこの坂を上り下りするだけでも、老人にや大抵のこつちやありませんがな。」と、およしはたび〳〵應へてゐた。そして、ある時には、

「貴下が錢をちやんと持つとりなさらんからこんな不自由な目に會ひなさるんぢやがな。あの時私の云ふた通りにして、御自分で持つとりなさらうなら、何時までもその錢が役に立つんですのに。一文無しぢやこれからどうしなさる」と、あべこべに此方から叱るやうに云つた。

「さう云ふな。お前にはこれまでに隨分いろ〳〵な物をやつて居るぢやないか。現金にしても三十年も

の間のを積つて見たなら餘つぽどになつとるであらうが、お前はそれを算用したことはないんか。」

およしの方から今更介抱賃を慾しがられた義理ではないと老僧は思つてゐるので、およしの薄情らしい言葉付は恨めしかつた。が、およしの云つたやうに、金や品物のすべてをあまりに早く縁者知人に分配したのは愚かだつたとは、老僧自身にも後で氣付いて屢々悔い歎いてゐるのであつた。自分の壽命をあまりに短く計り過ぎた。どうせ持つて死ねないものなら、殘して置いた物を後で他人に勝手に仕末されるよりは、自分の量見で仕末した方がましだ。同じことなら自分の手で配けてやつて、自分の生きてゐる間に皆んなに感謝されたいと、妙に諦めがついて、慾で集めたものを無雜作に手放したのが間違ひであつた。村の噂に云つてゐたやうな佛心からさうしたのではなくつて、あの時は魔が差したやうなものであつた。

彼れは僧職と共に寺に附屬した物の一切を若僧に讓つた時に、自分のつくつた財産は、彼方此方の自分の氣に入つてゐる者等へ割いて與へた。およしへは格別によくしてやつた。およしは男一人女一人の子持で、亭主はまだ生きてゐるのだが、老僧とは雇ひ人と雇はれ婢としてだけの關係ではなかつた。それは早くから村の者に知られてゐる事實であつたけれど、そのために老僧の價値が見くびられるのでもなかつた。舟乘り稼業の貧しいおよしの匹偶の伊作は、流石に恨み憎みを絶えず胸に潛ませてはゐたが、何も荒立てないで幾十年も過して來た。「今に仇の打てる時が來ようぞい」と、誰れに云ふともなく呟いてゐたこともあつたさうだが、女房に對しても老僧に對しても、世間の噂に上るやうな仕打はしなかつた。そして、陸にゐる時にはおよしと同じ家に寢起して、同じやうに歳を取つた。どちらも黑毛は數へ

られるほどしかない白髪頭で、顏は皺だらけだが、その顏中の皺も天日や汐風で燒焦がされて、赭く强さうに見えるので、男の方はそれでいゝが、女としては顏と髮との際立つた色取りが厭らしく見られてゐる。それに、およしのまるい小さな目の玉は歳には不似合に若々しい光を放つてゐるので、人相に一層の厭らしさを增してゐる。一くせありさうにも見られた。

　最早ろくな報酬は得られないのに、手數がかゝつて汚らしくて、しかも何時果てるとも知れない看護をするには、いくら年來の情誼があるとはいへ、つく／＼倦果てたので、知合ひの老婆老爺に向つて剝出しに屢々零してゐたが、匹偶に向つては言出せなかつた。

「今行つたかと思ふたら、もう戻つて來たのか、この頃はえらう早く用事が片付くんぢやな」と、匹偶に當てつけがましく云はれても、

「ふゝん」と、自分ながら氣持の惡い、胸の透かない鼻先の返事をするに過ぎなかつた。

　相手の當てつけが少し煩縟なると、持前の我殺な口調で突掛つたが、わざと頭から匹偶を壓えつけるにしても、この頃は以前のやうな張合がなかつた。

　匹偶の伊作は女房から直接に老僧の樣體など聞くことはなくつても、およしが世間へ話してゐるのを又聞きしてゐるので、病床に就いて後の時節々々の老僧の樣體は、枕許に立つて知らせて下さる何神樣かの助けをも得て、ありく／＼と目の先にちらつくのであつた。……目から鼻から喉から、五體中からあふれ出る汚物に浸りながら、手足が自由にならないために、避けやうとして避けることが出來なくつて、朝に晝に晩に藻掻き惱んでゐる死にぞこない坊主の樣子が小氣味よく空中に描き出されるのであつた。

「ツーレ。ひとりでに仇の打てる時が來たぢやないか。……わしも長生をしとつてよかつた。これでこそ、わしもこの世へ思ひを殘さいで、何時でも安心してあの世へ行くことが出來るんぢや。……坊主も坊主ぢやが、仕樣事なしに誰れもいやがる介抱をさせられるので困つとるおよしの奴もえゝ氣味ぢや」

ひとりでかう思込んでゐると、信心氣のない伊作も、生れてはじめて、眞心からあの神樣この神樣へ手を合はせる氣になれた。

「樣を見い」と叫んで何十年胸の中に溜つてゐた欝憤を一時に晴らされる時節の來たのが悦しくて溜らなかつた。そして、この頃では、老僧の一日も生伸びるやうにと願つてゐる者は村中で伊作老爺唯一人となつてゐたので、沖から戻ると、先づその生死の噂に耳を留めた。

若僧は病室から遠ざかつた所に夫婦睦まじく住んでゐて、寺の勤めはいゝ加減にして、病身の保養がてら、季節々々の草花を培養したり庭いぢりをしたりして樂んでゐる。金魚や緋鯉に麩などやつて、泉水を眺めて半日も過すこともあつたが、病人の方はおよし一人にまかせつきりで、滅多に病室へは顏出ししなかつた。食物の好みを病人がおよしに言出さうなら、

「寢てばかり居る人間がそんな贅澤を云はいでもよからう。旨い物を食べて寢とると却つて身體に害になるんぢや」と、若僧はおよしを經て病人を戒めた。

「およしャア」と、日に幾度となく心細げに呼立てる老僧の聲が幽かに洩れて來ても、聞馴れてゐる夫婦は以前ほど不快に感じなくなるとともに、傷はしい思ひも次第に起らなくなつてゐた。

「誰れか來て呉れんかヤア」老僧は幾度呼んでもおよしの姿が見えない時に、かう叫立てることがあつて、そろ／＼寺のあたりに來てゐる村の者の耳を欹てさせた。

「錦吉もおきしもこの頃は些とも見舞に來て呉れん。角屋の隱居も寄りつかんやうになつてしまふた。一言さう云ふて呉れい」と、ある日、その人達を思出して、およしに頼んだが、

「あの人達がお見舞なんぞに來るもんですか。それだから、貴下が息の有る間は、お金を御自分でちやんと持つとりなさればよかつたんですがな」と、およしはその人達への言傳さへも果さうといふ氣はなかつた。

「お前も一つことばかり云ふ。……お前も六十に手の屆いて居る人間ぢや。今の間に慈悲善根を積んで置けいや。慾得ばかり考へとつちや後生が惡からうぞ」老僧は叱るやうにかう云つた後では、「他人でないわしの介抱ぢやもの、一心に出來んことはあるまいがな。慾得離れて機嫌ようわしの世話をして呉れれば、わしもお前のために惡いやうにやせん」と、子供を賺かすやうに云ふこともあつた。僧侶に親切を盡せば、この世あの世で並々ならぬ報いのあることをくど／＼說聞かせることもあつた。が、およしはお說教の中途でそつと座を外すのを例としてゐた。髮こそ白けれ身體の何處にも障りはないこの老婆は、後生願ひに身を入れる氣になれぬどころか、まだ一稼ぎも二稼ぎもしやうと心掛けてゐるので、所得の尠い義務看護のために無駄骨を折つて徒らに日を費すのが惜くてならなかつた。前垂の下に煮魚などを隱して寺の石段を上つてゐた昔が懷かしく思出されると、外に親身に世話をする者のない老僧の身の上が、今更のやうに不憫に思はれて、眞心から世話をして上げやうといふ殊勝な考へを起すこともあつた

が、一文なしのこの老人の病氣には期限のなさゝうなのにウンザリして、一時心にきらめかした殊勝な考へも直ぐに消え失せるのがお極まりになつてゐた。

「お母も今月一杯勤めたら、若いお住寺に譯を云うて斷つたらえゝぢやないか。阿呆らしいと云ひながら何時までも厭なことをせいでもよからうがな」と、遠洋漁業に雇はれて出てゐる四十近い子息が、たま〱村へ戻つた時におよしの日々の不平を聞飽いて云ふと、およしは「ほんにさうぢや」と云つて、不平の口を閉ぢながら、いざ斷はらうとなると何となく氣が差してならなくつて、日に三度や四度は矢張り定刻に寺の石段を上つた。

その癖、老僧に對するおよしの言葉付の次第に荒つぽくなるのは誰れかゞ聞きつけて、そろ〱の噂に上つた。

「樣を見い、えゝ氣味ぢや」伊作老爺の呆けた耳にも、こんな噂だけは鋭く響いてゐたので、老爺はさも快げにかう呟いた。……そして、病呆けた老僧が噂通りにおよしに小つ酷くあしらはれてゐる有樣を一生に一度でも垣間見したくなつた。忌々しくつて何十年來足を踏入れたことのない××寺の境内へ、今になつて入つて見たくなつた。たとへ道で會つてお顏を背けて、長の年月殆んど見たことのなかつた水腫れの老僧の病呆けた今の姿を、障子の隙間からでも覗きたくなつた。老僧のこの世からの地獄の苦しみを空想してゐるだけでは物足らなくなつたのであつた。

で、ある日、およしが出て行つた後で、老爺は思立つて家を出た。近所の店で線香を一束買つた。どうするのだと店の人に訊かれたので、「お墓參りをする」と答へると、「お前さんがお墓へ參るんかい。今

日は誰れかの命日なのか」と不思議がられた。

この老爺が線香を持つて寺の方へ向つてゐるのは、通りすがりの誰れの目にも變に映つた。

その日は五月初めの空のよく晴れた日であつた。麥は穗を出して躑躅は山を染めてゐた。老爺は先づ墓地へ入つて、暫く道を迷つてから久振りに見つけた自分の先代の墓前に線香を點して、眞心から骨太い手を合せて南無阿彌陀佛を唱へた。柄にない念佛も、年齢のせいか、口すさんで見るといゝ氣持であつた。老爺は次手に鎌や手桶を持つて來て墓掃除をすればよかつたと思ひながら、その赤黑い骨太い手で墓の左右の雜草を引拔いたりへし折つたりしたが、かうしたゞけでも、先代が墓の下で喜んでゐるやうに思はれた。

寺が壞れて見窄らしくなつてゐるのに心が動かされて、老爺は頻りに四邊を顧みた。そして、土壁の壞れ目から入つて行くと、村の外の家では見られない牡丹や山吹などの綺麗な花が庭の彼方此方に咲盛つてゐるのが、彼れの目を惹いた。……全體老僧は何處に寢てゐるのであらうかと、遠慮しながらも一足づゝ庭の方へ踏込んで、かねて噂に聞いてゐたやうな老僧の呆けた聲が何處にもしてゐないで左右の寂としてゐるのを不思議に思てゐたが、すると、ふと、

「誰れだ、なんぞ用があるんか」と、咎つける聲が横から聞えた。

老爺はきよろ〳〵見廻して、芝生に足を投出してゐる若僧を見つけると慌てゝ會釋して、「お天氣がよう續きます。只今お墓へ參じまして……」と云つたが、若僧の顏はまだ和がなかつた。

「お前さんは誰だつたかな」

「伊作で御座います。」それだけでは相手に分らないらしいので、「およしの匹偶で御座います」と言足した。

それが間の抜けた口振りだつたので、若僧は微笑を浮べて「お前さんがさうか。……まあ話して行きなさい」

「へい。……御病人はちつとはようおなりなさつたかな?」と、老爺はうつかり口に出した。世上の習はしとして一口でも見舞を云はなければならぬやうな氣が知らず〱してゐたのであつた。

「あゝ……」と、若僧はそれには空々しい返事をした。そして、芝生から起上ると、老爺のことは忘れたやうに、手を脊で組んで、泉水のほとりを歩んでゐたが、やがて庫裏の方へ向ひながら、ふと振返つて、「まあお茶でも飮んで行きなさい。お婆あもまだ居るかも知れんぞ」と云つて、冷かな笑ひを後へ殘して姿を消した。

老爺は病室を覗かうとした肝心な目的はついに達しないで、境内を一まはりしただけでその日は家へ歸つた。内の樣子は些とも見なかつたけれども、屢々噂に聞いてゐたやうに、病人が其處でつらい思ひをしてゐやうとは、老爺には思はれなかつた。およしの荒い言葉も聞えなければ、老僧の術なさうな叫び聲もしてゐなかつた。閑靜な座敷に終日終夜寢ころんで手足を休めてゐられる老僧の境涯は、却つて丈夫な老爺自身よりも幸福であるやうで、むしろ羨ましくなりだした。これほどに老いた身體を寒中暑中の差別なく、汐風や炎天に曝されて櫓櫂を手にしてゐるよりは、少しくらゐ患つて勝手なことが出來なくなつても、廣々とした座敷に寢て按摩の一つも取らせてゐたなら、どれほど年齡相應に氣樂だか知れないと、ひとりでに思はれだした。すると、世間の噂ばかりを實として、「いゝ氣味だ」とか「天罰だ」とか

のみ思つてゐたのが、今となると張合ひがなくなつた。

何だか仇も討たれてゐさうでなかつたので、忌々しさや詰らなさが以前よりも一層ひどかつた。

「お前は今日お寺へ何をしに行つたんぢや」と、この日およしに訊かれると、

「お墓へ詣つたのぢやが、お前は毎日お寺へ行つて居りながら、家のお墓の掃除一度したこともないんぢやなあ」と、老爺は詰るやうに云つた。

「何を思出してお前はお墓のことなんぞ云出すんぢやな。」

「今にわしのお墓も入るやうにならうぞい」老爺はさう言紛らせた。

「縁喜の惡いことを云はんすな。わしや死ぬる話は大嫌ひぢや。」

「わしも死ぬるのは嫌ひぢやつたけれどな、およし。……今度の若いお住寺に引導渡して貰うてお經も讀んで貰へるんぢやと思やあ、安心して死んだつて構はんやうな氣がすらあ。」

眞心からさう云つた老爺の言葉がおよしには聞きづらかつたが、それに刃向ふ言葉は不斷のやうに口輕く出なかつた。

老爺はさうは云つても、相變らず老僧についての世上の噂に耳を留めて、その雜談して居る樣や呆けた樣が知れると、ふと神經の興奮を覺えてゐた。

「わしも若いお住寺のお世話であの世へ行けると思や安心ぢや。それだけが死ぬにも死ねんやうな氣掛りぢやつたのに」と、時々人に話して笑はれてゐた。が、食代でも酒代でも、自分に入る物は自分で稼

がねばならぬやうになつてゐて、矢鱈に溜込んでゐるおよしからは些しの助けをも得られないこの老人は、そり〳〵そんなことをでも老後の慰めにした。

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
同　神田區裏神保町	上田屋
同　京橋區銀座三丁目	東海堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　京橋區西紺屋町	良明堂
同　日本橋區本石町	至誠堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同　北區東梅田町	立盛堂
京都市七條停車場前	共盛社
同　四條西洞院	前田大盛社
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

○定價　金參拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢但支那を除く）

册數／國別	內國	外國
六册	金壹圓八拾錢	金貳圓四拾錢
十二册	金參圓六拾錢	金四圓八拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金五圓拾錢外國は金六圓八拾錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし

送金注意

一誌代郵稅　は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし

一郵便爲替　にて御送金の場合は指定を**本郷區西片町十番地中央公論社**とし、拂渡局を**東片町局**と指定あれば途中盜取さるる虞なし

一振替貯金　口座は**東京三十四番**なり

一郵券代用　は謝絕す　但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるるを拒まず

一集金郵便　の便法を利用せらるゝ方は、**坐ながらにして誌代の拂込**をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし

一金一圓迄　金六錢（集金委託料
一金五圓迄　金七錢　及送料共）

一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正七年六月廿九日印刷納本
大正七年七月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　菅谷憲治
印刷人　高木西三

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地
中央公論社
電話長小石川一四四
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 6,80; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可
大正七年六月廿八日印刷納本

中央公論七月號（第三十三年第七號）

